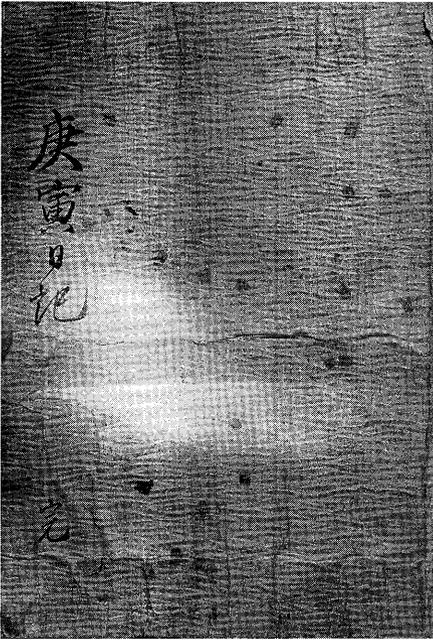


明治学院史資料集

第13集

明治学院大学図書館



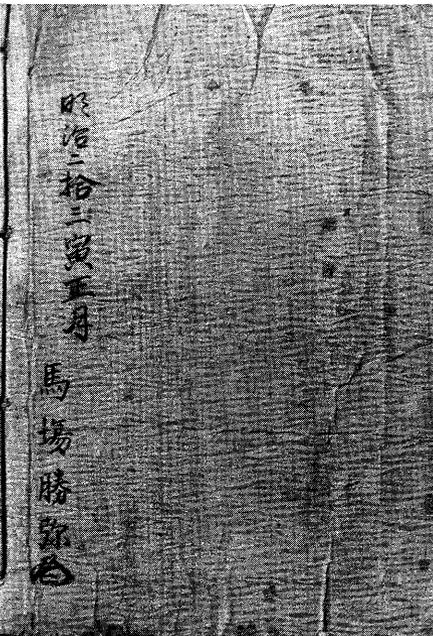
馬場勝弥
庚寅日記

.....
和卦紙

ヨコ 16.0cm

タテ 20.8cm
.....

(大津留家蔵)



目次

父 孤蝶の思い出……………	大津留 晴子……………	(1)
馬場孤蝶における文学的青春……………	伊東 一夫……………	(5)
明治二十三年 馬場勝弥(孤蝶)日記について……………	秋山 繁雄……………	(25)
馬場勝弥(孤蝶) 明治二十拾三寅正月 庚寅日記……………		(47)
馬場孤蝶年譜……………	秋山 繁雄……………	(127)
資料2 マリア・T・ツル―夫人の人物史のための基礎的研究……………	津田 一路……………	(18)
資料1 記念館肖像画の人びと ——初代宣教師と歴代総理・院長——……………	工藤 英一……………	(1)

凡 例

一、原文に忠実であることをつとめ、漢字は原則として新字体を用いたが送り仮名はそのままとし、漢字で著しく一般的でないものには、ママのルビをつけた。また判読不能の場合は□で現わした。

二、本文上欄外に記されたものは当日の最後に*を付し記した。

父 孤蝶の思い出

大津留 晴子

父が亡くなりましたのは昭和十五年六月二十日で、場所は渋谷区松濤町五番地（現神山町十三一八）。今から四十六年前の事になります。いつの間にこんなに長い歳月が立ったのかと不思議な気がいたします。

父母が過していた頃の夏は、うちわに扇風機があるのが精一杯、クーラーなどは考えも及ばない時代でした。弟が友達から譲り受けた一台の扇風機を家中で大切に使用しておりました。食事の時は、扇風機のある父の書斎に食事運び、いくらかの涼風に満足したものでした。父にとって、そんな暑さの避暑法は野球に熱中する事でした。現在でこそ野球が一般的ですが、当時父は必ずベースボールといっておりました。日記にストライクには丸が、ボールには黒丸が記されています。明治学院在学中に一高からベースボールを教えるもらいに来た事を、後になって何度か聞かされた事があります。多分外人教師から聞いたのでしょうか。それ程学院は外国の事については進んでいたと考えられます。

父は学院に通っていた頃からすでになか／＼の読書家だった様で、当時は本郷に住んでおりましたので学院までは

父 孤蝶の思い出

相当の距離なので朝だけは人力車で、帰りは人力車代を節約のため歩いたそうで、「ただいま」と云うと縁側に大の字になり、祖母が「おかえり」といって出てみるともう英語の本を開いてあおむけに寝たまゝ読んでいたと親類の者に話していたのを聞いた事があります。

父は学院卒業後、高知、彦根、浦和と英語の教師をしておりましたが、兄辰猪をアメリカで亡くした馬場家では何とか生計の道をたてなくてはと親類の者達が骨を折って日本銀行の文書課に就職先を見つけられました。日銀では外国文書を、北島互氏が主として英文を、父が邦文を担当し、又現金輸送等の仕事をしていた様です。その頃は多くても一日三、四通の電報が入る程度なので時間的に余裕があり、父はこの時期他日文壇に出るための勉強が出来たといっております。この様にして就職した日銀でしたが、父の文学に対する気持は強くどうしても退職したいと申し、結局母の伯父土方寧の奔走により、明治三十九年九月より慶応義塾の文学部に就職し、昭和五年三月まで教えておりました。はじめは時間数も多かった様ですが私が覚えているのは一週間に火曜日一日の講義で父も相当力を入れていたようでした。この縁で没後父の蔵書を慶応に寄贈しましたが、戦争中、整理中に図書館の屋根裏で全部焼失しました。佐々木孝丸氏によれば日本に二冊しかないものもあつたよし、かえすがえすも残念な事です。

トルストイの「戦争と平和」を最初に翻訳したのは父だつたと思います。もともとこれは英語からでしたが、父は翻訳する事は小説を書く事と同等、或いはそれ以上の努力をしなくてはならないといつか私に申しましたのを覚えております。父の語学力については、木戸昭平氏の著書「馬場孤蝶」のはしがきの中に次の様な一節があります。彼は夏目漱石も舌を巻くほどの語学の天才であり、博覧強記の持ち主であつたという。最近、本郷のペリカン書房主人品川力氏が佐々木孝丸著「風雪新劇志」を紹介してくれた。その中に孤蝶を評して「世の中には、デカバチもないアタ

マをした人もいるものだ」とあった。お世辞にしても娘の私にとってはおうれしい極みでございます。父の兄馬場辰猪もアメリカで鎧をつけ、日本の武士道を英語で説いたと記録され、写真も残っております。語学にはすぐれたものを持っていた兄弟だったと思われれます。

父の周囲はさながら日本近代文学史を見る様で、徳富蘇峯、大町桂月、幸田露伴、森鷗外、島崎藤村、戸川秋骨、夏目漱石、樋口一葉、斎藤緑雨、与謝野夫妻、森田草平、佐藤春夫、水上瀧太郎、久保田万太郎、小島政二郎、村松梢風、小泉信三、野上豊一郎・弥生子夫妻、井伏鱒二、他にも大勢の友人に恵まれていたことはたしかだと思います。又昭和女子大の学生さんの様に孤蝶を卒論に選んで下さったり、父について色々発表して下さいる方々もありました。最近では、昨年高知工高教諭の木戸昭平氏が「馬場孤蝶」という本を執筆され、これは第七回平尾賞を受賞されました。没後半世紀近くも立ちますのにこうして父の事に思いをはせて下さる方に恵まれましたのは父に取りましては名誉な事であり、娘の私に取りましては有難い事でございます。

現在流行の探偵物語も父は婦人倶楽部に連載し、締切りに間に合わず、講談社の少年が私が学校から帰ると玄関に待っていたのも度々でした。私が何才位か一寸思い出せませんが、幼い日に父から聞いた探偵小説がございます。それは、クリスマス頃、ダイヤモンドを盗んだ宝石泥棒が隠し場所に困り、近くにいた七面鳥の口の中に押し込み、しばらくしてその場所に来てみたら、クリスマス事なので鳥屋がすっかり買い取っていたという話で、吾々三人（照子、晴子、昂太郎）は大変面白がったのを覚えております。コナン・ドイル、エドガー・アラン・ポー、セキストン・ブレイキ等は、やはり幼い日に耳にした作家でした。今はない「新青年」で探偵物で一時代を画した森下岩太郎（雨村）氏は父母の同県人で皆様良くご存じの江戸川乱歩、横溝正史の育ての親ではないかと思われれますが、氏は

父 孤蝶の思い出

父が昭和五年に改造社から、デイケンズの「オリバー・ツイスト」の訳本を出版した時相当苦勞した事、セキストン・ブレイキ叢書のこまかい字を虫眼鏡をたよりにほとんど読んだ事等について、「先生という人はそおいう人だ」と他人には理解出来ない様な父の訳本に対する一途な傾倒ぶりを私にしみみ話して下さった事がございましたが、私も父が虫眼鏡を使ってブレイキに夢中になっていた様子が今も目に浮び、なつかしさに絶えがたい気がいたします。

父の思い出にはこんな事もございました。三田の豊岡町におりました時、ある日突然三田署の署長の訪問を受け、何事かと話を良く聞きますと、父が何年もの間、ブラックリストにのっていたとの事でした。「別に何十年も政治運動らしい事をなさる様子もないのでこの際リストからはずす」との事でした。社会主義者の堺利彦、大杉栄、荒畑寒村、山川均氏等との親交があったからでしょう。皆様の訪問はすべて文学上の事でしたので、こちらはそんな事とは夢にも知らなかった事なので家族で大笑いしたものでしたが、思えば父は自分では気が付かずに激動の時代の一部を体験していた事になるのでしょうか。

折も折、この夏NHKで昔幼い日に父から聞いたなつかしいシャイロック・ホームズを放映しておりました。ストーリーは昔と変わりませんが、いっしょに聞いた姉と弟はすでに亡くなり、当時を偲べるのは私一人になってしまいました。

昭和六十一年八月

馬場孤蝶における文学的青春

伊 東 一 夫

I

文学への関心を深め、やがて積極的に文学活動に参加するように孤蝶をいざなっていた、そのきっかけの源を求めてゆくと、やはり明治学院普通部への入学、そして学院で結ばれた在学生との交遊に帰することができる。また、厳格で献身的な信仰をもつカルヴィン主義を建学精神としながら、明治学院の教育に流れていた個性尊重のリベラリズムや優れた多くの教師の指導は、孤蝶ら在学生の文学的個性の育成に、大きく働いていたものと推量される。さらに、その外側をとりまき、その育成に栄養を与えたのが、明治女学校と女学雑誌派であり、それについて、開花結実をもたらしめたのが、文学界派の文学運動であった。

孤蝶は、明治二十二年に明治学院に入学した。周知のように、在学生には、島崎藤村・戸川秋骨・和田英作らのような、芸術的個性の持主が多く、彼らとの交遊が、孤蝶の開眼に働いてゆくことになるのであるが、ここに刊行をみた「孤蝶日記」は、孤蝶が、文学界派の一人として、その活動に入る、いわば開拓期ともいべき明治二十三年の記

録である。まさに萌芽期にある孤蝶の文学的青春の実相が、ここには躍如として活写されているのである。

まず「孤蝶日記」の記述を資料として、彼の文学上の遍歴の跡を辿ってみよう。

第一は、外国文学への対応である。孤蝶が繙いた作者と作品とをとりあげてみよう。

此日朝ノ内「シヨウ」ノ文学史ヲ読ム(二月十一日)〔註〕(George Bernard Shaw)

夜ニ入りテテニソン氏イノック、アーデンヲ読ム(二月十六日)〈夜ニ入りテ「テニソン氏」ノ「イノック、ア

ーデン」ヲ字引ヲ用イテ読ム(四月十日)〔註〕(Arfred Tennyson, Enoch Arden)

余ハ「リットン」ノ「リエンヂ」ヲ少シ読ミタリ(三月二日)〔註〕(Edward George Bulwer-Lytton: Rienzi?)

夜ニ入りテ「シヨニン」ノ文及ビ詩ヲ読ム(三月四日)〔註〕(Samuel Johnson)

丸善ニ立寄リ「バイロン」ノ「チャルド・ハーロールド」ヲ買フ(三月二十一日)〔註〕(George Gordon Byron:

Childe Harold's Pilgrimage)

文学ノ試験ニ逢ヒ「セキスピヤア。スコット。テニソン。ヂツケンヌ。マコーレー。」ノ五名ニ付イテ書ッ。〔註〕

(Shakespeare, Scott, Tennyson, Dickens, Macaulay)

「カーライル」ノ「ルリツド、ピクチュアア」ヲ読ミシハ午後ニシテ(五月八日)〔註〕(Thomas Carlyle)

午後「ド、クインシイ」ノ「ノツキング、アット、ゼ、ゲート云々」ノ一章ヲ読ミ終レリ(五月七日)〔註〕(Tho-

mas De Quincey: On the knocking at the gate in Macbeth)

翻訳課にては「ほをそをん」の「すかーれつと、れたあ」を読み始めたり(六月十二日)〔註〕(Nathaniel Ha-

欧米文学については、孤蝶の受容は、シエクスピアを除けば、主として十八、九世紀の英米文学、特に小説に主力がおかれており、日本文学に比べると、その範囲は、むしろ狭いといえるであろう。

第二は、日本の近代文学への対応について、この日記を検索して、とり出すことにする。

新著百種及び日本之文華の代を本屋に払ふ（六月二十一日）

朝食後新著百種、号外（紅葉著新桃花扇及び巴波川）を読み終る（十二月三十一日）

「新著百種」は、明治二十二年から二十四年にかけて、吉岡書籍店の発刊による小説叢書で、第一号は、尾崎紅葉の「二人比丘尼色懺悔」である。孤蝶は、紅葉の「新桃花扇・巴波川」を読み、△さわ云ふ者の筆力周到、写す所、真に近し。氏は世間平凡の事を脱化して以て一部をなす。之れ蓋し氏の明治の西鶴たる所以か。余わ只文章わからず、其着想に至りては氏の西鶴に勝る点多々なるを認むる者なり。▽（同）と評している。孤蝶の文学への関心が、硯友社の総帥である紅葉のような保守派に向けられているとしても、その批評の的確にして、識見の高さには、注目に値するものがある。

此日午前ハ新小説日本振袖始等ヲ読ム（一月四日）

拾時頃床に入ル。就眠新小説ヲ讀ム（二月二十八日）

久米ヲ訪ヒ新小説第二卷ヲ受取り帰ル（四月二十六日）

此日本屋にて都乃花、新小説、閨秀新紙を買えり。（六月十七日）

「新小説」は、「文芸倶楽部」とともに、明治文学を担う有力な文芸雑誌である。初期は、明治二十二、三年、小説家・劇評家の饗庭篁村^{あまは}はか須藤南翠・森田思軒ら同好会による発行であったが、二十九年に春陽堂が継承、本格的な文芸誌として発足した。孤蝶が愛読したのは、初期の「新小説」である。

本屋ニ行キ都之花、日本之文華、先代萩等ヲ買ヒ帰ル。（一月五日）

本屋ニ立寄り都之花ヲ請受リ帰ル。（二月二日）

外ニ出デ本屋ニ都ノ花ノ綴ヲ頼ミ（三月八日）

四時前外ニ一浴シ都乃花ヲ求メ来レリ（三月十六日）

万世橋ヨリ車ニ乗り日吉町ニ来リ都ノ花ヲ讀ム（四月六日）

午前都乃花三拾七号ヲ讀ミ終レリ（四月二十六日）

此日ハ朝ノ内都ノ花ヲ讀ミ、国民之友ヲモ見ル（五月五日）

「都乃花」及「出世景清」を讀終れり（五月十九日）

「都乃花」を受取り帰れり（六月一日）

本屋に行き都乃花及び日本乃文華、劇種本数冊を求め来れり（七月十日）

孤蝶がもっとも愛読した文芸雑誌は、「新小説」について「都の花」であった。「都の花」は、明治二十一年から二十六年にかけて、金港堂発行の文芸誌で、山田美妙が最初編集にあたり、小説を主とする、明治初期の代表的な雑誌である。「国民之友」は、明治二十年、徳富蘇峰の民友社から発行された革新的な総合雑誌であるが、孤蝶の関心は薄かったようである。そういう点では、後年、「文学界」の母胎となった「女学雑誌」も、このころの孤蝶には、無縁のようであった。

第三は、日本の古典への対応である。日記からとり出してみることにする。

途ニテ日本文学全書、恋八卦柱曆ヲ買フ（四月二十五日）

日本文学全書二篇及び近江源氏を受取る（六月一日）

此日朝より徒然草を読み二時頃迄に読み終る之れにて日本文学全書第一篇を終る（七月五日）

「文学全書九篇」及び「好色五人女」を取りて表町に着す（十二月二十五日）

此日朝ヨリ栄花物語ヲ読ミ午後二時過之ヲ終リソレヨリ曲亭雜記、源氏物語等ヲ読ム（三月十日）

此日朝より伊勢物語を読み始め（七月二日）

此日朝より紫式部日記を読み（七月三日）

三時頃より土佐日記を読み始め（七月五日）

「方丈記」をも読む（七月九日）

当時の孤蝶の、文学への関心は、欧米文学や日本の近代文学よりも、むしろ、日本の古典に傾注していたことがこの日記から推察される。その第一は『日本文学全書』である。この叢書は、日本の代表的な古典文学を集録した最初の古典全集ともいえるべきもので、池辺義象と落合直文の編集により、明治二十三年から二十五年にかけて博文館から二十四巻が刊行された。この全書を中心に、孤蝶の古典作品の繙読がなされたことが、日記に詳しく記されている。なお彼の古典遍歴のなかで、注目すべきは、浄瑠璃本（語り本）への執着である。彼は、寄席に足しげく訪れ、特に義太夫の語りを聞くのが好きで、義太夫本五冊を購入したなどの記録もある。十二月三十日の記に、一年をふりかえり、△義太夫を聞きし事の非常に多くなり（中略）之れを沓月分より通算する時は四百五拾四段となるなり▽と記されていることによっても知られる。文化文政以後の文学から着手してゆくが、劇作家近松門左衛門らが活動した元禄文学は、彼のもっとも愛好した古典であっただろう。平田禿木は、△その土佐の宿でのことを思ひ出し、我々は一つ浄瑠璃を聞かしてくれと所望した。快諾直ちに形を改め、端座して、音吐朗々と例の太閤記十段目一段を語ってくれた。由来義太夫は土佐人の嗜好で、その後も君は、親類の豊川邸へ来るその道の師匠に就いて相当修業を積んだらしい。登張竹風君なども、中国生れの広島出身で、義太夫はなかなかお得意らしいが、今にまだ一度も聞かして貰ったことがない。が、馬場君の方が確かに一枚上のやうに思へる。大体咽喉が美しいのである。ちよつと小唄や俚謡を歌つても、その余韻哀調捨て難いものがあつた。▽（『文学界前後』）と、その回想に記している。

孤蝶が文学に開眼してゆくなかで、彼に大きな力を与えた友人に島崎藤村がある。これについても「孤蝶日記」が明らかにしていることが注目される。

四時より島崎氏部屋に行き種々談話し小説の題名五つを得たり「仙人、蜃気楼、花曇り、運氣、天の河」これなり、

(二月十二日)

小説を制作した孤蝶が、その題名について藤村に相談し、彼の教示にもとづいて五題をあげたという記事である。

「孤蝶」の号も藤村が与えているように、また△ソレヨリ昼食シ島崎、赤田、二氏ト共に散歩ニ出デ田圃道ヲサマヨヒ品川ノ宿ニ出デ学院ニ帰ル▽(三月六日)、△島崎氏ト学院ヲ出デ種々談話シナガラ京橋ニ来リ(中略)椎菓子等ノ馳走ニナリテ拾時帰宅ス▽(三月七日)、△サンダム館後ノ芝地ニテ島崎、赤田ノニ氏ト相撲ヲ取ル▽(四月九日)などの記述からも察せられることであるが、二人は、日常生活の面でも、とりわけ親密であったことがわかる。

なおこのころの、孤蝶の文学における表現力やその傾向を示すものとして、
魁くる矢竹心の斯くぞとわ箴に薫る花にこそ知れ(二月十二日)

のような自作の短歌が記されている。陳腐な旧派の作風で、新味はまだほとんど見出すことはできない。同様に、たとえば絳景文にしても

馬場孤蝶における文学的青春

追々春景色立初メテ野路ノ若草萌出ル緑ノ色モ床シク、霞薄ク籠メテ小山ノ下ヲ辿ルモヲカシキ心地ス。加フルニ小川ノ流レ潺湲タル、所々ノ園ノ梅ノ咲キ香フナド何レカ春ノ心ヲ長閑ナラシムル者ナラザラン。(三月六日)

四時過御殿山ニ行クニ道ノ傍リノ桜ハ皆尽ク満開ニテ最早空ニ知ラレヌ雪モ降りシテ、加フルニ菜ノ花ノ黄金色ナド又ツキヌ眺メニコソ、御殿山近クニ行ケバ杉ノ木ノ緑リノ中ヨリ桜ノ白キガホノ見ユル又一シホ、山ニ行ケバ早九分通りノ盛り、相変ラズ掛茶屋ナドモ多ク有レド憩フ人モ少ゲナリ、田圃ニ面セル畦端ニ草折り數キテ眺メレバ、此ノ辺リハ小山多ク其間ニ田ノ入り込ミタル、菜畑ノ一面ニ花ツケタルガ黄金ノ板ノ如ク見ユルナドイトヲカシ(三月二十七日)

というように、古典的美文調で、柔軟にして格調高い擬古文体をなしている。しかし、擬古的であることが著しいために、作者の個性は発現することなく埋没していて、まだ表に十分発芽していないのがこの時代であった。

明治二十六年に「文学界」が発行された。孤蝶は高知にいたが、透谷や藤村ら在京の同人に協力、積極的な文学活動に入っていた。しかし、他の同人らも、透谷を除いては、孤蝶と同じ傾向をもって文学的近代の模索を続けており、旧套から十分脱出してはいなかったのである。このような古い感覚や思想・表現から脱皮解放されて、いかにして文学的近代を実現することができるか、そのことによって、彼らの日常は、焦燥と不安に包まれたのである。しかし、彼らが、日本の古典に、その若々しい眸を向けたことが、そのために、古い情感や思想に促えられて、近代への開眼を遮断されたのではなからうかとみるならば、それは即断であって、この時代の文学界派の古典への対応とその理解には、独自の世界があり、むしろ彼らは日本古典のあつかいとしては、新鮮な開拓者としての功績を担うものと

いうべきであらう。

明治二十六年、「女学雑誌」の分派として生まれた「文学界」は、明治女学校と明治学院の関係者を中心として成立した。同人とされた星野天知兄弟・北村透谷・島崎藤村・平田秃木・戸川秋骨・馬場孤蝶・上田敏らは、大方がキリスト者であるか、キリスト教に心を寄せる人々で、またその多くは、西欧の文学や思想を受容した若い学徒でありながら、古典に強い関心をもったことが、大きな特色であった。上田敏のギリシア古典学習のほかは、すべてが日本古典にその眼を向けた。天知は中古中世文学、透谷は中近世文学、藤村は中近世文学、秃木は中世文学、秋骨は、中世芸能（能と謡曲）、孤蝶は近世文学（浄瑠璃）に親しんだ。訓詁を主としてきた古典研究に対して、文学界派の古典対応は、日本古典の再検討・再認識であり、文学としての古典批判を通して古典復興（日本のルネサンス運動）という新しい対応のしかたであって、日本文学研究に注目すべき足跡を残している。

3

文学界同人とはいうものの、孤蝶だけは東京を離れることが多かった。明治二十四年、明治学院卒業後、彼は高知市私立共立学校の教師として赴任、二十六年八月に辞任して上京、九月には日本中学に就任、二十八年には彦根中学に転勤、明治三十年帰京、浦和中学に転勤後は、日本銀行に勤務、それからは東京定住となった。しかし、文学界同人らとの交遊は、密接であって、彼の文学の展開と拡充には、やはり「文学界」が中心的役割を果たしたが、三十一年の「文学界」の廃刊後、明治三十四年ごろからは、新詩社の明星派に移り、与謝野鉄幹との交友を深めていった。

文学界時代の孤蝶の主なる作品には、「文学界」発表のものを挙げると、長詩「酒匂川」（26・11）、評論「想海漫

歩」(同)、小説「片羽のをしどり」(27・1)、小説「流水日記」(27・35)、詩「破三味線」(27・9)、小説「みを
つくし」(27・9)~(12)、詩「孤雁」(27・11)、小説「かれ野」(28・1)、詩「すりごろも」(28・3)、随筆「我おも
しろの記」(28・7)、随筆「柴刈る童」(29・1)、小説「雪の朝」(31・1)、詩「みちしば」(31・1)などがある。
同人らのなかで、孤蝶の作品は、小説において、優れた才藻を発揮しており、その点では、初期の藤村をはるかに越
えるユニークな存在であった。孤蝶が小説を中心に、その文学活動を始めた背景には、卒業後、尾崎紅葉や樋口一葉
との交わりがあったことも考慮すべきである。そして、小説や詩、また随想においても、古典調を脱し得なかつたに
せよ、『野守草』(明治35)、『連翹』(38)のごとき、滋味深い随想集も遺していることが注目される。

孤蝶の特質を、他の同人に比べる時、もう一つの独自の方面として、批評(評論)家の風貌を備えていたことであ
る。木戸昭平氏が、△孤蝶は文学における一種の土佐の脱藩者であった。そして兄辰猪の残した自由民権の流れをつ
ぎ時流をつねに浄化しようと挑戦したところがなんとも志士的であると思われる。▽(『馬場孤蝶』)と評されている
のも、いわば孤蝶が、アウトサイダー的な文明批評家・警世家であることを指したものと思う。『近代文芸の解剖』
『社会的近代文芸』『野客漫言』などの著作は、その片鱗を示すものである。

なかでも、彼が、出発を始めた文学界同人らの心情を、藤村を中心に、告白的に語った次の回想は、出色である。

先日、島崎君が、(中略)『あの時分の僕は自分が何を書いてゐるのだからよくわからなかつた。何ういふ風にすれ
ばいいのか、自分には分らなかつた。要するに、自分のものといふものを、何も持つてゐなかつたのだ。それから
見ると他の諸君の方が、確かに自分のものといふものを書いてゐた』と云ふ様な意味のことを云つた。勿論、さう

いふ様な所はあつたに相違なからうが、これを他の方面から見れば、さういふ所が反つて鳥崎君の強味であつたと思ふ。自分の持つてゐない何物かを求めようとする。言葉を換へて云へば、自分の持つてゐる何物かをしつかりと捉へ得るようにならうとする努力、さういふ努力のために作者の全人格が甚だしく動揺してゐるといふ所が鳥崎君の初期の作物からは明かに看取せられると思ふ。即ち、生まんとする悶え、作り出さんとする跑ぎがそれらの作品の大部分で認め得られる。

『文学界』の連中の芸術的の方面の目的といふのは、今の言葉で云ふならば、各自の個性、少くとも主観を充分に且つ明かに投影した作品を発表しようとするのであつた。然し、当時の文壇に現はれた先輩の作品は吾々のさういふ心持から見て模範にすることの出来るやうなものとは殆どないと云つてよかつた。そこで、さういふ目的をもつてゐる者共は、自ら敢然起つて自分達にとつて最もコンジニアルな形式なり、精神なりのものを、何か作り出さなければならなかつた。その当時吾々の間には、ジェニユインなものを作りたいという言葉をよく用ゐた。即ち、純なものを作りたいというのである。今日の言葉で云へば、充分個性の表われたものを作るといふ意味になる。鳥崎君がさういふ純なものを作り出さうと、最も多く努力した人の一人であることは疑ひがない。(『明治文壇の人々』)

次にあげるもう一篇は、文字界刊行時代を回顧して、文学界同人らが、文学を通して、何を志し、何を主張しようとしたか、その特質、その独自性を、明晰的に確に指摘した思想と文学に関する重厚な評論といふべきものである。

『文学界』の創立者等は、兎に角孰れかの耶蘇教の教会に籍を置いた人々である。その当時の耶蘇教なるものは

可成り新知識の進歩主義の人々を集めてゐた。が、しかし、さういふ人々の中心思想は、東西の古い道徳から何程も脱出してゐるのではなかつた。『文学界』の創立者等の志は、さういふ古い道徳から自分等の思想を解放しようといふのに在つた。『文学界』の創立者等の間には『繩墨を脱する』といふ言葉が行はれた。即ち古い羈絆を脱する、即ち習俗を脱するといふ意味だと解して宜からう。

前に引用した透谷の文章の中からも窺ひ得られるが如く、『文学界』の創立者等の志は所謂凡人の思想行為、即ち凡人の生活の尊重に在つた。凡人の存在の意義、凡人の尊嚴を主張するに在つた。『文学界』創立者等の当時文界に対する態度は——其当時の思想界に対する態度は、その当時文界の權威を成してゐたところの硯友社派及び民友社派の文学に対する反逆の態度であつた。謂はば物質主義に対する精神主義の反抗であつた。洗煉に対する野性の反抗であつた。文界の紳士に対する文界の書生の反抗であつたのだ。言葉を換へて云へば、理知主義に対する感情主義の反抗、客観主義に対する主観主義の反抗であつたのだ。

『文学界』の同人は自分等の失恋のことを平気で書いた。尤もその点では僕と戸川君とが一番罪が深かつたかも知れないが、他の諸君もその点で全然無罪だとは言へなからう。ところで、二十八年頃だと思ふのだが、川上眉山が、尾崎紅葉が『文学界』の連中は恋の失敗のことを殆んど誇りがに書いて居るのだが、あれは並の人ならば隠すのが本当であるのに、どうしてああいふ風に露骨に書くのであらう。あの連中の心持がどうも解らない」と云つてゐるといふことを僕に話したことがある。『文学界』の連中が露骨に自分等の失恋を告白したのは、前に言つた通りの平凡生活の尊重、客観主義に対する主観主義の反抗、洗煉に対する野性の反抗、といふやうな所に根拠を有してゐたのだと思ふ。『英雄畢竟馬前の塵である。つはもの共の夢の跡は夏草である。羅馬の城壁は跡なく崩れてしま

つた。英雄の事業に何の永遠があらう。恋を求め天地の美を探る凡人の心の方が、遙はるかに永遠であり、意義がある』と、島崎君が高知で僕に話したことがあるやうに思ふ。

『文学界』の同人等は当時の思想界の現状、当時の文界の現状にはあきたらなかつた。で、彼等はその現状から脱却しようとした事は前に言つた通りであるが、其脱却しようと思つた本人が矢張り彼等自身の裡に旧い多くのものを有つて居つた。なほその上に、残念なる哉、彼等は自然主義の開拓者等の如き良い師表を有つてゐなかつた。『ハムレット』と『若きエルテルのわづらひ』とはさう遠くまで行けないことは知れ切つてゐる。彼等は人生にロオマンスを索めた。即ち彼等の向つた方向は間違つてはゐなかつた。が、到着点を確かに睨んでゐたのではなかつた。『文学界』の創立者等及び『文学界』に可成り關係を有つてゐた人々の中で、出発点から到着点まで少しも疲れずに来た人が二人ある。それは島崎藤村君と田山花袋君である。(『明治文壇の人々』)

孤蝶の指摘は、文学界派の心情や思想が、西欧浪漫主義者のそれであることを、もつとも鮮明に語つてゐるのである。そのような浪漫主義的志向において、彼らは、旧弊への反抗批判を試み、心情の告白、自我の主張によって、旧い束縛から烈しく解放を求めた。そこには、西欧的近代の到来への切なる待望があつたのである。日本の文学に近代をもたらそうとする模索と苦闘、それが「文学界」の人々の、偽らぬ文学的青春であることを、孤蝶は、いみじくもここで語つてゐるのである。

文学界派の人々が、学芸や生活について、親しく語りあった場所は、下谷区三輪町の藤村の兄の家、上野に近い池の端七軒町の秋骨の下宿、元箱根の葦の湖畔に建つ民宿青木であった。このなかでも、箱根での明治二十六年一夏の生活は、彼らの文学的青春と交遊、明治人の生き方を、もともとも鮮烈に克明に、しかも劇的に物語る、文学界派ロマンスともいべき一篇の敘事詩に比せられるものであろう。

明治二十六年、関西探訪の旅に出発した藤村は、七月、石山から帰京の途に上り、途中、東海道の吉原に近い鈴川で、透谷、秋骨・秃木と会合、四人は、その後で箱根に上り、元箱根の青木に宿泊した。青木は旅館橋本屋の親戚で、現在の民宿にあたり、当時の主人は青木新太郎、この青木家は、現在は「美松」という食堂を経営して昔日の面影を残している。天知兄弟は、参加しなかったが、文学界の主要メンバーが一堂に会したことは興味深い。透谷に続いて、秃木が下山してから、秋骨・藤村は残留し、八月には、孤蝶が来訪、下旬に三人は下山、途中、塔の沢の宿にたちどり、二人に送られてまず藤村が鎌倉に出発、続いて孤蝶が帰京、秋骨は一人残って元箱根に帰った。これが、一夏の彼らの交遊と会談の生活であった。

これまでに、この箱根の会合は、藤村の小説『春』を引用して説明されることが多かった。しかし『春』は小説であるから、内容を直ちに事実としてうけとることに問題がある。そこで私は、なるべく事実に近い資料によって、この会合を再現したいと思う。

まず秃木は『文学界前後』に、次のように回想している。ここでは、透谷の風貌が見事に活写されていて興味深い。

二三日そこへ滞在して透谷君叔父さんの一家へも別れを告げ、鈴川から沼津へ出て、帰京の途に就いた。沼津からは円太郎馬車に乗つて、三島まで来た。その時透谷君が自ら馭者台へどつかと坐を占めて、凄じい勢で馬を馭したことを覚えてゐる。三島で昼食をして箱根の山へかかった。日和下駄履きで、ごろた石をしきつめた道を登るのであつたが、十国峠あたりまで来て、やつとはつとした。夕暮近くに箱根の宿しゆくに來ると、秋骨君が懇意の明治学院の洋人が散歩してゐるのに会つた。それから、秋骨君が知つてゐる、湖畔の、下宿屋のやうな家へ落着いた。そこのお婆さんがよく学生の世話をし、宿泊者中には知名の士も出てゐて、それが自慢なのだといふことであつた。一浴後、夕食となつたが、何でも湖でとれた小海老の煮付かなにかを下物に、またしても珍しく酒を命じたのであつた。浅酌中、透谷君は横浜矢戸坂上のゲーティー座で見たハムレット劇の思ひ出を語つた。座頭といふのは、もと牧師であつたのが役者になつて、東洋へ放浪して來たのだといふことであつた。興に入ると、透谷君は起つてハンケチを頭へ載せ

いづれを君が恋人と

わきて知るべきすべやある

の、オフエリヤ狂乱の舞をひとさし舞ふのであつた。

翌日は透谷君が東京へ帰るといふので、三人で底倉まで送つて行き、蔦屋へ寄つて一浴し、此処でもまたビールを命じ、給仕に出た宿のお婆さんからその息子が鎌倉の師範学校へ出てゐるといふので、自慢話も聞かされ、また歓待もされた。日が蔭つてから透谷君は立つて行つたが、その時秋骨君が尻つ張しよりで人力の後押しをした姿は今に忘れない。

三人で宿に帰つて行つたが、蘆ノ湯へ来た時はもう暗く、松明を二本買ひ、それを頼りに湖畔の宿に帰つた。
〔蘆湖畔の一夕〕

次は藤村の『眼鏡』（青春の自伝を児童読物風に語つた作）の箱根の場面である。

元箱根へ着きました。まあ、高い山の上にまた斯様な湖水がある。広い晴々とした琵琶湖とは違つて斯の蘆の湖畔はシン／＼としたやうなところです。見ても冷たさうな、青い、深い、透き通るやうな水です。

「ギーー　ギーー」

山の上で人が櫓を漕いで、旦那の着いた宿の障子の外を通ります。（中略）

部屋の天井でも、畳でも、湿けて白く成つて居ます。庭の木を見れば苔が生えて居ますし、石垣の方を見ればそこにも苔が生えて居ます。何もかも苔だらけです。天井や畳の白いのも、必とあれも苔ですよ。

こりやまあ、うっかりして居ると私達の身体にまで苔が生えさうだ。斯の静かな湖水の岸の宿で、林さんと藤森さんとは二晩か三晩も泊つて話して、やがて東京の方へ帰つて行きました。吉川さんと旦那だけ残りました。（十八）
斯の箱根の宿へは、高知でお目に掛つた旦那のお友達の中西さんが訪ねてお出に成りました。

旦那も喜びまして、

「僕は今度の旅で、面白いお爺さんに逢つて来た。」

と言つて、来助爺さんに逢つた時のことや、あの隠居が人に知られずにお百姓の鍬なぞを打つて居た話をして、

お友達に聞かせました。

いよ／＼旦那も箱根を発つといふ日には、中西さんも吉川さんも山の下まで見送らうと言ひまして、三人して湖水の岸にある宿を出掛けました。(中略)

皆な草の露に濡れて、山を下りて行きますと、谷の下の方に早川の水が見えます。山を下りれば下りるほど、段々近くなつて来て、しまひには往来へ掛けた橋の下へその水が流れて来て居ました。そこにあるのが塔の沢の温泉場でした。(十九)

塔の沢の温泉宿の二階からは、早川が直ぐ欄の下に見えました。

「一ぱい入つて来ようぢやないか。」

と旦那達は浴衣に着更へまして、三人で話し／＼湯殿の方へ参りました。

「パタ／＼、パタ／＼」

長い廊下のところには、手拭を提げたお客だの、宿の姉さん達の往つたり来たりする上草履の音がして居ます。

湯殿はずつと梯子段を降りて行つた下の方にありました。湯殿の直ぐ前から見ると、丁度滝壺の中のやうなところに、中西さんや、吉川さんや、それから旦那が好い心地さうに入つて汗を洗して居ました。(二十)

旦那は二人のお友達と部屋へ戻りまして、お昼飯を食べました。オサシミでも何でも斯様な山の下で食べられるんです。

中西さんでも、吉川さんでも、年は旦那より一つ二つ上でしたが、皆な若いさかりのお友達で、面白さうに談したり、笑つたりしました。やがて御二人とも湯元まで旦那を送らうと言ひまして、連立つて塔の沢の宿を出ました。

塔の沢と湯元とは、くつついて居ると言つても可い位です。崖に添うて静かな道を下りて行きますと、もうそこが湯元でした。(二十一)

旦那は作者藤村、吉川さんは秋骨、中西さんが、高知の共立学校を退職して帰京した孤蝶である。藤村・秋骨・孤蝶は、明治学院在学中は、同級生というよしみもあつて、この三人の間には、また格別の親交があつたようである。この間の心情を、秋骨は、『自画像』のなかで、次のように詳細に語っている。

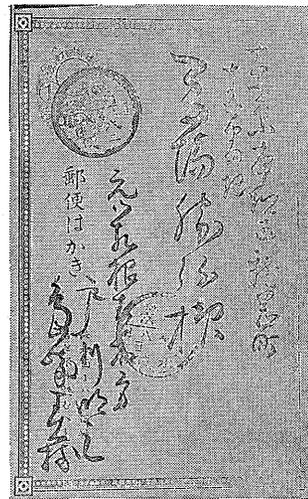
私より少し後れて馬場孤蝶君が入学して来られた。フロック・コートを着用して来られたと私は思つて居たが、それはモオニングであつたさうで、それは馬場君自らの私に語られたところである。私如き粗末な和服のものからモオニング姿の君を見たのであるから、私は好奇心をもつたのは勿論であつたが、何でも豪い人に相違ないと思つた。当時の馬場君は非常に著実に几帳面な人で、学課なども正直に勉強して来られたのであつた。——さう云ふと今は著実でもなく正直でもないと言つたやうにも取れるが、私の云ふのはさう云ふ意味ではない。今日ではそれ以上にもつと立派な特徴をもつて居られると云ふのである。なほこれは今でもさうであるが、何でもよく知つて居れる人で、要するに私共より先進の人であつた。少なくとも私より学問に於ても世事に関する知識に於ても、遙かに進んだ人であつた。殊に国文学の知識に於ては、到底私共のその足下にも及ばないところで、学期学年の試験となると、芝生に円座をつくつて、馬場君に来てもらひ、一学期の講義をくりかへしてやつて貰ふのが例であつた。が、こんな風にして何時とは無しに、四十幾年もつづく友誼が此処で作られたのであつた。性情や傾向の然らしめ

たところもありはしたのであらうが、私に於ける兩君の感化と云ふものは恐ろしいもので、かくして今日の私の基礎が作られたのであつた。兩君が無かつたならば、私は当初学院に入つた時が空々であつたやうに、終りも空々であつたらうと思ふ。なほそれにつけても云はなければならぬのは、島崎君の態度である。私の入学当時の君の態度がそのまま続けられて居たならば、私などは到底島崎君には口をきく事さへ出来なかつたであらうと思ふ。それが一と夏の変化で、極めて質素な人となられたので、而も島崎君の方から口をきき始められたので、私は交際することが出来るやうになつたのである。それで自から馬場君と三人の仲間が成立したわけである。

秋骨の孤蝶評が、この回想にみられることも参考になるが、藤村は、『春』のなかで、次のように、孤蝶を評している。これには虚構はなく、事実そのままである。

三人の中では足立が一番年上である。彼は青木よりすこし若い位の年頃であつた。男らしい額には軒昂とした意氣を示して居る。物言などのテキパキとして且つ大人びたところは、早くから浮世の波に擦もまれたらしく見えた。かりそめにも曲つたことの嫌ひな男であると、日頃他ひとから言はれて居たが、一面には甚だ氣象の面白いところが有つて、西国の人に特有な唳ささい感覺を具へて居た。元箱根の宿に居た間、近松の世話物などを読んで友達を泣かせたことも有る。義太夫の一節も語つて見ようといふものは、友達仲間では彼一人であつた。(十)

藤村は、秋骨がふれなかつた面から、孤蝶像をとりあげて興味深く語っている。私は最近、秋骨と藤村が連名で、



孤蝶に宛てた葉書（明治二十六年八月九日付、元箱根の青木から發送）を入手した。これは『春』の敘述が、事実を語っていることとの証明となるだけでなく、また秋骨・藤村・孤蝶の三者の親交を示す資料ともなるものである。

書信本文は藤村筆であるが、△此度は御上京の旨にて近々拝顔を見んとは近來の快事に御座候付ては御駕來には少々無心有之候御都合にて巢林子世話物にても御懷中用意被下候様早速御返事きたのであろう。その時、藤村より依頼された近松の世話物淨瑠璃を持參、青木家で、孤蝶が読み語ったその作品を聞いて、秋骨と藤村は感泣したというのである。

「文学界」が創刊されて、明治文学や明治思想は、そこに寄り集まる青年らによって、近代への門戸が半ば開かれ、清新な文化の夜明けの光が、射しこんできたのである。その担手の一人であった土佐出身の孤蝶は、郷土土佐の自由民権運動の志士達の理想を、いわば文学において実現しようとしたともみることが出来る。文学界同人のなかでは、きわめて個性的で異色ある人物として彼が理解される所以である。そのような彼の文学的青春を育んだ明治学院とその学友らとの、若き日の生活の実態、その日常の歴史が、克明詳細に記されたこの「孤蝶日記」の価値と重要性は、このささやかな解説では、語りつくすことのできないほど、豊かな滋味を湛えている貴重な記録である。（本稿を草するにあたり、品川力・阿部洋・馬場昂太郎の諸氏の御厚意に謝意を表する。）

明治二十三年

馬場勝弥（孤蝶）日記について

秋山繁雄

この馬場勝弥（孤蝶）の明治二十三年の日記が、馬場家のご好意によって明治学院史資料集に収録、公表されることはきわめて意義深いことである。

この日記のもつ意味に二つのことが考えられる。その一つは明治学院の歴史にとりきわめて重要であるということである。他の一つは文学者としての馬場孤蝶研究にとりこれまた重要な資料であるということである。

大ざっぱにいつても、明治学院の百余年にわたる歴史の中で、最も資料の少ない白金開校時から明治三十年頃に至る間に、この馬場の日記が加わることは、この間の歴史解明に一つの光明を与えることになる。もちろん、この白金初期の間に資料が全然ないというのではない。明治学院開校願をはじめ、明治学院一覧なども一部の欠落はあるものかかなり保存されている。しかし学生簿や成績表、在学証などいわゆる実務記録になるとほとんど残っていない。明治学院理事會記録にしても当時は英文、和文二通の記録があったはずであるが、明治二十年から二十五年に至る間は皆無で、わずかに明治二十六年頃からの英文理事會記録が史料室に保存されているに過ぎない。従って明治学院九十

年史、明治学院百年史の編集、執筆に当っては、この時期の新たな資料の発掘に大きな努力が払われたことは関係者のすべてが知るところである。

これに引きかえ明治学院五十年史の編集出版は昭和二年であるから、今より六十年近くも以前のことであり、当時は学院の規模も現在と比較にならぬほど小規模であり、資料収集も容易であり、ヘボン博士の後を継いで明治二十三年から第二代総理となり大正十年までその職にあった井深梶之助も健在であり、またこの当時の学生もかなり生存していたのでこれらの人びとの助言、回想などもうることができ、執筆者の鷲山弟三郎(第三郎)は五十年史の執筆に随分便宜を受けたものと考えられる。従って今日から見ると明治学院五十年史は明治学院の歴史にとり貴重な資料源になっていることも争えない事実である。

しかし五十年史完成後は折角集められた資料は分散され、時の経過と共に散佚したものもあった。明治学院九十年史の編集事業は、分散した資料を再び集めなおすことから始められ、その上に新たな資料の発掘整理に力を注ぎ、九十年史の完成後、集積された資料に加うるに新たに集められた資料を用いて井深梶之助とその時代三巻を刊行し、さらに明治学院百年史の編集事業に引き継がれ、新資料の発掘に努めて、執筆者の工藤英一教授の起案により、明治学院百年史資料集を刊行し、百年史完成後も引き続き明治学院史資料集を刊行できていることはまことに幸いといわなければならない。

さて既述の如く白金移転当時の資料不足の状況の中に、今新たにこの馬場孤蝶の明治二十三年の日記が全文、明治学院史資料集に収録、公表されるわけである。たしかに長い歴史の中において一年というのはまことに微々たる期間である。明治学院百余年の歴史にとっても、また馬場孤蝶の七十二年の生涯にとっても一年間というのはたしかに短

かい期間である。それにもかかわらず明治学院史にとっても馬場孤蝶研究にとっても重要な資料であるというのほどういうことであるか。それは馬場がこの明治二十三年に明治学院の学生であったことの自己証明であり、この一年間を綴る自らの日々の記録であるからである。

これをもう少し具体的に見るならば、この二十三年の日記は、馬場孤蝶が明治学院普通学部二年の後半に当る明治二十三年一月一日から、普通学部三年の前半の二十三年十二月三十一日までの日々の記録である。この馬場の日記を通して見るとき、これまで無味乾燥であった明治学院一覽に記されている明治学院普通学部の学科課程、学年、学期及休業、入学、在学及退学、礼拝及聖書授業、試業及卒業証書、奨学金及褒賞金、寄宿及取締、生徒心得、束脩、授業料及其他の費用、生徒の結会、学年暦等につき、普通学部の学生の一人である馬場を通して、実際にどのようなのであったかを確認できるのである。

また馬場の日記には、教師、学友、手にした書物、見に行った義太夫のことなど詳細に記されている。これらもまた当時の学生生活を知る上でたいへん貴重である。もちろん日記であるから自らは名前や書名や外題を記すことによつて多くの想像をもつことができたであろうが、日記を読むものにとつては単なる列記と思われることがないでもない。しかしそれにもかかわらず、この日記には学ぶべきことが多いと考えるのは私一人ではないであろう。

以下にこの馬場の日記を読むための補助にと考え、参考資料をいくつか記すことにする。

先ず初めに馬場孤蝶の学友たちを知るために明治二十九年普通学部一覽の中から明治二十四年卒業生の所をみることにする。もちろんこれは明治二十四年六月に卒業証書をもらった学生たちで、この中には中島久萬吉、和田英作、北村季晴・関友三など何人かの中退者がいるのであるが、これらの人々は含まれていない。

馬場勝弥(孤蝶)日記について

〔明治二十四年普通学部卒業〕

当時の近況

在東京

彦根尋常中学校教諭

在東京

在静岡県三島

石見国浜田製糸所在勤

在米国ハーワード大学

農科大学別科生

在神戸伝道者

在米国ノルスウエストルン大学

在米国

東京倉庫会社々員大阪在勤

パチエラー、オヴ、デビニター(パンフイック、プレスビテリアン

在米国

東京一番町日本基督教会伝道者明治学院神学部嘱托講師

在東京

氏名	本籍
赤田開太	東京
馬場勝弥	東京
福間源太郎	鳥取
花島轍吉	静岡
星野元治	群馬
比佐道太郎	福島
子安千代松	東京
松原茂雄	石川
松浦和平	群馬
岡本敏行	滋賀
小城徳太郎	長崎
奥野武之助	東京
小倉鋭喜	高知
島崎春樹	長野

在北海道

在東京

在東京帝国大学文科撰修生

在群馬一ノ宮

在横浜

広島教会牧師

以上二十名が明治二十四年普通学部卒業生であった。これらの学友たちの名前が馬場の日記の中に出てくる。もちろん日記に出てこない名前もあるが、学院において机を並べて学んだ学友たちである。

次に戸川明三（秋骨）が死去したとき島崎藤村が戸川の追悼文を書いている「明治学院時報」昭和十四年八月二十日、第八十六号を左に掲げる。

学院時代と云へば、わたしたちのクラスとてさう取り立てゝ云ふほどの特色もなかったが、一体に皆の気がそろつてゐた。そんなところから、各自思ひ／＼の氣質を延ばして行かれもしたしました学窓を巣立つてからも種々な面に出て働く人物を養ひ得たかと、今になつていろ／＼想ひ当るふも多い。年齢から言へば、わたしたちクラスのものとは随分不揃ひで、当時としてはその不均も止むを得なかつたから、戯れに「お爺さん」と呼ばれるほどの年頃の生徒もまじつてゐたが、一学級としての学生の数もさう多くなく、時に増減はあつても二十四五名を超えなかつたことが、いろ／＼の意味でわたしたちのために好かつたかとも考へられる。和知君、奥野君、小倉君などは

高畑宜一	北海道
高崎四郎	鹿児島
戸川明三	東京
富永兵弥	群馬
友野與四郎	神奈川
和知牧太	山口

級中でも年輩な人達であつたが、これらの諸君はいづれも宗教に行かうとしてゐたくらるだから、万事を争はず大概のことは譲りに譲るといふ遣り方であつたし、年少な仲間には松浦、友野、富永、星野等の諸君を数へ、ベエス、ボールの運動などに身が入つたのもこの年少なものの方に多かつたが、学業の成績にかけてはクラス中堅の人達に及ばなかつた。戸川君は、比佐君や馬場君等と共にその中堅の人達で年齢の上でもわたしなぞより二歳乃至三歳の兄であつた。その周囲には氣を負ふ岡本君のやうな人もあり、努力家の高畠君のやうな人もあつて、ジニオル、コンテストなどで賑はつたものだ。わたしたちは皆で廻覧雑誌などもつくり、文才に富んだ比佐君や稲葉君は早くから好いものを書いたやうに覚えてゐるし、戸川君も廻覧雑誌寄稿者の一人には相違なかつたが、しかし学院時代の戸川君はどちらかと云へばおもむろな準備の日を送つてゐて、主として語学の勉強に専心してゐたやうに思ふ。故ランヂス教授が米国からの赴任も、わたしたちが二年生の頃のことであつたやうに記憶するが、同教授の精緻な学風と熱意とはいつの間にかクラスのものゝ敬慕の的となり、夫人もまた学生を愛して有志のものに独逸語の初歩を授けて呉れた。……

次に島崎藤村が『桜の実の熟する時』の中で馬場孤蝶について描いている箇所を見ることにする。『桜の実の熟する時』は藤村の自伝小説といわれるもので、明治二十三年の初夏の頃から卒業後一年の明治二十五年春頃までを書いているので、この馬場孤蝶の明治二十三年の日記は、ちょうどその中に含まれ、時期的に相重なる部分があるのである。その意味からも、重要であると思われるので、引用はかなり長くなるが、以下に馬場が描かれている箇所を記すことにする。なおこの『桜の実の熟する時』では、馬場孤蝶は足立、戸川秋骨は菅、藤村自身は岸本捨吉として描か

れている。

(三)の中で、三年を終了した夏休みに、捨吉はキリスト教青年会主催の夏期学校の講演を聞きに明治学院に行き、菅と会話する所で、

『どうだらうね、足立君は来ないだらうか。』と捨吉はもう一人の同級生のことを菅に言つて見た。捨吉は菅と親しくなる頃から足立とも附合ひはじめた。三人はよく一緒に話すやうになつた。

『足立君は来るといふ話が無かつた。しかし来ると可いね。』

と菅も言つて、捨吉と一緒に部屋の窓際へ行つて眺めた。」とある。

(五)の中で、捨吉が黙し勝ちになり、学友ともめつたに口をきかない頃、

「斯ういふ中で、捨吉は二人の友達に心を寄せた。相変らず菅は築地の家の方から通学して居た。足立が寄宿舎生活をするやうに成つてからは、三人して一緒に成る機会が多かつた。」

と捨吉が足立と菅を特別に思つてゐることを記し、次に捨吉が足立の部屋を訪ねる所で、

「捨吉は足立の部屋の前へ行つて、コン／＼と扉を叩いて見た。

『お入り。』

といふ声がする。『カム・イン。』と英語でいふ声もする。

扉を開けて入ると、丁度菅も学校の帰りがけに寄つて居た。三脚しか椅子の置いて無い部屋の内には足立、菅の外に同級の寄宿生も二人居て、腰掛けるもあり、立つもあり、濃い色のペンキで木目に似せて塗つた窓枠の内側の

ところに倚りかゝるも有つた。

『岸本は丁度好いところへ来た。』

と足立は年長の青年らしく言つて、机の上に置いてある菓子かしの袋を勧めた。

とあり、捨吉が皆と一緒に菓子を食べる。菅が風呂敷包からダンテの『神曲』の英訳本を取り出して見せたりする。続いて、回想を交えながら、

「足立が前に言つたことは、ふと捨吉の胸を通過とつうした。『何故、君は彼様に一時黙つて居たんだ』と足立が尋ねたが、左様直截ちよくちに言つて呉れるものは斯の友達の外に無い。捨吉はその時の答をもう一度探して見た。『僕は自分の言ふことが気に入らなく成つて来た……一時はもう誰にも口を利くまいと思つた……左様すると独語ひとりごとを始めた、往來を歩いて居ても何か言ふやうに成つた……到底沈黙とてもを守るなんてことは出来ない……』

あの時、足立は快活な声で笑つた。そして斯様なことを言つた。『なにしろ岸本にも驚くよ。折角あんなに書いた物を焼いて了ふなんて男だからねえ。』

眼前めづまへにあることと済んで了つたことが妙に混り合つた。捨吉は足立や菅と一緒に居て、一人の友達の左から分けた髪が眼についたり、一人の友達の黒い羽織の色や袴の縞などが眼についたりした。何処までが『今』の瞬間で、何処までが過去つたことだか、その差別をつけかねた。

髭の赤い舎監が部屋の扉を開けて見廻りに来た。第四学年と成つてからは舎監も皆の爲るやうに為せて、強ひて寄宿の規則などを八釜やかましくは言はない。以前はこはい顔をして居た人が心易い笑顔をさへ見せ、友達でも呼ぶやうな調子で『足立君』とか『菅君』とか呼ぶやうに成つた。

『残り物ですが奈何です。』

一人の同級生は菓子の袋を割いて舎監の前に置いた。

『それぢや一つ御馳走に成るかな。』

と舎監は手を揉んだ。

軍人あがりの斯の舎監は体操の教師をも兼ねて居た。部屋の中央にある机の側に立つて、足立達の用ぶふ教科書や

字書を眺めた目を窓の外へ移し、毎日々々塵埃ほこりになつて器械体操などを教へる広い運動場の方を眺め乍ら、

『秋らしく成つたネ。西南戦争を思出すナ……』

と粗い髭をひねり／＼言つた。

捨吉は窓に近く造りつけてある書架すえだの前へ行つて立つて見た。何気なく足立の蔵書を覗くと、若い明治の代に翻

刻されたばかりの『一代女』が入れてある。古い珍本から模刻したといふその挿画のめづらしい元禄風俗や、髪の

形や、円味をもつた袖や、束髪などの流行つて来た時世にあつて考へると不思議なほど隔絶かぎはなれて居る寛濶で悠暢な

昔の男女の姿や、それからあの皆なの褒める○○の多い西鶴の文章は捨吉も争つて買つて来て開けて見たものだ。

何といふ汚れた書ほんだらう。左様考へた彼は『一代女』を引割いて捨てた話をして、酷く足立には笑はれた。それら

のことが一緒に成つて胸の中を往来した。……

菅が築地をさして帰らうと言ひかけた頃は足立も捨吉も窓のところから一緒に秋らしい空を望んだ。」

と描いていて、馬場孤蝶の日記を読む上で重要な示唆を与えている。

(七)の中で、捨吉が日本橋の恩人田辺の家から寄宿舎に帰ってきた所で、

「捨吉は足立の部屋の扉を叩いて見たが、あの友達はまだ帰つて居なかつた。……」

秋の日のひかりは岡の上にある校堂の建物の内に満ちた。翌朝になつて捨吉が教室の方へ通つて行つて見ると、二十人ばかりの同級生の中に復た菅と足立の笑顔を見つけた。」

と記され、卒業證書をもらったあとと記念樹を植える所で、

「皆で寄つて集つてそこに新しい記念樹を植多た。樹の下には一つの石を建てた。最後に、捨吉は菅や足立と一緒にその石に刻んだ文字の前へ行つて立つた。」

『明治二十四年——卒業生』

と描いている。そして捨吉が足立と菅と別れて行く所で、

「学校を卒業する頃の菅はエマソンなどの好きな、何となく哲学者らしい沈着おちつきを有つた青年に成つて行つた。それにクリスチアンとしての信仰もこの人は極く自然であつた。足立はまたさかんな気象の青年で、基督教主義の学校の空気の中ありながら卒業するまで未信者で押し通したといふことにも、一つの見識を見せて居た。」

『いよ／＼お別れだね。』

捨吉は二人の友達と互ひに言ひ合つた。

菅は築地へ、足立は本郷へ、いづれも思ひ／＼に別れて行つた。十六歳の秋から二十歳の夏までを送つた学窓に離れて行く時が捨吉にも来た。」

と叙述している。

捨吉は卒業後学校へ通わせてくれた恩返しに横浜の伊勢崎屋の手伝いに行くのであるが「しばらくもう東京の方

の菅や足立のことを思出す暇さへもなしに暮し、「他の学校に比べると割合に好い図書館が有り、自分の行く道を思ひ知ることが出来、それからまた菅や足立のやうな友達を見つけることが出来たといふだけでも、この学窓に学んだ甲斐はあつた」と回想する。

(九)の中で、伊勢崎屋の手伝いをやめて、「捨吉はしばらく逢はなかつた菅や足立を見る楽しみをもつて東京の方へ帰つて行つた」のであるが、東京へ帰つた後、捨吉は菅を誘つて青木(モデル北村透谷)を訪ねようとする時に、「その時菅は高輪の学校を卒業する頃に撮つた写真を取り出して、捨吉と一緒にあの学窓を偲ぼうとした。四年も暮した学窓は何と言つても二人に懐かしかつた。その写真の中には、菅、足立、捨吉の外に、もう一人の学友がいつでも単衣ものに兵児帯を巻きつけ、書生然とした容子に撮れて居た。

菅は、膝の上に手を置き腰掛けながら写つて居る足立の姿を捨吉と一緒に見て、『僕の下宿している朝鮮の名士が、この中で一番足立君を褒めたつけ。この人は出世しさうだ、左様言つたつけ。見給へ、この写真には僕も随分面白く撮れてるぢやないか——まるで僕の容子は山賊だね。』と濃い眉を動かして笑つた。……

斯う三人一緒に成つて見ると、もう一人の学友——青木と幾つも年の違ひさうもないあの足立をこゝに加へたならば、と左様捨吉は思つた。」

以上は島崎藤村の自伝小説『桜の實の熟する時』の中から足立として描かれている馬場孤蝶の出でくる箇所を拾つてみたのであるが、藤村と馬場の関係には深いものがある。これを馬場の日記にみても、島崎の出でくる回数はかなり

馬場勝弥(孤蝶)日記について

り多い。参考のために次に大まかに調べたものを記してみたい。

〔明治二十三年の馬場孤蝶日記に出る学友、教師の頻度数〕

(28回) 比佐道太郎、赤田開太 (22回) 島崎春樹 (20回) 戸川明三 (13回) 高畑宜一 (9回) 子安千代松 (8回) 近藤忠恕 (7回) ハリス、小倉鋭喜 (6回) 高崎四郎、ランディス、マクネア (5回) ショーン・バラ、奥野武之助、井深梶之助、岡本敏行 (4回) 花島轍吉 (2回) 友野与四郎、和知牧太 (1回) ランディス夫人、石本三十郎、押川方義、富永兵弥、福岡源太郎、ワイコフ、杉森此馬

この他中島というのが何回か出てくるが、この中島が中島久萬吉であるかどうかはわからない。

次に馬場孤蝶の日記に出てくる馬場が手にした書籍、雑誌、新聞等を列記すると次の如くである。もちろんこれかなり大ざっぱな調べであり、日記に記された通りのままである。

国民之友、日本振袖記、院本六本、新小説、捨小舟、都之花、日本之文華、先代萩、小説文範、改進黨新聞、シヨウの文学史(英文)、フィッシャーの万国史(英文)、テニソンのイノック・アーデン(英文)、田舎荘子四冊、日本人、売色案本丹、曲亭雑記、吉原談語、倭文範(三日太平記、平仮名盛衰記、彦山権現誓助劍、蝶花形名歌島台、北条時頼記、太平記忠臣蔵講釈)、文庫古著百種、道中膝栗毛、百日曾我、講義録、濡燕宿傘、寝物語、仏連知ブック、新著百種、国民新聞、源氏桐壺之卷、文章軌範、ヘボン辞書、義太夫本十四種、リットンのリエンジ

(英文)、アイバンホワ(英文)、天智天皇、読売新聞、ジョンソンの文と詩(英文)、パークのロード・チャタム(英文)、拾二段、栄華物語、源氏物語、聖經物語、バイロンのチャイルド・ハーロールド(英文)、徒然草、志想三華、八大家(漢文)、クライブ伝、三馬の戯場粹言幕の外、歴世女装考、素人狂言紋切形、中将姫、蓮蔓茶羅、カレリツジの詩ラブ、及びモーニング・ヒム・ツー・モン・ブラン、ウエブスターのフロム・ゼ・スピーチ・イン・レプライ・ツー・ヘーン、関八州繫馬、小文学、日本文学全書、恋八卦柱曆、ローヤル第四、ドクインシイの「のツキング・アット・ゼ・ゲイト・イン・マクベス」、マコーレーのピユリタン、出世景清、フリーマンの麻氏氣質(英文)、正夢草紙、神明角力金看板喧嘩之板、国華、義士のゆかり、忠臣蔵、閩秀新誌、文学院の講義録、エマーソンの応報(英文)、松の緑、本朝三国史、近江源氏、芦屋道満大土鑑、蘇東坡の潮州韓文公の碑、エンシエント・マリナア(英文)、上范司諫書、ホーンソンのスカレット・レター(英文)、江戸紫、やまと新聞、歴史上の基督、伊勢物語、紫式部日記、住吉物語、妹背山女庭訓、信州川中島合戦、太平記旭鎧、方丈記、劇種本数冊、祇園祭礼、小野道風青柳硯、伊賀越乗掛合羽、近江源氏先陣館、仮名手本忠臣蔵、枕の草紙、十六夜日記、おちくぼ物語、弁内侍日記、とりかへばや物語、皿々郷談、日本文典、文学院講義録(論理学、心理学、史学、法学通論)、勝関、都新聞、スウイントン大家論集中のアーピングの「西みんすと5あべい」(英文)、サツカレイのデプイニス(英文)、ロビンソン・クルーソーのデフォの伝(英文)、国民英学新誌、讃岐典侍日記、和泉式部日記、開明の用文、近松作吉野都女櫛、グリーンの英国国民史(英文)、せきすびあー著作集(英文)、兼好法師物見車、碁盤太平記、檜権三重帷子、スチイルの星学(英文)、戯曲近松集、蜻蛉日記、こぬらし、帰省、マアチャント・オフ・ベニス(英文)、英語論、物集氏編初学日本文典、謝撰拾遺、羅甸文典、地質学(英文)、鎌倉三代記、蟬丸、伊達染

馬場勝弥(孤蝶)日記について

手綱、姫山姥、重井筒、民法人事篇、双子隅田川、近頃河原達引、壇浦兜軍記、恋女房、心中紙屋治兵衛、行平磯
馴松、大功記、帚常盤、祇園女御九重錦、軍法富士見西行、菅原好色五人女、大内裏大友真鳥、太平記忠臣蔵講釈、
新著百種号外(紅葉著新桃花扇及び巴波川)

馬場はヘボン館に寄宿していたが、土曜、日曜には本郷の自宅に帰った。従ってこの土曜、日曜には実によく寄世
に行つて義太夫を見聞した。義太夫の外題は読みがむづかしいので以下に主なるものに読み仮名をふつて参考に供し
たい。

薰木累物語身売りノ段

義経腰越状五斗生酔之段

艶容女舞衣酒屋之段

比翼塚幡随院長兵衛内ノ段

伽羅先代萩政岡忠義之段

伊賀越道中双六岡崎之段

絵本太功記(十段目)尼ヶ崎之段

〔太閤記もある〕

刈萱道心筑紫土産宮守酒之段

藪鶯恋枝路小いそが原雪降之段

〔畦道もある〕

八陣守護城正清本城之段

加賀見山 旧 錦絵(五ツ目)鳥居又助往家之段

三拾三間堂棟木由來平太郎住家之段

中将姫古跡松雪責之段

恋女房染分手綱、杳掛村ノ段

奥州安達ヶ原袖萩祭文の段

恋娘 昔八丈鈴ヶ森之段

忠臣一力、由良之助生立の段

傾城阿波の鳴門拾郎兵衛内之段

御所桜堀川夜討(三ツ目)弁慶上使之段

本朝二拾四孝狐火之段

玉藻前 旭杖、金藤次上使之段

同胞比翼塚、長兵衛内之段

花雲佐倉 曙宗五郎内之段

文覚上人

二ツ蝶々 廓日記 [双ツ蝶々曲輪日記もある]

摂州合邦辻玉手嫉妬之段

馬場勝弥(孤蝶)日記について

馬場勝弥(孤蝶)日記について

本朝一拾四孝、十種香之段

日蓮記、勘作内之段

関取千両幟、稻川内之段

菅原伝授手習鑑、寺子屋之段

新版歌祭文、野崎村ノ段

勢州鈴鹿合戦、平治住家之段

金比羅利生記、百度平住家之段

於妻八郎兵衛恨鮫銷

一之谷嫩軍記、熊谷陣屋之段

染模様妹背門松、質店之段

源平布引瀧松並檢校琵琶之段

明烏夢泡雪、山名屋之段

桂川連理柵、帶屋之段

平仮名盛衰記、逆櫓之段

箱根靈験記、覺仇討施行場之段

道中膝栗毛、島田宿之段

日吉丸稚桜、五郎助内之段

於俊伝兵衛堀川之段

壇浦兜軍記、阿古屋琴責之段

碁太平記白石噺坂戸村之段

彦山権現誓助劍

天網島茶屋場之段

花の上野誉の仇討、志度寺之段

仮名手本忠臣蔵、勘平内之段

天網島時雨の炬燵、紙屋之段

近頃河原達引堀川之段

生写朝顔日記、麻耶岳之段

岸姫松轡、鑑飯原兵衛館之段

蝶花形名歌島台、小坂部館之段

播州皿屋敷鏡山館之段

釜ヶ淵二ツ巴、釜入之段〔双ッ級巴もある〕

女舞、劍、紅楓、長町之段

清正公利正記、駒下駄仇討之段

楠昔噺、砧拍子之段

馬場勝弥(孤蝶)日記について

馬場勝弥(孤蝶)日記について

日蓮上人御法海、勘内之段

源平布引滝、三人上戸之段

和田合戦、市若初陣之段

玉藻前旭袂、道春館之段

賢女鑑片岡忠義之段

姉背山女庭訓、芝六住家之段

関取二代鑑、秋津島切腹之段

蘆屋道満大内鑑、葛の葉子別之段

姫山姥廓晰し

夏祭浪速鑑、三婦内之段

佐倉妻恨、鮫鞘、お妻八郎兵衛鰻谷之段

双蝶々廓日記、引窓の段

国性爺城門之段

女景清八嶋日記、日向島之段

〔桜鏝恨鮫鞘もある〕

最後に「明治学院時報」昭和十五年二月二十日、第九十二号に馬場孤蝶の訪問記がのっているので次に引用する。
見出しは「明治文壇の逸材馬場孤蝶氏を訪ふ」となっている。

柔らかい日ざしの早春の午後、渋谷松濤の自宅に、明治文壇の花形、馬場孤蝶氏を訪ねる。

奥まつた一室に案内されると氏は、胃がお悪いとか病臥中であつたが快よく会つて下され豊饒たる御姿は七十有余の御高齢とは思へぬ程に御元氣である。早速御質問に及ぶ。「その頃の学院の想出話を一つ」

私は明治二十四年島崎藤村・戸川秋骨・岡本敏行君等と共に、出たものでその頃は中学部は未だなく神学部と普通部（今の高等学部）丈であつた。此頃は学院へも久しく行かぬのでよく判らぬが、私共の植えた楠が今大きく成つて残つてゐる筈だ。あれは私達の一、二年前の人から始めたものでその当時は銀杏の木であつたのを私達の時からよく持つ木がいよと云ふので、目黒の方まで、行つて植木屋で買つて来たのがあれだ、もう五十年にもなるかなと氏は當時を追想せられ感慨無量の体。当時学院のあたりは東京の郊外の方であつて、建物と云つたら学院位のものであつた、その当時は、田舎の人が多かつた様で、芝築地あたりから来る人は通つてゐたが私共は寄宿舎に入つて居た。その当時の生活はたまにあみだをやる位で授業は時間通に出てゐた。

私のクラスに比佐道太郎と云ふ人がゐてこの人が突によく出来た。島崎君等も最初はよく出来たらしい。前に大臣をやつて居つた中島久萬吉君等はよく僕の事等を知つてゐたと云ふが僕の方では記憶がない。しかしよく御馳走になる時等知らないにしても知つてゐたと云つといた方が得だからそう云ふがねワツハツハツ……

——勉強は如何でした——

その頃の教へ方は全部英語で只数学文が日本語であつたと想ふ。

漢文はなく、和文はあつて、二年で竹取土佐日記等を三、四年で源氏物語をやつた。源氏等講議（講義）の途中で教師が

馬場勝弥(孤蝶)日記について

はずかしがつたりすると、「先生こんな事なんでもないでせう」とかついて僕等の方から冷やかしたものだつた。その時分は外人教師が多かつたが、彼等はこせ／＼とした教へ方をせず又余り怒りもせず、寛大なお師匠さんだつた。試験等でも紙を渡すと表へ行つてしまひ皆でカンニング等やつても平生から氣をつけてゐるので、それ相應の点がついた。面白い事には一度信用すると答案も、ろくに見ずにゐるらしく僕等は、アストロノミーと云ふ論文を書いた時はどうしても僕の説では月が西から出なくてはならぬのに、それでも九十何点かの点を呉れた。今でもこの寛大なゆるみのある教へ方をなつかしく想つてゐる。今之をやれと云ふのではないが、カンニング等眼を皿の様に、さがす必要もないと想ふ。

——では今の学院にどんな御意見をお持ちでしょうか——

外人の教師も多い事だから、もつと外国語に力を入れる可きではなからうか。今の時代は外国語を習ふのではなくして、むしろ自分の方から積極的に外国語に深く入り込んでゐつて理解する。之でなくてはいかんと想ふ。学院は初から英語が盛んであると云ふ事が特色であつたのだから今でもこの特色を助長して、永くやつて行きたいものである。

未だ／＼話はずきなかつたが、余りに御邪魔するのも失礼なのでこの大先輩の御健康を祈つて辞去した。

馬場孤蝶、島崎藤村など明治学院普通学部明治二十四年卒業の学生の教師、学友についての参考文献を次に掲げる。

『明治学院百年史』昭和五十二年十一月一日発行、工藤英一「第四節、初期普通学部の師弟たち」

「白金通信」昭和五十四年七月一日平林武雄「学校唱歌の開拓者北村季晴」

「白金通信」昭和五十四年九月一日平林武雄「地方政治に注いだ新知識星野元治」

「白金通信」昭和五十四年十二月一日平林武雄「日本語会話教本を英文で著した赤田開太」

「白金通信」昭和五十五年二月一日平林武雄「今も残るへボンの教科書富永兵弥」

「白金通信」昭和五十五年四月一日平林武雄「牧師に送る心尽しの眞綿福沢仁太郎」

「白金通信」昭和五十六年二月一日並木張「野球好きな少年関友三（その一）」

「白金通信」昭和五十六年三月一日並木張「絵画修業から骨董商へ関友三（その二）」

「島崎藤村研究」第九・十合併号昭和五十七年八月二十日秋山繁雄「島崎藤村の教師たち——『桜の実の熟する時』を中心として——」

『明治人物拾遺物語』昭和五十七年十月二十五日秋山繁雄

「国文学解釈と鑑賞」十一月臨時増刊号現代作品の造型とモデルの中の秋山繁雄「桜の実の熟する時（島崎藤村）」

「白金通信」昭和六十年四月～八月秋山繁雄「農業教育から実業へ子安千代松」

庚寅日記

明治二十三年
正月

馬場勝弥(孤蝶)

明治二十三年正月一日 水曜日 朝来曇天夜ニ入りテ雨降ル

此日教拾軒ニ年礼ニ廻ル 午前拾壹時過福島氏来ル 即チ喫飯
シ氏ト共ニ高野氏ヲ訪フ ソレヨリ福島氏方ニ行キ少時談話ノ
後去ツテ龍岡町辺ヲ廻リテ帰宅ス 夜ニ入りテ久米氏来リ寄席
ニ行カンコトヲ企ツ サレドモ雨降り来リケレバソレヲ止メテ
松永氏ヲ訪ヒ源氏合セヲナシテ帰宅ス

又手何故カ元日ハ大抵曇天ナルガ例ノ如クナリ居リ此日モ矢張
リ其例ヲ免レザリキ サレドモ幾多ノ童子ガ弄ブ紙鳶ノウナリ
幾多ノ子女ガ衝ク追羽子ノ音ハサスガニ新年ノ喜シサヲ顯ハス
モノム一ツナリ 今年ハ彼ノ旅行中トカ又ハ手紙ニテノ年礼流
行ノ故カ町々モ余リ賑ハシカラザリシナレドモ午後ハ少シハ街
ノ込合ヒシ様ナリシ

正月二日 木曜日 朝来曇天 朝ノ内ハ少雨ナリシガ午後ニ至
リテ雨止ム

此日午前ハ家ニ引込リ居リシガ正午頃ヨリ外出セント準備ヲ為
シ居ル途端ニ早川氏来レリ氏去ツテ余ハ河田氏方ニ至ル 氏ノ

庚寅日記

宅ニテ横田氏ニ逢フ 高等中学ノ生徒三名来リ酒ヲ呑ム 家父

モ次ギテ来レリ 午後五時前帰宅ス夜ニ入りテ福島氏ヲ訪フニ
高野氏モ来リ居リテ西洋骨牌ヲ弄ビテ九時前氏ノ宅ヲ辞シ本屋
ニテ国民之友。日本振袖始。及(ビ)院本六冊ヲ買フ

一月三日 金曜日 朝来曇天且少雨 前夜来ノ雨ニテ道路泥濘
甚シ 午前ヨリ雨止ム

此日新小説ヲ本屋ヨリ受取ル 昼食後谷内氏来ル 氏ト共ニ龍
岡町ニ行キ豊川ニ行クニ不在ナリ 谷内氏方ニハ来客アル様子
ナリシガ故ニ直チニ帰宅セリ

夜ニ入りテ福島氏ヲ訪ヒ氏ト共ニ小川亭ニ行キ豊竹三福連中ノ
義太夫ヲ聞ク 三ケ日ノ内ノ事ナレバ入りハ随分多カリシ
加フルニ批評百出余程(註)証シカリシ 先ツ最初ハ花沢津賀蝶ノ

『薰木累物語身売リノ段』ナリ 此人ハ大分骨ハ折ラレタレド
モ声ノヨクコナレテ居ラザル故カ聞苦シキ箇所少ナカラザリシ
然レドモ声ハ能ク立ツ 次ハ鶴沢文瑛ガ「義経腰越状」五斗
生酔之段」随分タシカナル所アリ可成面白ク聞込ミタリ 次ハ

庚寅日記

豊竹駒之助 三味線鶴沢三生ニテ『艷容女舞衣酒屋之段』ヲ語

ル 随分艷モ有リテ面白カリシガ願ハクハ今少シ声ニ変化ノアラマホント思フ 次ハ竹本東代玉ノ『比翼塚播隨院長兵衛内ノ

段』骨稽百出能ク人ノ頤ヲ解キシハ感服ト云フ可シ 扱大切ハ豊竹三福「伽羅先代萩」政岡忠義之段」ナリ 此レハ吾々ガ待

チニ待チタル甲斐アツテ余程面白ク感シタル所モサワナリキ就中政岡ノ千松ノ屍ヲ抱テノ愁嘆ハ大受ケナリ サレドモ『誠

ニ国ノ礎ゾヤ』『礎ゾヤ』ハ今少シ声ノ徹ラバト思ヒテ残念ナリ サレドモ惣体ヨリ言エバ実ニ旨ヒ者ナリ 且ツ僅ニ骨拔セ

シノミニテ恰（恰）ンド全体ヲ語ラレンハ大満足ノ至リナリ ナンニセヨサン（セヨ）ブク否カン（否）ブクノ至ナリ

一月四日 土曜日 朝来晴天 風甚シク吹キ少シク寒氣ヲ感シタリ

此日午前ハ新小説日本振袖始等ヲ読ム 午後二時ヨリ龍岡町ニ行キ谷内氏ヲ訪 早川氏方ニ行キ馳走ニナリ午後五時前帰宅ス 夜ニ入りテ豊川ニ行キ馳走ニナリテ帰ル

一月五日 日曜日 朝来晴天 此日午後久米氏来ル氏ト共ニ外ニ出テ本屋ニ行キ都乃花。日本之文華。先代萩等ヲ買ヒ帰ル 夜ニ入り氏ト共ニ福島氏方ニ行

キ歌骨牌ヲ取ル 拾二時過帰宅ス

一月六日 月曜日 朝来晴天 此日ハ朝ヨリ京橋区役所ニ行キタルニ同所ハ既ニ引ケ居リテ詮方ナク日吉町ニ行キ竹内方ヲ訪フニ不在ナリシカドモ妻君出来

リテ種々馳走ニナル

家ニ帰りテ居リシニ船越ノ令嬢来リテ晩ニ歌骨牌取リニ来ル可シトノ案内アリ 此日ハ日本之文華ヲ読ミ午後八時前ヨリ船越氏方ニ骨牌取リニ行キ拾二時前ニ帰宅ス

一月七日 火曜日 朝来晴天 此日午前小文学ヲ受取ル 午後三時頃外出シ本屋ニ行キ小説文範ヲ買ヒ来ル 帰途筆及ビ野紙ヲ買フ

夜ニ入りテ松永氏ヲ訪フニ不在ナリシカバ本ヲ置イテ帰ル 福島氏ヲ訪フニ不在ナリケレバ直ニ家ニ帰り小説文範ヲ読ム

一月八日 水曜日 朝来晴天 至極暖氣 拾時過早川氏来レリ 余ハ拾二時前ヨリ家ヲ出デ萬代橋ヨリ鉄道馬車ニ乗リ京橋区役所ニ行キ徴兵適齡届ヲ出シ帰ル

此日烟草屋来レリ 五時頃家ヲ発シテ新橋迄乗車シソレヨリ徒歩シテ学院ニ行ク 此夜捨小舟ヲ読ム 同拾時過就寤

一月九日 木曜日 朝来晴天 午後ハ雲出タリ 此日ヨリ課業始マレリ 昼食後捨小舟ヲ読ミ終ル 同日夜ニ入りテハ祈禱会ニ出席シタルガ随分閉口ノ至リナリシ

一月拾日 金曜日 此日曇天 朝ノ内ハ少シ時雨レタレドモ夜ニ入りテハ全ク晴レタリ

此日書籍室ヨリ本ヲ借ル 昼食後直チニ学院ヲ出テ帰途ニ上ル 午後二時頃家ニ達ス 改進新聞ヲ読ム 中島氏来リテ歴史ノ

抜萃ヲ頼マル 氏ニ改進新聞ヲ貸ス 六時過福島氏ヲ同伴シ小

川亭ニ淨瑠璃^{じやうるり}聞キニ行ク 此日ハ可成ノ入りナリシガ其多数ハ書生ノ如シ

最初ハ花沢津賀蝶ノ「日高川」ナリシガ未ダ声ノコナレザル故カ余リ引キ立タザリキ 次ハ鶴沢文瑠ガ「伊賀越道中双六岡崎之段」ナリ 是レハ随分骨折リノ甲斐アツテ面白カリシガ惜イ哉外題ノ善カラザル為メ客ノ倦怠ヲ招キシハ是非モナシ 次ハ豊竹駒之助三味線鶴沢三生ニテ「絵本大閤記十段目尼ヶ崎之段」ヲ語ル 随分熱心ニ語リタレバ大分喝采ヲ拍セシモ今少シ落子付イテ調子ノ変化ニ工夫セバ天晴ナル物トナル可シ ナニシロ先ヅ感吟ノ部ト云フテ置キナン

次ハ竹本東代玉ガ「刈萱道心筑紫土産」宮守酒之段」ナリ 相更ラズ熱心ニ語リタレバ随分面白カリシ 就中前ノ方ヲ抜カサレシハ大ニ能シ 然シ声ニ力ノ入ラザル所モ少シハアル様ナリ 扱又大切ハ豊竹三福ガ「藪鶯恋枝路小いそが原雪降之段」ナリシガ此レハ言フ迄モナク実ニ感心ノ外ナシ 妙技真ニ迫リ人ヲシテ泣カシメントス 就中雲助ノ歌ノ如キハ最モ善シ 此夜ハ不思議ニモ余ハ二度聞キシ者ニツアリ 即チ三福ノ藪鶯ト東代玉ノ刈萱トナリ 去年ノ夏若竹亭ニテ之ヲ聞ケリ 但シ同人同曲ナリ

一月拾一日 土曜日 朝来曇天 午後四時過降雨夜ニ入りテハ星ヲ見ル

此日朝ノ内「シヨウ」ノ文学史ヲ読ム 午後関口氏来ル 姉次イデ来ル 二時過ギヨリ歴史ノ拔萃ヲ初ム 福島氏来レリ 午

庚寅日記

後六時赤田氏来ル 氏ニ辞書及ビ都ノ花ヲ貸ス 七時頃福島氏ヲ訪ヒ氏ト共ニ又小川亭ニ行ク 此日ハ随分ノ入ナリシ 且批評百出大ニ賑ハシカリシ 余等ノ行キタル時ハ遅カリシガ故ニ駒之助ヨリ聞キタリ 此夜ハ先代萩ノ管ナリシニ「八陣守護城正清本城之段」ニ組ミ代エタルハ甚残念ナリシ 然レドモ「八陣」モ熱心ニ語ラレタレバ随分面白カリシ 次ハ竹本東代玉ノ「加賀見山旧錦絵五ツ目鳥居又助住家之段」ナリシ 随分面白クハアリシガ声ニ力ノ入ラザル所非常ニ多ク甲斐ナク思ヒシ所少ナカラズ甚残念ノ至リナリ

大切ハ豊竹三福ガ「艷容女舞衣酒屋之段」ニテ之レハ望ヲ屬セシ甲斐アツテ余程面白ク感ジヌ 先ヅ「去年ノ夏ノ煩ヒ」以下数行ノ所実ニ妙トヤ云ハン音トヤ云ハマシ隣ノ三味線ノ所相変ラズツレ引キニテ中々愉快ナリシ 何ニセヨ女ノ越路トノ称空シカラザル可シト思フ 此ノ一段ノミニテ座料充分ナリ 簡程ノ妙曲ヲ僅少ノ座料ニテ聞クハ勿体ナキ程ナリ 此ニテ打出シタリ 時ニ拾時拾分前ナリ

一月拾二日 日曜日 朝来晴天至極暖気 昼前ヨリ南風吹キ荒レタリ

朝ヨリ歴史ヲ書ク 拾時過倉部氏来レリ 作文ノ添削ヲナス 昼食後お清さん来ル 余ハ外ニ出テ草履ヲ買ヒ雜誌代ヲ本屋ニ払フ 二時頃中島氏来レリ

午後五時過家ヲ出ツ 道々風烈シクシテ甚困難ナリシカバ目鏡橋ヨリ車ニ乗り日本橋迄行キノレヨリ徒歩シテ丸善ニ行キ

庚寅日記

フイッシャノ万国史ヲ買ヒ京橋ヨリ鉄道馬車ニテ新橋迄行キツレヨリ人力車ニテ三田迄至リ遂ニ学院ニ帰ル 前日来遊ビガ過ギタレバ課業ノ下読タマリテ甚困難ヲ感ジタリキ

一月拾三日 月曜日 朝来晴天 前夜来ノ風未ダ止マザリキ

此日午後高畑氏ヲ訪ヒ菓子ノ馳走ニナリテ帰ル 帰途又菓子ヲ食フ 部屋ニ歸リ又阿弥陀ヲナン菓子ヲ買ヒテ食セリ

一月拾四日 火曜日 朝来曇天 時々電ヲ降ス

此日ハ仏語ノ教授始メテアリ 前ニ定メタル書物ハ本屋ニナキ由ヲ教師ニ話セリ 夜ニ入りテハ別段ノ事モナシ

一月拾五日 水曜日 朝来曇天 四時頃ヨリ降雨拾時前上レリ

此日昼食後高畑氏ヲ訪フニ不在ナリキ 夜ニ入りテ総勢九人許リニテ阿弥陀ヲナン菓子ヲ買ヒタリ

一月拾六日 木曜日 朝来曇天ナリシモ午前ヨリ晴レ渡レリ

此日昼食後五人許リニテ弓ヲ射ニ行ク 晩食後金子ニ行キ菓子ヲ食ス 此日昼食ハ麵麩ナリキ 夜ニ入りテテニソソ氏イノツク、アーデンヲ読ム

*歴史ノ時間ニストロブ破レテ休ミトナレリ

一月拾七日 金曜日 朝来晴天至極暖氣

此日演說歴史ノ二科日ハ休ミナリシ 余ハ前日来ノ風氣少シク重リ頭痛甚シク余程困難セリ

午後三時過ランズス夫人ノ所ニ行キフレンチ、ブックヲ見ル 三時三十分赤田氏ト共ニ学院ヲ出デ帰途ニ就ク 五時十分許リ過ギニ家ニ着ス

夜ニ入りテ中嶋氏来ル 氏去ツテ久米氏来リ共ニ外ヲ散步シ勸工場ニテ股引ヲ買ヒ義太夫二冊ヲ夜店ニテ買ヒ新道ノ蕎麦屋ニテ蕎麦ヲ食ヒテ帰ル 就眠前改進新聞ヲ読ム

一月拾八日 土曜日 朝来天氣清朗ニシテ至極暖氣ナリキ

此日拾壹時過醫師ノ門ヲ訪ヒ菓ヲ貰ヒテ帰ルコヒ一入り角砂糖ヲ食セリ

午後一時過外ニ出デ紙及ビ其二三ノ買物ヲ成セリ 道ニテ宇佐美氏ニ逢フ 夜ニ入りテ田舎莊子四冊ヲ読ム

一月拾九日 日曜日 朝来曇天四時過霰降ル

此日ハ前日来ノ風未ダ癒エズ臥床セリ 午前田舎莊子ヲ讀ミ終ル

午後小説文範ヲ讀ミ其句ノ出所ヲ調べタリ 三時頃草郷来レリ

五時頃中嶋氏来レリ

一月二十拾日 月曜日 朝来晴天午前風吹き出タリ此日朝起キ出テ見ルニ前夜降りシ雪ガ積リ居ルヲ見ル

午前ヨリ此日記ヲ綴ヂヌ 午後壹時過本屋ヨリ都乃花及ビ日本人ヲ持来レリ 二時頃杉氏母子来ラレタリ 夜ニ掛ケテ都乃花及ビ日本人ヲ読ム

一月二十拾一日 火曜日 朝来晴天

此日午前拾一時頃醫師ノ門ヲ叩キ診察ヲ請ヒ菓ヲ貰ヒテ帰ル 道ニテ珈琲入角砂糖及ビ日本之文華ヲ買ヒ来レリ 母ニ頼ミテ練

羊甘及ビ唐饅頭ヲ買ヒ来リテ之ヲ食フ 夜ニ掛ケテ日本之文華ヲ讀ム 此日午後姉ヨリノ書状ヲ受取ル

一月二拾二日 水曜日 朝来晴天

此日午前日本之文華ヲ読ム 午後五時頃外ニ出テ本屋ニテ売色
案本丹ヲ借り曲亭雜記ヲ買ヒ婦ル 夜ニ入りテ之ヲ読ム

一月二拾三日 木曜日 朝来曇天且降雨

此日午前拾時頃谷内氏来リ歌ノ事ニ付キ談話シ同拾二時過婦去
ル 此日学校ニ行カント思ヒタレドモ風未ダ全ク癒エズ 依ッ
テ之ヲ止メ本屋ニ行キ「吉原談語」「倭文範」ノ二書ヲ借り婦
ツテ之ヲ読ム『倭文範』ハ「三日大平記、平仮名盛衰記、彦山
権現誓助劍蝶花形名歌島台、北条時頼記、大平記忠臣講釈、ノ
六ナリ

一月二拾四日 金曜日 朝来晴天風甚シ

朝ヨリ倭文範ヲ読ム 午後四時前姉ノ内ノ下女金ヲ持チ来ル
あんまり奇麗な装なり志かば何処の奥様かと思ひたるぞ笑しけ
れ お安次ギテ来レリ 姉ニ向ツテノ手紙ヲ認ム 島崎ヨリ手
紙ヲ請取ル

一月二拾五日 土曜日 朝来晴天随分ノ風ナリキ朝起後拾時頃

ヨリ家ヲ出デ本屋ニ本ヲ返シ醫師ガリ行キ菓請得テ帰リス 午
後福島氏訪ヒ来ヌ 四方山ノ談シノ内松永亀及ビ内藤氏モ訪ヒ
来リヌ 夜ニ入りテ書目五種ヲ書キ送ルトテ文二三行認メツ眠
ニ就キ侍リヌ

一月二拾六日 朝来晴天風少シク吹ク夜ニ入りテ止ム

此日午前久米、内藤、松永亀ノ三氏来リテ昼少シ過ル頃婦リス
五時頃家ヲ立出デ目鏡橋ヨリ鉄道馬車ニ乗り新橋ニテ下リノ

庚寅日記

レヨリ馬車ニテ札ノ辻ニテ下リソレヨリ歩キテ七時頃学院ニ行
着キヌ 島崎氏訪ヒ来テ種々ノ事語り出デヌ 英文ノ草稿ヲ作
レリ

一月二拾七日 月曜日 朝ノ内ハ晴レ居リタレド昼過ル頃ヨリ

黒キ雲空ニ漲リ出デヌ 六時頃ヨリ雨降り出デヌ 夜中ニ
ハ雪トナリタルトカ聞キヌ

此日ハ学校ニ出デ幹事局ニ行キテ月謝及ビ寄宿料七円ヲ払ヒツ
其後課業モ事ナクスマヌ 朝ヨリ頭痛激シクホト／＼コヲジハ
テヌ 暮相頃一シヲ苦シカリツレバサテハトテ学院ヲ立出デ三
田ヨリ車ニ乗リテ眼鏡橋迄来リ其レヨリ歩キテ家ニ歸リ着キヌ
雨ハ夜ニ入ルニ從ヒ最トド降増ルケンキニゾアリケル

一月二拾八日 火曜日 朝ヨリ曇リ朝ノ内ハ少雨降リツレド暮

前ニハ速ク止ミス

此日ハ朝ヨリ床ノ内ニ有リツ母ノ外ニ出行序ニ藤村ニ行キテ唐
饅頭ヲ買ヒ来ラセテ食ベハテヌ

一月二拾九日 水曜日 朝ヨリハ曇リ居ツレド折節日光ヲ漏シ

ヌレド暮前ニハ曇リス

此日ハ醫師ノ許ニ行キ菓請ヒ得テ帰リス 昼過ル頃ヨリ文庫古
著百種ナド取り出デテ見ツ五時前於安餅ヲ持チ来ヌ

一月三十日 木曜日 朝来晴天至極暖氣

此日ハ朝ヨリ家ニ居リタリ 午後清司来レリ晩方姉来レリ 於
安次ギテ来ル 夜ニ入りテ文章ノ下書キヲナス

一月三十一日 金曜日 朝来晴天

庚寅日記

朝医師許行キ薬ヲ貰ヒテ帰ル 松永氏ヲ訪フ久米氏来レリ余ハ
啖時頃ニ帰宅ス 四時前福島氏ヲ訪フテ道中膝栗毛ヲ貸リテ帰
ル 夜ニ入りテ之ヲ読ム

二月一日 土曜日 朝来晴天

朝ヨリ膝栗毛ヲ読ム 松永久米両氏来ル 相伴フテ外ニ出デ寄
席行ヲ発起シ若竹亭ニ行ク此日ハ少シ遅レタルガ故ニ最早一杯
ノ客ニテ座ス可キ所モナク、稍ク二階ノ片隅ニテ聽聞セリ 最初
ハ竹本子染ガ「三拾三間堂棟木由来平太郎住家之段」ニテアリ
シガ中途ヨリ聞キシ故カ感心スル点モ見出スニ由ナカリシ 然
シ声ハ可成リ立ツ様ナリシ 次ハ竹本綾之助ノ「伽羅先代萩政
岡忠義之段」ニテ相變ラズ「ラツカサン」ノ三味線ナリ 之レ
ハ申ス迄モナク感服物ナリ 然シ餘リ短キハ少シ不満足ノ事ト
存ズル 例ノ礎^{イソ}ゾヤハ今少シト思侍ベリキ 次ハ竹本照勝ガ
「義経腰越状五斗生酔之段」ナリ 大坂表ヨリ今度初上リトノ
口上アリシ此人ハ少シ声ガ大キクテ少シ切り切りが目立テ聞苦
シカリシガ中程ヨリ余程聞キ能クナリタリ 何ニモセヨ可成リ
ノ物ト云フ可シ 大切ハ小政ガ「中将姫古跡松雪貴之段」ナリ
之レハ充分聞キ堪^{イソ}ニアリテ感心セリ之レニテ家ニ帰ル
昨日午後谷内氏来リテ余ト共ニ神田ニ行キ本ヲ買フ余ハ淡路町
ニテ西洋林檎ヲ買ヘリ国民新聞ヲ買来レリ

二月二日 日曜日 朝来晴天

此日朝豊川ニ行ク 昼食ヲ馳走ニナリテ帰ル 其レヨリ本屋ニ
立寄り都之花ヲ請受リ帰ル 家ニハ杉氏来リ居ラレタリ 直チ

ニ久米氏ヲ呼ビ行キ少時ニシテ久米氏来レリ 諸氏去リシ頃ハ
四時前ナリシ 六時半頃ヨリ家ヲ出デ福島氏ヲ訪フニ不在ナリ
シカバ余一人ニテ若竹ニ行ク 此日モ随分ノ入りニテ前日ニ劣
ラザル程ナリシ 最初ハ鶴沢文綱ガ「恋女房染分手綱番掛村ノ
段」ニテアリシガ随分ノ骨折リハ見ヘタレドモ少シ調子ガ新内
然タル所アリシハ餘リ面白カラズ 次ハ子染ガ「奥洲安達ケ
原。袖萩祭文之段」ニテ随分面白カリシ 能ク勉強ノ効顯レテ
喝采ヲ拍セシハ宜シ 就中余リ抜カサズシテ恰^{イソ}ソンド全体ヲ語リ
シハ大満足ナリ 次ハ綾之助ガ「恋娘昔八丈、鈴ヶ森之段」ナ
リ 此レハ実ニ骨折ノ効充分ニテ慥ニ受ケマシタ 然シアンマ
リ短キ様ナリシハ何時モナガラ残念^{イソ} 次ハ照勝ノ「忠臣一
力。由良之助生立之段」ニテ前夜ヨリ声ノ聞苦シキ所ハ少ナク
大ニ聞能クナリシガ故ニ可成リ面白ク聞キタリ 大切ハ小政ガ
「艷容女舞衣酒屋之段」ナリシガ可成リ感服物ナリ 二挺三味
線ノ所ハ随分面白カリシ 然シ歌ハ今少シト思フ 然シ先ヅ宜
キ出来ナル可シ 此レニテ家ニ帰ル 就眠前膝栗毛ヲ読ム

二月三日 月曜日 朝来曇天然レドモ時々日光ヲ見ル

午前拾時頃福島氏来レリ 道具屋掛物ヲ持チ来レリ 午後膝栗
毛ヲ読ミ終レリ 草郷エ手紙ヲ出ス 午前二時過福島氏ヲ訪ヒ
膝栗毛ヲ返ス 五時過帰宅ス 道ニテ日本人四拾号及筆ヲ買フ
六時過ギ家ヲ出デ福島氏ヲ誘ヒ若竹亭ニ行ク 此日モ随分ノ
大入りナリシ 初ヅ最初ハ綾之助ノ「傾城阿波鳴門拾郎兵衛内
之段」ニテ妙曲美声座ロニ聞ク者ヲ感動セシメン様子ナリシ

時々女客ノ手布ヲ目ニ覆ヒシヲ見掛ケタリ 就中ふだらくや云々ノ御詠歌は感服ノ至リナリ実ニ能クモ歌ヒシ物哉 次ハ子染ノ「八陣守護城ハツ目正清本城之段」先ヅ可成ノ出来ナラント思フ 然シ前夜ニ劣ル事蓋シ数等ナル可シ 次ハ照勝ノ「御所桜堀川夜討。三ツ目弁慶上使之段」ナリシガ此レハアンマリ声ノ大キイノヲ氣ニセシ故カ語り口非常ニ不活潑ニテ餘リ面白カラザリシ大切ハ小政ノ「本朝ニ拾四孝」狐火之段」ニテ能ク骨折ノ甲斐アリテ餘程面白カリシ 殊ニ狐火之歌ハ琴ト三味線ヲ加エテ語りシハ甚ダ宜シ 又狐火ノ所ハ二挺ニテ賑ヤカニ語り終リシハ面白シ 何ニセヨ随分能キ出来ナリト思フ 然レハ前夜ニ優ルコト万々ナリ 此レニテ家ニ歸リ就眠前日本人ヲ読ム

*「照勝ハ竹本若辰トノ評ハ蓋シ当ラズト雖モ遠カラザル者ナラン」

二月四日 火曜日 朝来曇天少シク寒氣ナリシ暮相頃少雨 朝ヨリ日本人ヲ読ム 午後ハ本箱ノ片付ケナド為シ居ル内ニ時移リシカバ四時頃晩食ヲナン直チニ歸院ノ途ニ上ル 例ニ依テ万世橋ヨリ鉄道馬車ニテ新橋迄行キ其レヨリ人力車三田ニ行キソレヨリ徒歩シテ学院ニ着ス 途中神田明神ノ手前ヨリ雨降り出デヌ サレドモ三田ニ至リシ頃ハ降り止ミタリ 夜ニ入りテ島崎氏ノ部屋ニ行キ種々談話ス 部屋ニ歸リテ後、日本之文華三号ヲ読ム 拾時ニ拾分頃外ニ出タルニ空ハ何時シカ晴レ行キテ一輪ノ皎月中天ニ輝クヲ見タリ

庚寅日記

二月五日 水曜日 朝来晴天

此日朝幹事局ニ行キ賄方料ヲ払ヒ昼食後近傍ヲ散歩シ紙ヲ買フ 部屋ニ歸リ文章ヲ書ク 晩食後近傍ヲ散歩セリ 夜ニ入り嶋崎氏来リテ余ノ贅ヲ書ケリ

二月六日 木曜日 朝来晴天

此日幹事局ヨリ欠席届ヲナセトノ命令アリ 午後之ヲ認メタリ 晩食後近傍ヲ散歩シ南京豆及ビ菓子ヲ食フ 六時ヨリ礼拝堂ニ出デ賄ノ事ニ付キテノ相談ニ参ス

二月七日 金曜日 朝来晴天 南風吹キ出テ至極暖氣ナリシ

此日午前書籍室ヨリ書ヲ借ル 幹事局ニ至リ届ヲ出ダス 其後赤田氏ト共ニ幹事局ニ行キ賄ノ事ニ付キ近藤氏ト談話シ本屋ノ切符ヲ貰ヒテ歸ル 昼食後ミツセス・ランヂス方ニテ本ヲ貰イ来ル 三時過学院ヲ発シ帰宅ノ途ニ上ル 猿樂町ニテ国語伝習所ニ立寄り校外生ノ月謝ヲ納ム 此レ友野氏ノ依頼ニ依レバナリ五時過家ニ着ス 姉来ル 六時過竹町ニ行ク此日ハ前日程ノ入りニテハナカリシモ可成リ頭数多カリキ 先ヅ最初ハ文綱ノ「玉藻前旭袂。金藤次上使之段」ナリシガ調子ガアンマリ氣取り過ギテ面白カラズ 次ハ子染ガ「同胞比翼塚。長兵衛内之段」ニテ可成面白カリシ 次ハ「綾之助」ガ「繪本大功記十段目尼ヶ崎之段」ニテ語り人ハヨシ外題モヨケレバ餘程染シキ心地セリ 実ニ声ノ善キニハ何時モ感服セリ 就中「不義ノ富貴」以下「操ノ鏡曇リナキ」迄実ニ妙々ト云フ可シ 初ハ照勝ノ「三十三番札所靈驗壺坂之段」ナリシガ先ヅ上出来ノ部ナラン

(此ノ人ニシテハ) 大切ハ小政ノ「花雲佐倉曙宗五郎内之段」ナリシガ之レハ申ス迄モナク可成リノ出来ナレドモ余程面白カリキ 此レニテ家ニ帰ル 此日途中ニテ日本之文華及ビ百日曾我ヲ買フ

二月八日 土曜日 朝来南風烈シク至極暖氣先ヅ過半晴天夜十時過雨降り来レリ

此日朝ハ家ニテ下読ヲナシ午後ハ龍岡町ニ行キ谷内ヲ訪ヒ談話中早川モ来リテ笑話シテ午後五時頃豊川ニ行キ六時少シ前帰宅ス 晩食後家ヲ出デ竹町ニ行ク 此日ハ風甚シキニモ拘ハラズ大分ノ入りナリシ 先ヅ最初ハ文綱ノ『文覚上人』ニテアリシガ餘リ感心ハセズサレドモ三味線ハ可成鳴ル様ニ思フ 次ハ子染ガ「恋娘昔八丈。鈴ヶ森之段」ナリ 之レハ先ヅ此人ニシテハ上出来ノ部ナル可シト面白ク聞キタリ 次ハ照勝ガ「二ツ蝶々廊日記」ニテ先ヅ中位ノ出来ナラント思フ 扱其次ハ当日ノ呼ビ物。綾之助ガ『奥州安達原。袖袂祭文之段』ニテアリシガ相変ラズ感吟物ナリ 取り分ケ歌祭文ハ何レモ感服可致候 然モ此レニテ自負セズニ充分勉強センコトヲ祈申候 扱大切ノ小政ガ「撰洲合法辻」玉手嫉妬之段」ハ中々面白カリシ且充分語リ尽セシカバ餘程満足ノ至リナリ

二月九日 日曜日 朝来曇天且降雪拾二時頃ニハ上リタリ

此日午前倉部及中島氏来レリ 午食後直チニ宇佐美ヲ訪フ 客来ノ様子ナリシカバ去ツテ松永氏ヲ訪フニ氏不在ナリシカバ暫時待チ合セ居リテ氏ニ逢ヒ仏語ヲ習ヒテ後種々長談シ四時過帰

ル 氏方ニテ素麵及び薯ノ馳走ニナレリ 本屋ニ行キ雜誌代ヲ払ヒ帰ル 新小説廿五卷ヲ読ム 又日本之文華第三号ヲモ……

二月拾日 月曜日 朝来曇天寒氣風吹ク時々日光ヲ漏ス

此日朝ヨリ仏語ヲ復修シ夕景松永氏ヲ訪フ不在ナリキ 去ツテ福島氏ヲ訪フ 氏モ不在ナリシカバ単騎藤栗毛ニ鞭ツテ竹町ニ行ク 最初ハ文綱ノ「西郷一代記。岩崎再会之段」ナリシガ之レハ随分耳新シケレバ可成面白キ心地セリ 然シ語リ様ハ感服不申 次ハ子染ノ「艶容女舞衣。酒屋之段」ナリシガ随分善シ「跡ニハ園ガ」ノ辺ハ可成能キ出来ナラン 次ハ綾之助ガ「本朝二拾四孝。十種香之段」声ハヨシ調子モ妙只感服致候 就中身ハ姫御前云々ノ所拔群ノ出来 次ハ照勝カ「日蓮記。勘作内之段」ナリシガ調子ニ少シモ変化ナキ為メ面白カラザリシ 次ハ小政ノ『大功記。尼ヶ崎之段』ナリシガ骨折リノ甲斐アツテ余程面白カリシ 取り分ケ「不義ノ富貴」ヨリ「涙ニ誠頭ワセリ」ノ辺最モ妙 扱大切ハ「関取千両幟」。稲川内之段」総一座掛ケ合ニテアリシガ子染之女房勝レタ出来ナリ 照勝ノ三味線上出来ノ之ニテ家ニ帰ル 空ハ一面ニ晴レ渡リ満天星ナラヌ限モナキカト疑フバカリナリキ

二月拾一日 火曜日 朝来曇天拾二時頃ヨリ降雪四五寸ハ慥ニ

積レリ六時頃ニハ止ム

此日朝起キルヤ否ヤ宇佐美氏ヲ訪フニ不在ナリシカバ去ツテ福島氏ヲ訪ヒ談話益々漫ミ込ム頃氏ヨリ午食ノ膳ヲ出サレタレバ其時余ハ立上リテ窗外ヲ眺メタルニ何ゾ知ラン何時シカ雪ノ

降り出テテ早ヤ一面銀世界ノ觀ヲ呈セントハ 食後窓ヲ推シテ
外ノ景色ヲ眺メタルニ雪ハ益々降り増リ歌心座ロニ余輩ノ腦ニ
浮ベリ 其所ニテ余ハ庭ノ竹ノ雪ニ撓ミタルヲ見テ以為ラク吁
人生モ又此ノ如キカ人間何ソゾ一生艱難ナクテ過ゴスヲ得ベキ
ヤ 然レドモ艱難ニ逢フモ少シモ撓マズ艱難去ラバ又其本ニ復
ス可シト云フ心を「降る雪に庭の弱竹埋むともなど其本に帰ら
ざるべき(又ハ緑の色は代らざりけり)」(題若竹) 閑談に時移り雪
降り出しを知らざりければ「思きや互にかわす言の葉の積ると
知らぬ庭の白雪」又雪と云へるにて「心なく庭に降り積む白雪
も何時しか消る果敢なきよ。人の命も斯くばかり。数にはもれ
ぬ山桜。只潔く消なんと思う心ぞ丈夫のいと頼みある誠なるら
ん」同じ題にて「恋人の忍ぶたよりも絶ぬらん庵に閉す雪の関
守」又窓外の雪を取り食ひたれば戯れて「斯くばかり不風流な
る歌人のなど勝れたる節やあるべき」町を隔てたる家に処女の
窓ニ依リテ此方を眺め居たるが雪の垣根に積るに從ひ此方より
は見えずなりければ「美女を垣間む間も絶にけり籬に積る雪の
関守」折節通る美形の批評などなし居る内に四時の鐘声江けれ
ば直に家に帰りたるに老母の梅を読めとありければ「降る雪は
梅の小枝を埋むともなど薫りをば包み果つべき」鉢の梅をとあ
りければ「我庭の鉢の梅ヶ枝雪籠めて佐野の昔も忍びるる哉」
其後都の花の中の鉢の木。百日曾我等ヲ父母ニ讀み聞かせかき
餅を焼きて食べつつありしに老父の「託びぬれば」を始めとし
て讀みねと云へりければ「託びぬれば今降る雪も哀添ひ猶忍ば

庚寅日記

るる昔なりけり」中将姫と云ふ心を「よしや身は積る吹雪に埋
むとも松の操は変らじと思ふ」袖萩をとありければ「声立てて
歌ふ古采音占さえしめり勝なる雪の夕暮」常盤御前をとありけ
れば「糸竹なる我古郷を出立てて小幡の雪に哀れをぞ添ふ」宗
清「我君のおきてたがえず常盤なる松を助くる雪の関守」浦里
「常盤なる松の緑も萎むとわからでや積る庭の白雪」藪乃鶯の
お賤をと有りければ「踏み迷ふ恋の枝路降る雪になくくたど
る目無鳥かな」同じく礼三郎をとて「恋ふ妻と慕ふ我子を右左
猶袖絞る雪の夕暮」同じく雪降りの雲助をとて「心なき身にも
誠を頭わせし小いそが原の雪の夕暮」是にてはつと草臥れて寝
床に入りぬ

二月拾二日 水曜日 朝来晴天

此日むっくり起きるや否や奮然として以為らく我今日は外に出
づれば必らず人の雪掃除したる道を通るならんに我暮し家の前
の雪片付けでは冥加の程こそ恐しき次第なりとて前町の雪かき
払ひて後屋食し其れより家を出出、萬世橋より馬車に乗り例の
妄想に耽りつつ有りしが家を出しより考え出せし歌―生田の森
の梶原源太を題とせる、稍く出来上る「魁くる矢竹心の斯く
ぞとわ版に薫る花にこそ知れ」二時前学院に着す 講義録第
二号を借覽す四時より鳥崎氏部屋に行き種々談話し小説の題名
五つを得たり「仙人。蜃気楼。花曇り。運氣。天の河。之れな
り

二月拾三日 木曜日 朝の内ハ少シ曇リ居リシガ午後ハ晴天ニ

庚寅日記

成レリ

此日ハ午後三時ヨリ歴史ノ試験ヲ受ケシガ下読ミ無カリシカバ大ヒニ困却セシガ出鱈目ヲ書キテ於茶ヲ濁シテ帰ル 四時過子安赤田島崎他一名ト高輪ノ旧伊藤伯邸ヲ見ニ行キタリ該所ハ恰モ停車場ノ筋向ヒ辺リニ当リ居レルガ門ヲ入りテ付キ当リニ梅園アリ 入口ニハ茅葺キノ冠木門アリテ一寸風雅ナ見エ好ロシク右手ニハ茅葺キノ家アリ 梅ハ恰ソド七八本モ有リ皆満開ナリ 枝ニ詩歌ノ書キ寄セノ為メノ帳面吊ルンシ有リタリ 其レヨリ進ミタルニ一間ノ堂アリ額アリ 光山ノ二字ヲ記ス 如何ナル仏神ナリヤ知ラズ 其ノ前ハ池ニテ水端ニ芦ナド生ヒ繁リ水中ニ緋鯉ナドノ泳グ様最をかしげナリ 池ヲ回リテ少シ築山ニ上リタル所ニ東屋アリ 天上ニハ寛文年間ノ記シアル遊女及ビ狸々ヲ画キタル板アリ 脇キニ記スニ諸願成就ノ四字ヲ以テス山ヲ上リタル所ニ又東屋アリ 此辺ハ一面ニ品川沖ヲ見晴ラシテ風景中々宜シ 時ニ恰モ汽車ノ出ヅルヲ見タリ 其レヨリ横道ニ出デ畑中ヲ歩キ小松ノ有ル庭ヲ通りテ外ニ出ヅ 随分取り補ラヒナバ中々好キ庭ニハナル可シト思ヘル 然レドモ家ノ少キニハ一驚ヲ喫セリ……伊藤伯ガ時々来リテ住ハレシト思ヘバ……其レヨリ婦リタルニ五時過ナリキ 六時ヨリチヤペルニテ伍長撰拳及ビ賄方料ノ話シアリ 賄料ハ終ニ上ゲザルコトニ決セリ

二月拾四日 金曜日 朝来晴天可成暖氣
此日朝ハ何事モナク過行キシガ昼前詠讀ガ当リテ下読ナカリシ

カバ少シクヨハリタリ 午後三時頃ヨリ戸川氏ト共ニ学院ヲ出ヅ 高崎氏モ三田迄同道セリ 戸川氏ト共ニ新橋ヨリ鉄道馬車ニ乘リ万世橋ニテ下リ元富士町迄同道セリ 五時過家ニ着ス 晩食後久米及中嶋氏来レリ 六時過豊川ニ行クニお安留主ナリシカバ七時過迄待チ合ハセ居リシガ未ダ帰ラザリシカバ同家ヲ辞シ寄席ニ行クニ丁度照勝ノ「おつま八郎兵衛」ヲ語り進ミタル折リナリケリ 之レト云フテ悪イ所モ無ケレドモ調子ハ始終一調ニテ面白カラズ 次ハ綾之助ノ「菅原伝授手習鑑」寺子屋之段」ニシテ中程ヨリ語り初メシガ相ヒ変ラズ旨イ物デ御座ル取り分ケ「門火ヲ頼ミ」云々ノ辺リヨリ結尾迄実ニ面白サ云ハシ方ナシ 次ハ小政ノ「加賀見山旧錦絵」尾上部屋之段」此レハ先ヅ中位ノ出来ナリキ 然シ中々面白カリシ 扱大切ハ「新版歌祭文」野崎村ノ段」ニテ小政ノ於染。照勝ノ久作。子染ノ於光。駒鶴久松。母親ナリシガ小政ノ於染ハ中々ノ出来於光ハ可成其他先ヅ善キ出来ナリキ シマイハ三味線三挺ニテ政鶴胡弓ヲスリタリ

二月拾五日 土曜日 朝来曇天時々日光ヲ漏ス夜ニ入りテ拾時前ヨリ雨

此日昼前ヨリ下読ミヲ始ム 二時前大石氏来リ種々談話シ帰ル 午後五時過中嶋氏訪ヒ来ル 六時頃久米来リ同道シテ外ニ出デ寄席ニ行ク 先ヅ最初ハ「殿中喧嘩場之段」ニテ師直ハ子染中々ノ出来 若狭之助ハ駒鶴先ヅ宜シ 政鶴ノ伴内中々宜シ 同ジク子染ノ勘平ハ中々善ク駒鶴ノお軽可成 次ハ「判官切腹

之段」ニテ照勝之レヲ語ル 先ヅ善キ出来ト云フ可シ 次ハ

「二ツ玉ノ段」ニテ子染ナリシガ之レハ可成面白カリシ 次ハ

「於輕身壳之段」駒鶴先ヅ善シ―此人ニシテハ―扱テ次ハ

「勤平腹切ノ段」小政ナリシガ之レハ云フ迄モナク餘程善カリ

シ 大切ハ「一力之段」ニテ由良之助、小政ハ中々宜シ 喜

多ハハ勘二、矢間野太郎ハ政鶴 千崎弥五郎ハ駒鶴ナリシガ之

レハ先ヅ無ンデモナシ 子染ノ平右衛門ハ顔ヲヌリテ出来リシ

ガ跡トニ小政ト掛ケ合セニナリテモ中々宜カリシ 政鶴ノ伴

内。駒鶴ノ九太夫ハ中々宜シ 例ノ謎ニテハ客ノ腹ヲ絢ラセタ

リ 然ン少シ猥……小政ノ於輕中々面白ク聞キヌ ソンテ此ノ

夜ハ小政迄ガ由良之助ノ時ニハ黒ノ衣物ヲ着テ頭ニ紙切レヲ結

ビ付ケ又於輕ノ時ニハ紅ノ繻絆ヲ着ル等中々ノ趣向他ノ人々ノ

車輪ニテ総体ニ善キ出来ナラント思フ 帰途密柑ヲ買フ

二月拾六日 日曜日 朝来降雨

此日午前拾時過倉部氏来ル 赤田氏次イデ来レリ 午食後直チ

ニ松永氏ヲ訪フテ長談ス 牡丹餅ノ御馳走ニ相成リ申ス 三時

過同家ヲ辞シ帰宅ス 五時頃ヨリ雨降り出ケレバ大ヒニ弱リ家

ニ止リヌ 演説文ノ草稿ヲ作ル

二月拾七日 月曜日 朝来曇天且時々降雨

此日都乃花三拾三号ヲ受取り之ヲ読ム 午後五時頃家ヲ出ヅ

万世橋辺ヨリ雨降り来ル 例ノ如ク同所ヨリ鉄道馬車ニテ新橋

迄来リソレヨリ徒歩シテ学院ニ着ス 途中ニテ雨激シク降り出

デ随分困難ヲ極メタリ

二月拾八日 火曜日 朝来曇天

午後三時頃ヨリ外出シ二本榎の大弓店ニテ弓ヲ引ク 夜ニ入り

テハ例ノ如ク課業ノ下読ヲナシタリ

二月拾九日 水曜日 朝来曇天且降雨夜ニ入りテ雷鳴ヲ聞ク

此日ハ午後一時過幹事局ヨリ伍長ニナレトノ辞令ヲ頂戴セリ

此日始メテ漢学ノ課業ニ出席セリ

二月二十拾日 木曜日 此日朝来曇天時々日光ヲ見ル

此日晚食後二本榎ノ通りヲ散步シ種々笑談ヲシナガラ歩キ蜜柑

屋ニテ蜜柑ヲ食フ 又菓子屋ニテ珈琲ヲ飲ム

二月二十拾一日 金曜日 朝来晴レ居リタルガ午後ハ少シ雲ガ出

来レリ夜ニ入りテ少シ雨降ル

此日二時頃家父ヨリノ書状ヲ受取ル 故ニ文学会ヲ断リテ家ニ

帰ル 三田ノ幼稚舎ニ行キタルニ太一ハ既ニ横浜ニ歸リ去リ居

リタレバ余ハ直チニ家ニ歸リ着キタルニ恰モ五時半位ナリシ

ソレヨリ晩食ノ後河田氏ヲ訪フ 姉ノ迎ノ為メナリ 同氏方ニ

テ八時頃迄談話シ姉ト共ニ同家ヲ出デ菊坂下ノ汁粉屋ニテ汁粉

ヲ食ス 帰宅後本屋ニ行キ濡燕宿傘。寝物語ノ二書ヲ買ヒ来ル

就寝後寝物語ヲ讀ム

二月二十拾二日 土曜日 朝来晴天可成暖氣

此日ハ朝ハ新聞及ビ日本人ヲ讀ミ午食後文学史及ビ仏連知ヅツ

ク―ヲ讀ム 四時過於安来レリ 寄席ニ行カントノ發言アリ皆

々同意シ行コトニ決ス 中島氏来ル 六時過家ヲ出デ寄席ニ行

ク 於安次イデ来レリ 入りハ先ヅ大入りノ部ナリ 最初ハ名

庚寅日記

モ知ラヌ男ニテ面白カラズ 次ハ「鈴之助」ノ三世相ナリシガ之レハ可成リノ出来ノ様ニ思フ 体ノ構ヘ非常ニ金之助ニ似タリ 次ハ今輔ニテ「江戸ッ子ノ旅」ヲ語ル 中々軽ク滑稽百出 聴客ノ腹ヲヨラセタリ 終リノ三味線ハ中々達者サテモ能ク上達セシモノカナ 次ハ加賀太夫ノ「酔月奇聞」ナリシガ之レハ中々旨ク語リタレバ随分面白カリシ 桂文治ノ「鍋草履」ト云フ話シ前置ニ少シ猥褻ナル所アリタリ……擬声ハ中々……次ハ里朝例ノ「縁カイナ」ヲ五ツバカリヤリ終リニ櫓太鼓ノ曲引キヲヤリタルガ中々ノ腕前ツク、感服ノ至リナリ 次ハ才賀此ノ爺益々頭ハゲテ「ランムプ」其所除ケトノ有様。話シハ相変ラズノベツマクナシニテ可成リ善キ出来ナラン 次ハ玉輔ガ「義士銘々伝」ハ餘リニ氣取リ過ギテ面白カラズ 之レニテ中入り於安ハ此ノ時歸リ去レリ 中入り後ハ桃太郎ガ女郎買ノ話シ中々ノ出来 次ハ文楽ノ続キ話シ中々面白ク聞キタリ 此レニテ家ニ帰ル 就眠前新著百種ヲ讀ム

*道ニテ新著百種及ビ日本之文華ヲ買フ

二月二拾三日 日曜日 朝来晴天
此日午食前福島氏ヲ訪ヒ十二時頃帰宅シ午食後浜田氏ヲ訪ヒ種々談話ノ末帰宅ス 直チニ晩食ヲ喫シ家ヲ出ツ 此時姉ヨリ一円貰ヒ父ニ二拾錢ヲ与フ 万世橋ヨリ馬車ニテ新橋迄来リソレヨリ徒歩シ学院ニ帰ル 読売新聞ヲ讀ム
二月二拾四日 月曜日 朝来曇天拾時頃ヨリ降雨
此日朝ベラ氏ニ告ゲテ試験ノ場所ヲキメテ貰ヒタリ 昼食後仏

語翻訳ヲナス 午後四時頃「アミダ」ヲナン菓子ヲ買來リテ之ヲ食フ 夜ニ入りテ日本之文華第四号ヲ讀ム 拾時過外ニ出タルニ空晴レテ星耀ヤキ居タルヲ見タリ

二月二拾五日 火曜日 朝来過半晴天昼頃ヨリ風吹キ出タリ 此日源氏桐壺之巻終ル 国民新聞二三枚ヲ讀メリ 午前「ハリス」氏請持チノ文学史ノ試験アリタリ 仏連知ブツク六、七、二章ヲ讀メリ

二月二拾六日 水曜日 朝来晴天、風甚ダ強シ 此日数学課ハ休ミナリキ 拾時頃火事アリ四ツ谷辺トノ事ナリキ、夜ニ入り就寝前「フレンチブツク」ノ八章ヲ讀メリ 此夜ハ塾監ヨリ頼マレテ余計ニ巡廻ヲナセリ

二月二拾七日 金曜日 朝来晴天中々暖シ 昼食前幹事局ヨリ金ヲ請取ル 其中二円ダケ賄料ヲ払込ム 午後和学ノ時帯木之巻ヲ讀ミ始ム 此日午前近藤氏ニ漢学ヲ習フ事ヲ頼ミテ承諾ヲ得タリ 夜ニ入りテ「ランデス」教師ヲ訪ヒ物理ノ質問ヲナシ演劇ノ話等其他種々談話ヲナシテ歸レリ 九時頃ヨリ雨降り出デヌ 九時過塾監ヨリ部屋ノ事ニ付テノ話アリタリ

二月二拾八日 金曜日 朝来曇天且降雨午後ヨリ雨上リ四時過ニハ快晴

朝乳屋ニ金三拾五錢ヲ払フ 此日アデソン氏ノ文ヲ讀ミ終ル 午後二時過課業ニ出シ爲メ出行キタルニ便所ニテ本ヲ落シタレド是非ナク之ヲ拾ヒ拳ゲ、水ニテ之ヲ洗エリ 三時過学院ヲ出

テ帰途ニ就ク 新橋ヨリ鉄道馬車ニテ日本橋迄来リ其レヨリ徒歩シテ家ニ着ス 夜ニ入りテハ歌ナド歌ヒテ時ヲ費シ拾時頃床ニ入ル 就眠新小説ヲ読ム

三月一日 土曜日 朝来曇天九時頃ヨリ晴ル然レドモ風有リ

此日朝床ノ内ニテ新小説ヲ読ミ終ル 九時前豊川ニ行キ文章軌範ヲ借り「ヘボン」辞書ヲ持テ拾一時前ニ同家ヲ出デ家ニ帰ル 門口ニテ浜田氏ニ逢フ 直チニ髪ヲカリニ行キ湯ニ入りテ家ニ帰ル 午後福島氏ヲ訪フ 高野氏次イデ来ル 同家ニテ桜餅ノ馳走ニナル 四時頃同家ヲ出デ帰宅ス 其レヨリ課業ノ下読ヲナス 夜ニ入り於安来ル 谷内氏次ギテ来レリ於安余ノ義太夫本六本ヲ拾銭ニテ買ヒクレタリ 八時過谷内氏ト共ニ外ニ出デ義太夫本八冊ト「リエンジ」「イバンホラ」及び天智天皇ヲ買フ 就眠前改進新聞ヲ読ム

*此日午前姉帰レリ

三月二日 日曜日 朝来晴天晚方曇ル

午前倉部氏松永、早川氏等来レリ 氏等去ツテ中嶋氏来レリ 余ハ「リツトン」ノ「リエンヂ」ヲ少シ読ミタリ 三時過外ニ出テ都ノ花及ビ曲亭雜記ヲ買フ 安並氏来レリ 氏去ツテ中嶋氏又来レリ 六時過家ヲ出デ万代橋ヨリ鉄道馬車ニ乗リ新橋ニテ下リソレヨリ徒歩シテ三田ニ出デ密柑ヲ買ヒ道々之ヲ食ヒ遂ニ学院ニ達ス ソレヨリ課業ノ下読ミヲナシ拾一時頃都ノ花ヲ読ム

庚寅日記

三月三日 月曜日 朝来晴天 然ソ八時頃ヨリ花曇リ

此日午前ハ歴史課休ミナリシカバ部室ニ帰リテ読売新聞三日分ヲ読ム 午後一時半ヨリ近藤氏ニ文章軌範ノ講義ヲ聞ク 部室ニ歸リテ後、都ノ花及ビ天智天皇ヲ読ミ終レリ

三月四日 火曜日 朝来薄曇リ

此日午前ハ歴史休ミナリシカバ部室ニ歸リテ源氏帯木ヲ少シ読ム 午後文章軌範ヲ読ム 四時過金子屋ニ行キ珈琲菓子ヲ食シ近傍ヲ散歩ス 夜ニ入りテ「ジョンソン」ノ文及ビ詩ヲ読ム

三月五日 水曜日 朝来晴天風烈シ

此日課業カタノ如ク済マセシ後漢学課ニ出席シ居タルニ三田ニ火事始マレリ 故ニ直チニ部室ニ歸リ島崎、赤田、桜井、三氏ト火事場ニ赴ク 近藤氏方ヲ見舞ヒ、聖坂ヲ下レバ猛火眼前ニ燃エ出デ百屋蕩尽スル様イトモ哀レゲナルニ人々ノ己ガジシ荷物ヲ持運ブ者引キモ切ラズ 中ニハ手桶又ハ下駄等ヲ大切ソヲニ持チ居ル婦人モアルハ其周章ノ様思遣ラレテ座ロニ暗涙ゾ浮バレケル 坂下ヲ横ニ切レ小山町ニ出デ、三田四国町ニ出デ、比佐氏ヲ訪フニ戸川、赤田、桜井、他ノ一人来リ居レリ、依ツテ同家ノ屋根ニ登リ見タルニ慶応義塾ハ坂ノ上人堤ヲ作り蒸気唧筒ノ烟ノ立登ルヲ見ル 松山氏ノ家ハ烟中ニ窺然タルヲ見ル 其時火先キハ既ニ田町ノ方ニ向ヒ黒烟日ニ映ジテ黄色ヲ帯ビ一日悽然、中ニモ氣ノ毒ナリシハ新町辺ノ店庫ノ火ノ入りテ時々烟ヲ吐ク様ナリキ 間モナク同家ヲ出デ慶応義塾ヲ通り抜ケ聖坂ヲ上リ学院ニ帰ル 晩食後井深先生餘等ニ告グルニ炊出し

庚寅日記

ヲナス故ニ今夜ハ手助ケケレヨトノ依頼アリ 七時前ヨリ食堂ニ入り結ビヲ作ル 八時頃ヨリ追々換リ出シ余等ハ最後ニ残りシカバ九時頃学院ヲ出デ高輪海岸ノ借家ヲ見シニ一ノ貧民ヲモ見ズ 直チニ三田ニ行キタルニ昨日迄モ可成ノ町ナリシ所モ今見レバ一望曠原ノ様ヲ現出シ只所々ニ残火ノ烟ヲ見ル耳 余ハ嶋崎氏ト共ニ一籠ノムスビヲ携エ所々歩キタレドモ食ヲ乞フノ人モナシ 依ツテ学院ニ帰レバ拾時ノ号鐘告ゲ渡リス

*小泉氏ヲ訪フ

三月六日 木曜日 朝来晴天

此日ハ前夜ノ火事ニテ休業 拾一時頃迄比佐氏ト教場ニテ雑談ス ソレヨリ昼食シ島崎、赤田、二氏ト共ニ散歩ニ出デ田圃道ヲサマヨヒ品川ノ宿ニ出デ学院ニ帰ル 扱テ追々春景色立初メテ野路ノ若草萌出ル緑ノ色モ床シク、霞薄ク籠メテ小山ノ下ヲ巡ルモヲカシキ心地ス、加フルニ小川ノ流レ潺湲タル、所々ノ園ノ梅ノ咲キ香フナド何レカ春ノ心ヲ長閑ナラシムル者ナラザラン、ソレヨリ晩食後物理ノ問題ヲ学ビ、就暮後ノ「パーク」氏「ロード、チャタム」ヲ読ム

三月七日 金曜日 朝来晴天晚景ハ少曇

此日ハ朝ヨリ物理ノ事ニテ大心配ヲナシタレドモ案ジルヨリ産ムガ安シトカソレモ事ナク過ギ午後伝語ノ試験モスマセ島崎氏ト学院ヲ出デ種々談話シナガラ京橋ニ来リソレヨリ鉄道馬車ニ乗り同氏ニ日本橋ニテ別レ帰宅ス 時ニ五時過ギニテアリタリソレヨリ新聞ヲ読ミ又拾二段ヲ少々読ム

三月八日 土曜日 朝来晴天非常ノ好天氣

此日朝十二段ヲ読ミ終ル 倉部氏来ル 氏去ツテ課業ノ下読ミヲナス 久米及ビ中島氏来レリ 氏等去ツテ大石早川来ル 於安来ル 晩食後於安ヲ伴ナヒ外ニ出デ本屋ニ都ノ花ノ綴ヲ頼ミ 豊川ニ行クニ門付ケ来リ居リテ寺子屋及ビ仙台萩ヲ聞ク 椎菓子等ノ馳走ニナリテ拾時帰宅ス 途中ニテ足袋、義太夫本、日本之文華等ヲ買ヒ来レリ

三月九日 日曜日 朝来曇天拾一時過ヨリ霧雨降り出デ夜ニ入

リテ本雨降り来レリ

朝中島氏来レリ 九時過豊川ニ行キ手紙ヲ貰フ、椎ヲ食ヒ拾一時頃同家ヲ出デタルニ大石早川二氏ニ逢ヒ同家ニ至リ少時談話ノ後帰宅ス ソレヨリ久米氏来ル 文章ヲ書ク 題シテ國語之研究ト云フ 五時頃湯屋ニ行キ一浴ス 六時過家ヲ出デ雨ヲ冒シテ仲町吹拔亭ニ行キ豊竹小緑連中ノ淨瑠璃ヲ聞ク 最初ハ緑恵ノ「勢州鈴鹿合戦、平治住家之段」ナリ 可成骨折リハ見エタレドモ少シ急グ様ナ心地セリ、次ハ新緑、三味線、数尾ニテ「傾城阿波之鳴門」十郎兵衛住家之段」ヲ語ル 中々宜シ 所々小緑其假トモ云フ可キ所アリ、就中巡礼歌ハ大出来ナラン 次ハ数尾、三味線、海老造ニテ「菅原伝授手習鑑、寺子屋之段」ヲ語レリ 数尾ハ二十六七位ナルベシ 眼ノキョトノ然タル人ニテ頭ニハ例ノ島田髷ヲ頂ケリ 語リ様ハ何処カ小緑ニ似テ中々熱心ニ語リタレバ随分感服セリ 次ハ竹本鹿の子ガ「御所桜堀川夜討、弁慶上使之段」ナリシガ中々ノ出来、昨年トハチ

ガヒテ声モ直リテ餘程面白カリシ、扱大切ハ『金比羅利生記、
百度平住家之段』小緑之レヲ語ル 外題ガ餘リ善クナキガ故ニ
何フカト思ヒシガサスガハ中々宜クシテノケラレタリ 実ニ語
リ来リ歌ヒ去ルノ間座ロニ膝ノ進ムヲ覺エヌ許リナリキ ソシ
テ此日ハ例ノ束髪ヲヤメテ島田ニ結ヒテ居リシガ大分若ヤギタ
ル様ニ見受申候 以上二人ノ三味線ハ海老造勤メタリ 此夜ハ
雨天ノ故カ客入り思ハシカラザリキ 之レニテ家ニ帰ル

三月拾日 月曜日 朝来降雨三時過上レリ

此日朝ヨリ栄花物語ヲ読ミ午後二時過之ヲ終リソレヨリ曲亭雜
記、源氏物語等ヲ読ム 六時過福島氏ヲ訪フニ氏不在ナリシカ
バ一人ニテ仲町ニ行ク 先夜トハ差ヒ可成ノ入りナリ書生ヲモ
多ク見掛ケタリ 傍ニ下等職人ノ氣障氣充分ナルガ居リテ聞ク
モ忌ハシキ事ドモヲ高声ニ話シ立テシニハ閉口セリ 最初ハ豊
竹新緑ガ「加賀見山旧錦絵鳥居又助住家之段」ヲ語ル 相変ラ
ズ氣ヲ入レテ語ラレシハ感心且中々旨イ所アリ 次ハ豊竹數尾
ガ「於妻八郎兵衛恨鮫鮪」ニテ中々ノ出来先ヅ感吟之部ナラン
ト存ジ申ス、次ハ竹本鹿子ガ「一之谷嫩軍記、熊谷陣屋之段」
ニテ之レハ去年聞キシ時ヨリモ声ノ直リシ故カ聞キ能カリシ、
且中々ノ上出来ト思ハル「国ヲ隔テ拾六年」ノ辺リハ餘程旨シ
 大切ハ豊竹小緑ガ「艶容女舞衣、酒屋之段」ニテアリシガ之
ハ云フ迄モナク中々輕妙トヤ申ベケン、先ヅ「跡ニハ園ガ」ヨ
リ以下実ニ感服ノ外ナシ 又「聞テイルサノ」及ビ「ヲシノ片
羽」云々ノ所ニ挺ニテ語ラレシガ此レモ旨イ者ナリ 何ニセ

庚寅日記

ヨ真打ノ価値充分ナル可シト思フ 此レニテ家ニ帰ル
*以上三味線ハ何レモ海老造随分ノ骨折ナラン、中々ニ勉強ノ
程感心ナリ

三月拾一日 火曜日 朝来曇天昼頃時々日光ヲ見ル

此日午後出発ヲ用意ヲナシ居リタルニ大石、早川、谷内、来レ
リ種々雜談ヲ為シ去ル 姉次イデ来ル 四時過共存同衆ニ荷物
ヲ受取りニ行ク 五時過荷物ヲ受取り歸リ箱ヲ開イテ種々ノ品
物ヲ見ル 夜ニ入りテ於安来レリ拾時過於安ヲ伴ナヒ豊川ニ行
キ掛ケ物及ビジヤボヲ貰ヒニ帰宅ス 途ニテ義太夫本五冊、バカ
リ求ム 此日新橋ノ家ノ事稍ク落着ス

三月拾二日 水曜日 朝来曇天降雨甚シ

此日ハ朝ヨリ家ニ有リテ種々荷物ヲ取り調べタリシガ夜ニ入り
テハ種々雜談ヲ為セリ

三月拾三日 木曜日 朝来曇天午後日光ヲ見ル

此日ハ午前姉歸リ余モ拾時過家ヲ出デ萬世橋ヨリ鉄道馬車ニ乗
リ新橋手前ニテ下車シ日吉町ニ行キ家ヲ見舞フニ父及ビ姉居リ
タリ 暫時談話ノ上新橋停車場ヨリ汽車ニ乘リ品川ニテ下車シ
ソレヨリ徒歩シテ学院ニ帰宅ス 直チニ午食ヲ喫シ和文ノ課業
ニ出席ス 課業終リテヨリ夜ニ入り非常ニ物理ヲ読ムニ苦心ス

三月拾四日 金曜日 朝来曇天時々日光ヲ見ル

此日ハ朝バラガ大ニ怒リタル様子ニテ来ル 月曜日ニハ嚴密ナ
ル試験ヲ為ス可キニ付其積リニテ居ル可シト云ヒタリ ソレヨ
リ事ナク過ギテ三時過赤田、及ビ戸川氏ト共ニ学院ヲ出デ三田

庚寅日記

ノ幼稚舎ニ行キタルニ太一ハ居ラザリシニ付キ下女ニ本郷ニ来ル様伝エクレヨト云ヒ置キテ同所ヲ去リ新橋迄来リソコニテ二氏ニ別レ日吉町ニ行キタルニいの来リ居リタレバ少々用談シ去ツテ竹内ニ行キ種々礼ヲ述べ直チニ同家ヲ辞シ新橋ヨリ鉄道馬車ニ乗り萬世橋ニテ下車シソレヨリ家ニ帰ル 晩食後倉部氏来ル 安並氏来リ姉モ来レリ 八時過家ヲ出デ仲町ノ吹抜亭ニ行キタルニ時刻遅カリケレバ竹本鹿ノ子ガ「菅原伝授手習鑑、寺子屋之段」ヲ語リ中程辺リ迄進ミタル時ニテ有リタルガ中々旨イ所多シ、ワケテ「御台若君」以下終リ迄餘程面白カリシ 次ハ小緑ガ「花雲佐倉曙、吟味場之段」ナリ 之レハ初メテニテ如何カト思ヒシニ中々ノ出来、加フルニ熱心ニヤラレシハ感服、中ニモ父ハ子ヲ氣配ヒ子ハ親ヲ庇ヒ、兄弟互ニ苦痛ヲ忍ブ所等ハ宛然一部ノ演劇ヲ見ルノ心地シテ思ハズモ涙下リタリ 之ニテ帰宅ス

*小松敏太郎氏ニ逢フ 氏ハ桜井ト云フ下宿屋ニ居ラルル由
三月拾五日 土曜日 朝来曇天夜ニ入り降雨

此日ハ朝ヨリ課業ノ下読ヲナス 午後久米及ビ大石来レリ 三時過姉及ビ太一來レリ 七時前家ヲ出デ松永氏ヲ訪フニ伊達氏来リ居リタリ 七時過松永氏ト共ニ立出テ家ニ歸ルニ谷内氏来リ居レリ 外ニ出タルニ醉客アリ暴言ヲ吐キ居リタレバ之ヲ捕エテ詫ヒサス 七時半頃吹抜ニ行着ク 丁度鹿之子ガ「四段目扇ギガ谷ノ段」ヲ語リ進ミタル時ナリシガ中々宜キニハ相違ナキモ一端ヲ見テ其全班ヲ評スルニ由ナシ 次ハ新緑三味線数尾

ニテ「六段目勸平腹切之段」ヲ語ル 可成ノ出来ナリシガ少シセキ込ミハセズヤト思フ所モアリ 次ハ小緑ガ「九段目山科隱家ノ段」ニテ之レハ申ス迄モナキ上出来正ニ感服申候 実ニ之レ耳ミニテモ座料十分ナラント思ハレタリ 扱大切ハ「七段目一力之段」ニテアリシガ其レノ相応ノ出来ナラン サレドモ小緑ノ平右衛門ヲ数尾ニ繰リカエタルハ残念ノ扱一々申サウゾナレバ先ツ新緑ノ弥五郎、緑惠重太郎、雛緑、喜多八ハ如何ニモ御苦勞、雛緑ノ力弥、九太夫ハ可成リ緑惠ノ伴内中々善シ 鹿之子ノ由良之助先ヅ善シ数尾ノ平右衛門上出来ナラン新緑ノ於輕、此人ニシテハ上等ノ出来ナリ 此ニテ帰宅ス 此夜ハ客ハ大入りノ部ナリキ

*此夜ハ例ノ通り「仮名手本忠臣蔵」ノ通シニテ中々ノ客入りナリキ

三月拾六日 日曜日 朝来曇天風強シ午後九時過頃ヨリ晴天

此日ハ朝ヨリ聖經物語ヲ讀ム 午後中山氏来レリ 四時前外ニ一浴シ都乃花ヲ求メ来レリ六時過家ヲ出デ婦校ノ道ニ上ル 萬世橋ヨリ人力車ニテ新橋迄来リ日吉町ニ立寄り荷物ヲ預ケソレヨリ出雲町警醒社ニ行キ写真ヲ置キ来レリ ソレヨリ又日吉町ニ行キタルニ草郷義兄来リ居レリ鯉飯ノ馳走ニナリ申ス 種々談話末八時過去ル 余ハ少々談話ヲナシツツアリシニ八時半頃ニナリシカバ泊ル事ニ決シ拾時頃ヨリ聖經物語ヲ讀ミ出シ拾二時過之ヲ讀ミ終レリ ソレニテ眠ニ就ク
三月拾七日 月曜日 朝来晴天中々ノ好天氣

此日朝六時ニ寢起直チニ朝飯ヲ喫シ七時日吉町ヲ出デ土橋端ヨリ車ニテ三田迄来リソレヨリ徒歩学院ニ帰ル 丁度八時ナリキソレヨリ課業ニ出ヅ 昼食後バイブル試験ノ為メ「ノート」ヲシラベタリ 三時ヨリ試験ヲ受ク先ヅ上出来ノ部ナリ 晩食後高畑氏ヲ訪フ 但シ島崎、子安之ニ氏同伴菓子ヲ饗セラレ七時頃帰校ス ソレヨリ課業ノ下読ヲナス

* 此日物理ノ時間ニ発句ヲ得タリ……

蚊帳漏るる月影涼し夏の夜半

三月拾八日 火曜日 朝来晴天三時頃ヨリ雲出風吹ク

此日朝読売新聞ヲ読ム 「ハリス」氏ノ課業ニハ文学家ノ伝ヲ書キテ出ス 午後仏語翻訳ヲ大急ギニテナス 三時頃文学会ノ会費ヲ払フ 此日歴史ノ時間ニ歌ヲ読ム……花モ雪モ吹キ払ヒタル大空ニ清クモ涼ル月ヲコソ見ル……拾時頃パーク氏ノ文ヲ読ミ文章ノ草稿ヲ作ル

三月拾九日 水曜日 朝来曇天且降雨

此日歴史ノ時間ニハ歴史ノ書キ抜キヲナス 昼食後文章軌範ヲ読ム 漢学科ハ此日在リタリ 夜ニ入りテハ物理ノ問題ヲナス

三月二拾日 木曜日 朝来曇天

此日歴史科ニテ前日ノ続キヲ書ク 午後和文源氏物語ノ註解ヲナス 三時ヨリ大西祝氏ノ演説ヲ聞ク 氏ハ二十七位ナル可シ中々旨ク演ゼラレタリ、演題ハ「文学ニ於ケル悲哀」ナリキ、五時晩食シ直チニ学院ヲ発シ新橋ニテ赤田氏ト分レ日吉町ニ行ク 姉ト種々談話ス 八時頃親爺帰ル 拾時過就寢

三月二拾一日 金曜日 朝来曇天且午後降雨夜十時頃ハ晴居リタリ

此日朝九時頃日吉町ヲ出デ帰途ニ上ル 道丸善ニ立寄リパイロシノ「チャルド・ハーロールド」ヲ買フ 其レヨリ家ニ達スレバ下元氏来ル事ニナリ居レリ 午前ヨリ新聞及ビ新小説及ビ都乃花ヲ読ム 午後二時頃松永氏来レリ 氏去ツテ久米来レリ 六時過松永氏ヲ訪ヒ氏ト共ニ伊豆本ニ行ク 爰ハ客種下等ニシテ屋根モ低ク從ツテ空氣ノ流通悪シク大ニ困難セリ 先ヅ最初ハ「竹本円八」ガ「忠臣蔵」平右衛門出世ノ段」ナリシガ之レハサスガ寄席ガ下等ダケニマズイ事甚シ 次ハ「竹本文玉」ガ「八陣守護城」正清本城之段」ナリシガ之レモ本ノ真似事ニ過ギズ 次ハ「竹本小住」ガ「染模様妹背門松」質店之段」ニテ中々面白ク語リタリ 然シ實目ノ少ナキハ遺々憾々 次ハ「竹本住八」ガ「薰木累物語」土橋之段」ヲ語リシガ同人ハ未ダ拾四位ノ小供ナレドモ中々旨イ者ナリ 然シ否ニ頭ヲマゲルノハ止メニタラト思フ 扱大切りハ「竹本梅尾」ガ「源平布引瀧松並檢校琵琶之段」ナリシガ之レハ中々宜シ 同人ハ年頃二拾六七ニモナリヌベシ 体格中々シツカリシテ居リテ其語リ口土佐榮ノモツト善キ物ナリ サレバ声モ大キク男子ニモ劣リ不申トモ云エル程、ケレドモ今少シ艶ガアリテ落ス処ナドモ少シハ有ルガ宜シト思フ 之ノ連中ハ何故カ「住八」ト「小住」ヲ除キテハ他ハ銀杏返シ サテモ不思議、終リノ二人ノ三味線ハ清花勤メ申候 之ニテ家ニ帰ル 就眠前徒然草ヲ読ム

庚寅日記

三月二拾二日 土曜日 朝来降雨三時頃雨止ミ追々晴ル

此日朝改進新聞三枚ヲ読ム 万国史ヲ読ム 尔許ノ養子ト種々談話ス 午後三時過迄ニ万国史ヲ読ミ終リ徒然草ヲ読ム 夜ニ入りテ外ニ出デ菓ヲ買ヒ来レリ 文章一ツ相認メ申ス題ハ「起テヨ大和ノ快男児」ナリ

三月二拾三日 日曜日 朝来晴天午後ハ曇ル

此日朝浜田氏ヲ訪フ 西川氏来レリ 種々談話シ拾一時同家ヲ辞ス 午後「墓参リ」ナル小説ヲ起草ス同三時頃入浴シ表紙ヲ買ヒ帰レバ於安来リ居レリ 午後五時頃家ヲ出デ万世橋ヨリ車ニ乗ラント思フニ車夫ハ何レモ馬車直デハ行カズ 折柄鉄道馬車モナシ 詮方ナク今川橋手前迄歩キタルニ稍ク馬車ニ行逢ヒ之ニ乗リ新橋ニテ下リ日吉町ニ立寄り暫時遊ビ居タルニいのガ「チョコレット」ヲクレタリ 之ヲ喫シ居リタルニ、竹内氏来ル、種々雑談ノ上八時半頃氏帰ル 余ハ直チニ出立デ、芝公園手前ニテ雨降り出デヌ、二本榎ニテ半鐘ノ音ヲ聞キ願ミレバ火元雨雲ニ映ジタルヲ見ル 九時頃学院ニ達ス

三月二拾四日 月曜日 朝来曇天且降雨拾一時ヨリ風烈シ

此日ハリス氏休業、志想之華ヲ見ル 夜ニ入りテ物理ヲ沢山読ム

三月二拾五日 火曜日 朝来曇天且時々降雨

此日ハ朝数学ノ試験ニ出逢ヒシガ用意ナカリシガ故ニ大キニ閉口セリ「ハリス」氏ノ時間ニ文学ノ試験ニ逢ヒ「セキスピヤ」スコット。テニソン。ヂツケンス。マコーレー。」ノ五名ニ付

イテ書ク 此日和学休業致ス 昼食前文章軌範ヲ読ム 昼食後島崎氏ノ部室ニテ珈琲ノ馳走ニ相成申ス 夜ニ入りテハ物理ヲサラヒ、歴史ヲ見「パーク」ノ「亜米利加ニ於ケル自由之精神」ナル章ヲ読ミ終ル 文学会々費金拾銭ヲ払フ

三月二拾六日 水曜日 朝来半晴

此日ハ内国博覧会ノ開場式アリ 「ランヂス」氏ノ時間ニ物理ヲ書ク 歴史科ニテハ「マク」氏余輩ノ英語ヲ正ス可キ由ヲ注意サレヌ 食後文章軌範ノ講義ヲ聞ク 其後八大家ノ講義ヲモ聞ケリ ソレヨリ明日物理ノ試験ノ準備ニ忙シカリシ

三月二拾七日 木曜日 朝来曇天

此日朝うちヨリ手紙ヲ請取ル 中ニ徴兵検査日ノ事ニ付キテノ区役所ノ召喚状入り居リタレバ直チニ幹事局ニ行キ休ム旨ヲ断リ聖書課及ビ礼拝ニハ出席シ書籍室ニ借用書物ヲ返シソレヨリ白金ヨリ車ニテ新橋迄来リ日吉町ニ立寄りソレヨリ上下車ニテ京橋区役所ニ往復シ届ヲ済ス ソレヨリ車ニテ学院ニ帰り直チニ翻訳ノ試験ニ出席ス 問題八ツ皆之ヲ書ク 午後二時過物理ノ試験ヲ受ク 問題ハ七ツナレドモ中々六ヶ數カリケレド「ランヂス」氏去リシカバ本ヲ見テ胡魔カシタリ 四時過御殿山ニ行クニ道ノ傍リノ桜ハ皆尽ク満開ニテ最早空ニ知ラレヌ雪モ降りソラ、加フルニ菜ノ花ノ黄金色ナド又ツキヌ眺メニコソ、御殿山近クニ行ケバ杉ノ木ノ緑リノ中ヨリ桜ノ白キガホノ見ユル又一シホ、山ニ行ケバ早九分通りノ盛リ、相変ラズ掛茶屋ナドモ多ク有レド憩フ人モ少ケナリ、田圃ニ面セル帷端ニ草折り敷

キテ眺ムレバ、此ノ辺リハ小山多ク其間ニ田ノ入り込ミタル、
菜畑ノ一面ニ花ツケタルガ黄金ノ板ノ如ク見ユルナドイトヲカ
シ、暫時休息シ学院ニ帰ル。時ニ五時過、晩食後六時過学院ヲ
発ス。二本榎ノ通りニテ鶏卵ノ折詰ヲ求メ近藤氏方ニ行キ氏ニ
之ヲ送ル。種々談話ノ後八時過同家ヲ辞シ九時過日吉町ニ来ル
福富氏来リ居ラレ、種々談話ノ末拾一時過帰ラレタリ。ソレヨ
リ眠ニ就クニ車声人語耳ニ入りテ夢成リ難カリシ。

三月二拾八日 金曜日 朝来曇天且降雨

此日前六時寢起、いのヲ起シ朝飯ノ用意ヲナシ居リシニ七時鳴
リシカバ陛下、名古屋エノ御出発ヲ拜シ奉ラントテ立出ヅ。先
ヅ銀座通りニ出タルニ人ハ多人数居ル気色モナシ。即チ巡查ニ
御出発ノ有無及ビ御道筋ヲ問フニ御出発ハアリテ且御道筋ハ幸
橋ヨリ西久保トノ事ナレバ新橋端ニテ待チ奉リシニヤガテ七時
二拾分ニ向々タル頃ヲヒ先驅後從敵メシク通御アラセラレヌ
我アマリノ畏サニ傘ヲタタミテ拜シ奉レリ。サテモ一天万乗ノ
君ガ親シク陸軍総督ノ為メトテ雨ヲモ厭セラレズ御出発アルハ
臣民ノ我等ニ取リテハ恐レ多クモ有難ケレト思ハズ涙溢レケリ、
ソレヨリ日吉町ニ帰リ日本之文華四、五、両号ヲ読ム。いのヲ
横浜ニヤル。余ハ午後二時過家ヲ出テ学院ニ帰ル途中雨中々ニ
降りテ少々濡レ申ス。途中芝公園ノ桜ハ美事ニ咲揃ヒ且雨中ノ
眺メ一シホナリキ、五時カタノ如ク晩食ヲ喫シ、六時過ヨリ文
学会ニ臨ム。当夜ハ雨ノ故カ来賓少ナク之レガ為メニ我等餘ッ
タ菓子ノ分ケ前ニ有リ付キタルハ喜コバシ、然シ弁士ニハ氣ノ

毒ナリ、七時頃ヨリ始ム、「デクラメーション」伊王野氏中々
旨クヤラレタリ。題ハゼ、ライジイング、イン、一七七六ナリ
次ハ笹尾象太郎氏ノ邦語演説「日本社会ハ誰ヲカ待ツ」ハ中
々熱心ニ論ゼラレタレバ充分善キ出来ナラン。然シ声ヲアンマ
リ出サレタ故カ後ニナリテ声ガカレタルト羅馬ヲ例ニ引カレタ
ル時ニ「四世紀ノ末ニ羅馬ガ盛ナリシ云々」ト云ハレタルハ少
シ不感服、次ニ「ビヤノ」ヲ引ク。我等ハ音楽ノ嗜好ナキ故カ
少シモ面白カラズ。只時々ドンチャン云フ高音ヲ聞キテハ耳ヲ
ツブシケル、次ハ英語演説、「アワー、コンフィニューズド、リ
テレーチュア。ゼ・イビル、エンド、イツツ、レメヂイ」弁士
松浦和平氏之レハ意外ノ出来、其上非常ニ落付イテ居レシハ愈
々感服、次ハ邦文朗読「人世」古川勇之ヲ読ム、実ニ旨イト云
フノ外ナシ。是レニテ又音楽。学院生徒、中々旨シ、次ハ「デ
クラメーション」「ハーテイ、リーディング」吉川氏随分発音ハ
善カリシカドモ餘リ急ギ過タルラント我ハ思フ、次ハ邦語演説
「師友ノ感化」弁士奥野氏 相変ラズ熱心ニ且教師ノ職ヲ論ジ
テ餘ス所ナク実ニ我学院ニ適中シタル所少ナカラズ、願ハクハ
之レガ英語ナラバト思フ程ナリ、是レニテ音楽又洋琴、次ハ英
文朗読「アワー、ウオークス、イン、ゼ、ツエンチエスセンテ
ユリイ」花嶋氏之ヲ読ム。平常トハ違イテ中々落着キテ居ラ
レタレド声ガ少シ少サカリシカバ餘リ感服モ致シ不申、終リハ
青木君ノ英語演説「イマジネーション」ナリシガ中々六ヶ敷ク
テ我等ニハ訳リ兼ネタリ、然シ演ジ方ハ中々……声ノ自然的ニ

庚寅日記

シテ毫モ暗唱の所ナキハ実ニテ感嘆ノ至リナリ、之ニテ又洋琴アリ、其後石本君ノ祈禱、及ビ讚美歌風琴ハ花嶋氏ナリ、「マコーレー」氏ノ祝禱、ソレヨリ菓子出デ清楽合奏アリタリ。是レハ中々面白カリシ其他手品、又「パイヲリン」モアリ。終リニ又清楽ヲ奏シヌ、之レニテ部屋ニ歸ル、眠ニ就キシハ拾一時過キ

三月二拾九日 土曜日 朝来雨甚シ

朝七時過寢起 ソレヨリ麵麴ヲ喫シ九時過学院ヲ発シ帰途ニ上ル、雨激シクシテ、三田ニ至ル頃ホヒ早餘程濡レタリシカドモ勇氣ヲ鼓ンテ歩ミ出シ公園ニ至リタルニ雨中ノ桜見ル所デナシ余等ツグム風流ハ寒キ者ト感申候、ソレヨリビシヨ濡レニテ歸リ衣類ヲホスニ餘程時間カカリヌ、昼頃、竹内氏来ラレタリ、ソレヨリ午食シ新聞ナド読ミ居ル内日暮レニ高屋氏ヨリ手紙来リ直チニ之レヲ横濱ニ出ス六時過いの婦レリ 姉モ歸リ直チニ本郷ニ行キ宿ル 此日夜竹内ニ行キ歴世女装考ト云フ書ヲ借ル

三月三拾日 日曜日 朝来晴天夜ニ入りテ曇ル

此日朝ヨリ女装考ヲ読ミ秋ノ巻迄読ミタル頃姉歸リ来リ竹内氏モ来ル 同氏ト談話中高屋ノ夫人来レリ 三時過日吉町ヲ立出デ京橋ヨリ車ニ乗り万世橋ニテ下リソレヨリ家ニ歸ル夜ニ入りテ近傍ヲ散歩シ種々買ヒ物ヲナス 新聞ヲ沢山読ミ申ス

*松永氏及ビ於安来レリ
三月三拾一日 月曜日 朝来曇天且雨甚シ

朝拾時前寢起 下元氏ニ「クライブ」伝ヲ読ミテヤル 午後ハ日本之文華ヲ読ム 夜ニ入りテ三馬ノ戲場粹言幕の外ヲ読ム 九時頃姉来リテ一宿ス *四時頃福島氏来レリ

四月一日 火曜日 朝来晴天

朝北沢ニ行キ金ノ催促ヲナス 久米ヲ訪フ 九時頃眼鏡屋ニ行キ眼鏡ノ修復ヲ頼ム 拾時頃家ヲ出デ車ニ乗り日吉町ニ来ル、丁度横濱ヨリ下女ガ来リ居リタリ 之レハ大事ノ要事アリテ其手紙ヲ持チ来リシト云フ事ナリシ 午後下女二人共本郷ニ行クトテ出行ケリ 余ハ戲場粹言幕之外及ビ歴世女装考ヲ読ム 五時頃親人歸ラレ其レヨリ食事ヲ為シ居タルニ下女歸リ来レリ 八時過初ハ横濱ニ歸レリ、素人狂言紋切形ヲ読ミ終ル 拾時頃ヨリ雨降り来ル

*三時頃河田氏来ル氏去ツテ後暫時ニシテ松永氏訪ヒ来リヌ

四月二日 水曜日 朝来曇天且降雨五時頃ヨリ止ミ夜ニ入り快晴

此日朝ヨリ仏連知部津苦ヲ読ム 拾時前姉来レリ 拾時過婦ルトテ新橋ノ停車場迄送り行キ銭ヲ四拾錢貫ヒ申シテ歸ル 午後親爺殿区役所エノ届ノ事ニ付キ本郷ニ行キ暮方婦ラレタリ 夜ニ入り八時半頃鶴仙ニ行キ浄瑠璃ヲ聞ク、客ハ大抵商人分子多キ様ナリ 女モ中々比較的ニ多カリシ、入りハ先ツ八分過ギ位ナル可シ、遅カリシカバ小末ノ「撰州合法辻」玉手嫉妬之段

ヨリ聞キタルガ先ヅ可成ノ出来ナラント思フ 然シ今少シ爽ニ行ケカシト思ヒシ、次ハ東玉ノ「艶容女舞衣」三勝半七酒屋之段」ニテ三味線ハ小末、何時モナガラ調子ハ中々旨ケレド所々腹ニ力ノ無キ所アリシハ残念至極ト云フ可シ 其上「聞テイルサノ云々」ノ所一挺ニテハサツパリ用立タズ、然シ「跡ニハ園」云々ノ所以下ハ中々面白ク聞キタリ、之レヨリ先キ小末ノ語り居リタル時イのガ跡ヨリ来レリ 故ニ共ニ帰ル 時ニ拾一十二拾分前ナリキ 直チニ就眠

四月三日 木曜日 朝来晴天風中々強シ

朝ヨリ仏レンチブツクヲ讀ミ午後三時過ニ全ク之ヲ讀ミ終レリ 午前親人ハ深川ニ出行カレタリ 午後五時前義太夫語り弼昇トカ云フ者来レリ 種々談話ノ末六時過歸リ去レリ 親父次デ歸レリ 七時過イのト共ニ寄席ニ行ク 此日ハ丁度祭日ナレバ如何ニモ込ミ合フ事ナラント思ヒシニ左程入ラズ二階ハ僅五六人位ナリシ 先ヅ最初ハ竹本東吉ガ「明烏夢泡雪」山名屋之段」ナリシガ先ヅ善キ出来ナル可シト思フ 次ハ東滿王ガ「伽羅先代萩、御殿之段」ナリシガ之レハ声モ善ク中々感心セリ 次ニ小末ハ「桂川連理柵」帯屋之段」ナリシガ茶理モ中々善ク且終リノ部分ハ充分ニ旨シ 扱大切ハ東玉ガ「平仮名盛衰記」逆櫓之段」ナリシガ之レハ前夜ニハ引キ代エテ余程ノ出来我等アツト感嘆ニゾ及ケル、之レニテ家ニ帰ル

四月四日 金曜日 朝来晴天非常ニ暖カ夜ニ入り曇ル 朝ヨリ「テニソン」氏ノ「いノック。あゝデン」ヲ讀ミ始メ拾

二時頃之ヲ読終ル、拾一時頃小島来レリ 一時頃横濱ヨリ机箱箆等到着ス 短冊ニ歌ヲ書ク 四時頃イのノ妹来レリ晚方姉来ル 竹内、小島二氏来レリ

四月五日 土曜日 朝来曇天且降雨

此日拾一時草郷義兄来レリ 時計ノ鎖ヲ取り代エタリ 午後二時前家ヲ出デ本郷ニ帰ル 三時過松永氏ヲ訪フニ不在ナリシカバ久米ヲ訪フニ内藤氏来リ居リ晚ニ寄席ニ行ク可キ由ノ約束ニ及ベリ 六時過松永氏ヲ訪ヒ氏ト同道ニテ久米、内藤氏ト共ニ竹町ニ行ク 此日ハ土曜日ナレバ大入りナラント思ヒシニ思ノ外カナリシガ、デモ九分位ノ入りナラン、先ヅ最初ハ「鶴司」ガ「おさん茂兵衛大経師之段」先ヅ可成リトデモ云フテ置ク可シ 次ノ小政ガ「本朝二拾四孝。十種香之段」ナリシガ之レハサスガニ感服物ナリ 然シ此所ハスケニテ他ニ本職ガアル故カ非常ニ声ヲ惜マレンハサル事ナガラ我等ニ取リテハ遺憾ナリ 次ハ土佐栄ガ「摂州合法辻。下之巻」ニテアリシガ三味線ガ鳴ラザレバ引キ立タザリシカド此人ニシテハ上出来ナラント思ハル 次ハ染勝ガ「箱根靈驗記覺仇討施行場之段」ナリシガ之レハ滑稽十分ニテ客ノ腹ヲ綯ラセタルハ感心ノ 考フルニ去年ヨリハズツト芸ガ上リタル様ニ見受ケヌ 扱大切ハ綾之助ガ「三拾三間堂棟木由来。平太郎住家之段」之レハ只アツト許リ感嘆ニゾ及ケレ、此ノ前トハ違イテ三味線ノ調子ヲ上ゲテ並ニシタルハヨシ且三味線引鶴加津ハヨク合ワセテ引キシハ感服、一体綾之助ノ節ノ少カキニハ毎度感心ス、先ヅ玉ノ中ノ玉ト思

庚寅日記

ヒシハ木遣リヲ二擬ニテ充分声ヲ張り上ゲテ語リシハ聞クモ中心地ヨカリキ之レニテ帰宅ス

四月六日 日曜日 朝来晴天晩方曇リ拾一時過電及ビ降雨ス

朝中島氏来リテ書ヲ読ム 拾時頃ヨリ谷内氏ヲ訪フニ大石、早川等居リ暫時談話ノ後豊川ニ行キ密柑ヲ食シ午後二時過谷内氏ヲ訪ヒ三時過帰宅ス 途ニテ曲亭雜記ヲ買フ 家ニ帰レバ姉来リ居リテ根岸エ花台及ビ他一品ヲ付返エシクレトノ頼ミヲ受ケ

之レヲ返シテ来ント車ニ乗リ家ヲ出デ上野山下ヨリ根岸ノ加藤ノ家ニ行キ品物ヲ返シソレヨリ新坂ヲ上リ博覧會ノ裏ヲ通りテ摺鉢山ノ裏ヲ通りテ広小路ニ出ヅ 道々ノ桜最早散リタルモアリ又散リカカリタルモアリ 盛ハ既ニ過ギタレド風ニテラ／＼

散ルサマハサスガ拾テ難キ心地ゾスル此日ハ中々ノ人出ナリキ 最早所々売店等出来上リ中々奇麗ナリシ、家ニ着シテ靴ヲ磨キ居リタルニ本屋都ノ花ヲ持来レリ 七時頃家ヲ出デ本屋ニ本代ヲ払ヒ万世橋ヨリ車ニ乗リ日吉町ニ来リ都ノ花ヲ読ム

四月七日 月曜日 朝来半晴二時過雨降り出デタレドモ暫時ニシテ止ミヌ

此日朝ヨリ都ノ花及ビ曲亭雜記ヲ読ム 拾一時頃姉来レリ 午後二時頃高木、及ビ竹内氏来レリ、黒岩次イデ来レリ、四時頃親父帰宅ス 六時頃いのへ横濱ニ帰レリ

四月八日 火曜日 朝来晴天中々暖氣

此日ハ大奮発ニテ朝五時過ニ寝起六時半ニ喫飯直チニ日吉町ヲ出デ土橋手前ヨリ車ニ乗リ学院ニ歸ル 二本樓ニテ麻裏草履及

ヒ鉛筆ヲ買フ、八時半頃物理書ヲ書籍室ヨリ借ル、此日ハ朝早く起キシ故カ非常ニ眠タク感ジタリ、課業モ事ナク終リ三時頃ヨリ学院ヲ出デ日吉町ニ歸ルニ皆留守ニテ有リシカバ浜ニ頼ミ

テ船ヲ買来ラセ之ヲ食セントシタルニ姉帰宅セリ 七時前晩食、小島氏来レリ 姉ハ本郷ニ行ク、余ハ直チニ学院ノ途ニ上リ八時過学院ニ着ス

四月九日 水曜日 朝来晴天午後曇リシガ夜ニ入り晴レヌ 此日課業モ事ナク済ミ晩食後サンダム館後ノ芝地ニテ島崎、赤田ノ二氏ト相撲ヲ取ル 六時過学院ヲ出デ帰途ニ就キ七時過日吉町ニ着ス、姉ハ河田氏ニ招カレテ未ダ帰ラザリシ、万国史ノ下読ミヲナス、九時頃姉歸ル、小島来ル、拾時眠ニ就ク

四月拾日 木曜日 朝来花曇リ 此日朝五時半ニ起キ出デ同二十分日吉町ヲ発シ六時四十分頃学院ニ着ス 七時カタノ如ク朝食ヲ喫シ課業ニ出席ス、翻訳課ハ非常ニ六ヶ敷カリシ 晩食後赤田氏ト相撲ヲ取ル 夜ニ入りテ「てニソン氏」ノ「いノツク、あーデン」ヲ字引ヲ用イテ読ム 拾一時頃各室ヲ点檢ス

*織田氏ヨリ点数ヲ聞ク、即チ平均八十九点ニシ三位ノ頭ナリキ

四月拾一日 金曜日 朝来曇天追々晴レ午後ハ風少シ吹ク 此日「ハリス」氏ハ休ミナリシ 翻訳ハ前日程デアラザリシ井深氏ニ点数ヲ問ヒタルニ七十五点ナリト云ハレタリ 午後三時過学院ヲ出デ日吉町ニ歸ル 夜ニ入りテ姉下女ヲ連レテ歸り来

レリ 拾時頃眠ニ就ク

*日吉町ニテ馬琴ノ椎枝鳩ヲ読ム

四月拾二日 土曜日 朝来曇天且降雨午後八雨止ミ晚方ハ夕映

アリ

此日ハ朝ノ内中将姫、蓮蔓茶羅ヲ読ミ午後二掛ケテ徒然草ヲ読ム 朝早く松永氏ヨリノ手紙ヲ請取リタリ 競漕観覽券在中 午後四時過義兄来レリ 天浮羅ノ馳走ニナリ五時前日吉町ヲ立 出デ新橋ヨリ馬車ニテ日本橋迄行キノレヨリ車ニテ万世橋迄来リ徒歩シテ家ニ着ス 直チニ河田氏ニ金子在中ノ手紙ヲ届ケタリ 家ニ帰リテ喫飯シ直チニ若竹亭ニ行ク 此日ハ先ヅ拾分近クノ入ナリシ 最初ハ鶴司ノ「ウツ」先ヅ可ナリ（此人ニシテハ） 次ハ「小政」ガ「中将姫古跡松。雪實之段」ナリシガ之レハ毎度聞ク者ナレドモ中々宜シ 慾ニハ今少シ声ヲ惜マズニヤツテ貰ヒタカリシ 次ハ「土佐栄」ガ「新版歌祭文。野畷村之段」ナリシガ如何ニモ三味線ガ苦シカリソヲナリシ、ソシテモヲ少シ流暢ナ所ガ有ラバ宜シカラント思フ 然シ出来ハ先ヅ中位ナル可シ 次ハ染勝ガ「道中藤栗毛。島田宿之段」ナリシガ相変ラズ滑稽百出、客ハ抱腹セリ、先ヅ宜キ出来ナラン 扱大切ハ「綾之助」ガ「菅原伝授手習鑑。寺子屋之段」ナリシガ之レハ中々ノ上出来余程感服セリ 就中「御台若君諸共ニ」ノ辺以下只妙ト云フノ外ナシ 之ニテ帰宅ス

四月拾三日 日曜日 朝来晴天

此日朝新聞及ビ歴史ヲ読ミ居リタルニ安並、倉部ノ両氏来レリ

庚寅日記

氏等去ツテ余ハ衣服ヲ改メ家ヲ出デ春木町ヨリ車ニ乗リ吾妻橋ニ至リソレヨリ徒歩シテ言問ノ所ニ至リ掛リ員ニ切符ヲ渡シ場ニ入り競漕数番ヲ見ル 高等中学校ト商業校トノ競漕ハ高等中学勝チタリシカバ同校ノ生徒ハ大悦ビニテ旗ヲ振り鈴ヲナラシナドシタルハ左モソト思ハル 終リノ分科撰手競漕ハ医科ノ勝チトナリタリ 其レヨリ余ハ寺島村ノ清司ノ家ヲ訪フニ妻君ノミナリシカバ少時談話ノ後帰途ニ着ク 途中言問ニテ困子ヲ買フ 堤上ヲバ医科ノ学生一同勝旗ヲ捧ゲテ行キノ逢ヒタリ 花ハ散リテ青葉耳多シ サレバ多クノ掛茶屋モ休ミ居ル人寥寥タリ 本願寺門前ヨリ上野迄乗車シソレヨリ徒歩家ニ帰ル 直チニ入浴シ喫飯後車代拾一錢ヲ貰ヒ家ヲ発ス 門口ニテ松永氏ニ逢フ氏ハ二度共勝テリトテ賞牌二個ヲ余ニ示サレヌ 真砂町ニテ氏ト別レ車ニ乗リ日吉町ニ至ル 代数書ヲ読ム 拾時頃義兄帰レリ 拾一前就眠、姉ヨリ二拾錢ヲ貰イタリ

*山根氏来リ居ラレタリ

四月拾四日 月曜日 朝来曇天午後二時頃ヨリ降雨

此日六時寝起直チニ朝食ヲ喫シ七時過家ヲ発シ佐久間町ヨリ車ニ乗リ聖坂ニテ降りソレヨリ歩キテ学院ニ着ス 直チニ課業ニ出席ス 体操課ハ休ミナリシカバ読新聞ヲ読ミタリ午後一時半過近藤氏ヨリ文章軌範ノ講義ヲ聞ク 二時過ギヨリ仏語ノ翻訳ヲナス 花嶋氏ヨリノ頼ミニテ来ル金曜日ノ文学会ニハ英文朗読ヲ為ス可キ由ヲ諾セリ 夜ニ入りテハ子安氏等ト英語ヲ用ヒテ談話ス可キノ約ヲナセリ 若シ邦語ヲ言ヘバ五厘宛ノ罰金

庚寅日記

ヲ払フ可キトノ事ナリキ、此日ハ他室ヲ点検セズシテ就眠

四月拾五日 火曜日 朝来曇天朝ノ内降雨昼前雨ハ止ム

此日数学ノ時間ニ運算ヲナス可キ由ヲ云ハレ出テタレドモ容易ニ出来ズ 彼レ是レ考エ中鈴鳴リタリ、此時間ニ次ノ週間ヨリ三角術ヲ始ム可キ由ノ話シ有リタリ 午後二時過仏語課ニテハ書キ取り及ビ翻訳ヲナセリ 甚不出来ナリキ、三時過書籍室ヨリ「シニキスピアー」ノ人肉質入裁判ヲ借ル 部屋ニ帰リ「カレリツヂ」ノ「ラブ」ト題セル詩ヲ読ム

四月拾六日 水曜日 朝来曇天

此日翻訳課ニテ「カレリツヂ」ノ恋ヲ読ミ終ル 文章軌範ヲ読ム 夜ニ入り「カレリツヂ」ノ「モーニングヒム、ツイ、モン、プラン」ヲ読ム

四月拾七日 木曜日 朝来朧ナリシカドモ午後ハ晴レタリ

此日翻訳ニテハ「カレリツヂ」ヲ終リ「ダニエル、ウエブスター」ニ移ルベキ由ノ話アリキ 夜ニ入り「ウエブスター」ノ「フロム、ゼスピーチ、イン、レブライ、ツイ、ヘイン」ヲ読ム

四月拾八日 金曜日 朝来晴天非常ニ暖カリキ

此日ハ午後後文学会ノ英文ヲ書ク 四時頃子安及ビ池田ト相撲ヲ取ル 一度モ勝タズ、六時ヨリ文学会ニ出デ「ゼ、サルタン、エソドゼ、ビジャール」ナル一章ヲ読ム、島崎、小倉、正木其他諸氏ノ演説ヲ聞ク 九時前赤田氏ト共ニ学院ヲ出デ日吉町ニ帰ル

四月拾九日 土曜日 朝来晴天至極暖カリキ
此日ハ横浜ヨリ客来ルトテ朝ヨリ書物ヲナス拾時頃の横浜ヨ

リ来レリ 午後ハ種々ノ人來ル 母叔母ハ本郷ヨリ草郷義兄ハ横浜ヨリ買客ヲ連レ來ラレタリ 混雜ノ中ニテ万国史ノ下読ヲナセリ 黒岩氏午前ノ中來レリ 国元ノ親人病氣ニテ至急立帰ルトノ話アリ 七時過日吉町ヲ出デ新橋ヨリ日本橋迄馬車ニ乘リ其レヨリ徒歩シテ家ニ帰ル ソレヨリ直チニ若狭ノ妹ニ手紙ヲ書ク 遺物ヲ添テ送ル為メナリ 拾時過黒岩氏來レリ、之レヨリ先本屋ニテ日本之文華第七号ヲ求メ來レリ

四月二拾日 日曜日 朝来晴天風烈シク午後ハ曇ル夜ニ入り雨

朝八時前眼鏡屋ニ行キ眼鏡ノナラシヲ依頼ス、帰途久米氏ヲ訪ヒ十一時前帰宅ス 其レヨリ演説文ヲ草ス 題ハ「外国語学ニ付テ」ナリ、午後本屋ヨリ関八州繫馬。及ビ小文学ヲ請取り小文学及ビ文華ヲ読ム 三時過入浴シ五時喫飯直チニ家ヲ発ス 今川橋吉岡ニテ三角術、及ビ寺子屋ノ翻訳ヲ求メ其レヨリ徒歩シテ日本橋迄行キ同所ヨリ車ニテ日吉町ニ帰ル 夜ニ入り日本之文華ヲ少々読ム

四月二拾一日 月曜日 朝来曇天且降雨

此日朝六時前寝起 其レヨリ車ニテ学院ニ帰ル 午後文章軌範ヲ読ム 夜ニ入り各室ヲ見舞フ

四月二拾二日 火曜日 朝来曇天

此日仏語課ハ人少ニテ休ミ、ソレヨリ午後晚食後島崎氏ト近傍ヲ散歩ス 夜ニ入り「イノツク、アーデン」及ビ「ウエブスター」ノ文ヲ読ム 此日始メテ三角術ノ講義

四月二拾三日 水曜日 朝来曇天

朝「ハリス」氏ヨリ演説文ヲ請取ル、友野ノ日本文学全書ヲ借りテ視キタリ 午後文章軌範中ノ電錯論、留候論、始皇論、ヲ讀ム 二時ヨリ八大家ノ講義ヲ聞ク 夜ニ入り「ウエブスター」ノ文ヲ讀ム

四月二拾四日 木曜日 朝来曇天午後四時頃ヨリ追々晴レ夜ニ入リテ晴レ渡レリ

此日昼食後文章軌範ノ内、夷狄不洽論、荀卿論ヲ讀ム、夜ニ入り「ウエブスター」氏ノ文ヲ讀ミ終レリ

四月二拾五日 金曜日 朝来曇天風甚シ

此日午後仏語ヲ休ミテ帰途ニ就ク 新橋ノ井ビ土橋ヲ越エタル所ニテ帽子ヲ川中ニ飛シタルニ因リ惜シケレド「ウント」奮発シテ立歸リタリ 日吉町ニテ改進新聞ヲ讀ム 五時頃ヨリ家ニ歸ル、途ニテ日本文学全書、窓八卦柱曆、ヲ買フ、夕方ヨリ久米及ビ松永氏ヲ訪ヒ都ノ花三拾七号ヲ受取り歸ル 其レヨリ之ヲ讀ム 又改進新聞ヲ讀ム

四月二拾六日 土曜日 朝来晴天午後曇ル

此日朝久米来レリ、午前都乃花三拾七号ヲ讀ミ終レリ 文学全書ヲ少々讀ム、拾二時過谷内氏ヲ訪フ、大石氏ニ逢フ、三時頃同家ヲ立出タルニ早川氏ニ逢フ 豊川ヲ見舞フニ不在ナリキ、之レニテ家ニ歸ル、浜田氏ヲ訪フニ不在ナリシカバ都乃花ヲ置キテ歸ル、又久米ヲ訪ヒ新小説第二巻ヲ受取り歸ル、中島氏来ル、「ローヤル」第四ヲ讀ミテ遣ル、六時過松永氏ヲ訪フニ不在ナリケリ、故ニ直チニ一人デ小川亭ニ行ク、土曜日ノ事ナレ

庚寅日記

バ充分ノ入り、土佐ノ書生ノ一群、時々騒ギ起チシハ一興、先ヅ最初ハ弥津子ノ「日吉丸稚木桜、五郎助内之段」ナリシガ之レハ御苦勞ト申ス、次ハ弥鼻ガ「本朝二拾四孝狐火之段」ナリシガ之レハアンマリ急ギ過ギテ只驅ケ通ル様ニテサッパリ味ノナイ様ナ所ヲ時々聞キ込ミタリ 望ムラクハ今少シ身ヲ入レテ語ルガ宜シ然シ声モ可成ナリ 随分シツカリシタ所モアレバモウ少シ修行スレバ上達ス可シ 次ハ豊沢团玉ノ「お千代半兵衛八百屋之段」ナリシガ之レハ声ハ中々渋ケレドモヲ少シ爽カナ所欲シシト思フ、然シ三味線ハ中々旨シ、次ハ竹本稻枿ガ「伽羅先代萩」ナリシガ之レハ中々声モ宜シ其上、大分気張ツテヤラレタレバ、大受ノ様子ナリキ、就中「子ハココニ云々」ノ所政岡ノ慈嘆ノ所ナドハ中々感服致シ申ス、何ニセヨ、土佐ノ田舎人ガ斯ウ程トハ実ニ意外ノ至リデ御座ル(三味線ハ鐘柵)、扱大切ハ「於俊伝兵衛堀川之段」ナリ、先ヅ鐘柵ノ伝兵衛、弥津子ノ母親ハ御苦勞、弥鼻ノ御俊ハ中々宜シ、稻枿ノ与次郎、猿廻シノ歌ハ旨シ 然レドモ善クハ聞キ取レザリキ 团玉ノ三味線中々宜シ、鐘柵ノモ先ヅ可成 之レニテ家ニ歸ル時ニ拾一時過ナリキ

四月二拾七日 日曜日 朝来曇天降雨

朝久米来レリ 中島氏次デ来ル、倉部氏昼前来レリ、午後歴史ヲ讀ミ三時頃入浴シ、晩食後直チニ家ヲ出ツ 道路泥濘甚シカリシカバ万世橋ヨリ馬車ニ乗ラント思ヒタレド車中餘リニ雑沓ヲ極メ居ル様ナリシカバ、泥ン粉ノ中ヲ日本橋迄漕ギ付ケ其レ

庚寅日記

ヨリ馬車ニテ新橋ニ来レリ 拾時前姉ハ太一ヲ連レテ横濱ニ行ク 拾時過床ニ就キタレド四辺騒シクシテ中々寝付カレザリシ
四月二拾八日 月曜日 朝来曇天

此日朝五時半起キ出デ六時過朝食直チニ車ニテ京橋区役所ニ行クニ随分人ガ大勢来リ居レリ、重ニ商人又ハ職人分子多カリキ我ハ始メハ丈ケヲ取りタルガ五尺三寸五分、胸膈ハ二寸二分不足、其次ノ関節運動ハ宜シカリシガ、其ノ次ノ目ニ至リテ僅ニ上ノ端ノ大キナノガ稍ク見エル位、目眼ヲ掛ケテモソソナニ違ハナカリシカバ、医者ハ拾度ノ目鏡ヲ持来リテ之レニテ見ヨトアリケレバ余ハ其レニテ見タルニ善ク見エタリ、此ニ於テ、医者ハ書キ付ケニ近視二分ノ一ト書キタレバ、其次ニ至リ裸躰ニナリ所ニテ衣類ヲヌガントシタルニ掛リ官ガ言フニハ、「宜シイ、貴君ハ目ガワルインデシヨウ？」余「左様」ト云ヒテ其次ニ至リタルニ軍医ガ肌ヲヌゲトテ肌ヲヌギン後チヨイト見テ之レ迄病氣ニ罹リシ事ガ有ルカト問フニ因リ余ハ脚氣ニ罹リタルコトアリ今モ時々出ルト云ヒケレバ目鏡ヲ見セヨトテ之ヲ見、ソレニテ書キ付ケニ判ヲ押シクレタリ、之ヲ見ルニ丁種トアリタレバ大悦ビニテ之ヲ司令長官ノ所エ出シ置キ直チニ立帰リタリ 区役所ニテ待ツ間「関八州繫馬」ヲ読ム家ニ帰リテ之ヲ読ミ終リ「おさん茂兵衛恋八卦柱磨」ヲ読ミ終レリ 巷時頃日吉町ヲ立出デ新橋ヨリ鉄道馬車ニ乘リ日本橋ニテ降り其レヨリ徒歩シテ本郷ニ歸ル 家ニ歸リテ無尽ノ書キ付ケヲナス 晩食後浜田氏ヲ訪フ 暫時談話ノ後松永氏ヲ訪フニ不在ナリシカバ己

ヲ得ズ家ニ歸リ傘ヲ持チテ小川亭ニ行キヌ、先ヅ最初ハ弥昇ガ「菅原伝授手習鑑」寺子屋之段」中途——松王ノ梅ハ飛ビ云々ノ歌ヲ吟ジテ入り来ル所——迄語り進ミタル時ナリキ、之レハ前夜ヨリハ落付キアリテ随分面白カリシ、次ハ団玉ガ「おつま八郎兵衛」聚楽町之段」此人ハ声モ中々洪ケレバ随分面白ク感ゼシ所少ナカラズ 次ニ稻舂ガ「義経腰越状」五斗生醉之段」中々ノ出来随分キバツト大キク出ラレタル所大受ケナリ、扱大切りハ「壇浦兜軍記」阿古屋琴責之段」総掛ケ合三味線ハ団玉ナリシガ中々旨シ 曲ビキハ感服セリ、「弥津子」ノ三味線モヨシ、同人ノ岩永左衛門、鐘舂ノ榛沢六郎ハ御苦勞千万、弥昇ノ畠山重忠、中々ノ出来 稻舂ノ阿古屋申ス迄モナク上出来、只稍声ヲ貯フ気味合ニテ歌ノ聞ケザリシ所アリシハ遺憾、此日ハ土佐ノ書生ノ一群四人許リ高座ノ前ニ詰メ掛ケ居リテ鐘舂ノ三味線ノ時高座ヲ見上ゲタルニ同人ハ「アリヤメツタ」トハ土佐ノ丸出シ、ソレヨリ中入後高座ニズツト皆々列ビタル所ヲ類リニ何ニカ云ヒタレバ稻舂ガ「ソノナ事言ヒナ」ト云フニ下ニテハ「ソノナ事云フハドコノおぼサンゾヨ」トハ面白シ、婦リニ裏階子ヨリ下リテ楽屋ノ前ヲ通りタルニ弥昇ガ上下ヲ疊ミツツアリシガ「奥サン」ハト云ヒシカバ余ハ「昨日横濱ニ行キマシタ、貧乏隙ナシデ方々駈ケ廻ツテ居ルンダ」ト云ヒテ別レタリ 拾巷時過家ニ歸リ着ク 此日ハ親爺本郷ニ宿レリ
四月二十九日 火曜日 朝来曇天時々霧雨降ル
此日朝八時過改進黨ヲ見ルニ八重桜此日ニシテ結尾ヲ告ゲタ

リ拾時過家ヲ出デ日本橋迄徒歩シ其レヨリ鉄道馬車ニテ新橋迄来リ日吉町ニ着キタリシハ拾一時過ギナリシ、一時半過、家ヲ出テ徒歩シテ学院ニ来レリ聞ク此日生徒中ヨリ流行性感冒流行ノ故ヲ以テ休業ヲ請求セリト夜ニ入り「ドグインシイ」ノ「のツキング、あツト、ゼ、げイト、いん、まクベス」ナル文ヲ少々読メリ

四月三十日 水曜日 朝来曇天午後降雨

此日朝八時半過休業ノ事ハ向フ一週間ト極リ直チニ帰途ニ就ク日吉町ニテ昼食シ一時頃鉄道馬車ニ乗リ眼鏡迄来リ其レヨリ徒歩シテ家ニ帰ル其レヨリ早川氏ヲ訪ヒ国民之友ヲ借り来レリ

四時過浜田氏ヲ訪ヒ仏連知書ヲ読ム六時過松永氏ヲ訪フニ不在ナリシカバ直チニ家ニ歸リ七時家ヲ出デ小川亭ニ行ク、此日ハ雨天ニモ拘ラズ大分ノ入りナリキ、晩カリシカバ、例ノ「仮名手本忠臣蔵」判官切服之段一ヲ団玉ガ半バ頃迄語り進ミタル所ニテアリタリ之レハ先ヅ並出来、次ハ弥昇ガ「恩愛二ツ玉之段」之レハ出来ハ善キ方ナレドモ今少シ滑稽アラバト思ヒシ、次ハ稻舂ガ「勘平腹切之段」之レハ申ス迄モナク中々面白カリシ就中「金ハ女房ヲ云々」ノ所ハ感服ノ至リ、扱大切ハ「七段目一力之段」重太郎、力弥（やす子）鐘舂ノ善太八、弥昇ノ弥太郎、ハ何レモ御苦勞、弥昇ノ九太夫ハ今少シ滑稽ノ氣マジリテモ善カラシ、鐘舂ノ件内充分ニ騒ギタレバ書生サシハ大受ケノ形、然シ随分猥褻……呂華ノ由良之助此人ハ我初メテノ見參ナレバ深ク聞カネバ評スルニ由ナケレドモ声ハ中々コ

ナレテ居リテ可成リ聞キ由シ三味線ハ先ヅ中出来、団玉ノ平右衛門先ヅ中ノ上位？、於加璃ハ稻舂之ヲ勤ム中々宜シ、声ノ立ツ人ナレバ之ノナ事ニハ最も適スルナラン、此レニテ帰宅ス

五月一日 木曜日 朝来曇天

此日朝姉来レリ余ハ早川氏ヲ訪ヒ豊川ニ行キ塩猪ヲ貰ヒ婦ル

四時過小泉氏方ニ使ニ行ク婦リ来レバ於安来リ居レリ晩方豊川ニ行キ荷物ヲ請受リ来レリ夜ニ入り親爺来レリ九時過日吉町ニ帰レリ

五月二日 金曜日 朝来曇天

朝青山表町四丁目三番地林民雄氏ヲ訪フ不在ナリシカバ、日吉町ニ立寄り馬車ニテ眼鏡迄来リ其レヨリ徒歩シテ家ニ歸レバ小泉ノ妻君来リ居ラレタリ拾二時過島崎氏赤田氏余ヲ訪ヒ博覽会ニ行カン事ヲ促ス、故ニ余ハ直チニ昼食シ直チニ伴フテ家ヲ出デ上野ニ行ク、家ヲ出ヅル時、姉ヨリ三拾錢貰ユリ、一時過会場ニ入り込ミタリ先ヅ、右手ノ館ヨリ見初メテ諸所ニテ魔胡ツキタレドモ稍ク四時過迄ニハ第一本館ヲ見ノコス迄ニ見タリシカバ、晩レヌ内ニト美術館ニ入タルガ彼ノ有名ノ美人琴ヲ弾ズルノ図ノ美人ハ其レ程デモナシ日本画ノ内尾形月耕、狐ノ美女ノ形ニ変ズルノ図ハ中々旨シ、山本芳翠ノ寒梅ノ月、原田直次郎氏ノ「観音ハ実ニ高尚ニシテ且壯大ナリ島崎氏之レヲ評シテ曰ク詩仙ミルトンヲシテ画工タラシメバ必ラズヤスノ如キ画ヲ作ルナル可シト至言ト云フ可シ其辺ニ武者ノ弓ヲ射

ルノ図中々美事ナリ画者ノ名ヲ忘レタリ、其外探幽ノ龍、雪舟ノ山水等中々美事ナリ、其レヨリ水族室ノ真暗闇ニ立入り魚類ヲ見ル。鰻ノ凡三尺位アリテ周リ五寸位ノ者アリ。鯛ノ如キ魚ニテ鱗ノ在ル者アリタリ。其レヨリ立婦リテ第一本館ヲ大急ギニテ一通目ヲ通シ外ニ出デ饅餅及ビ漬ケ物ヲ買ヒ直チニ広小路ニ出デ島崎氏ト別レ、赤田氏ト共ニ四丁目迄来リ氏ト別レ家ニ帰ル六時頃姉ハ横濱ニ行ク、久米モ来レリ親父モ来リシガ去レリ、九時前髪ヲカリニ行キタリ

五月三日 土曜日 朝来降雨

此日拾時頃家ヲ出デ入浴シ、久米及ビ松永ヲ訪フニ何レモ不在ナリシカバ、直チニ家ニ帰レリ、午後老時過松永氏来レリ。氏ト同道ニテ竹本越路一連ノ義太夫聞キニ若竹ニ行ク、入りハギシ詰ミ先ヅ千五百位ノ入りナル可シト思フ、先ヅ最初ハ簾中ニテ竹本越栄太夫「八陣守護城」正清本城之段」ナリシガ之レハ御苦勞デゴザンス、次ハ竹本小長太夫、三味線豊沢広子ニテ「加賀見山旧錦絵、鳥居又助内之段」ナリシガ之レハアンマリドタバタ遣リスギタト思フ。今少シ修行ス可シ。次ハ竹本越尾太夫、三味線豊沢広吉、ニテ「暮大平記白石斬。坂戸村之段」ナリシガ之レハ何ントナクダレ氣味ナリシハ残念。次ハ竹本村太夫。豊沢龍三。ノ「同上吉原櫓屋之段」此ノ人ハ声ガ中々ニ立チシカバ、中々面白カリシ。先ツ上出来ナラン、次ハ竹本さの太夫、三味線。鶴沢小庄ニテ「王業前旭袂、金藤次上使之段」ナリシガ中々宜カリシ、身振ハ宛然タル芝居ノ様、テモアンマリナ……ト

ハ素人ノ考カ、次ハ竹本路太夫。三味線豊沢花助。ニテ「日蓮記。勘作内ノ段」ナリシガ之レハ中々面白カリシ、其上一ツモ抜カサズニ一段丸ルデ語ラレシハ満足致セリ。上レハ先ツ上ノ下位ノ出来ナル可シ、扱大切りハ竹本越路太夫。三味線豊沢広助ニテ「艷容女舞衣。三勝半七酒屋之段」之レハ名人ノ御得意物トテ悪カロー答モナシ。又悪イ所ガ有ルニシテモ我等ニハ分ラヌ訳。美音、妙曲座ロニ人ヲシテ感ニ堪エザラシム。真ニ海内無双ノ名空シカラザルナリ。之レニ加フルニ広助ガ三味線妙アリ我等只ヒタ呆レニ呆レケリ、先ヅ「跡ニハ園ガ云々」ノ所以下教拾行只感ズルモ猶餘リアル心地セリ。其レヨリ下ツテ「聞テ入ルサノ障子ヨリ云々」ノ所ハ中々旨シ、此所広助ノ三味線ニハアツト感嘆。マダ其ノ次ノ鴛鴦ノ片羽ノ」云々ノ所モ中々ナリキ。全ク遂ハリシハ八時三十分頃ナリキ。餘リ入りガ多キ故容易ニ出ル訳ニ行カズ。空ジキ腹ヲ抱イテ待ツコト凡三十分許リ稍ク家ニ帰ル。道路ハ前日来ノ雨ニテ泥海ト変ジ随分歩クニ困難ナリキ。松永氏ハ用事アリテ越路ガ出ルトスグニ帰りタリ。翌日聞ケバ早川、大石ハ或友人ト少シ後ニ来リ居リシ由ナリ

五月四日 日曜日 朝来降雨

此日朝ノ内松永氏ヲ訪ヒ読売新聞ヲ借り来レリ。午後ハ新聞ヤ国民之友等ヲ読ミタリ。暮方浜田氏方ニ新聞ヲ届ケ龍岡町ニ行キ、早川ニテ国民之友ヲ借ル。大石モ来リ種々談話ノ後九時過帰宅セリ。道ニテ都ノ花及ビ日本人ヲ買フ

五月五日 月曜日 朝来降雨晩方西ノ方少シタ映

此日ハ朝ノ内都ノ花ヲ読ミ、国民之友ヲモ見ル 午後一時頃松永氏来ラレタレバ氏ト共ニ、若竹ニ行クニ此日モ中々ノ入りナリキ、先ヅ最初ハ越尾ノ「花雲佐倉曙儀作内之段」之レハ相変ラズダレテ面白カラズ、次ハむら。太夫ガ「八陣守護城。正清本城之段」随分面白カリシガ、然シ前日ニハ一着ヲ輸スル気味アリ、次ノさ。の。太夫ガ「彦山権現誓助劍」ニテ之レハ非常ニ能カリシ、先ヅハ上出来ト云フ可シ、次ハ路。太夫ガ「天網島茶屋場之段」随分善ク出来タリ、言葉ノ旨イノハ実ニ感服ノ至リデス、花助ノ三味線中々能シ、扱、大切リハ越路ノ「伽羅先代萩政岡忠義之段」ナリ、之レハ前日ニハ立優ツテ感服セリ実ニ旨ト云フヨリ外ナシ、加フルニ三味線ノ能キ事ヲ以テス、之レラ感ゼザルモノハ木偶カ石仏ナル可シト思フ、節ノ少カキ所、折折スツト立テ上ル所、実ニ独得ノ妙アルナリ、先ヅ旨イ所ハ「何共ナイト洗面作り」、「お末の業ヲシガラキヤ」、ヨリ「心モ清キ洗ヒ来」迄就中「心モ清キ云々」ノ所ナントモ申シ様モナシ、雀ノ所及ビ政岡愁嘆モ中々旨シ、サテモ名人！之レニテ家ニ歸リタルニ日本之文華ヲ本屋ヨリ持チ来リ居レリ 故ニ少々之レヲ読ム

*越路ノ先代萩？ 先代萩の越路？ と許リ只呆れにけり

五月六日 火曜日 朝来曇天且降雨

此日余ハ日本之文華ヲ読ム 森下エノ手紙ヲ書ク 宇佐美来レリ 五時頃家ニ出デ弓町ヨリ車ニ乗リ日吉町ニ来レリ 夜ニ入

庚寅日記

リ雨甚シ風サエ少シ加ハル

五月七日 水曜日 朝来曇天且降雨午後ニ至リ雨止ミ夜ハ星ヲ

見タリ

此日ノ課、歴史ハ休ミ其他ハ事ナク済ミ、午後「ド、クインシイ」ノ「ノツキング、アット、ゼ、ゲート云々」ノ一章ヲ読ミ終レリ 并ビニ「イノックあーでん」ヲ読メリ 此日ハ各室ヲ見廻リタルニ人ノ居ラザル所少ナカラザリキ 拾時前就眠

*此日ハ朝六時前日吉町ヲ出デ新橋ヨリ車ニテ三田迄参リ其レヨリ徒歩学院ニ着セリ

五月八日 木曜日 朝来晴天午後降雨夜ニ入りテハ星出ツ

此日モ歴史休ミ。三角術問題ヲ解キ、「カーライル」ノ「ルリッド。ピクチュア」ヲ読ミシハ午後ニシテ夜ニ入りテ演説文ヲ草ス 題ハ「我が文学史ノ編纂」ナリキ 眠鐘ノ鳴リシ後真中ダケノ部屋ヲ点検セリ

*此日十四銭ヲ赤田島崎両氏ヨリ受取ル

五月九日 金曜日 朝来晴天

此日歴史休ミ、故ニ翻訳ヲ此時間ニ操リ上ゲタリ 午後三時過学院ヲ出デ帰途ニ上ル 四時過日吉町ニ着ス、八時頃今井ト云フ人来レリ 種々談話之後拾時頃親父横浜ヨリ歸リタル故ニ少時談話ノ後歸リ去レリ

五月拾日 土曜日 朝来花曇り夜ニ入りテ晴ル

朝七時過寝起 九時過、日吉町ヲ出デ本郷ニ歸リ来レリ 拾二時頃於安来リテ寄席ニ行カン事ヲ勸ム 一時頃母ト三人ニテ竹

町ニ行ク 此日ハ相変ラズノ大入りナリシガ越路ハ病氣ニテ欠席、中々失望セリ 最初ハ竹本小長、豊沢広子、「艶容女舞衣酒屋之段」餘リ外題ガ大キクテお手ニ餘リマシタ 次ハ越尾、広吉「花の上野誉之仇討、志渡寺之段」今少シ修行アレ、「薫木累物語。羽生村之段」竹本むら太夫、龍王ハ先ヅ中出来。次ノ「さの太夫、小庄ハ「菅原伝授手習鑑、松王丸屋敷之段」ナリシガ之レハ中々ノ出来ナリシ、次ハ「桂川連理柵、於半長右衛門帯屋之段」ヲ路太夫、花助、語ル 随分面白カリシ 何時モナガラ此ノ人ノ言葉ノ旨イノニハ感服ナリ 誠ニ「ナチユラル」ノ所善ス可シ 此レニテ家ニ帰ル 夜ニ入り於安ヲ送り行キ豊川ニ逢ヒ万国史ヲ借り帰ル 此ノ日ハ寄席ニテ勝鬨ヲ読ム

五月拾一日 日曜日 朝来晴天

午後作文ノ稿ヲ起ス 四時前姉来レリ 古印紙ヲ搜索ス 夜ニ入り姉ハ歸リ去レリ 六時過入浴、倉部氏ニ逢フ

五月拾二日 月曜日 朝来晴天

午前姉来レリ 午後お孝さん来ラル 豊川ニ行キ饅餅ヲ貰ヒ帰レリ 四時頃お孝さん帰ラル 夜ニ入り姉ヲ帰レリ 此ノ日ハ高木ハ玉ヲ捜シ当テタリキ、夜ニ入り作文ノ稿ヲ続ク

五月拾三日 火曜日 朝来曇天且降雨暮方雨止ム

此日朝六時ニ起キ真砂町ヨリ車ニテ三田迄来リ其レヨリ徒歩学院ニ帰ル、此日「カーライル」ノ文ヲ読ム

五月拾四日 水曜日 朝来晴天然レドモ中々寒カリシ

此日課業ハ無事ニ過ギ午後近藤氏ヨリ文章軌範ノ講義ヲ聞ケリ

夜ニ入り「いのツク、あーでん」ヲ読ム

五月拾五日 木曜日 朝来晴天晚方雲出タレド夜ニ入り晴レタリ

此日翻訳課ニテ「カーライル」ノ文ヲ読ミ終レリ 午食後赤田氏ト近傍ヲ歩ク 晚食後島崎赤田両氏ト近傍ヲ散步シ田圃ノ中ヲ通ル道々泥濘ノ場所アリテ困難ヲ極メタリ 夜ニ入り九時過各室ヲ巡見ス 「まコーレー」ノ「ビュリータン」ヲ読ミ終レリ

五月拾六日 金曜日 朝来晴天

此日「マコーレー」氏ノ文ヲ読ミ終レリ、三時頃ヨリ学院ヲ出デ赤田氏ト共ニ日吉町迄来ル 六時頃姉来レリ 兄モ次デ来レリ、今井及ヒ諏訪氏来レリ 拾時過父帰宅ス、姉ヨリモ一円貰イタリ

五月拾七日 土曜日 朝来曇天

此日朝新橋停車場ヨリ電信ヲ出ス、此時兄より五拾銭貰フ、午後三時頃帰途ニ就ク 六時過福島氏ヲ訪ヒ、吹抜亭ニ行ク、入りハ先ヅ可成、先ヅ最初ハ東代玉ノ「同胞比翼塚。播隨院長兵衛内之段」ナリシガ、之レハ余リ感心セズ、次ハ三福ノ「中将姫古跡松。雪責之段」ナリシガ、出来ハ余リ善キ方ニハ非ザル可ケレド、之レハ助ケ故ト思エバ無理モナシ、然シ中々旨イ所モ少カラズ、次ハ鶴枝「忠臣蔵、八段日本蔵下屋敷之段」ナリシガ、先ヅ可成、然シ今少シ調子ノ変化アラバ如何ト思フ、次ハ照勝ノ「仮名手本忠臣蔵。勘平内之段」ニテ相変ラズ骨稽百

出大笑ヲハセ、何時モナガラ眠気覚シナル可シ、扱大切ハ綾之助。鶴加津ノ「伽羅先代萩。政岡忠義之段」ナリシガ之レハ中々旨イ物ナリ トリワケ「お末ノ業」云々ノ所「中々能シ、然シ「心モ清キ洗イ米」ハ餘リ感心セズ、今少シ転バンシテモ善カラシ「実ニ国ノ礎ゾヤ」以下中々……………之ニテ帰宅セリ

五月拾八日 日曜日 朝来曇天三時頃降雨

此日朝中島氏来レリ 午前ヨリ文章ノ稿ヲ次グ 二時前入浴ス 其レヨリ本屋ニ行キ出世景清ヲ買フ、福島氏ヲ訪フニ松村氏来リ種々談話ヲナシ七時過家ニ歸リ其レヨリ又本屋ニ行キ都乃花ヲ買ヒ、帰途筆ヲ求ム、拾時頃姉来レリ

五月拾九日 月曜日 朝来曇天且降雨

此日は朝遅れければ学校を休む事に決し八時過高木の宅に至るに折能く在宅にて同人を伴なひ来れり、「都乃花」及「出世景清」を読み終れり

五月二拾日 火曜日 朝来半晴

此日朝六時前起き朝食を喫し家を出で、真砂町より車に乗るに車夫の遅き事実にもどかしく思ひしが新橋にて他の車に乗り代えたりしに此の車は少し早かりければ此にて天神坂下まで行きたるに最早八時五分過ぎなりしかば大急ぎにて講堂に駆け込みたり 此れにて先づ此日の課業無事に終りたりしに余は少々風を引きたり、夜に入りて寢室に燈を入れて居りたるに塾監来りて、燈を寢室に入れる事相成らずと云われたりしかば即ち燈は寢室と勉強室との間に置いて稍やく下読みを終れり

庚寅日記

五月二拾一日 水曜日 朝来薄曇

此日翻訳課にては「フリーマン氏」「麻氏氣質」を読み申す 課業終ると直ぐに赤田氏と部室を出たるに比佐、岡本、戸川、奥野、諸氏に逢ひ即ち同道して三田迄来り岡本以下三氏に別れ、赤田氏と共に比佐氏の宿に止まる氏より磯部饅餅を饗せらる 二時頃相伴ふて同家を出で加賀町の角にて氏に別れ家に帰る、烟草屋来り居りたり、五時頃蕎麦を食す 演説文の稿を次ぐ 暮相過遂に之れを終れり、八時頃より正夢草紙を読み始め拾二時頃迄に全く読み終る

五月二拾二日 木曜日 朝来過半晴天

朝より床を出ず 神明角力金看板喧嘩之板なる書を読む 午後演説文を所々筆を加ふ 沓時前姉来り、二拾銭貰ひたり、晩方菓子を買来らせて之を食ふ 葛目おば来られぬ 日本之文華及び日本人を持来られたり

五月二拾三日 金曜日 朝来薄曇

此日朝より起き出で午後に至り演説文の清書を致し申す、夜に入り国華を読む

五月二拾四日 土曜日 朝来半晴

此日朝食後暫時にして太一來れり 拾時過家を出で新橋より車に乗り、日陰町の出口迄行きたるに、折善く「はりす」氏に逢ひ演説の草稿を渡したり、其れより泉岳寺に行き種々義士の遺物を見物し場内にて「義士のゆかり」と云へる書を求め又同寺門前より車に乗り帰宅せり、午後草郷義兄来れり 此の時余に

庚寅日記

一円を贈られたり、五時前、太一を連れて帰り去られたりしかば、親父に二拾錢だけ遣して帰途に上る。目鏡迄乗車。其れより徒歩して家に着す、九時過外出し本屋に行き日本之文華の代を払ひ「忠臣蔵」及び「閨秀新誌」を求めたり、就眠前改進新聞を読む

五月二拾五日 日曜日 朝来曇天時々日光を見る

此日朝寝て居る内に姉来れり、余は豊川に行き種々談話し昼食の馳走になり、文学院の講義録を貰ひて帰れり。お安も姉来り居るが故に来れり。名刺をあつらえに行きたりし間に姉は日吉町に行けり、午後六時過家を出て本屋に行きて日本文学全書の代金を払ひ万代橋より馬車にて新橋迄来り七時半頃日吉町に着す。其れより課業の下読みをなす

五月二拾六日 月曜日 朝来雨天

六時過寝起、土橋より車に乗り三田迄来り、其れより徒歩学院に着し朝食を喫し課業に出席す、事なく相済みたり、但し此の日「いのつく」物語終る。午後寒氣致せしかば、少々寝申したり。此の故に翌日の下拵らえ間に合はず、随分苦たり

五月二拾七日 火曜日 朝来曇天午後三時過より雨

此日課業は事なく済み、午後島崎、赤田両氏と外出し水菓子屋にて、氷を呑み、菓子屋に行きて二三品許喰ひ、部屋に帰り、明日の用意をなせり、七時頃塾生一同にて外出し「はりす」氏の家に至り、「いちご」、菓子等の馳走に預りたり。拾時頃帰校せり

五月二拾八日 水曜日 朝来曇天

此日井深氏休業せられたり、故に翻訳課休み申せり、晚方赤田氏と外出し「はりす」氏を訪ひ前夜の礼を述べたり

五月二拾九日 木曜日 晴天

此日翻訳課にては「えまーそん」氏の「応報」なる章を読み初む、夜に入り各室を巡見す

五月三拾日 金曜日 朝来晴天午後曇る

此日朝の内は事なく済み、午後二時頃学院を出て日吉町に帰す、姉は「いんふるーえんざ」にて寝て居りたり、四時過外出し、本を買ひ来れり、「松の緑」と云へる書物を読みたり

五月三拾一日 土曜日 朝来曇天且降雨

朝九時朝食し種々談話をなし。昼食後姉より五拾錢貰ひ受け、日吉町を出て、京橋より鉄道馬車に乗り、筋違にて下車し、それより家に帰り、改進新聞を読む、其後演説草稿を清書す、午後七時頃家を出て吹拔亭に行く、此日は雨烈しかりし故客は五拾餘人位なりと見受けたり、先づ最初は東代玉が「伊賀越道中双六」なりしが餘り感服も致さず、次は三福が「三拾三間堂棟木由来」平太郎住家之段」なりしが之れは中々善し、就中木遣りは感服の外なし、されど三味線は二挺の方望しかりし、次は鶴枝が「天網島時雨の炬燵」紙屋之段」中々宜し、次は染勝の「万両幟天神坂の段」相変らず睡氣覚し、さても賑やかな、扱大切は綾之助「御所桜堀川夜討」弁慶上使之段」を語るに声は善し節はまわるし中々旨しと云ふの外なし、此れにて家に帰

る

六月一日 日曜日 朝来晴天

此日朝より草稿の清書に着手す、午前之れを書き終る、日本文学全書二篇、及び近江源氏を受取る、午後二時前入湯、帰りに本屋にて「本朝三國誌」、芦屋道満大内鑑、都乃花を受取り帰れり、五時過福島氏来れり、七時家を出で、本屋に本代を払ひ万世橋より馬車に乗り新橋にて下り、日吉町に一宿す

六月二日 月曜日 朝来晴天

七時前家を発し徒歩学院に帰る、此日暗方に麵麩代及び松尾に文学会々費を払ひたり、晚食後近傍を散歩す、高島氏を訪ひ七時頃部屋に帰れり

六月三日 火曜日 朝来晴天夜に入り雨降り雷鳴

此日物理科にては暗室にて経験をなせり、午後は赤田氏と共に外出し高島氏に逢ひ「いちご」を食ひそれより同氏方に至り批把の馳走になりたり、帰院後「えんしえんとまりなあ」を買ひ来れり

六月四日 水曜日 朝来晴天雲少出づ

此日物理は暗室にてなす、翻訳科にては「えまーそん」の文を読む、昼食後近藤氏より蘇東坡の「潮州韓文公の碑」なる章の講義を聞く、夜に入り「えんしえんとまりなあ」を読始む、源語の帚木の巻を復読せり

六月五日 木曜日 朝来晴天

此日は「まごをれえ」井深の両氏休み、故に押川方義氏を学院に招くの会議を開き、比佐、小倉、奥野の三氏を委員に撰べり

此日より「えんしえんと、まりなあ」を読始む、昼食前「上

菟司諫書」の講義を聞き、帚木の巻の質問をなして午後食す、二時頃仏文翻訳をなす、夜七時より、らんぢす氏方に行きいちご、ばん、等の御馳走になりたり

六月六日 金曜日 朝来晴天夜に入り雨

此日課業事なくすみ午後三時過より学院を出で日吉町に帰る、杉浦と云ふ人来り居たり、「芦屋道満大内鑑」を読み終る

六月七日 土曜日 朝来曇天午後は青空を見る

此日夜より姉は芝居に行くとして用意しきりなりしかば拾時前迄に母及びお屋す来れり、午後家を出で京橋より鉄道馬車に乗り万世橋にて下車し春木町に至り帽子を買ふ。それより家に着し改進新聞を読む、読売新聞中の「夏やせ」は此日にて終る、夜に入り近傍を散歩し、本を綴ぢる事を頼み置き、服部に逢ひ、少時談話す、拾二時頃母帰れり

六月八日 日曜日 朝来晴天

此日朝の内「えんしえんと、まりなあ」を読む、福島氏訪ひ来れり、午後入浴し、あんずを買ふ、帰宅後演説の演習をなす、六時頃家を出で万世橋より馬車に乗り京橋にて下車す、日吉町には、兄及び河田、山田氏等来れり

六月九日 月曜日 朝来半晴午後拾時過より降雨

此日朝六時前寝起日吉町を出で徒歩して学院に帰る、此日は数

庚寅日記

学及び和文の試験を受けたり、午後より、礼拝堂に於て競技演説の演習をなす、四時過鳥崎氏に休みの届書書きて貰ふ、夜に入りて大勢我部室に集り、物理の問題を学べり

六月拾日 火曜日 朝来曇天且降雨

此日「バラ」氏は休み、願書を出す、物理の試験に逢ふ 中々の不出来、午後三時頃ちやべるにて演説の稽古致す 晩食後部室にて演説の順の圖を引く、夕禱に出る時休みになるかどうかを聞きたるに近藤は休みに成らざる由を答られたり、此件に付きては帰宅後相談をなせり、此日晚方「まくねや」氏に文章訂正の謝礼を述べたり

六月拾一日 水曜日 朝来曇天六時頃より雨

此日朝礼拝堂に於て井深氏に休業の件に付き再議を請ふに休業許可し難しと云われたれば皆々大ひに激昂したりけれど、兎に角、教員に一個人として頼み見る可しとの事に決し、高畑氏には「らんぢす」氏に行く事を頼む、氏帰りて、級としての休は勿論其意を得ず、然れども八人だけ許す事は明朝迄に可否の返事に及ぶ可しとの事なりしかば、午後六時頃「まこをれえ」氏を問ひ休業の事を頼み、又「はりす」氏を訪ひ同事を依頼す種々雑話の後、八時頃同氏を辞す、此日「えまそん」の文を読み終れり

六月拾二日 木曜日 朝来晴天

此日朝休業の会議ありしが此れも休まぬ事に決したり 然れども、教員は一個／＼の見込にて相当の取計らひをなす可しとの

事になりき、翻訳課にては「ほをそをん」の「すかーれつと、れたあ」を読み始めたなり、午後演説の下稽古をなせり、中々旨く行かず

六月拾三日 金曜日 朝来晴天

此日は課業事なくすみ、午後演説の演習をなす、午後二時前学院を立出で、家に着せし頃は、三時過なりき 八時頃日吉町を立出で、京橋より馬車に乗り日本橋にて下り、それより人力車にて万世橋迄来り、直ちに家に帰る

六月拾四日 土曜日 朝来薄曇、午後三時頃より降雨

此日朝より改進新聞を読む、午後家を出で谷内を訪ひ少時談話す、豊川に行き文学院の講義録第六号を貰ひ来れり、四時頃国の小島と云える人来れり、お孝さん来られたり、

六月拾五日 日曜日 朝来曇天

此日、朝中島氏来れり 松永氏を訪ひ暫時談話す、髪を刈り、湯に浴す、帰途浜田氏を訪ふ、雨降り出たり、六時前家に帰り直ちに立出す万世橋より車に乗り、新橋にて下車す、日吉町の家には杉浦と云ふ人来り居りたり、いのはまと来り居れり

六月拾六日 月曜日 朝来半晴

此日朝起き出たるに弥鼻が前夜より来り居りたり、七時前太一を連れて家を出づ 八時前学院に着す此日は別段の事もなく進みたり、相変らず午後演説の下稽古をなす

六月拾七日 火曜日 朝来晴天

此日朝より教師に休業の承諾を受く 朝幹事より金を受取り、

月謝に二円、賄方料に壹円二拾銭を払ひたり、之れが終りの五円かと思へば何となく心細かりし、午後ばら氏に休業の事を談じ学院を發し、日吉町に来れば母も来り居りたり、五時過家を出で本郷に来る、衣物など着更えて伊豆本に行けり、此日は客は実に僅の様に見受けたり、先づ初めは、弥津子の「義経腰越状、五斗生酔之段」之れは餘り感服致さず、次は弥鼻が「摂州合法辻、玉手嫉妬之段」なりしが之れも少し不出来ならんと思ふ、次は呂華が「日吉丸稚棧、五郎作内之段」之れは中々善く出来たり、扱大切は稲舂、三味線鐘舂にて「近頃河原達引堀川之段」なりしが、之れは餘り善くは出来ざりしが善き事々善し「女膚には白むくや」云々の歌は今少しと思ひたり、此日本屋にて都乃花、新小説、閨秀新紙(くわしゆしんし)を買えり

* 鐘舂ノ三味線は中々宜しかりし

六月拾八日 水曜日 朝来晴天

此日朝より演説の下稽古をす、都乃花及び新小説を読む、午後松永氏を訪ひ梅を貰ひて食す 二時頃入浴し、家に帰る、此日お安来れり、お孝さんも来られたり、晩方外出し、福島氏を訪ふに不在なりしかば、仲町に行き守田にて「初音の友」を買ふ、餘り多すぎしかば之れを伊豆本にて少し弥鼻に分けて遣りたり 先づ弥津子の「生写朝顔日記、麻耶岳之段」中途より聞きたり、次は弥鼻の「岸姫松轡鑑飯原兵衛館之段」なりしが、之れは前夜に優りて善き出来ならんと思ふ、呂華の「恋娘昔八丈鈴ヶ森の段」は中々善く出来たりと思ふ、扱切りは稲舂三味線鐘

舂の「二之谷嫩軍記熊谷陣屋之段」は余程感心物なり、「国を隔てて拾六年」なども先づ上出来なりき、之れにて家に帰りたり 六月拾九日 木曜日 朝来晴天中々暑し

此日朝食後直ちに家を出で目鏡より馬車にて新橋迄来り、日吉町にて昼食し、其れより学院に至る、途中の暑氣堪え難かりしかば、水屋にて氷二杯呑みたり、学院に行き、演説の下稽古を終り、帰途比佐氏を訪ふ 種々談話の末飯時になりて一飯の御馳走に相成りたり、七時前、高畑、赤田来れり 八時前皆共に金本亭に行く、最初は「勘里の日蓮記、勘作内之段」之れは御苦勞、次は豊竹三清の「蝶花形名歌島台、小坂部館之段」先づ可成なる可し、次は同おかいが「増補忠臣蔵、本藏下屋敷之段」可も無けれども之れと云つて取り捨てる様な所も少なし、然し時々新内の調子が出るわ如何に…… 次は東代玉が「薰木累物語、土橋之段」之れは先づ善し 終りの方は中々…… 然し力なく見受けし所少なからず 大切は三福が「三拾三間堂棟木由来、玉太郎住家之段」之れは悪かろう筈なし 何時もながら感服せり 然し木遣りの所をぬかさされしは遺憾 之にて比佐氏の宿に帰り一泊す

六月二拾日 金曜日 朝来曇天午前より晴れ

此日朝食は比佐氏の馳走に相成り七時過氏と共に車にて学院に至る ばら氏の課業に出席す、電気燈工事は大分に撈取りたり、拾七時前演説の演習をなす、拾二時前荷物を車に積みて日吉町に帰れり、午後六時過家を出で三田に行くに比佐氏方には小嶋

氏来り居れり 八時前高崎、比佐氏と金本に行く、此夜は充分の入りにて有りし 最初は「播州皿屋敷鉄山館之段」にて三清なり、之れは先づ中位と申して置く可し、次は「おかい」が「恋娘昔八丈、鈴ヶ森之段」之れは餘程面白からず、全体此の人の声にては此んな物は無理なり、次は東代玉が「刈萱道心筑紫、土産、宮守酒之段」之れは先づ無難、然し慾には今少し声

がしつかりして居らばと思ふ、扱切りは「伽羅先代萩、政岡忠義之段」豊竹三福之れを語る此れは万端越路張りにて語りたれば大きな感服致せり 女にして之れ位語る人は中々少なからん、先づ「お末のわざ」以下敷衍「國之礎」以下の愁嘆は中々の出来、合わせて三福にぞ及び申ける、之れにて三田より車に乗り日吉町に帰る

六月二拾一日 土曜日 朝来晴天

朝七時前寝起 朝食後直ちに学院に來れり 演説の演習をなす、井深氏の送別会に臨む 帰り掛けに岡本氏を訪ひ少時談話し、拾二時頃学院を出でて帰途に就く、一時前日吉町に着す 二時頃弥昇來る、土佐の武藤と云ふ人次いで來れり、石を持來りたるなり 義兄次いで來れり、皆々歸りて小島八郎氏來れり、五時過新橋より鉄道馬車にて眼鏡迄來り、其れより家に歸る、新著百種及び日本之文華の代を本屋に払ふ、浜田氏を訪ふて種々談話し八時前氏を辭して伊豆本に行く、最初は、弥津子が「伽羅先代萩、政岡忠義之段」万々御苦勞 次は弥昇が「釜ヶ淵二ツ巴、釜入之段」之れは先づ中位の出来なる可志、次は呂華が

「八陣守護城、正清本城之段」之れは中々旨し 感心の部なり、扱切りは稲杵が鐘杵の三味線にて「艶容女舞衣、酒屋之段」を語る 之れは中々能く出来たらんと思ふ、中にも「跡には園が」以下中々宜し、丁度弥昇の語り居る時に松永氏來られたり故に氏と共に家に歸る 寄席にて新著百種を読む、家には姉が歸り居りたり

六月二拾二日 日曜日 朝来晴天

此日朝姉は豊川に行けり、余は新著百種を読み終り改進新聞をも読みたり、姉は智恵子を連れ來りて、日吉町に行きたり、午後七時頃浜田氏を訪ふ 氏と共に松永氏に行く 少時談話の後家に歸る 午後六時過家を出て本屋にて日吉町に來れり

六月二拾三日 月曜日 朝来晴天

此日朝八時迄に学校に着す 例の如く演習をなす、午前拾時頃四階にて火事を見る 跡にて聞けば本郷春木町との事なりし、四階にて演習をなす、中々旨く参り不申、午後高畑氏を訪ふ 部室に歸りて又々演習をなせり、午後七時いよ／＼「さんだむ」館に参りたり 親父來りたれば、場中に入れ置きたり、八時頃、三年級競技演説会弁士第一席富永兵弥氏演題は「ぜはつす、つう、しびりぜえしよん」にて演ぜられしが平常より、早き事凡倍位なりし、次は斯く申す拙者 題は「らんげえじ、あず、いつと、あつふえくと、あわー、りてれちあー」なり 少し急ぎ込みて二度つかえて三度云ひ間違えたり 此間に奏楽あ

り 次は高畑宜一氏の「ばあそなる、あどをんめんと」、之れは非常に善く出来たり 次は花嶋徹吉氏「うえるす、えんど、じゃばん」中々能く出来たり、次は赤田開太氏の「ぜ、ぶろぐれつす、をふ、のをれつち」中々善く出来たれど、中途にて言ひ間違えた時「クソッ」と云われたるは少し耳立ちたり 之れにて奏楽、次に友野芳朗「えこのみかる、あいぢいやす、いんじやばん」之れは度々つかえられたる様見受たり 次は岡本敏行氏の「すてえと、をふ、あつふえやーず、いん、じゃばん」之れも時々よどまれし上に終りの部分のぼつぎれになりしは、餘り感服致し難し、之にて部屋に帰り親爺と共に車に乗り日吉町に着せしは拾一時なりき、此の日は富永氏を除きては他は皆日本服のみなりしは愉快なりし 且電気燈も餘り明るからずして餘りまぶしくもなかりし

*粧飾は中央に国旗を交叉し演壇兩隔に花を生けたる花瓶を据る

六月二拾四日 火曜日 朝来晴天

此日朝よりぐず／＼して居りたるが拾時過に花嶋、赤田の二氏来りたれば二氏と共に新橋より鉄道馬車に乗り筋かいにて下り江木に行き写真を写す 総勢七人に「はりす」氏を加ふ 直ちに本郷の家に帰る、午後二時頃より、豊川に行き大石氏をも訪ふ 途中焼跡を見る五時過帰宅す

六月二拾五日 水曜日 朝来晴天

此日七時前に本郷の家を出で、母と共に車にて日吉町に来れり、

庚寅日記

杉浦氏来れり、午食後直ちに家を出で土橋より車にて三田迄行きそれより徒歩学院に着す、二時より応接に従事す、客も大抵揃ひたれば演説を聞き居たるに井深氏、声を掛け云はる様「袴を着し居らねば後に不都合なる可し」と 故に戸川氏より袴を借る 「扱演説は都合四人にて先づ最初英語にて青木澄十郎氏の「宗教と學術」、之れは少し聞きたり、次は邦語尾崎為三郎氏の「豪傑」余り善く出来たとも思わず、之にて奏楽（但市中音楽會） 次は英語にて「自然力の利益と他愛主義」正木貞氏 論旨は能かる可けれど演じ方餘程まずし 次は河合亀介氏の邦語「人類幸福の進化」之れは中々能かりし様なり、之れにて奏楽 次に卒業証書を渡す卒業生は六人にて青木澄十郎、加藤

民雄、河合亀介、正木貞、尾崎為三郎、佐藤詮蔵の諸氏なり 次に卒業生への勧告は「つういんぐ」氏之れを勧められたり、次に賞金授与、三年級賞学金小比佐、岡本の二氏、同二年級は笹尾、手嶋二氏、三年級演説は第壹賞高畑二等は余なりき、祝禱は石本君 之れにて式を卒れり 「ばら」氏より賞金を受

取らんと待ち居りたるに「まくねあ」「らんぢず」両氏握手して余等を祝しくれたり 下の幹事局にて金を受取る 部屋に寄り比佐、戸川氏と高畑氏方に行きたるに追々同級生集まり枇杷及び氷の御馳走に相成り七時頃迄に稍く帰宅す 家には小島氏及び弥昇来り居りたり 日本文学全書を受取る 弥昇に「三拾三間堂棟木由来」を語らす 拾時頃帰り去れり

六月二拾六日 木曜日 朝来薄曇五時頃雨

庚寅日記

此日朝の内に「本朝三国誌」を読み終れり 午後二時頃より家を出て下谷仲町迄の本屋毎に和語集解を探したれど何処にも無かりし 豊川に行き五時頃迄居り其れより家に帰り本を少し取り集め其れを持ちて聖堂裏より車にて京橋迄来り其れより徒歩して佐々木にて薬を買ひ家に帰る、夜杉浦より電信来れり

六月二拾七日 金曜日 朝来薄曇晚方雨

朝より西洋人が来るならんと其の準備をなす午後二時頃弥昇来れり、四時頃杉浦来る、五時前松永氏来れり、氏は六時前に帰られたり、弥昇も次いで帰る 但し此日より伊豆本が始まるが故なり 杉浦氏帰り来りて西洋人わ帰れたりと云えり、拾時頃余わ眠に就く

六月二拾八日 土曜日 朝来薄曇昼過少雨

此日朝やまと新聞を読む、又「歴史上の基督」を少々読み申す 拾二時頃小島来る 弥昇次いで来れり 夜に入りて少々「歴基」を読む

六月二拾九日 日曜日 朝来曇天且降雨

此日朝共存同衆に行き森氏の病氣なる由を聞きたり、午後赤田氏来れり、氏と共に三田に行く積りにて出でたるに土橋にて近藤氏に逢ひ三人にて水交社の前迄行きたるに雨天にも拘らず相撲興業中なりしかば即ち立入りて見たり、大坂相撲の踊り等も有り中々面白かりし、五時頃家に帰着す

六月三拾日 月曜日 朝来曇天且夜に入り降雨

此日朝少し「歴史上の基督」を読む 午後三時過比佐氏を訪ふ

て晩食の馳走に成り拾一時頃迄談話し三田より車にて帰宅す

七月一日 火曜日 朝来曇天且降雨

此日は全国衆議院議院の撰挙会相開けり

此日朝お安来れり、此日は武藤氏鑑の事に付き度々足を運ばれたり、午後「歴、基」を読む 四時頃弥昇来れり 但し、向拾五日間逗留の筈なり、夜に入り拾一時迄に「歴、基」を読み終れり、拾一時半頃弥昇来れり

七月二日 水曜日 朝来曇天且雨

此日朝より伊勢物語を読み始め三時頃迄に之を片付けたり、昼前赤田氏写真を持ち来れり一飯を饗す 此日三時頃外出し府下議員当撰者人名を新聞社にて見、佐々木にて薬を買ひて帰来れり、家には鑑見の客来り居れり比佐氏来り、子安氏も来れり、比佐氏に新著百種を二冊貸す 夜に入り琴平亭に姉同道にて義大夫を聞に罷る、少し遅かりしかば音女、大吉の「義経腰越状五斗生酔之段」を半ばより聞きたり、之れは声のかれ居る故余り面白くもなかりし、其上調子も今少ししつかりして貰い度し 次は呂華が「日吉丸稚桜、五郎助住家之段」之れ先づ上出来の部なり、扱切りは稻舩と鐘舩の「近頃河原達引、堀川之段」之れは此の前伊豆本の時よりは善く出来たらんと思ふ 然し今少し歌の所など、ゆつたりとしたらばと存申す 寄席にて高屋の妻君、及び武藤氏に逢ひたり 車にて帰宅す

七月三日 木曜日 朝来曇天且降雨

此日朝より紫式部日記を読み午後拾一時前之れを終る、姉は午後横浜に行けり 武藤氏午前來れり 三時頃外に出で時計を受取る、民友社及び大同新聞社の張り出しを見る

七月四日 金曜日 朝来曇天降雨

此日朝より住吉物語を読みて拾一時頃に終る昼食前道具を見に客が二人來れり、一時過、外に出で民友社及び政論社の張出しを見るに最早余程知れ居れり、末広、中江、大江、植木、竹内、河野、大江、鈴木萬次郎、杉浦重剛の諸氏当撰せり 大同派に近き者即ち自由、庚寅等多数に居る様に見受けたり、さ而も方々のかく時得給ふに付けても、只哀のみ増るは我亡き兄の上にある 是たとせばかりの年月を、半外国に送り、国に歸りて一日も安き心地せざりしは何の為ぞ、只名のみにやはなど、さる業はせん、実に世の人の為よかれとの為めなりける、されば今迄生きてあらば、いかに楽しかるらんをさ而もはかなきは人の命なり、かく思えば、いとくぬれまさは宿の軒ばのみかわ 夜に入り徒然草を九拾八ページ読む 拾一時頃弥昇歸來りて玉子をくれたり

七月五日 土曜日 朝来曇天時々日光を漏す

此日朝より徒然草を読み二時頃迄に読終る之れにて日本文学全書第一篇を終る 島崎氏來り文学全書の金六拾錢請取る 弥昇に手紙の上封端書などかきてやる、三時頃より土佐日記を読み始め五時前之れを終る、此時草郷よりの手紙に接す、姉は病氣なる旨しるしありたり、午後七時半頃より琴平亭に行く 客も 可

庚寅日記

成り入り居りたり 百人を余程越えしならんと思ふ、比佐、小島、肝付の三氏跡より來られたり 最初は弥津子が「⁽²⁾」
「御苦勞にこそ、次は弥昇が「釜淵ニツバ、釜入之段」なり之れは先づ中位ならんと思ふ 次は豊竹音女、大吉が「菅原伝授手習鑑、寺子屋之段」なり、之れも先づ善き出来ならんと存する 「御台若君」以下も先づ難無し、次は呂華が「三拾三間堂棟木由来、平太郎住家之段」之れは中々善く出来たらんと思ふ 扱大切は稻舂三味線、鐘舂の「大功記、十段目、尼ヶ崎之段」之れは始の方は余り感服せざりしが「夕顏棚」辺よりは大分善く出来たらんと思ふ 先づ女では之れ位に語る人は恐らくはなかるらんと思ふ 「不義の富貴」以下中々旨く出来たり、之れにて家に歸る

七月六日 日曜日 朝来晴天風烈し夜に入り雨

此日朝九時過家を出でんとしたるに大石氏來りたり、少時談話の末、氏去れり、直ちに家を出で新橋より鉄道馬車にて万世橋迄來りそれより徒歩、真砂町にて劇種本四冊及び江戸紫、日本人等を買ひ求め家に歸る 靴屋に靴の直しを頼み、浜田氏を訪ひ写真を見せなどし暫時談話し家に歸り昼食し、それより荷物を纏め、松永氏を訪ひ、少時談話し四時過帰宅し六時前車にて日吉町に歸る、七時前比佐氏來る 七時過氏と共に寄席に行く 跡より肝付氏母人を伴ひて來られたり、先づ最初は弥津子が「奥州安達原、袖萩祭文之段」半ばより聞きぬ、次は弥昇が「本朝二拾四孝、十種香之段」先づ善き出来ならん 前夜より

は優りて見えし、次は「摂州合邦辻、玉手嫉妬之段」音女大吉之れは中々旨くやられたり、次に呂華の「管原伝授手習鑑」、松王住家之段」之れは非常に善く出来たり、いつもながら熱心なのは感服せり、扱切りの「艶容女舞衣、酒屋之段」稲榊、鐘榊は先づ可成り「跡には園が」以下中々能し「聞いて居るさの」云々の所も申分なし、之にて帰宅す 雨降りしかば大きに弱わり申たり

七月七日 月曜日 朝来曇天且雨

此日午前拾時前三田に行き比佐氏を訪ふに不在なりしかば其假立帰る、午後「一之谷嫩軍記」を読み七時迄に読み終れり 三時頃義太夫の稽古をなす中々行かず、さても六ツ可敷しやと閉口に及び申す、武藤氏来れり、七時過寄席に行く 此日客は可成の入りにてありし、最初弥津子の「新版歌祭文、野崎村之段」之れは評なし、次ぎに弥昇が「加賀見山田錦絵、鳥居又助住家之段」先づ善き出来なる可し 然し今少し熱心であればと思ふ、次の音女、大吉は「伽羅先代萩、政岡忠義之段」之れは中々能く出来たらんと存ずる、次の呂華が「天網島時雨、炬燵紙治内之段」は申分なし、只毎度ながら感服、扱切りの「蝶花形名歌島台、小坂部館之段」稲榊、鐘榊は中々旨く出来たり、筒様な物にては先づ上の部なる可しと思ふ、之にて帰宅す、寄席にて「妹背山女庭訓」を少々読み申せり

七月八日 火曜日 朝来雨

此日朝九時頃より「妹背山」を読み拾一時頃に之を終れり 午

後寺時前より「信州川中島合戦」を読み始め三時前に片付け申し候 三時頃麵包を食ひたり、七時過琴平亭に行く客は可成り百人を越す二拾五人とか聞けり、最初弥津子の「岸姫松禰鑑、飯原兵衛館之段」別に云ふに由なし、次は「義経腰越状、五斗生醉之段」弥昇之れは先づ上出来、中々旨かりし所多かりき、次は豊沢音女、大吉の「箱根靈驗記、覽の仇討」滝之段」先づ無難、されど出し物が悪かりし故餘り感服せず、次に呂華の「御所桜堀川夜討、弁慶上使之段」先づ上々善く出来たり、「三途川」云々の所など中々宜かりし、扱切は「生享朝顔日記、酒屋之段」稲榊、鐘榊、之れは中々能く出来たり「露のひぬ間」云々の歌も感服、先づ上出来ならん 此日寄席にて「大平記旭鑑」を少々読む

七月九日 水曜日 朝来曇天夜に入り雨

此日拾時迄に「旭鑑」を読み終る 「方丈記」をも読む 岩さきが来られたり 小島八郎氏及び横浜よりの便来り、浴衣を渡す、午後更科日記を読む

七月拾日 木曜日 朝来曇天且雨三時過より晴

此日午後より本郷に行く、此日豊川を訪ふに豊川及び順弥が病氣にて大騒ぎにて居りたり掛金を受取り帰る、本屋に行き都乃花及び日本乃文華、劇種本数冊を求め来れり、岡田を訪ひ本を売る相談をなす 五時頃迄に帰宅す、夜に入り琴平に行く、先づ弥津子の「女舞劍紅楓、長町之段」御苦勞 弥昇の「絵本大功記、尼ヶ崎之段」之れは先づ可成りに出来たり、音女、大吉

の「碁太平記白石噺、新吉原揚屋」は先づ善く出来たらんと思ふ。次は呂華が「奥州安達原袖萩祭文之段」之れは非常に能く出来たりと存ずる。就中祭文は中々なりき、扱大切りは稲枿、鐘枿が「伊賀越道中双六、沼津兵作内之段」中々能く出来たり。何時もながら感服致せり。寄席にて祇園祭礼信仰記を少々読む。

七月拾一日 金曜日 朝来晴天

此日朝より本郷に行く。本を少し持ちて岡田に行き本代九拾錢を請取り豊川に行き病氣を見舞ふ、林民雄氏に逢ふ。同家にて麵包を食し、帰途谷内を訪ひ少時談話し二時頃帰宅す。夜に入り琴平に行く。最初弥津子が「一之谷嫩軍記、熊谷陣屋之段」御苦勞、弥昇の「艶容女舞衣、酒屋之段」之れは能く出来たり。音女、大吉の「生写朝顔日記、宿屋之段」先づ可成（此人にしては）。次は呂華が「釜ヶ淵二つ巴、釜入之段」之れは中々能く出来たり。之んな物でも語り様に因つて面白く聞ける所が不思議なり、扱切りは「伽羅先代萩、政岡忠義之段」稲枿、鐘枿之れは非常に能く出来たり。先づ「お末のわざ」以下「洗いな米」迄の所中々能し、後段の政岡の愁嘆「誠に国の礎」以下妙とや云はん奇とか評せん、寄席にて「都の花」を読む。之れにて帰宅す。

七月拾二日 土曜日 朝来晴天

此日朝六時前寝起八時の汽車にて横浜に行く、姉はまだ寝て居りたり。金を三拾一円貰いて勝木を訪ひ拾二時四拾五分の汽車

庚寅日記

にて帰宅す、汽車中にて「都の花」を読み終る、帰れば太一来り居りたり、暮方より「祇園祭礼」を読む。寄席に行きて読み終れり、追々客も減り五拾余人位の入ならんと見受けぬ。最初弥津子が「清正公利生記、駒下駄仇討之段」此れは先づ可成、弥昇が「撰州合邦辻、合邦住家之段」は能き出来ならんと存ずる、次に音女大吉の「天網島時雨炬燵、紙屋治兵衛内之段」は中々面白かりし。然れど此の前の呂華のには一着を輸するの氣味なり、呂華の「菅原伝授手習鑑、寺子屋之段」は中々旨かりしには相違なきもあんまり此方が望を属し過ぎた故かそれほど感服は致さざりき。「みだい若君」以下中々面白かりき。扱切りの「恋娘昔八丈、お駒万三鈴ヶ森の段」稲枿鐘枿は中々に善く出来たらんと思ふ。之れは何とも申分もなし只感服して筆を擱く。

七月拾三日 日曜日 朝来晴天

此日朝武藤氏来られたり。竹内氏来る、午後七時過草郷来れり。三時半に家を出で、時計屋に時計のなをしを依頼し新橋より鉄道馬車に乗る。本郷に行き伯母に頼みて地代を渡し紐本等を少々取り集め本郷の家を出で、真砂町にて「じゃむ」及び麵包を買ひ万世橋より乗車し日吉町に帰る。夜に入り琴平亭に行く、最初弥津子の「日吉丸稚桜、五郎助住家之段」先づ可成。弥昇の「三拾三間堂棟木由来、平太郎住家之段」は能き出来ならん、次に音女、大吉の「玉藻前旭袂、道春館之段」中々宜し、呂華の「恋女郎染分手網、重の井子別之段」は余程面白かりき、切

りの「義経腰越状、五斗生酔之段」稻榊鐘餅先づこんな物なる可し、先づ中以上の出来なる可しと存ずる。

七月拾四日 月曜日 朝来晴天

此日朝太一は学校へ歸る。九時前より「小野道風青柳硯」を午後に掛けて読み終る。沓時前弥昇は小川亭に行たり。午前拾時頃と午後三時とに麵包を焼いて食したり。午後六時過迄に「伊賀越乘掛合羽」を読み終りたり。七時過琴平亭に行く。客は非常に少なかりき、最初弥津子の「生写朝顔日記、宿屋之段」はいま少し声がこなれて居らばと思ひたり。次に弥昇が「菅原伝授手習鑑、松王屋敷之段」先づ可成の出来ならん、呂華の「岸姫松戀鑑、飯屋兵衛館之段」中々に善く出来たりと思ふ、御詠歌も相応なりき、切りの稻榊鐘餅が「繪本大功記、十段目尼ヶ崎之段」之れは先夜も聞きし通りにて申分なし、相変らず「爰に刈り取る真柴垣」以下妙々、我思ふに尼ヶ崎を語らせては当時女義大夫にては第一等の位置を占め得べし、然し今少し力あらばと思ひし、之れにて帰途麵包を買ひ之を食す。拾二時頃就眠。

七月拾五日 火曜日 朝来晴天暑気甚し

此日朝五時半頃寢起、近頃の早起きなり、九時過弥昇は横浜に行きたり、拾時頃麵包を食す、それより二時頃迄に「近江源氏先陣館」を読み終れり、其れより又々麵包を食し申候、日本之文華拾三号を夜へ掛けて読む、昼寝を度々なせり、人老人減りしかば誠に寂しく感じたり、夜銀座通を散歩す。拾時過就

眠

七月拾六日 水曜日 朝来晴天 暑気甚し

此日朝より日本之文華を読む。午後に至りて読み終れり、比佐氏よりの書状に接す、昼寝少々致す、夜に入り銀座通りを散歩す。木村屋にて食麵包一斤を買ひたり、拾時頃就眠。

七月拾七日 木曜日 朝来晴、雲出でしかば餘り暑からず

此日午前之内「彦山権現誓助剱」及び「仮名手本忠臣蔵」を拾ひ読み致し申す、赤田氏よりの書状を受取る、午後より枕草紙を読み始む。二時頃うとくと寝申候、三時頃麵包を食す、晚食後去る拾四日迄に本年中間きたる淨瑠璃の敷を調ぶるに左の如くなりし、沓月は小川亭え三遍行きて拾三段但し三福一座、二月は、若竹へ八遍、三拾八段、但小政綾之助一座、次に三月吹抜亭に五度、小緑一座にて伊豆本え一度小住梅尾一座にて四段合せて二拾段、外に豊川にて門付けより二段聞く、合せて二拾二段、四月鶴仙え二度東玉一座六段、若竹え二度、拾段、小政綾之助一座、小川亭え三度、稻榊団玉一座にて拾三段合せて二拾九段、五月、若竹亭え三度、越路一座にて拾七段、吹抜亭え二度、三福綾之助一座十段合せて二拾七段、六月、伊豆本に三度、稻榊一座にて拾二段、三田の金本亭へ二度、三福一座にて九段、合せて二拾一段外に二十五日弥昇に家にて一段所望す、七月拾四日迄琴平亭え拾度、音女稻榊一座にて四拾七段、総計百九拾八段なり。其中「先代萩御殿」と「三勝酒屋」を何れも拾一遍、「菅原、寺子屋」を九遍、「腰越状泉館」を七遍、

「三十三間堂子別れ」を七遍、「大閤記十段」「八陣正清本城」を六遍宛、「鈴ヶ森」と「二拾四孝狐火」合法下の巻を五遍宛、「加賀見、又助」「袖萩祭文」「御所桜弁慶上使」「日吉丸五郎助住家」を四遍宛、「新版、野崎」「蕃隨長兵衛内」「中将姫雪實」「玉藻道春館」「日蓮記勅作内」「釜入り」「おつま八郎兵衛」「陣屋」「忠臣蔵一力」「同勘平切腹」「同判官切腹」「岸姫松兵衛内」「朝顔宿屋」「天綱島紙治内」「堀川」を三度宛、「累身壳」「刈萱宮守酒」「菅原松王郎」「桂川帯屋」「白石斬揚屋」「阿波十郎兵衛内」「蝶花形小坂部館」「本蔵屋敷」「忠臣蔵二ツ玉」「累土橋」を二度宛、「佐倉、吟味場」「同子別れ」「同儀作内之段」「加賀見尾上部屋」「忠臣蔵一力由良之助生立」「日高川」「伊賀越岡崎」「同沼津」「まんぢとふすべ」「藪鷺雪降」「恋女房子別れ」「同杏掛村」「盛衰記逆櫓」「明島山名屋」「三拾三札所壺坂」「千両職稲川内之段」「二ツ蝶々引窓之段」「文覚上人」「西郷一代記岩崎再会」「皿屋敷數山館」「女舞長町之段」「白石坂戸村」「八百屋建立」「朝顔麻耶」「万両職」「壇浦琴責」「天網島茶屋場」「清正公利生記」「道中膝栗毛島田宿」「箱根靈驗施行場」「同滝之段」「布引琵琶之段」「於染久松質店」「増補忠臣平右衛門出立」「忠臣蔵山科」「同殿中」「同身壳」「ちやり、同勘平内之段」「鈴鹿合戦平治内之段」「彦山毛谷村内之段」「恋八卦大経師」「金比羅利生記百度手内」「花上野、志度寺」右何れも一度宛聞き申候 晩合武藤氏来られたり
七月拾八日 金曜日 朝来晴天中々暑し

庚寅日記

朝の内は去年の日記など調べ、午後は「枕の草紙」を読む 四時過杉浦の番頭山田伊三郎と云う人來れり、此人を伴ひて竹内氏に行けり 晩方より下痢、腹痛を催し大に困難 宵より寝る 親爺九時過歸り來たれり
七月拾九日 土曜日 朝来晴天

此日午前沓時頃より腹痛烈く大きに弱りたり便所へ數度通ふ 夜明けてよりも寝床を出ず時々腹痛を發す、朝より「枕の草紙」を夜へ掛けて読む、昼前於孝さん來られたり、但し当分逗留の筈なり、拾二時過より昼寝少々致す
七月二拾日 日曜日 朝来晴天

此日朝より平臥日本人を少々読む 拾時頃麵包を食す、其れより「枕の草紙」を読み五時過に之れを終れり 此れにて「文学全書第二編」を読み終れり 二時過医師の許に行く 留守にて診てくれず、帰宅後「らむね」一礮を吞む
七月二拾一日 月曜日 朝来晴天

此日午前六時半頃寝起、それより「日本人」を少々読む 九時過車にて弓町なる印東氏に行き診察を請ひ「水薬」及び散薬を貰ひて歸る、それより「日本文学全書第三編」中の「十六夜日記」を正午頃迄に読み終れり、阿仏尼が子の為めとて老躰をも厭はず遙々東の旅に上るさま、いともあわれにて時につけての歌などにも子を思ふ心はあらはてにて遠き世の事なれど座ろに涙さしぐみぬ、かきさまは先づ流暢なる方ならんと思わる、午後沓時過より「おちくぼ物語」を読み出し、夜に入り拾時過全

庚寅日記

く読み終れり、馬琴の「皿々郷談」欠皿の艱難及び其の出世のくだりは、此の物語りの全部を転化せし者(？)、落窪の君は欠皿なる可し、

七月二拾二日 火曜日 朝来晴、雲出しかば涼し、午後六時頃

より雨

朝より「弁内侍日記」を読み午後三時頃之れを終る、即ち「文学全書第三篇」は之にて終れり 拾一時頃母本郷に行く 午後七時過帰る、「文学全書」「文華」「日本人」「江戸紫」「都乃花」などを買い来れり、それより「江戸紫」を読み終り「都」「文華」「日本人」など少々読む、牛乳入饅餅を少々食し申候

七月二拾三日 水曜日 朝来晴、雲出涼し晩方雨

此日朝より「都乃花」を読む、九時前母横浜に行く、少し後れて余は弓町の印東氏許に行き薬を貰ひて帰る、家には重枝氏来り居れり、拾一時頃「都の花」を読み終る 「征西將軍」は佳境に入り「伊勢せの海土」は終を告ぐ、二時前客人帰る、それより「日本の文華」拾四号を読み六時過読み終れり 三時過うとうと眠り申す 晩食後「日本人」を大概読む 九時頃母横浜より帰れり

七月二拾四日 木曜日 朝来曇天且雨

腹痛烈しかりし、拾一時過より「文学全書」中の「とりかへばや物語」を読み始む、三時頃母に頼みて「衛生館」を買来りて之れを食す、夜に入りて早く眠に就く

七月二拾五日 金曜日 朝来曇天且雨

朝九時過医師の許に行き丸薬を貰ひて帰る、拾一時頃「衛生館」を食せり、午後一時過より「とりかへばや物語」を夜に掛けて拾一時頃迄に読み終れり、拾一時過就眠

七月二拾六日 土曜日 朝来曇天晩方雨降る

朝九時頃より「堤中納言物語」を読み午後七時過迄に之れを読み終る、之れは書きざま中々流麗なる所あるやに覚ふ、本郷及び諏訪への手紙認む、二時頃麵包を食せり、それより、「四季物語」を四時頃迄に読み終る、全巻を拾式に分ちたり 其の一は即ち月に当り居れり、書きざまは奇峭とや云ふ可き 月々のさま種々に移り行くを序する所中々面白し、又時としては世を概るさまの月の見えるはいとも哀れと見たり、之れにて「日本文学全書第四編」を読み終る、夜に入り近傍を散歩す

七月二拾七日 日曜日 朝来曇天朝の内雨拾時止む午後九時頃

又降雨

九時頃医師の許に行き暫時待たされ稍く薬を貰ひて帰る 家には親爺本郷より帰り居りたり、午後七時過「皿々郷談」を少々読む、三時過「日本文典」を読み始む、山田伊三郎と云ふ人來れり、夜に入り銀座通を散歩したるに雨降り来りければ急いで帰る

七月二拾八日 月曜日 朝来曇天拾時頃より晴れ始め午後は快

晴なり

朝九時頃より「日本文典」下巻を読み七時過之れを終れり、それより動詞変化表及び起統表を四時頃迄に写し終れり 夜に入

り近傍を散歩し銀座通にてじやむ及び麵包を買ひ来れり

七月二拾九日 火曜日 朝来晴天午後曇り三時頃より雨

午前九時頃医師の許に行き拾時半頃に診察を受け薬を貰ひて帰る 家には葛目の伯母来り居りたり、二時頃より「文学院講義録中論理学」を読み五巻迄を六時頃迄に終れり、夜に入り外に出で食麵包を買ひ来り之れを食す

七月三拾日 水曜日 朝来晴時々曇る

此日八時頃より「講義録中論理学」を読み五時頃迄に八巻迄読む 午後二時前早川氏来れり 種々談話の後四時過氏去れり 氏に「勝関」「日本文学全書」「小説文範」を借す、三時頃太一來れり 間もなく歸り去れり、夜に入り銀座通りを散歩し麵包を買ひ来れり

七月三拾一日 木曜日 朝来晴天

朝より「講義録中心理学」を読む 九時過医師の許を訪ひ薬を貰ひ来れり、夜に入り「心理」を四巻迄読めり 拾一時過就眠

八月一日 金曜日 朝来晴天夕方より降雨

此日は何もせずぐくにて日を費し午後六時頃より家を立出で本郷に行き本屋にて「文学全書」第四篇を買ひそれより家に行きて親爺に逢ひ少時談話し、谷内を訪ひ地面の事など依頼種々雑談に及びて後拾時頃同家を出で帰途に就く 神田明神の辺より車に乗る新橋迄来り、家に着せしは拾一時前なりき

八月二日 土曜日 朝来曇天且雨

庚寅日記

午前九時過医師の許に行き診察を請ひ薬を貰いて帰る それより種々の本の読かへしをなせり 夜に入りて八時過鶴仙に義太

夫聞きに行く 先づ最初文綱の「日吉丸稚核五郎助住家之段」

之の人は声は可成り立てども調子が余程変なり、然し今年の二月聞きし時よりは余程上った様に存ずる 次は豊竹玉市「恋女房染分手綱 沓掛村之段」此の人は調子もよく言葉なども能けれど声が感心致さず 出来は中以上ならん、次は竹本小染の「奥州安達原、袖萩祭文之段」之れは中々能く出来たり 此人も二月よりか今の方余程上達せり、祭文の所なども中々能かり

き 熱心に中々長く語られしは感服の至なり 大切は小政が「艶容女舞衣、酒屋之段」之れは先づ上出来の部ならん 餘り長くも聞かず「跡には」云々のさわりを聞くとすぐ帰宅せり

八月三日 日曜日 朝来曇天時々雨風も出づ五時頃一時止む

此日午前十時頃谷内来れり種々談話をなす内二時過戸川氏来れり 谷内は三時に歸り、戸川氏又四時頃歸れり、夜に入りて都新聞を買ひて読みたり

八月四日 月曜日 朝来曇夜に入りて快晴

九時半頃医師の許に行き薬貰ひて帰る 午後二時過弥昇来れり種々雑談の後五時過歸り去れり 六時半頃より家を出で新橋より鉄道馬車にて日本橋迄行きそれより少々歩き又車に乗りて茅場町の宮松亭に行く、中々立派な寄席なり、幅広くして横より後へ引廻して二階あり之れも中々広き様なり 客は大抵所柄とて商人分子多かりき、最初は鐘櫛の「楠昔噺、砧拍子之段」之

れは先づ可成りの出来ならん、然し今少し落ち付きが出来ればと思ひし、次は弥津子の「生享朝顔日記、摩那ヶ岳之段」之れも先づこんな物なる可し、只此人にしては能き出来の一ならんと存ずる、次の弥鼻の「御所桜堀川夜討、弁慶上使之段」は中能く出来たり、然し声のなをらざる故か所々苦しそふ所ありしは残念至極、然れども余は丈の能き出来中の一なるを疑はず、次に竹本東玉が「染模様妹背門松、質店之段」之れは先づ上出来、久作の言葉は非常に旨かりき、然し調子が餘りさらさらとして我等の耳には余り適せず、次に呂華が「八陣守護城正清本城之段」之れは相変らず声の能く立つ人として餘程面白みを感じたりき、それに中々長く語られしは満足の至りです、扱大切りは竹本稻舂三味線鐘舂の「天網島時雨炬燵、茶屋場之段」之れは中々能く出来たり、余は道太夫の茶屋場を聞ききたることありしが其の時は非常に感服したれども之れを稻舂のに較ぶるに余り感服せず、彼れは越路の股肱、之れは、女流中の錚錚たる者或るひは彼の之れに勝れる点少なからざる可し、然れども又之れの彼に勝る点も無きにも有らざる可し、余は只不敏にして之れは彼れに勝るの点を見出す能わざるを如何せん、未だ全く語り終らざる中に帰途に上る、徒歩して家に帰て少憩すれば拾一時の鐘響き渡れり

八月五日 火曜日 朝来晴雲出づ四時頃より雨夜に入りても降

る

此日午前拾時寝起拾壹時頃親爺本郷より帰れり 二時頃又本郷

に行けり、二時過より「文学院講義録」中「心理学」を五巻より七巻迄読む 七時過家を出て新橋際より馬車に乗り日本橋手前にて下り、それより徒歩宮松亭に行けり、入りは中々有りたり 先づ最初弥鼻の「釜淵ニツ巴、釜入之段」は中出来位の物ならん 次に東玉の「菅原伝授手習鑑、寺子屋之段」は只余は其の軽妙なるに服す 然れども余り短かりしは残念の至りなり 次は呂華の「三拾三間堂棟木由来、平太郎住家之段」之れは声の能き人なれば無論面白く聞き込み申したり、然し木遣りは今少し色気を加味して最少し長く引張つたらば能かるうと存ずる 扱大切は稻舂と鐘舂の「絵本大功記十段目尼ヶ崎之段」之れは申す迄もなく上出来 就中「主を殺せし」云々の所より「操の鏡曇りなき」云々の所迄は只感嘆の外なし、音声の美、其の語り方の熱心と相待つて爰に至りたる物か、幾度聞いても尽きせぬ様なる心地せり、未だ完く終らざる内に帰途に上れり家に帰りに寝床に入れば雨激しく降来りし様なりき、何故か寝苦しかりし

八月六日 水曜日 朝来晴雲少々出づ午後四時頃降雨

夜半度々醒し 午前六時寝起す 午前九時半過印東氏の許を訪

ひ診察を請ひ葉貫ひて帰る、午後零時過より「講義録」中「史学」の一科を八巻所載の分迄読む、夜に入り九時前銀座通りを散歩す

八月七日 木曜日 朝来晴雲少々

午前九時頃医師の許を訪ひ葉貫ひて帰る、午後「講義録」中

「法学通論」を四巻迄読む、七時前家を出て宮松亭に行く。最初鐘柝が「日吉丸稚櫻五郎助住家之段」を中途より聞き申候次は弥津子が「新版歌祭文野崎村之段」之れは先づ可成。次は弥鼻が「加賀見山田錦絵、鳥居又助住家之段」先づ中以上の出来なるらんと存ずる。次は竹本東玉「伊賀越道中双六、沼津之段」之れは中々能く出来たり、いつもながら相変らず軽い。次は豊竹呂華の「天網島時雨炬燵、紙治内之段」なりしが之れは中々能く出来たり。扱大切りわ竹本稱柝鐘柝の「蝶花形名歌島台、小坂部館之段」之れは非常に能く出来たり。声の能く立つと熱心（あつこ）などで喝采（かっさい）を拍するわ毎度ながら感服致せり。当夜の如きは髪迄（かみ）こわして語られしは猶更で御座る。中入り前より楽屋に行きたるに土佐の人にて駿河台とかに居る人が居りて種々雑談をなし申す。拾一時少々前帰途に就く。

八月八日 金曜日 朝来晴拾時頃より曇拾一時頃降雨

此日朝清司の所より電信来れり。其事由は娘が死去せしとの事なり。九時過横浜及び向島えの手紙を認め申す。拾時頃印東氏方を訪ひ葉を貰ひて帰る。拾一時頃親爺本郷より来れり。「日本之文華」「日本人」「江戸紫」を受取り少々読む。「講義録」中「法学通論」を午後に至りて八巻所載の分迄読み終る。夜に入り宮松に出掛け申す。京橋より鉄道馬車に乗り日本橋迄行きそれより徒歩して先き々着きは七時過ぎなりし。此の日の客は可成りありたり。先づ最初の鐘柝の「白石晰後日蒼五郎兵衛内之段」は今少し落着きありたらば善からんと思ひし。次は弥

津子の「岸姫松轡鑑飯原兵衛内之段」之れも今少し声のこなれん事を望む。出来は中位、次は弥鼻の「義経腰越状、泉三郎館之段」之れも今少しにて堂に至る可し、然し先づ中以上の出来ならん。次は東玉の「恋娘昔八丈、白木屋之段」之れは中々軽妙とや申す可き。簡様な者は実に御手に入った物かな、其の次は呂華が「本朝二拾四孝、十種香之段」なり、之れは中々能し。只残念は沢山抜かしたのなり、此人の事なれば艶たっぶり扱切りは稱柝鐘柝の「生写朝顔日記」宿屋之段」は非常に旨し。いつもながら感服。とりわけ「露のひぬ間」は涼しきばかり……之れにて帰途に就き拾時少々過帰着す。

八月九日 土曜日 朝来曇

此日午前は別になす事もなく送り午後一時頃より「すういんとん」大家論集中「あーびんぐ」の「西みんすとるあべい」を読み四時過之れを終れり。七時頃手紙を認めそれより家を出て新橋際より馬車にて日本橋迄行きそれより徒歩して宮松に行く。此日は両国の烟花の故にて客は餘り大からざりし。最初弥津子の「一之谷嫩軍記、熊ヶ谷陣屋之段」半ばより聞きたり。次は弥鼻が「日蓮上人御法海、勅作内之段」之れは中出来の部ならん、次は東玉の「源平布引滝、三人上戸之段」之れは相変らず軽妙と申す可し。次は呂華が「釜淵二ツ巴、釜入之段」之れも先づ可成、然し声を痛めて居りたる故所々甲斐なき所ありし。扱大切りわ「和田合戦、市若初陣之段」稱柝、鐘柝之れは中々能く出来たる様なり。それより帰途に就き拾時前家に帰着く。

庚寅日記

八月拾日 日曜日 朝来晴、午前少雨

此日午前拾一時過印東氏の許に行き来診を請ふ、午後は叢竹の読返しをなせり、午後四時頃医師来れり、母を見て帰る、直ちに葉取りに行く、夜に入り拾壹時過又叢竹を読む

八月拾一日 月曜日 朝曇雨八時前暗夜に入り大雨

朝七時頃於安来れり、寝て居りて逢わず、拾時前より「大家論集」所載「さつかえー」の「で。ふいにばす」を読み三時頃之れを終る但し中途二時頃より昼寝致せり「で。ふいにばす」わ馬琴の「八犬伝」の終りに付したる一冊の如き傾き有り、坪内氏に倣ふて兄弟文学と云はんか、然し少し解からぬ所多きには閉口仕れり、午後四時過外出し麵麩を買ふ、それより又医士の所へ葉取りに行きたり、夜に入り宮松亭に行く、此夜は可成の客なり、最初弥津子「日吉丸稚桜、五郎助内之段」之れは感服も致さず、次の弥鼻の「撰州合法辻、合法内之段」は可成り面白かりし、慾には今少しこなれば善からんと存ずる、次は東玉の「絵本大功記、十段目尼ヶ崎之段」之れは中々旨し、就中「夕顔棚以下数行は感服致せり、然し調子が軽る過ぎて「夫を殺せし天罰」云々の所少し聞き堪えなかりし、次は呂華の「恋女房染分手綱」重の井子別之段」之れは可成能く出来たり、扱大切りわ稲榊鐘樹の「玉藻前旭袂、道春館之段」之れは中々旨い物なり、とり分け「焼野の雉子夜の鶴」云々の所只無暗に感服致申候、之れにて帰宅す

八月拾二日 火曜日 朝来雲出で時々雨夜に入りてわ中々降り

此日午前葉取りに行き拾壹時昼食しそれより家を出て新橋際より鉄道馬車にて筋違迄行き其より徒歩して本郷の家に行く、道にて福島氏を訪ひ少時談話し二時過家に行着く、少時憩みて三時過浜田氏を訪ひ五時前同家を辞し龍岡町の豊川を見舞ひ七時過同家を出て明神の所より日本橋迄乗車しそれより徒歩宮松に行く、此の日は遅かりしかば東玉の「新版歌祭文野崎村之段」より聞きぬ、之れは相変らず軽妙、次は呂華の「岸姫松櫛鑑、飯原兵衛内之段」之れも相変らず面白かりし、御詠歌も申分なし、扱大切の稲榊鐘樹の「恋娘昔八丈、於駒才三鈴ヶ森之段」は非常に面白かりし、之れは艶麗とても評す可し、家に帰り拾二時過就眠、都の花を少々読みたり

八月拾三日 水曜日 朝来雲出で時々雨を下す

午前拾時過医師の許に葉取りに行く、午後「都乃花」四拾四号を読み終り「講義録」中「論理学」九卷所載の分を読み、晩方葛目の伯母来れり、夜に入り宮松に行く、最初「鐘樹」の「奥州安達原袖萩祭文之段」を少々聞く、次は弥津子の「賢女鑑片岡忠義之段」先づ中出来、次は弥鼻の「三拾三間堂棟木由来平太郎住家之段」之れは先づ可成、然し外題が能き故大変徳なり、次は東玉の「平假名盛衰記福島逆櫛之段」之れは非常に能く出来たり、次に呂華の「生享朝顔日記宿屋之段」中々旨し、いつもながら感服申候、扱大切は稲榊鐘樹の「彦山権現誓助劔六助住家之段」之れも中々能く出来たらんと存ずる、拾壹時

過家に帰着す

八月拾四日 木曜日 天気略前日の如し

此日は朝より「講義録」中「論理学」拾巻所載の分及び同九巻所載「心理学」を午後後に掛けて読み終り 夜に入りて近傍を散歩せり

八月拾五日 金曜日 天気前日に同

午前八時過葉取りに行く、それより帰り直ちに家を出て新橋停車場に駆付け九時三拾五分の急行列車にて横浜に向ふ、根岸村の草郷方に拾一時前に着す 午後五時前立野の叔父を訪ひ従弟に靴を貰ひて六時過同家を辞す 夜に入り市街を散歩す

八月拾六日 土曜日 朝来天気略前日の如し

此日は朝より何処にも出ず 午後勝木氏を訪ひ新聞を見る 夜に入り市街を散歩せり 昼の中「講義録中法学通論」を読み終る

八月拾七日 日曜日 天気前日に同し

此日午前拾時過立野に行く 昼食の馳走に相成り虎市氏と種々談話し午後四時過草郷方に帰る 夜九時頃就寝一睡の後の。が拾時過に起しに來りしかば直ちに起きて行ききたるに姉わ東京よりの手紙を示し此の返事を書く可しと云ふに其旨心得て硯と筆を持ちて裏の家に行き敷帳の中にて筆を取りて手紙を書くに墨ねばりて行筆渋滞意に似せず 稍く数行に及ぶ頃、忽然として賊！賊！と云ふ声四方の沈静を破りて余の耳朵を撃てり 初めは太一が戯むるかと疑ひしが左にもあらざる様子なれば直ち

庚寅日記

に母屋に進入したるに最早賊は影をも止めず いの及びはつ。の云ふ所に依れば、余の裏に行く後姉が下女に最早締りを為して寝よと云付けたればいのが縁の戸をしめに來りたるに台所の方より覆面の男二人入來りしかば怪しんで台所口より廻りて下女部屋を覗きたるに一賊はつ。の襟を押さへて其時計算して居たる金を取りつつありし、之を見て吃驚狼敗賊の後を迂回して縁がわに出んとしたるに一賊玄関口より出て背中を握んで引止めしかば思わず大声を出したるに其声に驚き逃げ去りぬ、賊は三人にて他の一人は台所口を見張居たりとか、而して其の奪去る所の物は僅かに金沓円四拾銭のみ 其後余は裏にて手紙を書き終り眠に就く

八月拾八日 月曜日 天氣宜し

午前より太一と骨牌を弄す 午後に至りて勝木氏來られたり

夜に入り同氏を訪ひ改進黨新聞を見將暮をなし拾時前同家を辞す

八月拾九日 火曜日 天氣宜し

朝より「ろびんそん、くるうそう」の巻首に在る「でふをー」の伝を読む 此日東京より真珠を持ち來りし人あり 其人と種々談話致せり 此日警察署より賊を捕えたるが未だ白状せざる故其者の人相前日の者に類するか首を見分けて貰ひたしとてい。の呼びに來りしかば行きぬ 歸りて云ふに其の賊は似て居らざりしとなり 夜に入り勝木を訪ふ

八月二十日 水曜日 朝来天氣宜し晩方より降る

此日朝より別になす事もなし 午後真珠の持主來りて翌日朝来

る筈に極めて帰れり 夜に入りはつ及びい。の。太一を相手に骨牌を弄す拾一時過義兄帰れり 余も直ちに就眠 姉は本牧にて泊れり

八月二拾一日 木曜日 朝来雨甚し

午前真珠の持主来る 少時談話の後、本牧より手紙来り真珠は皆安く価を付ける者のみなれば返せと云ひ越しぬ 直ちに之を返したり 午後三時過勝木氏を訪ひ改進新聞を見、国民英学新誌を借りて帰る 夜に入り之れを読む 八時過姉帰りに来れり

八月二拾二日 金曜日 朝来降雨夜に入りて一時烈しく降りたり

朝より国民英学新誌を読む 午後二時頃根岸の伯母来れり 四時前勝木氏を訪ひ本を返し新聞を見、少時談話し居りたるに家より呼びに来りしかば直ちに帰りたるに姉わ今東京へ帰る可し、但し停車場にて暫時待つ可しと云ふに依り余は直ちに晩食を喫し、草郷を出で車にて停車場に着す 少時右傍の待合所にて待ち居りたるに雨わ益々降り出し風も中々出で待合所の天上の紙が半分ばかり剥げ落ちたり 七時頃姉来り金を受取り七時五拾分の列車にて帰京す 家にて就眠前「都乃花」及び「日本之文華」を少々読む

八月二拾三日 土曜日 朝来晴天風烈し

此日朝より「都乃花」を読む 午前の中に読終り「日本之文華」を少々読む 午後二時家を出で新橋より鉄道馬車に乗り万世橋にて下りそれより徒歩浜田氏を訪ひ「都の花」を貸す 小時

談話し四時過松永氏を訪ふに不在なりしかば去つて豊川に行き豊川に逢ひ種々談話し七時頃晩食の馳走に相成り直ちに同家を辭し小川町に行き小川亭に入る 看板に土佐栄とあり怪しく思ひながら家の中に入るに弥昇も居らず不審に思ひ居たるに、弥津子来りて稻舩の母が虎列刺に罹りて今朝死亡せり 故に弥昇も出て来る事能はず大分いそがしくとの話ありたり 之れにて万事了解するを得たり 扱遅かりしかば東玉の「桂川連理柵帯屋之段」を半ばより聞きぬ、然し何時もながら旨けれどこれわ特別に感服致せり 簡様な物にては女義太夫中主座を占むるわ明なり 次は呂華が「菅原伝授手習鑑、寺子屋之段」之れも中々感服せり とりわけ「御台若君」以下妙々と申す 扱大切りの土佐栄の「三三三間堂棟木由来、平太郎住家之段」、之れは調子が「づらい」にて感服せず なんだか三味線が苦しうなりき 少々聞きて飛出したり 帰途銀座にて饅餅を買ふて之を食ふ

* 途本屋に本代を払ふ

八月二拾四日 日曜日 朝来晴天

此日午前拾時頃松永氏来れり 種々談話し、友人西川義保氏は貸金催促の取扱をなす由を聞き諸方の証書を見せて其中より北沢外三通の証書を松永氏に託す 午後三時過氏去る、香爐を見る人が来れり 夜に入り銀座通を散歩す

八月二拾五日 月曜日 朝来晴天

此日午前九時過家を出で京橋より車にて神田明神坂下迄行きそれより徒歩して龍岡町に行き谷内を訪ひ小時談話し拾壹時過豊

川に行き種々の話しをなし二時過同家を辭す それより家に至り親爺に逢ひ直ちに松永氏を訪ふ 太田氏次いで来り將基をなし晩食の馳走になり七時過帰途に上る、江戸紫第五篇を家にて読む

* 於安より金二拾錢貰ひ其中五錢お幸さんに糸代として上る

八月二拾六日 火曜日 朝来曇天昼頃雨少々

午前より「日本之文華」第拾六号を見る 午後二時前葉取りに行き 四時頃晩食直ちに家を出つ、横浜及び前田、諏訪へ宛手紙を出す新橋際より鉄道馬車に乗り万世橋へ迄行きそれより徒歩家に着す 誰も居らざりしかば暫時待ち居りたるに親爺歸り来れり それより浜田氏を訪ひ「日本之文華」を貸し、八時過迄談話し、同家を出で、豊川に行き葡萄酒の馳走に相成り拾時前本郷の家に来り風呂敷を取りて帰途に就く、本郷通にて「輕便らむね」を買ひ大通りを歩いて日吉町に着す 時に拾毫時なりき、それより「らむね」を飲む

八月二拾七日 水曜日 朝は晴れ昼頃より雨

此日午前九時過土佐の西尾の親戚森田某と云ふ人來れり 香爐を見る人次ひで来る、午後二時過葉取りに行き帰途麵包を買ふ 午前よりして度々「らむね」を飲む、豊川より昨夜貰ひ来りたる金の内にて拾錢だけ貰ひたり 夜に入り外出し髪をかる、銀座通を散歩す

八月二拾八日 木曜日 朝曇り、雨降る

午前日本人を読む 午後二時頃家を出で有楽町より神保町迄乗

庚寅日記

車しそれより徒歩本郷の家に着く、親爺は留守なりき 四時頃同所を出で谷内を訪ふに爰に意外なる事を聞けり 即ち谷内義雄氏昨日より虎列刺病に罹り今朝午前四時に死去せりとこの事なり、実に吃驚仰天とは此事に候、同家にて大石、早川両氏に逢ふ 六時頃同家を辭し真砂町にて麵包を買ひ本郷の家にて之を食す 七時過福島氏を訪ひ氏と共に小川亭に行く 此日は非常に入りが少なかりき 最初は弥昇の「撰州合法辻、玉手嫉妬の段」なり、之れは餘り感服せず 同人は脚氣の由なり 次は松路の「妹背山女庭訓芝六住家之段」此人の調子わ只淡泊にして山もなく川もなく只平々坦々たる語り口なり言葉などは丸で清本の如し 次は東玉「関取二代鑑、秋津島切腹之段」之れは相変らず輕妙、然し今少し長くやって貰ひ度かりし 次は呂華の「明烏夢泡雪、山名屋之段」之れは中々面白かりし「そなたも共に」以下の所新内めかずに旨く行きたり 扱大切りわ土佐栄の「玉藻前旭袂、道春館之段」之れは先づ可成り能く出来たらんと思ふ 中途にて帰る 本郷の家に歸りても寝られず大きに弱りたり加ふるに雨激しく降り来れり

八月二拾九日 金曜日 朝来曇、晴雨定らず

午前一時頃枕本に雨が漏りて大きに困却せりそれより一睡し朝七時寝起八時過入浴し直ちに豊川に行き、昼食を饗せられ金七円だけ借り受け二時頃帰途に就く 本屋に金四拾錢を払ひそれより徒歩松住町迄来り同所より車にて帰宅す 家には親爺が文學全書を持来り置きくれたり 「らむね」及び「びすけつと」

庚寅日記

を食す 夜に入り散歩に出たれど雨に逢ふて引返したり

八月三十日 土曜日 朝来曇り且雨

午前拾時頃医師の許を訪ひ薬代及び診察料を払ひ薬を貰ひて帰る、うちより二拾銭貰ひ其中六錢にて牛肉を買ひて昼食に之れを食せり、日本文学全書第七篇所載中務内侍日記を拾一時前よりして午後六時前迄に読み終る 此日二時頃には雨激しく降り来り、いとど暗かりし、時々「びすけつと」を喫し「らむね」を飲み申したり、夜に入り銀座街を散歩し「あまなつとう」及び「やまと新聞」を買ふ 九時頃「讀岐典侍日記」を少々読む * 弥鼻よりの手紙に接す

八月三十日 日曜日 朝来曇

朝七時前寝起 朝食後直ちに「らむね」を飲み「甘納豆」を喫す、それより「讀岐典侍日記」を読み始め拾一時過にて之れを終る、文体わ先づ流暢なる方なる可し、拾時頃、谷内よりの手紙を受取る、義雄氏の葬式は来月四日に営む可き筈なりとかや 午後は「和泉式部日記」を少々読む 四時晩食し直ちに家を発し車にて美土代町に行き西川氏を訪ふ 暫時談話し八時過同家を辞し、小川亭に行く 此日は客は可成ありたり 最初は稲耕、鐘耕の「奥州安達原袖萩祭文之段」之れは相変らず感服致したり、歌祭文の如きは天晴の出来、次は呂華が「恋女房染分手綱、重の井子別之段」之れは中々旨し いつもながら感心の至りなり 扱大切りわ、土佐栄の「伊賀越道中双六岡崎之段」之れも先づ中位の出来、然しよくも聞かずに飛び出したり

本郷に行きてとまる

九月一日 月曜日 朝来晴天

此日朝六時前寝起 朝食後直ちに書類の調印等をなす 八時車にて日吉町に帰る それより医士の許を訪ひ薬を貰ひて、診断書の事を頼むに親爺を見ねば診断書は書けずと云はれたれば是非なく帰宅せり、午後は昼寝をなせり、夕方西川氏を訪ふに松永及び太田氏に逢ふ 種々談話の末七時過同家を出て松永と筋違迄来り それより別れて帰途に上る 大通りを徒歩して尾張町にて菓子を買ひ帰宅せり

* 此日は彼の農家には大切なる二百十日なりしが朝来完くの晴天 漸く夜の拾時頃に雨降出しのみ実に静穩なる役日にてありたり

九月二日 火曜日 朝来曇且時々雨

朝八時過親爺本郷より来れり、直ちに医者（おやぢ）の許へ遣る 拾時頃医者（おやぢ）の許を訪ひ、診断書を認めて貰ひたり 午前拾時頃下元氏来られたり、三時前田氏は親爺の本郷に帰ると共に帰られたり それより金の計算書を作りて見んと「そろばん」をはじきたり 七時外出し銀座通りを歩き尾張町にて饅餅（まんじゅう）を買ひそれより鶴仙（つるせん）に行く 此日は中々の入りにて下は充滿し居り二階も少々は入り居りたり 最初は鶴沢鶴司の「勢州鈴鹿合戦、平治住家之段」之れは先づ可成、今少しこなれば善からん 次は竹本小住の「菅原伝授手習鑑、寺子屋之段」之れは中々軽くて上出

来 然しあんまり艶過ぎて感服し難し、そして時々常盤津風の所を見掛け申したり 次は豊竹駒之助の「義経腰伏、泉三郎館之段」之れは中々能く出来たり 大分しつかりして来た様なり 次の大切りわ竹本綾之助三味線津賀代の「艶容女舞衣、三勝半七酒屋之段」之れは相変らず感服の外なし とりわけ「今頃は半七さん」以下の佐和理は只呆るる耳、然し三味線が今少しと思ひたり 此にて家に帰れば姉が来り居りたり 拾二時過就眠

九月三日 水曜日 朝来晴天

此日拾時過外出し玉子及び菓子を買ひ来れり、午後二時前武藤氏来れり、四時前家を出で数寄屋町より車にて丸山福山町なる河田氏を訪ふ 折能く在宅にて種々談話し居りたるに氏は胸に掛け居りたる時計を示して言はるる様「此の時計はお孝が来るに付掛て草郷氏より贈られたる者なり 然るに此度御承知の訳に成りたる故宇都宮氏に時計を返す事を頼みたるに同氏はそわ余の係する所に非らずと言われたれば其後豊川に行きて語るに此の事を以てせしに同人も之れを肯ぜざりしに依り目下大きに困却中なり 願くわお身帰路之れを持行き給わる可きや」と余わ之れを聞きてハタと当惑致したりしが「余わ兄貴君のみの使の資格にて持ち行きて草郷に渡すわ少しも差支なし」と云ひしかば、氏も大きに喜びて二階より箱を持来り今迄胸に掛けし時計を外して其の中に入れて余の前にさし置かれぬ 其様を目前に見る余の心中には風なきに波立起り只「気の毒」のみ領分を

肆にせり 氏又云ふ様此の時計を草郷氏が余に贈らるる時「此れはわれよりおん身に贈る」と云われたれば此度此を返却致しなば必ず草郷氏は立腹致さるるなる可けれど、余を以て之れを言わしめばお孝が来るによりて贈られたる物なれば之れはお孝に返却するなりとて其他種々の話ありたり 五時過同家を辭し福山町より車にて日吉町に帰る道すがらも河田氏の如き有様に立至りなは如何なる心ならんと実気心の毒と思ふ心のみや益けり、又齷て我身の事を思えば婿引出の品物を先きに届けに行くば善けれど、離縁に成りし人の持参品を返す使とは近頃以て閉使なれ口の至にて御座ると一笑を催したり 家には親爺来り居りたり 七時頃家を出で新橋際より鉄道馬車にて浅草橋迄行きそれより新柳亭を探し回りに漸く見当りて中に入りたり 此日入りわ先づ可成 然し大変狭き寄席なり先づ三方を引廻して二階あり楽屋の芸人扣所の如きも二階なり、最初弥昇の「釜淵二ツ巴、釜入之段」先づ中出来 次は小政の「恋女房染分手綱重の井子別之段」之れはさすがに能く出来たり、爰はすけ故少し満足は致し難けれど我は只其の老練なるに服す 次は呂華の「天網島時雨炬燵、紙治内之段」之れは相変らず奇麗事なり始めの所数行は正に感服致申候 扱大切りわ稻舂鐘舂の「蝶花形名歌島台小坂部館之段」之れは非常と云ふ程でわなければどまづ能き出来の一ならんと存ずる、楽屋に行きて弥昇に逢ひ袴が出来て居るに依り取りに来る可き由しを云ひたり 拾時過寄席を出で拾一時過家に帰着す

九月四日 木曜日 朝来曇

此日朝八時過区役所に行く、暫時待ち居りしに四拾過五拾近の年格好の男来りて財産差押へを出願致したるに裁判所よりは其の品書を出せと云われたれば区役所にて写して行かんと思へども皆無無筆にて困却此上なし 願はくは貴君の手を借るを得ば幸甚なりと云ふに余は快く承諾し直ちに品書を写しやりたり、間もなく免役証書を受取り、弓町の印東氏を訪ひ菓を貰ひて帰る 拾二時頃弥昇来り 午後尅時半頃家を出で車にて龍岡町に行く、谷内氏葬送二時過出棺染井墓地に葬送の取計らひあり 五時過龍岡町に来りそれより徒歩本郷に行くに親爺は居らず 本屋にて日本人を買ひ、水菓子屋にて菓を求め湯島より車にて帰宅す 七時過姉は赤坂の野崎の伯母を訪ふとて出で行きぬ、下元氏次いで姪を伴ふて来り、夜に入り改進新聞附録文車第一号「反魂香」を読む 拾時過下元氏去る

九月五日 金曜日 朝来過半晴天午後三時頃より快晴

此日午前は別に記す可き事なし、午後二時前武藤氏来る 四時頃玉蜀黍団子を食べ 夜に入り七時過中村啓と云ふ人來りて種種雑談をなす 拾時前氏去る、それより姉は三味線をひきなどし拾一時頃就眠

九月六日 土曜日 朝来晴、雲少し出で風あり涼し

此日朝九時頃立憲自由党事務所に行き竹内氏の宿所を訪ふに山城町三番地なり教られしかば同所へ行きて尋ねたれど餘り善く分らず 稍く尋當りて在宿の時間等を問合せたるに、一向それ

等には定りわなき由を言われたれば立帰りぬ、午後「和泉式部日記」を読み終る、松永よりの手紙を受取る、午後六時頃家より五拾錢遣ひ銭を貰ひ受け数寄屋町より乗車し美土代町迄行き西川氏を訪ふに不在なりしかばそれより柳原に出で七時過新柳亭に行着く 此日は土曜日なれども前日程客はなかりし 先づ最初弥津子の「生写朝顔日記、麻耶山中之段」は今少しと存ずる 次は弥昇が「本朝二拾四孝、十種香之段」大分落付きわありたれど今少し角が取ればよし、次は小政の「摂州合法辻、合法内之段」なりしが、之れは相変らず感服物なり さても能くこなれたる物かな、次は呂華の「八陣守護城、正清水城之段」は相成らず奇麗なり、我等は只其声の美なるに服す 扱切りは稲舩鐘舩の「艷容女舞衣、酒屋之段」之れは中々善し、例の「今頃は半七さん」以下の佐和理も申分なし、但し声を痛め居る由にて少し声が立ぬ様な気味ありしわ残念、其上「鴛鴦の片羽」云々の所をぬかされしわ如何にも不服 此れにて帰れり 家には義兄来り居りて種々の話しの最中なりき 拾二時過就眠

* 此日午前十時過に幸さん横浜へ歸られたり

九月七日 日曜日 朝来晴雲少く出づ

此日午前十時頃外出し菓子及び「はいすきい」を買ひ来り、兄より時計を借し呉れたり午後尅時過義兄より余の学資として二拾円出しくれたり、実に能く世話になり且其心配の程を思ひ廻せば、我々わ、充分に我々が心に感ずる感謝を言ひ願はず可き言葉なきに苦むなり、義兄歸りて余も又家を出で車にて美

士代町なる西川氏を訪ふ。同氏が宿にて種々談話し、訴訟実費を渡す、六時過同家を出で氏と共に小川町通の牛店にて「しやも」にて麦酒及び飯を食し七時過筋違にて氏と別れ日本橋迄乗車しそれより徒歩し日吉町に帰る、道にて「開明女用文」と云ふ本を八錢にて買ふ。此夜わ少々酒を過して頭痛激しく道々も足本つづわるく、気分あしく大きに弱りたり、家には中村氏来り居れり。同氏も拾時過帰り去りて拾一時過就眠。

九月八日 月曜日 朝来晴雲出づ涼し

此日午前八時頃時計屋に時計の直しを頼み、印東氏に行き薬を貰ひて帰る、午後二時過粟をゆでて之れを食す、弥昇来れり、前夜買ひ来りたる「女用文」を同人に贈る。六時前帰る、午後七時前姉と共に車にて浅草橋迄行きて下車し、姉ばかり、今戸まで行く。余は直ちに新柳亭に行く。二階に座を占めたり。来客は余り多くなし、恐らくは七拾近辺にても有らんか。最初は弥津子の「伽羅先代萩、政岡忠義之段」先づ可成（此人にしては）、然し今少しこなれて居らばと存じたり、次は弥昇の「義経腰越状、泉三郎館之段」之れは中々能く出来たり、あまり感服と云ふ程には至らず、次は小政の「玉藻前旭袂、三段目道春館之段」之れは相変らず旨い物なりと云ふの外なし、只音声を痛め居りたるが故か時々声の通らぬ様な所ありしは白玉の微瑕とでも云ひ置くべし、次は呂華の「日吉丸稚桜、五郎助住家之段」中々善く出来たり、相変らず、声の美なるわ感嘆の至りて御座る。此れが終りて中入の内に姉来れり。菓子及び鮎を土産

に貰ひ来れり。故に余も之れを食せり。扱大切りわ稲舂鐘舂の「伊賀越道中双六、沼津平作住家之段」なり、之れは相変らず旨し、然し声が未だ本当でない故か時々満足し難き様な所を時々見受けたるわ遺々憾々、稲舂の語り居る中に弥昇よりとて菓子及び茶を遣られたり、寄席を出ると直ぐ車に乗り新橋に帰る、拾二時過就眠。

九月九日 火曜日 朝来曇且雨

此日朝九時過水汲みに八官町に行く。雨に逢ひ大きに弱りたり、拾時頃武藤氏来れり。明日土佐に行く筈なりとか、午後七時前池田武兵衛来れり。三時頃親爺本郷より帰る、日本之文華拾七号を受取り之れを少々読む、夜に入り銀座通にて菓子を買ひ、勸工場に行き駒下駄を買ひ来れり。

九月拾日 水曜日 朝来快晴

此日午前は事なく終り、午後二時過義兄来り直ちに姉と同道して本郷に行けとの命令に接し、金百六拾円を預りて、車にて日吉町を発し道にて姉に別れ大時計の福田屋に無尽の金を投込みて直ぐに本郷に行き、小林商会と云ふ質屋に行き、暫時の後春木町の質店竹原庫三郎と云ふに至りて質物を出す可き由を言ひて又た小林に来り、又々待ちて稍く勘定書等も出来しかば、余は金を払ひそれより姉に別れ真砂町に行き本代を払ひ都の花四拾六号、江戸紫六号、近松作吉野都女楠の三冊を持ちて本郷の家に行くに折能く親爺も居合せて、暫時待ち居りたるに姉は春木町より帰れり、それより余は荷物の中え自分の本を入れて日

吉町に帰る、扱も此頃は種々の事に出逢ふ者かな 先日は河田より時計の使を頼まれ、今日は又質物出すとて、未だ一度も試みたる事もなき質屋の潜戸くぐりたるぞ可笑し、然し先づ質入れの使ひでなく出す方の使なれば、幾分か宜しき方ならんと存ずる、他日の材料にもなるかと眼を放つて四辺を見廻はす所に向の棚本が夥しく積み重ねあり 中には包の俵もあり、さつても書生の質置きする物は可笑しき者と思ひたり、日吉町に帰着し晩食後間もなく中村氏来る 今井、川上、二氏次ひで来れり、種々談話す、諸氏去り「都の花」を読む 拾二時頃就眠
*此の内より拾銭貰ひ春木町迄の車賃四銭を姉より貰ひたれば拾銭丸儲の勘定なり

九月拾一日 木曜日 朝来晴天雲少々出づ

此日朝より都の花を読み、直ぎに読み終り、それより「吉野都女楠」に取り掛り之れをも拾時頃に終り申候、九時過買物に出づ 帰れば太一来り居れり、拾一時頃時計屋に行き時計取りに来る、一時二拾五分の汽車に乗り横浜に行き車にて正金銀行に走せ付け義兄に会ひ書類及び手紙を渡す、義兄も書付けを見て借金の余り多きに一驚を喫し、非常に当惑して居られしは傍に見て居る余が胸に刃を刺さるるが如き思ありし、義兄は姉に今夜是非来る可き由を申伝よとて帰りに望みて旅費として余に二円をくれたり、それより乗車し柏葉に行き杉浦えの手紙を頼み、帯止めを受取り、せんべいを貰ひて車にて停車場に来り、四時二拾五分発の汽車にて帰京す、日吉町に帰り姉に横浜へ帰る可

き由を伝ふ 六時過姉太一と共に横浜に行く 余は直ちに外に出で銀座通にて時計の蓋ひを買ひ又勸工場にて銭入を買ふ、此日姉より一円貰ひそれにて汽車賃及び車代を支弁し五拾銭残りたればそれにて前記の買物をなし、二銭残りたりされば、結局、二円〇二銭、儲けたる訳合なり

*汽車中にて江戸紫六号を読終る

九月拾二日 金曜日 朝の内晴、午前九時頃より曇り時々雨

此日朝六時前寝起、七時二拾分前家を出で三田に行き比佐氏の宿を訪ひたるに氏は未だ出京せずとの事なりしかば、それより学院に行き岡本氏に逢ひ種々談話し九時過同所を出で帰途に就く 聖坂手前より雨降り出でたり、土橋手前にて栗及び梨を買ふ、若時頃、倉部氏来れり、種々談話す、氏に朝顔日記、彦山権現、蘆屋、及び先代萩の四書を貸す、夜に入り銀座街を散歩し、筆、紙、朱、等を買求む

九月拾三日 土曜日 朝来曇且雨

此日午前九時頃親父への手紙を書く、葛目の伯母本郷に行く、拾一時頃姉来る、車屋へ払ひをなし、菓子屋にて菓子を買ふ、帰途民友社の張り出には今朝小久保喜七氏外一名が壮士の為に刺されし由記しありたり、家に帰りて後、八官町迄水汲みに行く、午後四時頃福島氏来り種々談話す、五時頃子安、高崎、高島、の三氏来れり 内えも入らず帰る、六時半頃福島氏と同道して銀座通を歩き京橋にて氏に別れ家に帰る、それより又出直して鶴仙に行く、客は先づ大入りの分ならん 書生をも可成り多

く見掛けたり、先づ最初津賀代の「姫小松子の日遊、俊寛島物語の段」は可成り、次は鶴司の「絵本大功記、妙心寺之段」あんまり善くも出来ず、それに声を痛めて居るかごつ／＼つかえる様な気味あり、且時々うじや／＼と遣られて少しも分らぬ所ありしわ残念なりし、次は小住の「明烏夢泡雪、山名屋之段」之れは申す迄もなく上出来なり、とりわけ彦六の鼻歌は実に感服、義太夫をやめて新内専門にしたら善かるうとはちと悪口かと存ずる、次は駒之助の「蝶花形名歌島台、小坂部館之段」之れは中々能く出来たり、気のせいか何んとなく稲耕の語口に類する所ある様なり、然し「一百三十六地獄」云々の所は今少しと存ずる、それに無暗にぬかさされしわ残念の至りなり、引幕一張何れよりか贈られたり、大切は綾之助、鶴加津の「本朝二拾四孝拾種香之段」之れは呆るるばかりの上出来、とり分け「身は姫御前」以下の佐和理は感服のしようもなし、其他感ず可き所稱す可き所はとても数へ切れぬ程なれば只感嘆して筆を擱す、拾一時前就眠

九月拾四日 日曜日 朝来曇、午後二時頃より晴る夜に入り時

々雨

朝本郷の親父よりの手紙を請取る、午前拾時頃横浜より電報にて豊川の居所を問合せ来れり、故に直ちに染井に居る由を返信す、帰途栗を買ひ諏訪えの手紙を出す、帰宅後栗を食せり、午後時前近辺に虎列刺患者ありとて随分騒ぎたり、卓の掃除をなし二階え上げんとなしたるにどうしても上らず、故に已を得

庚寅日記

ず之を離れに持ち行き同所に二階より本箱等を持ち行きて本の排列等をなす、二時過家を出づ、此時車代を拾二銭貰ふ、新橋より鉄道馬車に乗り往復の切符を買ひ、萬世橋にて下車し其れより徒歩して本郷の家に行く、親父に頼みて洗濯屋及び質屋に行きて貰ふ、松永氏を訪ふに不在なりしかば都の花四拾六号を置きて、倉部氏方に行きたるに折善く氏在宅にて種々談話の後六時過同家を辞す、再び本郷の家に立寄り書物を少々取纏め之れを持ちて帰途に就く、途中本屋に本月分の雜誌代八拾一銭及び近松著作集の代価金五銭を払ひ、三町目より車にて、萬世橋迄来り、又鉄道馬車の御厄介にて七時過日吉町に着す、九時前義兄来る、大分酩酊めいじやうの様子にてやたらと立腹致されしわ可笑かりし、髪結が質に入れてありし蒲団を取に行くやら、姉が神田に行くやらにて随分混雑せり、拾一時過就眠致申候

九月拾五日 月曜日 朝来曇天且雨午前より晴れたれど三時頃

より又雨

此日朝六時寝起直ちに朝食し、家を出で三田に行き高崎氏を訪ふに子安氏も居れり、諸氏と共に学院に向ふ、道にて島崎氏に逢ふ、相変らず礼拝堂に押し込め、久し振りにて異人の氣遣りを仕り、ばら氏の御祈禱に笑を忍び稍く、「でい」室に逃げ込み、教師より明日の下読みの箇所を聞き、書籍室より本を借もし、又買もし高崎、戸川の二氏と共に三田迄来り高氏と分れ、戸川氏と共に飯倉に行き、本屋にて「ぐりいん」の英国民史、及び「せきすびあー」著作集を種々押し問答の末二円五拾銭に

て買ひ求めたり 拾二時半帰宅す、昼食後時表を清書し、之れを壁に張り、水を汲む、例の如く八官町迄も行けり、姉本郷より帰る、水にて身体を拭ひ、下読みに着手す 三時頃下元氏来れり 間もなく暴雨降り出でぬ 栗がゆだつて台所にあるのをちび／＼鼠の引く様に食したり、夜に入り八時頃姉は横浜に行き下元氏も同時に帰り去る 拾時頃近松著作集中の「兼好法師物見車」を少々読む

九月拾六日 火曜日 朝来曇八時頃日光を見たれども間もなく

雨

六時寝起、朝食後直ちに家を発す、芝公園弥生館の近傍にて戸川氏に出会す、共に学院に行く、礼拝堂にて之れより袴を穿ちて出校す可き由しを申聞けられて余等着流連中少々赤面に及び申したり、書籍室にて前日借りたる理財及び英語論を買ふ事に話込み差引き金六拾五銭を受取る、昼食後高輪の後藤邸に行き、楠目車志馬氏に逢ひ少々話し度き事件有之に付き日吉町迄足労を煩はし度しとの事を頼み氏の明日夕刻来る可しとの話を聞き同邸を出で乗合馬車にて帰宅す、栗を食し、新聞紙を見たりして暫時休憩し、三時過より課業の書を読む、五時前八官町迄水汲に行く、汲人込合ひて暫時待ちて、稍く一杯の水を得て帰る、七時頃諏訪よりの手紙を請取る、外出し革靴及び足駄を買ひ来れり、諏訪及び藤田えの端書を認む、九時過近松集の「兼好法師物見車」読みたり

九月拾七日 水曜日 朝来曇午前拾時頃より南風夜に入り晴

此日朝六時前「兼好法師物見車」を読み終れり、之れは次に在る「碁盤大平記」と続きて赤穂義士の事を作りしとなり 彼の出雲も之れに依りて「忠臣蔵」を作りしなり 六時半朝食す、直ちに家を発し学院に行く、課業も事なく済み拾七時学院を出で戸川氏と共に日吉町迄来る、二時過より六時過迄に明日の課業、論理、理財、数学を調ぶ 八時頃外出し銀座通を散歩す、帰宅後近松集所載の「碁盤大平記」を九時頃迄に読み終り、其次の「鎗権三重帷子」を過半読みぬ

*岡本氏より明治学院卒業式の記事二部を貰受く

九月拾八日 木曜日 朝来晴天南風残暑強

午前六時寝起、朝食後家を出で学院に行く、九時前幹事より学院一覽表を貰ふ、数学教師病氣にて同課休業、休みばかり多くして時間が明きて居りて随分退屈せり 外は風が吹けども教場内には少しも風が通さぬが故餘程熱かりし 拾二時四拾分頃昼食、戸川氏と共に帰途に上る、日蔭町通りの本屋を二三廻りて稍やく「すちいる」の星学を尋ね当て八拾錢にて之を買取る、此通には二軒ばかり虎列刺患者の家ありたり 家に帰り新聞など見たる後二時半過八官町に水汲みに行きたり 四時頃より翌日の課業中「ぐりいん」の英国国民史を四頁読申す 夜に入りて七時頃家を出で琴平亭に行く 客は至て少なかりし 最初は文玉の「源氏義仲出生之段」なりしが只御苦勞と申すの外なし 次は政鶴の「御所桜堀川夜討、弁慶上使之段」之れも感服仕らず、そして餘りよがる方にて時々気取り過るは宜からず 次は文綱

の「蘆屋道満大内鑑、葛の葉子別之段」之れは相変らず気取り
専門、餘り訛り過ぎる様なる心地致せり 願はくは今少し真面
目に語りて貰ひ度し 次は小染の「恋娘昔八丈、鈴ヶ森之段」
之れは中出来、今少し出来ると思ひたるに随分失望の至なりし、
扱大切は小政の「本朝二拾四孝、狐火之段」之れは中々能く出
来たり、殊に「思にや焦れて燃る」云々の所は政鶴の琴、小染
の連引きにて中々花やかなりし、例の「身は姫御前」以下も申
分なし、之れにて帰宅す 道にて粟を買ひ家にて之れを食す、
拾一時過就眠

九月拾九日 金曜日 朝来曇八時頃より降雨、拾時過より日光
を見る風あり

此日三田より雨に逢ひ車にて学院に至る 「らんぢす」氏病氣
にて休み 其の時間に近松集中の「鎗の権三重帷子」を少々読
む、此日は歴史のみにて他は皆休みなりしかば雜誌の事に付き
「びい」室に会し種々相談の末甲乙雜誌取扱人を撰ぶ事にな
り投票の末、小倉、高島、及び余の三人当撰せり、拾時半頃学
院を出で戸川氏と共に帰宅す、昼食後新聞を読み、粟を食す、
二時頃「鎗の権三」を読み終る、之れにて「戯曲近松集」の全
部を読了れり、三時前より理財学を少々読みたり、五時頃小島
来れり、七時過家を出で銀座通を散歩し靴下止めを求めて帰る、
それより「蜻蛉日記」を二拾頁読む、拾時過就眠

九月二拾日 土曜日 朝来快晴拾時過より曇り正午頃より雨二
時過暴雨晩方晴

庚寅日記

此日朝六時半寢起、八時半頃家を出で教寄(屋)橋際より車にて
淡路町の江木に至り写真を取る、それより徒歩本郷に行き本屋
にて「此ぬし」を買ひ日本之文華拾八号及び日本人五十五号を
受取 本郷の家に行着きたる頃は拾時頃なりし それより松永
を訪ふに不在なりしかば去つて福島氏を訪ひ種々談話し、同家
にて午餐を饗せられ七時過同家を辞し豊川に行き豊川わまだ染
井に居るや否やを問ひたるに豊川は来る二十二日ならでは発足
せずとの事を語られたり、早川を訪ひ少時談話し、「帰省」を
借りて、帰途、倉部氏を訪ふ 不在なり、家に帰着し、穿き物
を換へ松永氏を訪ふに之れ又不在、それより本郷通に出で、車
を備ひ、染井に行き豊川に逢ふ、お安及び智恵子わ既に大磯に
行きたり、五時過同所を出で又車にて帰宅す、六時過松永氏を
訪ふに不在なり、帰途松永及び浜田二氏の来るに出会し、伴ふ
て松永氏に行き八時過迄談話しそれより、家に帰り本を纏めて
包み、それを持ちて浜田氏と共に寄席若竹亭に行く、松永氏は
少時後れて来れり、客は充分の入りなりき、先づ最初は綾之助
鶴加津の「傾城阿波鳴門、十郎兵衛住家之段」中途より聞きた
れど相変らず旨し、例の「父母の恵」云々の御詠歌も申分なし、
声は善し、調子を旨くやり、節が少かくて、見れば、先づ完全
なる物と云ふ可し、次は照勝の「義経腰越状、泉三郎館之段」
我等之れを少しも感服せず、只徒らに客の嘲笑の種となりしわ
気の毒千万 扱切りわ東玉の「新版歌祭文、野崎村之段」之れ
は先づ善き出来只我等其老練と輕妙なるに服す、中途にて寄席

を出で二氏と別れ湯島より車にて帰宅す、新聞など読み、拾一時過就眠

九月二拾一日 日曜日 朝来半曇午後に至り快晴

此日八時過より九時過迄に「此ぬし」を読み終れり 其れより日本之文華第拾八号を半分許読む、午後老時頃より演説の草稿に着手す、早川氏本を返しに來れり 三時頃文成る 題して「第四年級学年の開始に於ける余の感情」と云ふ 八官町迄水汲みに行く、途に虎列刺患者の家二軒位ありたるが外を大廻りをして歸る、晩食後直ちに明日の課業中の心理、英国国史、を讀み又「まあちゃんとおふ、べにす」の序幕だけ讀み申す中々六かしくして餘程閉口せり 拾時前就眠

九月二拾二日 月曜日 朝来曇且時々降雨

此日朝六時寢起 朝食前牛乳を喫し直ちに家を出で学院に行く 課業例の如くすませ、帰途に就く、途中比佐氏の歸りたる由を聞きて戸川氏と共に三田の同氏の宿を問ふに不在なりしかば、共に帰宅す、家には姉來り居りたり昼食後菓子及び口取を食す 老時前栗を買ふ、二時過より英国国史、心理学、英語論、等を読む、栗を時々食えり、午後七時半過家を出で琴平亭に行く、此日は一杯の入りなりき 扱最初の小染は「大平記忠臣講釈、由良之助立出之段」を語りしが之れは感服の外なし、一体此んな物は御得意の様に見受け申す、次は小政の「三拾三間堂棟木由來、平太郎住家之段」之れは中々善く出来たり、其上に木遣の所は小染の連引きに政鶴胡弓をすりて声張り上げて歌われし

は大満足の至りなり、大切りわ繪掛合ひにて「菅原伝授手習鑑、車曳之段」之れを引抜きて「橋弁慶」を語る、其役割は松王丸、小政、梅王丸、文玉、桜丸、小染、時平公、玉市、三味線文綱、皆々申分もなき出来、二番目は牛若丸、小政、弁慶、小染にて政鶴、文玉、玉市、文綱の四人二人宛代り、に三味線を引く、之れは申迄もなく善く出来たり、之れにて家に帰れば姉は横浜に歸りたる跡なりし、拾一時過就眠

九月二拾三日 火曜日 朝来曇天

此日午前九時前家を出で三田の比佐氏を訪はんと急ぎしに公園の入口にて太一にハタと行逢たり、それより比佐氏の宿に行着きたるに其所は虎列刺患者ありて巡查二人が中に居り外には桶など車に積みてありたれば、之れはとばかり大きな驚き其前をそこへ過ぎ、三田の通りに出で二町ばかり北へ歩みし所にて高崎氏に出会し 同氏に「君の宿は大変なり、今巡查が来て居るが 多分虎列刺だろう」と云へば氏は「余は昨夜肝付氏を訪ひ同家に一泊し比佐相田、子安等は昨夜歸りたれば定めて困り居るならん」と云ふ 氏も今更歸る訳にも行かず大きに困却の模様なりしが、何にせよ一先づ前迄行きて見る可しとて余に別れたり それより帰途に就き拾時頃歸着、家には太一來り居りたり 午後老時過家を出で鉄道馬車に乗り往復の切符を買求め、眼鏡橋迄至り、それより徒歩本郷の家に行く、途本屋に立寄り、都の花四拾七号及び江戸紫七号を買ひ、家にて江戸紫を少々読む 直ちに松永氏を訪ふに不在なりしかば「此ぬし」を

帰途倉部氏を訪ひ、種々談話の末物集氏編集の「初学日本文典」及び手本二冊借りて帰れば松永氏来り居り少時談話の後氏去る、余は親父より葡萄を貰ひ「しやつ」、本等を一包にして家を出で本郷通の唐物屋にて香水及びべん二本を買ひ、萬世橋より馬車にて日吉町に帰る、太一は既に横浜へ帰り居りたり、留守中比佐、子安、相田、高崎の四氏来られしとかや、七時過明日の課業、心理学、英国民史、英語論を読む、九時過より都の花第四拾七号を過半読む 拾一時頃就眠

九月二十四日 水曜日 朝来半晴午前の内快晴す夜に入り雨

此日朝六時半寝起、大急ぎにて家を発し土橋際より三田迄乗車し、それより徒歩学院に行く、比佐氏に逢ふ、月謝を三円払ふ、明日よりは、日課割變る筈なり、拾一時過学院を出で高崎、福田、二氏と三田迄同行す、拾二時過家に帰着す、昼食後「都の花」を読み終る、一時過八官町に水汲みに行きたり 二時過より課業の下読みに取掛り、英国民史、論理学、及び星学を七時過迄に読み、それより、休業請願書を九時過迄に書き終る 此間に横浜及び氏家と云ふ人に宛て手紙を出す、皆玉の事なり、それより「小文学第七号」を読み終れり 拾時頃就眠

九月二十五日 木曜日 朝来半晴午前拾時頃より降雨

此日例の如く学院に行き、前夜認め置きたる願書を皆々に示すに二年生は不賛成なりき、九時頃より学院を出で品川停車場に「うわいこつふ」氏を迎ふ、それより静々学院に帰りたるに時間後れたれば、いつその事として休む事に決し比佐、高崎、友野、

置きて戸川氏等と三田迄同行し上の三氏に別れ戸川氏と共に帰宅す 家にて昼食後新聞を読む、三時前粟を食ふ 歴史及び心理の下読みをなし、晩食後演説文の暗誦に取掛る、七時頃横浜よりの手紙に接し、銀座の松島と云ふ玉屋へ行き、玉の事に付き談話し、帰宅後直ちに姉行の書状を認め申す、拾時頃氏家と云ふ人來り玉の事に付き談話す 拾時過就眠

九月二十六日 金曜日 朝来晴天朝は少々寒き位なりし

例の如く学院に出づ 此日演説をなす 時々言間違ひありて中々不出來なりき、漢学の教科書は「謝撰拾遺」と定む、それより赤田の部屋にて休業の願書を書き此れを杉森氏に出し、直よに帰途に就く、家へは谷内氏より饅頭を送り來りてありたり之れを少々食し申したり、新聞を読み、水汲みに参りたり 四時前より「初学日本文典」を少々読む 五時家を出で学院に行く、少し早かりしかば、赤田氏の部屋に行きたるに、小倉、比佐兩氏來合せ居て高島氏をも加えて都合四人にて規則の修正をなし居りたり、六時半より講堂にて文学会総会を開く、常議員を八名になすと云ふの議可決し、次に級々にて二名づつ撰みたしとの發議ありたり、之れは中々議論沸騰したれども、結局之れ迄通り会にて撰む事に決す、役員の撰挙及び常議員の撰挙をなす、当撰者は、會長比佐、副會長小倉、書記赤田、會計松尾の諸氏及び高島、和地の兩氏は我級の常議員に当撰せり、今夜の投票中には余の如きも副會長に三点、常議員に九点の得点ありしわ余程可笑 九時過閉会 比佐、奥野、赤田三氏と共に学

院を出で四の橋の傍迄同道し二氏と別れ赤田氏と共に赤羽川の縁をたどりて芝公園に出で佐久間町を経て帰宅す 赤田氏家に一宿す 種々談話をなし拾二時前就眠

九月二十七日 土曜日 朝来晴天拾二時頃より雲出づ

此日九時前赤田氏と共に家を出で徒歩本郷に行き本屋に立寄りたるに「文学全書」わ未だ来らざる由なりしかば直ちに家に帰る、昼食後松永氏を訪ふに久米居合せたり、二時前松永氏と共に同家を出で駿河台迄同道し、それより三土代町の西川氏を訪ふに不在との事なりしかば、又淡路町の江木に行き写真は出来て居かと聞き合せたるに明日出来ると云ふに由り、筋違より日本橋迄乗車し、それより徒歩帰家す、新聞など見て居る内弥昇来れり 今度は麴町の万七に掛る由なり、五時過同人去る、六時過比佐氏来る、七時前出掛けんとしたるに子安氏来れり、氏は少時談話の後去りたれば、比佐氏と同道し琴平に行く 此夜は中々の入りなりし、先づ最初は玉市の「平仮名盛衰記、逆穢之段」之れは余り感服も致さず 次は文綱の「艶容女舞衣、酒屋之段」時々旨い所もありしが餘り調子が変わり 今少し注意あらば善からん、然し三味線は旨し次は小染の「三拾三間堂棟木由来、平太郎住家之段」之れは中々善き出来なり、然し慾にわ今少し声がまわらば善からんと存ず 次は小政が「日蓮上人御法海、動作内之段」を語る 之れは申す迄もなく上出来にて只感服致すのみ 扱大切りわ「姫山姥廓嘶し」総一座、之れは中面白かりし 先づ小政の八重桐、上出来、小染の大姫君、可

成、玉市の源七、可成、政鶴の「更科歌門、之れ可なり、文綱の三味線大出来、終りわ三味線四挺にて賑やかに語り終りたり、比佐氏に別れ帰宅せしわ拾一時前なりき、拾一時過就眠

九月二十八日 日曜日 朝来晴天

朝八時寝起 ゆつくり飯を食ひ、ぐずぐずして居る内拾一時になりしかば八官町へ水汲に行く 午後二時頃粟を食す 明日の課業、英国国史、理財学、心理学を読む、六時過外出し、紙屋にて雑誌の紙五帖買ひたり 此日は陰曆にて八月十五日に当り、昼よりの晴天夜に入りてわ一点の雲なく、冴けき月は恰も鏡の如く中天に輝けり、町々も月見の人々行違ふ故か可成の賑なりき、拾時頃物干に出てて、月を眺めて巷首捻らんと思ひしかど余り月の清さに歌も発句もなんにも出でず只閉口して眠りに就きたり

九月二十九日 月曜日 朝来晴

此日例の如く学院を出づ 此の週間より「理財学」の到着迄は理財の課業休み 其代りに他の課業を為す可き由の話ありたり、午後二時過学院を出で帰宅す、明日の課業、英国国史、論理学、星学を調べ、六時過、家を出で通の丸善に行き「羅甸文典」を買来れり

九月三十日 火曜日 朝来晴

例の如く学院に行く、此日始めて「羅甸語」の課業あり 拾二時半過学院を出で帰宅す、明日の課業を準備し終り、七時前家を出で教寄屋橋より車に乗り、美土代町に行き西川氏に逢ひ種

種談話し、拾時前帰宅す

十月一日 水曜日 朝来曇九時過雨午後一時過晴、夜に入り雨

此日学院に出づ、始めて地質学の課業あり、和文も同上、拾二時前学院を出て福岡氏と同道し、同氏の宿にて昼食を饗せられ共に日陰町通を歩き新橋際より乗車して丸善に行き、「地質学」を買ひ求め同所より氏に別れ帰宅す、家には、姉来り居りたり、二時過栗を食したり、三時頃より六時過迄に掛け明日の課業、英国史、羅甸、論理、星学、を読む、七時前姉と共に鶴仙に行き、此日は可成りの入り、最初豊竹岡伊の「管原伝授手習鑑」、寺子屋之段」評する迄もなし、次は竹本小染の「三十三間堂棟木由来、平太郎住家之段」なり、之れも左程感嘆する程でもなし、次は竹本稻榊鐘樹「伽羅先代萩、政岡忠義之段」之れは此晚第一等の出来毎度ながら感服の至りにこそ、次は野沢語花の「箱根靈驗覺仇討、三人上口の段」先づ中出来、次は竹本勇紫の「彦山権現誓助剱、六助住家之段」之れも能き出来、扱大切は竹本住之助同小住の「恋娘昔八丈、鈴ヶ森之段」之れは中々旨し、然しせつこの声の深からざるは残念なり、未だ全く語り終らざる内家に帰る

十月二日 木曜日 朝来晴午後は快晴

此日学院にては比佐氏と悪口の筆談をなす、拾二時半過帰途に就く、午後二時過より課業の下読みをなす、夜に入り「蝶花形」の八ツ目の大略を英文にて綴る、拾時頃就眠

庚寅日記

十月三日 金曜日 朝来曇夜に入り雨

此日学院に出づ、漢文の課始めてあり「送廖道之序、昌黎」送僧浩初序柳州」「送石昌言為比使引」蘇老泉」の三つを読む、次に薄記の課業ありたり、夜四拾分過愛学部々会をB室に開き、部長及び書記の撰筆をなし余は部長に当撰せり、それより直ちに学院を出て帰宅す、家には弥昇及び下元氏来り居られたり、栗を食せり、写真を弥昇に送る、三時より英文の清書に取り掛り四時過之れを終る五時頃弥昇去る、余も家を出て六時過学院に着す、当夜は可成の出席数にて、英文及び演説も中々面白かりし、余も英文朗読、及び演説をなせり、九時過学院を出て比佐氏と三田迄同道赤田氏と八官町迄来り、余は帰宅す、栗を食し新聞を見る

十月四日 土曜日 朝来曇且雨

午前は何もなさず、空しく経過し、午後も栗など食し雑談に日を費し七時前鶴仙に行く、雨にも拘わらず中々の入りなりき、最初小染の「中将姫古跡松、雪責之段」之れは中出来、次は稲榊鐘樹の「絵本大功記、十段目尼ヶ崎之段」毎度ながら感服の至、取り分け「主を殺せし」以下妙々と云ふ可し、次は語花の「勢州鈴鹿合戦」之れは中々善く出来たり、次は勇紫の「夏祭浪速鑑、三婦内之段」、之れも上出来なり、大切りわ住之助小住の「三拾三間堂棟木由来、平太郎住家之段」之れは非常に能く出来たり、木遣りも申分なし、拾時前帰家、直ちに就眠

十月五日 日曜日 朝来降雨

八時過寢起、午前拾一時頃より明日の課業、心理、星学、を読み
 八大家文の中蘇老泉の「送石昌言為北使引」歐陽修の「送田畫
 秀才寧親萬州序」蘇子由の「上枢密韓太尉書」をも読み暮方に
 演説の下書を作る、題は「淨瑠璃」なり 杉浦来れり 七時前
 姉と共に鶴仙に行く、此日は中々の入りなり 最初子染の「撰
 州合法辻、合法内之段」之れは可成なりき、次は稻舩鐘舩の「奥
 州安達原、袖袂祭文之段」之れも先づ能き出来ならん 祭文は
 随分聞き堪えありし 然し「二人が間」と云ふ所を「二世」と
 間違えたるわどうした事か 次は勇紫の「新版歌祭文、野崎村
 之段」之れは何んだか丸で新内の様にてあまりの事に呆れ申
 したり 次は野沢語花語久の「花上野誉仇討、志度寺之段」之
 れも中出来と云ふ可けれ 次は大切住之助小住の「玉藻前旭袂、
 道春館之段」之れは中々善く出来たり 只毎度ながら感嘆の至
 なり、之れにて帰宅せり

十月六日 月曜日 朝来降雨甚

此日七時頃家を出で佐久間町より車にて学院に行く 課業事な
 く終り、拾二時前学院を出で芝公園迄乗り同所より車にて家に
 帰る、此日親父と母は高輪に出行き居りたり、二時過帰来れり、
 三時頃菓子を食べり、それより明日の課業英国国民史、論理、羅
 甸、星学、を読む、七時前姉と鶴仙に行く 此日可成の客 最
 初子染の「日蓮上人御法海、勳作内之段」先づ可成 次は稻舩
 鐘舩の「一之谷嫩軍記、熊ヶ谷陣屋之段」、之れは中々能く出来
 たり、次は語花の「恋娘昔八丈、白木屋之段」之れも能き出来、

次は勇紫の「生写朝顔日記、摩耶岳之段」、之れも可成なれど
 時々新内に成るには閉口、大切りわ住之助小住の「艷容女舞衣
 三勝半七酒屋之段」之れは非常に能く出来たりと思ふ 殊に
 「今頃は半七さん」以下非常に能く出来たり、帰宅後直ちに就
 眠

十月七日 火曜日 朝来曇且雨午後晴夜に入り星を見る

此日例の如く学院に出づ、課業事なくすみ、戸川氏と共に帰宅
 す、二時頃弥昇来る、明日の課業の下読みに着手す 五時過同
 人去る、七時前姉と共に鶴仙に行く 比佐氏跡より来れり 最
 初岡伊の「薰木累物語、与右衛門内之段」之れは御苦勞、次は
 子染の「金比羅利生記、百度平住家之段」之れは先づ能き出来、
 次は稻舩鐘舩の「三拾三間堂棟木由来、平太郎住家之段」之れ
 は能き出来には相違なきも餘り感服は致さず 其上、木遣りを
 やらざりしわ残念の至りなり、然し「それは野□の年経る身」
 云々の所は旨かりし 次は勇紫の「八陣守護城、正清本城之
 段」先づ可、次は語花語久の「源平布引滝、三人上口之段」中
 中善く出来たり 次は住之助小住の「佐倉妻恨鮫鞘、お妻八郎
 兵衛鯉谷之段」之れも非常に感服せり、毎度／＼旨い物なり
 拾時過帰宅には野崎の伯母及び小島氏来り居られたり比佐氏
 一泊す

十月八日 水曜日 朝来曇夜に入り雨

此日余は学院に出づ 心理の時間に谷内よりの手紙に接す 中
 には来る十日には岡山表え向け発足すべき手順なるが故に今晚

送別の宴を開く故来る可き由を記したり 課業終りて後伊
皿子より馬車にて帰宅す、直ちに課業の下読に着手す 四時頃
姉は横浜に帰る、少時の後谷内氏来る 氏と共に家を出て加賀
町より車にて切通坂下迄行き、それより同道して同氏の家に行
く、同氏の友数人來合せ居りて、酒數巡の後、種々談話をなし、
九時頃同家を辞す、真砂町の矢田に行き本代を払ひ近松の著作
三冊と「鎌倉三代記」を買求め本郷の家に行き親爺に逢ひ、種
種の品物を受取り近松の著三冊を谷内に届ける事を依頼し置き
て帰途真砂町より車にて帰宅す

十月九日 木曜日 朝來曇且雨

此日例の如く学院に出席す、課業別段の事なく、戸川氏と共に
帰宅す、三時頃より明日の課業の下読をなす 拾一時頃迄に江
戸紫を読み終り眠に就く

十月拾日 金曜日 朝來曇時々日光を見る

此日学院に行く例の如し、英語演説の演習をなす、不出来なり
拾二時半学院を出て三田にて麵包パンを買ひ道々之れを食し申す、
家に帰れば姉來り居りたり、二時過姉は神田に無戻りに行く、
それより暮方迄に「鎌倉三代記」を読み終る、七時頃家を出て
鶴仙に行く、最初子染の「恋娘昔八丈、鈴ヶ森之段」之れは
中々能き出来なり 次は稲舩鐘舩の「和田合戦市若初陣之段」
相変らず旨し、次は勇紫の「花雲佐倉曙宗五郎子別之段」先づ
よし、次は語花語久の「三日大平記、嘉平次住家之段」先づ可
成、次は大切住之助小住の「碁大平記白石嘶、新吉原揚屋之

段」中々能き出来なりき、之れにて帰宅す

十月拾一日 土曜日 朝來晴天晚方より曇夜に入り雨

朝八時起き、日本之文華拾九号を読む、ぐずぐずにて日を過し、
六時過家を出て加賀町より車にて麴町五丁目萬長亭に行く 餘
り広くもなき寄席なり、此夜は先づ大入りの部なりし 最初祖
摩吉の「娘景漬、花菱屋之段」先づ可？ 次は弥昇の「玉藻前
旭袂、道春館之段」之れは不出来ならん、「焼野の雉子、夜の
鶴」などは際立ちて悪るかりし、次は小住の「撰州合法辻、合
法内之段」之れも感服せず 次は「桂川連理柵、帯屋之段」東
玉相變らず旨し、さすがと云ふ處で御座る 次は呂華の「管原
伝授手習鑑、寺子屋之段」之れは可成の出来なりし、次は稲舩
鐘舩の「恋娘昔八丈、鈴ヶ森之段」之れは中々能く出来たりし、
毎度ながら感嘆の至りに候、之れにて同所を出て車にて帰宅す

十月拾二日 日曜日 朝來曇夜に入り晴

此日午前より課業の下読みに従事す、午後江橋氏來れり 氏は
何にかにありつかん為の出京とか、当分家に逗留の筈なり、夜
に入り、氏に余の文章の清書を依頼す、

* 此日谷内は岡山に行く 新橋迄送る 同所にて体重をかけた
るに十二貫五百目ありたり

十月拾三日 月曜日 朝來曇

此日学院に出で「甲乙雜誌」の草稿を集む 午後文学會總會を
開き、集議にて来月初旬同盟文学會を開く事に決す 二時頃迄
に寄宿舎にて小倉氏と共に「甲乙雜誌」を綴つ それより帰宅

す 七時迄に課業の下読み一通りすませ、鶴仙に行く、可成の客、最初子染の「¹²³」先づ可成なりし、次は稲榊鐘鉢の「薰木累物語、羽生村之段」申す迄もなく上出来なり 次は勇紫の「佐倉妻恨鮫輪、鰻谷之段」之れも先づよし 次は語花語久の「仮名手本忠臣蔵、勘平切腹之段」之れは中々の上出来正に感服致申候 大切住之助小住の「日蓮上人御法海、勘作内之段」可成りの出来なりき、之にて帰宅す

十月拾四日 火曜日 朝来曇、夜に入り雨

此日学院に出で課業無事に終り午後一時前常議員会を開き、種類の事を議し、諸氏の受持ちを定む 余は余興の方へ廻されたり 弁士は戸川、小倉の両氏と定りたり、然れども戸川氏は辞する様子なり、尙時過戸川氏と同道し帰宅す 六時頃家を出で加賀町より車にて麴町五丁目の万長に行く、途中桜田より雨に逢ひ大きに閉口せり、此夜は先づ可成の入り最初祖摩吉の語り終る頃行きたり、次は弥昇の「加賀見山旧錦絵、鳥居又助住家之段」之れは中々の不出来なりき 次は小住の「義経腰越状、泉館之段」初の調子が感服せざりしが故に聞くが者わないと高をくくって下に行きてろくに聞かざりし 次は東玉の「新版歌祭文、野崎村之段」之れは能き出来 次は呂華の「御所桜堀川夜討、弁慶上使之段」之れは可成、大切は稲榊鐘鉢の「彦山権現誓助剣、毛谷村六助住家之段」之れも先づ可成の出来、此の初の内亭の女余に下にて来りくれよと云ふに、何事かと下り行ききたるに姉の内の番地を書かされたり、九時半頃車にて帰宅す

す

十月拾五日 水曜日 朝来曇夜に入り雨

此日も学院に出で事なくすみ、和文課休みなりし故早く帰宅せり 姉来り居りたり、次いで下元氏来られたり、此日は珍らしく外出せず家にて課業を学べり

十月拾六日 木曜日 朝来晴天

此日学院に出で課業事なくすみ、昼食後高畑氏の病氣を見舞ひ、二時頃赤田、戸川、比佐の三氏と学院を立出で比佐氏に三田に別れ、帰宅す、家にて赤田氏と談話中、岡本氏来れり、二氏に本少々貸す、五時頃二氏共帰る、都の花を読み終り、蟬丸を少し読む、八時過姉横濱に帰る

十月拾七日 金曜日 朝来曇中々寒かりし

此日寢床にて「蟬丸」及び「伊達染手綱」を読み終る 九時家を出で本郷に行き松永氏を訪ひ「此主」及び「都の花」を受取り、帰宅し麵包を食す 重枝氏及び杉田と談話す 一時頃赤田氏を訪ひ同道して同家を出で上野迄徒歩しそれより浅草迄行き、公園をさまよひ遂に「ばのらま」館に入る、戦場の様今見る様な心地す さて能く出来たる物かな 中は暗くして日暮の様なる心地せり、同所を出で徒歩本郷に帰り「うどん」を食し松永氏を訪ひ同氏と共に竹町迄行き、余は寄席に入れり可成の入りなれど越路の座でわ今少し入る可き筈なり、初は路太夫花助の「伊賀越道中双六、沼津之段」相変らず旨し、言葉の自然なるにわ何時もく感服の至りなり 大切りわ越路太夫広助

の「本朝二拾四孝、十種香之段」之れは非常の出来なり 先づ「身は姫御前」以下数行及び「とのごに」云々の処及び「いかに御顔が」云々の処、「世にも人にも忍ぶなる」以下数行只あつとばかり呆れ申候 狐火の歌は琴を引きたるが、広助の三味線は非常に能かりし、越路も旨けれど広助も旨し 此処いよ御兩人と申し度し、これにて車にて帰宅す 「嬭山姥」を少々読む

十月拾八日 土曜日 朝来晴天夜に入り風

此日朝寢床にて「嬭山姥」を読み終る、朝食後「重井筒」を読む、午後老時頃より「民法人事篇」を読む、三時過比佐、相田の二氏来る、比佐氏に「此ぬし」をかす、五時頃同氏等と外出し銀座の通りを歩き本屋四五間歩き「劇の種本」をさがせどもなし、ようやく探し当てて「双子隅田川」及び「近頃河原達引」を買ふ それより帰途につき銀座四丁目にて二氏に別れ帰宅す それより「二子隅田川」を読む

十月拾九日 日曜日 朝来晴雲出づ

此日朝寢床にて「双子隅田川」と「近頃河原達引」を読み終れり、九時過より課業の下読みに取掛れり 二時過比佐、相田の二氏来る 三時頃江橋氏帰れり、即ち前の二氏と共に家を出で日本橋の先き迄行きそれより比佐氏と車にて本郷の若竹に行く 此日は中々の入りなりき、先づ最初むら太夫龍三の「生写朝顔日記、浜松之段」之れ可成なり、然し欲には今少し調子の变化あらまほし 次佐野太夫、小庄わ「玉藻前旭袂、三段目道春館之段」を語る、之れは非常に面白かりし 先づ「死出の

庚寅日記

晴衣」「焼野の雉子」など一点の申分なし、其他称す可き所感ずべき所数へきれぬ程、さてもくと許り呆れ申候 次は路太夫花助の「碁太平記白石噺、新吉原揚屋之段」之れも中々の出来なりき 次は越路太夫広助の「三拾三間堂棟木由来、三目平太郎住家之段」之れは云ふだけ野暮なれど非常に面白かりし、我等初めて此れ程の義太夫を抜かさずに語りしを聞きたり、之れ程旨き者聞きては最早此の後「三拾三間堂」は聞かずともよし、先づは旨い所を言へば、「柳の葉隠れ」、「母は今を」より「夫や子」迄、「夫れえ野に」より「形を遺すべき」迄、及び「魂中字をうる」と、殊に終りの木遣りわ突に感嘆の外なしさて名人！と呼ばんかな、目鏡より車にて三十間堀迄来りたるに火事起りたり、竹川町にて下車し、尾張町の十二月にて、しる粉及び雑煮を食せり、比佐氏家に一泊す

十月二十日 月曜日 朝来晴朝寒し

此日朝五時頃火事あり 比佐氏と共に家を出で、三田にて別れ学院に行く 課業事なくすみ、帰宅後取片付けなどなし居る内三時過重枝氏来られたり 四時過氏去る 余はそれより課業の下読みをなせり

十月二十一日 火曜日 朝来晴

此日学院に出づ、放課後高畑氏の病を見舞ふ、三時頃帰宅、家には下元氏来り居りたり、課業の下読みをなせり

十月二十二日 水曜日 朝来曇且雨

此日例の如く学院に出づ、課業終りて帰途、三田にて菓子を買

庚寅日記

ひ途にて之れを食す 帰宅後江橋氏来れり 四時前より課業の下読みをなせり

十月二十三日 木曜日 朝来曇午後時過より雨

此日学院に出づる例の如し、課業事なく終りて帰宅す、三時過より課業の下読みに着手し八時過迄に之れを終り「まあちゃん」と、をふ、べにす」の こと を読む

十月二十四日 金曜日 朝来曇午後晴

此日学院にて和知氏より金五拾五銭受取り之れを弘松氏に渡す、小倉氏と高知県水害罹災者救済金募集の事に付き少々相談す、昼食後文学会常議員会に出席す、会場を他に移すの議を出したれど敗北せり、それより三田を通り愛宕下を経て帰宅す、家には弥屏来り居りたり、四時過同人去る 夜に入り近傍を散歩し本屋にて「壇浦兜軍記」を求め、帰途柿を買ひ家にて之を食し「兜軍記」を読む

十月二十五日 土曜日 朝来曇

此日朝「兜軍記」を読み終る、拾時頃より心理学を読み昼食後は文章を書き出し七時頃漸く片付けたり、晚食中比佐氏来れり八時頃鶴仙に行く、最初は新呂太夫弥造の「恋娘昔八丈、白木屋之段」之れはあんまり気取り過る様に感服せず 次は生駒太夫仲助の「仮名手本忠臣蔵、山科の段」之れは中々面白かりき、之れにて帰宅す

十月二十六日 日曜日 朝来晴、三時過より曇

此日朝本郷に行き本屋に雑誌代を払ひ日本文学全書第七篇を取

り、家に行き、久振りにて弓を射る、本二三冊と雑物取り纏め家を出で福島氏を訪ひ種々談話の末同家を出で牛肉を買ひ萬世橋より馬車にて帰宅す、家にて江戸紫、都の花、日本之文華を拾読みす 夜に入り課業を終り、前日の文章の清書に取掛り拾一時過之れを終る 題は「想像の文学に於ける結果」なり

十月二十七日 月曜日 朝来曇昼より晴

此日学院に出で島崎氏に文学全書を渡す 何事も無く課業を終り二時頃迄に帰宅す、「まくねあ」氏に作文訂正を依頼せり

十月二十八日 火曜日 朝来晴

此日学院に出づ 事なく終り「まくねあ」氏を訪ひ、同氏は未だ訂正せざりし由を云われたれば、戸川氏と共に帰宅す 家には親父、及び葛目の伯母来り居りたり 姉も来れり 此夜姉と来る春日には兄の祭をなすべき由を決定し、新聞広告の原稿を作れり

十月二十九日 水曜日 朝来晴

此日学院に出づる例の如し、『心理学』の試験を受けたたり、「まくねあ」氏に逢ひ作文を受取り帰宅す、夜に入る迄手紙を福富渡辺、森、垣内の諸氏に出し、大同、時事の両新聞に広告を依頼す 此日河上氏来れり

十月三十日 木曜日 朝来晴午後曇夜に入り少雨

此日学院に出づる事例の如し、午後帰宅し、二時頃東京公論社に行き野崎氏を尋ね一日の事を頼むに氏は二三新聞に無料にて広告をなす事を周旋すべき由を云はれたり 六時過比佐氏来れ

り、七時過同氏と共に鶴仙に行く。客は非常に少なかりし、最初新呂太夫八重蔵の「箱根靈驗覽仇討、施行場之段」は先づ可成の出来、然し「でうれん」の様な所あり。次は生駒太夫仲助の「出世大平記、嘉平次住家之段」之れは中々能く出来たり、之れにて家に帰る。比佐氏は宿らず帰れり。天文及び歴史を讀む。

十月三十日 金曜日 朝来快晴

此日学院に出席す、事なくすみ帰宅後江橋氏来れり、午後三時過髪をつみに行き、帰れば下元氏日本歌学全書、及び新著百種を持来られたり、晚食後伊勢金及び渡辺氏来られたり。

十一月一日 土曜日 朝来晴午後曇二時頃降雨

此日朝八時頃戸川氏を訪ふ。菓子を饗せられ拾時頃青山の岡野と云ふ人來り、氏等同道して同家を出で、絵画協会にて渡辺乙羽氏に逢ふ。右諸氏と同道して薬研堀に行き、丸本一冊を得たり、即出雲作「古戰場鐘掛松」なり、拾二時少し過ぎ帰宅す、昼食後直ちにて車にて谷中に至る。茶屋には大石、早川二氏及び親爺來り居りたり。尙時頃より追々垣内、渡辺、甲藤、福富、林、山下、森、野崎、葛目、桐島、の諸氏來会せられたり、三時頃祭を終り、四時頃帰途に就く、此日岩崎、吉永、甲藤、森、葛目よりわ香奠を送られたり豊川よりわ墓前に花を供へられたり、年立ち、日暮れて今や爰に三年、嗚呼、身を以て国に尽くせし馬場辰猪わ、我此の立憲政体の設立に先立つ事既に三年に

して逝けり、余わ只帳然たらざらんと欲するも得ず、夜に入り野崎の伯母來られたり、此日わ根岸の伯母も來られぬ。

* 同家にて美妙の教師三昧を借覽す

十一月二日 日曜日 朝来晴天

此日午前家を出で上野迄鉄道馬車に乗り、それより、岩崎、吉永、豊川等に行き、早川を訪ひ、昨日の礼を述べ玉子の折を大石と阿氏に当てて差出せり。同家にて昼食し同家を辞し本屋にて都の花を購ひ、本郷の家に行き親爺に逢ひ、直ちに甲藤、千頭阿氏を訪問し、それより水道町の福富氏に至り種々談話し倭文範第二巻を借る。五時前同家を辞し車にて帰宅す、夜に入り「二十四孝」を讀む。

十一月三日 月曜日 朝来晴夕方曇

朝より都の花及び倭文範を讀む。尙時前比佐氏來れり、五時頃同氏と共に木挽町なる小西氏を訪ふ。六時頃氏等と銀座迄同道す、帰宅後間もなく、風心地なりしかば床に入れり。

十一月四日 火曜日 朝来薄曇

此日朝より風心地なれば就寢、頭痛激しければ演説の暗誦をもなさず。小説類を少々見る、鐘掛松を讀み終る。

十一月五日 水曜日 朝来薄曇且雨

此日親爺本郷より來れり、午後赤田氏來れり少時談話の末帰宅されたり。氏に文学会々費を渡す。

十一月六日 木曜日 朝来曇

此日午前比佐氏來れり、文学会を今一週間延期の旨を取計ふ可

き由の談話あり、余の風勢猛烈なり 追々食事も旨からずなれり、二時過戸川氏来れり 文学会各種々議論の末、延ばす事に決したる由語られたり、夜に入り比佐氏来れり

十一月七日 金曜日 朝来曇

此日医者に行き診察を請ひ薬得て帰る、午後赤田氏来れり 本郷に向け手紙を出す

十一月八日 土曜日 朝来曇

此日親爺来れり 午後は別になす事なく送りぬ、風心地益々苦しかりし、食事進まず

十一月九日 日曜日 朝来曇

此日朝親爺に薬取りに行きて貰ふ 拾一時頃印東氏来りて診察しくれたり 暮方横浜えの手紙を認む、「こんでんす、みるく」を買ひ来らせて之を呑む、「すふぶ」をも食せり、此日午後戸川氏来れり

十一月十日 月曜日 朝来晴

此日芝新報と云ふ種誌を福岡と云ふ人より送り来れり、氏わ亡兄の写真所望なりとの事認めありたり 午後福岡氏来れり、佐脇氏次いで来れり、五時頃二氏去れり

十一月十一日 火曜日 朝来曇

風も追々快し、午後戸川及び重枝の二氏来られたり、此日は起きたり寝たりしたり

十一月十二日 水曜日 朝来曇

此日は床を離れ演説文の暗誦をなす 晩方続けさまに草稿を七

遍読み申したり

十一月十三日 木曜日 同上

此日学院に出づ、帰宅後、演説の稽古に忙し 四時頃医者来る、余は次いで薬取りに行きぬ、佐脇氏に肺量、収縮等を量りて貰えり 夜に入りても稽古に忙し

十一月十四日 金曜日 朝来晴天

此日朝車にて学院に出席す、課業事なくすみ比佐氏の家に行く 昼食の馳走になり、それより同氏と外に出で学院に立寄りたるに裝飾掛りの連中は飾付けに大騒ぎをなし居りたり、それより同所を出で牛乳を呑み、田圃路を逍遙し演説の演習をなす、遂に御殿山に行き、枯野の中にて四時過迄下稽古をなす、中々旨く行かず、五時過比佐氏の宅にて晩食を食し学院に出づ、来賓も追々入来り、弥々六時過ぎにわ、比佐氏歓迎の演説あり、それより頌栄女学校生の音楽、次は、拙者登壇し「ゼ、エツフ エクト、ヲフ、イマジネーション、アツボン、リテレーチユア」を演じ我ながら少しも感服せず 就中、少し云ひ間違えたれば余程閉口せり、次は麻布東洋英和学校生徒、奥貫由五郎氏登壇し「我邦教育之前途」を演ず 語調落語家に類し、空言放語、一片の主旨何れにあるかを疑わしめたり、此れに明治学院生徒の音楽、次は青山東京英和学校生徒亀山氏「ステート、エンド、インデビダリティ」を演ず、姿勢、発音、共に当夜第一との評あり、拍手の中に壇を下る 氏が得意思ふ可し、次は我学院小倉銳喜氏「我が国民の品性を論じ諸君に望む」を演ず、

胸中熱血迸って胆為めに寒からしむるの思ひあり、論旨摯実、

言語勇健、当夜弁士為に顔色なし、次は頌栄女学校生徒の音楽、次は東洋英和學校生徒池田氏「グレートネス、エンド、シンパシー」を演ず 音声、時々高まりて、論旨も言語も無茶苦茶なりき 或人之れを評して火山の破裂の如しと 蓋し酷評と云ふ可し、次は東京英和學校生徒河村銀平「俠客」を演ず 之れは可成りなりけれど其の論ずる所の当否わ吾人の頗ぶる疑ふ所なり 之れにて「学院生徒」の音楽あり、「まこーれー」氏の祝辭を以て同盟文学会本部を終り之れより菓子を配る人種々の装ひをなして菓子をくばれり 次に兼松、和田、加藤等の諸氏の茶番「伯父は天保」と云ふを演ず 中々面白かりし、之れにて婦らんとしたるに或る人の余を呼びしかばF室に行きて文学会役員諸氏と菓子の残りを分つ、拾時頃車にて帰宅す

十一月拾五日 土曜日 朝来晴天

此日午前家を出て浜町に行き丸本三冊を買ひ来れり 家にて「恋女房」及び「心中紙屋治兵衛」を読む、比佐氏来れり

十一月拾六日 日曜日 朝来晴天

此日朝車にて牛込薬王寺前町に行き森氏を訪ふに不在なり 又去りて福富氏を訪ふに不在なりけり 即ち「倭文範」を返す 本郷に行く、本屋にて「日本人、都の花、江戸紫、日本の文華」を請取る、それより豊川に行く 小安に逢ひ切通坂下迄同道す、余わそれより、眼鏡橋より車にて帰宅す、家にて都の花を読む 弥昇来れり 今日より琴平に出るとの事

庚寅日記

十一月拾七日 月曜日 朝来晴

此日学院に出づ、課業事なくすみ、帰宅す 明日の下読みに忙しかりき

十一月拾八日 火曜日 朝来曇

学院に出る例の如し、事なくすみ帰宅す、夜に入りて雨激しく恰も暴風雨の如し

十一月拾九日 水曜日 朝来晴

此日学院に出でたるに比佐氏より浄瑠璃本を集めて、之れに著者の伝と略評を挿入して出版するわ如何にとの相談あり 余わ直ちに之れを賛し、随分尽力す可き由を云ひて別れたり 夜に入り榎坂町の野崎氏を訪ひ、書物の事に付き談話す、氏の言ふ所に寄れば篁村、三昧に評釈を委頼し、百川、南翠に序跋を頼まば善からん等の話あり、拾時頃帰宅せり

十一月二拾日 木曜日 朝来晴

此日学院に出で前夜の話の報告を比佐氏になす、午後地質学の試験を受く、事なくすみ帰宅す、此日弥昇来れり 明日わ横浜え病気見舞に行く可き由を云はれたり、夜に入り琴平に行く 最初、弥昇が「日吉丸稚桜、五郎助住家之段」先づ可成 次わ東玉の「恋女房染分手綱、杏掛村之段」之れは中々旨し、次は奈良梅が「日蓮上人御法海、身延山之段」此の人は、餘り一調子にて感服せず 今少し工夫ありて然る可らん 次は呂華の「生享朝顔日記、宿屋之段」中々能く出来たり、然し声を痛め居られたる故か少し物足らぬ心地せり、次は稲俣鐘軒の「玉藻

前曦袂、道春館之段」先づ可成に出来たり、就中「焼野の雉子」を申分なし 此れにて帰宅す

十一月二拾一日 金曜日 朝来薄曇

此日学院の帰途比佐氏を訪ひ同氏を待ち合せ午後晚食前同家を出で、家に立寄り直ちに南伝馬町の吉川に行き「日吉丸若木桜」を求めそれより日本橋手前にて車に乗り葉研堀に行き「仮名手本忠臣蔵」を買ひ中井に行きたるに明日丸本が少し来る由を言ひたるに其假帰宅せり 家には山本氏来り居りたり、晚食後、余は榎坂町に行き野崎氏を訪ひ少々談話す、就眠前「行平磯馴松」を読む

十一月二十二日 土曜日 朝来雨

此日朝拾時過中井に行き丸本五冊買ひ求めて来れり それより帰宅後麻布に行き本を見せ「矢口渡」と「安達原」とを置きて帰宅す、此日野崎氏を訪ふ

十一月二拾三日 日曜日 朝来晴

姉横浜より来れり、午後新堀町に行き、氏家氏を訪ふ不在なり 去つて巴町の森氏を訪ひ、品物を見に行く故同道してくれとの旨を談す 家に歸りて下読少々なす、午後四時前弥昇来れり 姉と越路を聞きに行く約束をなせり、余は五時過新橋停車場に行き電信を出し置き直ちに玉の井に行く 最初はむら太夫龍三の「鎌倉三代記、三浦別れの段」之れは別に感服もせず 次は佐野太夫小庄の「薰木累物語、身売之段」之れは非常に感服せり 次は道太夫花助の「芋源氏、伏見里之段」大分上品に

語られたり 大切は越路太夫花助の「近頃河原達引堀川之段」之れは実に能く出来たりと思ふ 就中「女膚には白無垢や」云云の鳥部山の歌は流麗とや評さんか、只彼の小流の潺湲たる響を発して流るるにや比すべき、中入頃氏家氏が余を呼び出しに來りたり、玉の事の話あり、九時過帰宅す

十一月二十四日 月曜日 朝来晴

此日学院に出づ 拾二時頃国会祝典を挙ぐる為休日の件を議す 午後に至りても休日々割極らず 依て在宿塾生に謀り明日を休日と定む 午後四時頃比佐氏の宅に行き氏と共に「玉の井」迄来り余わ先きに帰宅し、一食し直ちに車にて琴平に行き弥昇に逢ひ、跡より車にて来る可き由を言ひ置き、車にて「玉の井」に行く 最初は佐野太夫小庄の「加賀見山書錦絵、尾上部屋之段」相変らず中々旨し、毎度ながら熱心なるわ感服致申す 次は道太夫、花助の「双蝶々廓日記、引窓の段」之れは非常に老練なり 斯の如き者を語らせては、五分のすきもなき心地せり、取分け「それも云はずに去ばく」の言葉は、宛然曲中の人物躍り出たる如き心地せり 扱大切りわ越路太夫、広助の「絵本大功記、十段目尼ヶ崎之段」之れは中々面白く感じたり、とりわけ「夫の討死遊ばすを妻が知いで」以下数行「胸は八千代の玉椿」以下数行其の他の妙所には「主を殺せし」以下操の前の口説、初菊の嘆等枚挙に暇あらぬ程扱も名人と申すの外なし、七時過弥昇来りしかば即ち相伴て帰宅す、拾時過、同人帰れり

十一月二十五日 火曜日 朝来曇帝國議會招集日

此日朝より「大功記」及び「帚常盤」を読む午後子安氏来りて昨日は何故か学校の課業ありし事を話されたり、氏去つて晚方比佐相田の二氏丸本沢山持つて来られたり、余は其中より「祇園女御九重錦」を借る 七時過琴平亭に行き「矢口渡」が朝倉と云ふ本屋に有るか何うかと云ふ事を見て来てくれよと云ふ事を依頼す、此夜浄瑠璃四段聞きぬ 拾時過帰宅す 寄席にても「祇園女御」を少々読む

十一月二十六日 水曜日 朝来晴天

此日学院に出て課業事なくすみ帰途「いんぎ、筆、紙」等を買ふ 夜に入り寄席に行き四段聞きぬ、帰宅後「祇園女御」を読む

*千両幟の掛合ありたり

十一月二十七日 木曜日 朝来薄曇

此日朝拾一時過学院に行く、礼拝堂に於て祝詞の朗読あり、右終りて午後七時より学院運動場に於て、焙爐破、旗奪等の運動をなし煙火を挙げ夜に入れば火を焚きて祝意を表せり比佐氏わ運動の際頭部を打ちし為めに大弱りに成り居られたり、七時前学院を出て帰途に就き琴平に行く、四段、浄瑠璃聞き申したり、扱切りわ「壇浦兜軍記、琴責の段」総一座の掛合、弥昇の岩永稻舩の阿古屋、呂華の畠山等先づ無難なりき 拾時過帰宅す

十一月二十八日 金曜日 朝来薄曇

此日朝「祇園女御」を読み終れり 比佐氏を訪ふ 未だ寝て居

庚寅日記

りたり、夜に入り琴平に行く、五段ばかり聞きぬ、切りわ「妹背山女庭訓吉野川の段」にて中々面白かりし 中にも鐘舩、祖摩吉のやりそこなひにて皆々抱腹せり、拾時過帰宅せり

*衆議院議長中島信行、同副議長津田真道の両氏裁可せらる

十一月二十九日 土曜日 朝来晴

此日朝より本郷に行き雑誌代を払ふ 谷中に国会開設式及び議長、副議長等の稟告に行けり 余わ美に遺憾なり、多年民権説を主張し、今比の盛式に逢ふを得ずして、空しく地下の鬼となりしわ何事ぞ、国会の声は只余をして涙に咽ばしむ、然れども余は公私の別を知るものなり 故に余は国民として此の千載一遇の盛典を祝賀す、然雖ども猶余の胸裏には、此の国会なる語の為めに起す所の一種の感情が長えに消えざらんと信ず、余は我兄の墓に詣り、一方よりしては我國の不幸なる一愛国者と云ふ点よりし、他の一方よりわ我兄として、一菓の莫実を供へて以て我大日本帝國が希望の曙光を得たるを告ぐ、其二三ヶ所の墓を見舞い帰宅す、夜に入り琴平に行き、浄瑠璃五段ばかり聞く、切りわ「七福神春日遊」にて中々面白かりき、拾時過帰宅す

十一月三十日 日曜日 朝来晴

此日朝より課業の下読みをなせり、夜に入り寄席に行けり 此の夜わ「忠臣蔵」の通しにて最初、東玉の「扇ヶ谷」にて中々旨かりし、次は「二ツ玉の口」を祖摩吉語る、次は呂華の「二ツ玉」先づ可成なりき、次は「身売の口」祖摩吉、次は「身

売」奈良梅、先づこんな物？ 次は稲枿の「六段目勸平切腹の段」中々能く出来たり、毎度ながら感腹、敬服、扱大切わ「七段目一力之段」総一座掛合、今一々評すれば、先づ稲枿の由良、呂華のお軽、奈良梅の平右衛門先づ可成り、其他は先づ無難、拾時過帰宅

拾二月一日 月曜日 朝来晴

此日学院に出て居りたるに福富孝倫氏死去の趣きを聞きて大に驚き直ちに学院を終り馬車にて上野迄来り福富氏の葬式に会するを得ざる旨を吉永迄挨拶に及び、帰宅せり 夜に入り課業の下読みをなせり

十二月二日 火曜日 朝来曇

此日朝後れしかば、車にて二本榎迄行き、それより学院に行く、此日午前経済の試験ありたり、帰宅後下読みをなし、姉母と共に鶴仙に行く、最初「日蓮上人御法海、奈良梅」餘り感服もせず 次は錦、海老造の「源平布引滝、松浪檢校琵琶之段」先づ可成 然し餘程べろれん風なり、大切は稲枿鐘枿の「奥州安達原、袖袂祭文之段」之れは先づ善き出来なりき、此夜は薬屋より鮪を貰いたり 拾時過帰宅、課業の下読みをなせり

十二月三日 水曜日 朝来晴

此日学院に出づる例の如し 姉横浜に帰りたり 家にて翌日の課業の下読みをなせり

十二月四日 木曜日 ……

此日学院に出る例の如し、帰宅後夜に入り鶴仙に行く、最初奈良梅の「蘆屋道満大内鑑、葛の葉子別之段」別に際立ちし事もなかりき次は錦、海老造の「染模様妹背門松、質店之段」之れは可成、切、稲枿鐘枿は「王藻前旭袂、道春館之段」之れも中能く出来たり 例の「焼野の雉子」も申分なし、余わ只其の熱心なるに感ず 寄席にて「蘭園待」を読む

十二月五日 金曜日 ……

此日は に出る例の如し、帰途比佐氏の宅に立寄り種々談話す、帰宅後夜に入り鶴仙に行く 蓋し弥昇に本を買来る事を頼む為なり 最初「国性爺城門之段」岡伊、次は弥昇の「釜ヶ淵双巴釜入之段」先づ可成 次は小竹海老造の「御所桜堀川夜討、弁慶上使之段」之れは中々旨かりし、余わ大きに感服致したり 次は奈良梅の「増補忠臣蔵、本蔵下屋敷之段」之れも可成 次は稲枿鐘枿の「近頃河原達引、堀川之段」此は相変らず善く出来たり 切は錦の「菅原伝授手習鑑、寺子屋之段」之れも先づ善き出来ならんと存ず、寄席にて「蘭園待」を読み終る

十二月六日 土曜日 朝来晴

此日朝相田氏来れり「二拾四孝」を受取る、野崎氏を訪ふに不在なりしかば、新聞社にて同氏に逢ひ種々談話す、午後比佐氏来れり 夜に入り鶴仙に行く、最初岡伊「……」 次は弥昇の「新版歌祭文、野崎村の段」此れは先づ可、次は小竹の「傾城阿波鳴門十郎兵衛内」之れは先づ中位、次は奈良梅の「伊賀越

道中双六、遠目鏡之段」只猥褻なるには閉口せり 次は錦の「花上野誓仇討、志渡寺之段」先づ中以下宛然たる祭文のなし切りは「大功記、十段目」稻舂随分旨し、「主を殺せし」以下中々の出来、毎度敬服の至りなり拾時過帰宅

十二月七日 日曜日 朝来晴

此日課業の下読みなし、夜に入り野崎氏を訪ひ本を渡す

十二月八日 月曜日 同上

此日学院に出席する事例の如し、小島氏に「矢口」を止めて何にか他の者を用ひる事を話す帰宅後下読みを終り鶴仙に行き弥昇丸本を買ひ来る事を頼む 最初錦の「忠臣蔵扇ヶ谷之段」餘り感服致さず 次は稻舂の「蝶花形、小坂部館之段」之れは相変らず旨し「一百三拾六地獄之苦」云々中々能く出来たり、拾時過帰宅就眠

十二月九日 火曜日 朝来晴

此日学院より帰宅後下読みをなし、新聞社に行き野崎氏を訪ふに帰宅後なりければ手紙を出す、鬼外の代りに出雲の伝を書く事を委頼す

十二月拾日 水曜日 朝来晴

此日学院放課後比佐氏を訪ひ、書物の事に付き談話す 帰途日蔭町に於て「菅原」を買ひ求む 其時「雪女五枚羽子板」を持居る由の話を聞けり 夜に入り錦の「艶容酒屋」稻舂の「和田合戦市若初陣」を聴く

十二月拾一日 木曜日 同上

庚寅日記

学院より帰宅すれば中村氏来られたり、彼の書物の事を話したるに節付けをしてはどうかと云ふ説ありたり、余も至極面白からんと思ひたり、晩方弥昇来りぬ、但し姉は前より来り居りぬ夜に入り三人にて鶴仙に行く、最初の「三拾三間堂棟木由来、平太郎住家之段」之れは可成 然し木遣りわ恰度、米山甚句の様な所ありたり 次は奈良梅の「箱根靈驗誓仇討、三人上口之段」随分の不出来今少し抑揚あらばと思ひたり、次は稻舂の「金比羅利生記、百度平住家之段」中々の上出来なり、取分「七度契」云々、及び「西も東も知らぬ道」等は実に嘆服の至りなり、大切りわ錦の「女景清八嶋日記、日向島之段」之れは餘り感服せず 帰宅後心理学を読む 中村氏泊られたり

十二月拾二日 金曜日 朝来曇

朝中村氏と談話せしかば時間が少々後れしが故に車にて三田迄来りそれより学院に出づ、帰途比佐氏を訪ふ 帰宅後、夜に入り鶴仙に行く、最初小竹の「三日大平記、嘉平次住家之段」之れは善き出来なりき 次は奈良梅の「生写朝顔日記、浜松之段」先づ可成、次は錦の「奥州安達原、袖萩祭文之段」餘り感服せず 大切、稻舂の「日蓮上人御法海、勘作住家之段」は非常に能く出来たり 勘作の言葉とお伝の愁嘆わ勝れたる出来なり 余は思わずも涙下れり

十二月拾三日 土曜日 朝来薄曇午後雨

此日朝野崎氏を訪ひ書物の事を委頼し昼食後の御馳走に相成り帰宅す 宥時過より家を出て浜町に行き「軍法富士見西行」管

原」の二書を買求む、帰途国会新聞社に行き野崎氏に「菅原」を渡す事を頼む、帰宅後「天文」を読む、夜に入り鶴仙に行く、最初稻舂の「生写朝顔日記、宿屋之段」非常に能く出来たり「元私わ中国生れ」以下の佐和理わ妙々や云はん、次は彼の「領布振る山」わ中々旨かりき、切わ錦の「撰州合法辻、合法内之段」始め方を少々聞きて帰宅せり

十二月拾四日 日曜日 朝来薄曇時々雨

此日午前野崎氏を訪ひ、根岸への車代を渡す、拾時頃家を出て本郷に行く、松永氏を訪ひて昼食を饗せらる、午後二時頃小石川表町の中村氏を訪ふ、留守なりければ暫時待ち居りたるに帰宅せられたり、種々談話し晩食を饗せられて帰宅す、同家にて佐伯氏に逢ふ

十二月拾五日 月曜日 朝来晴

此日天文の試験をのぼす事を教師に談判す、経済の試験を明日なす由を言われたり、帰宅後下読みを忙し

十二月拾六日 火曜日 朝来曇

此日数学の試験をなす由を云はれ三題出たりしが余わ皆出来たる積りなり、午後経済は皆出来たり、帰宅後下読みをなし、且聖書を読み拾二時頃迄起きて居りたり、之れは明日聖書の試験あるが故なり

十二月拾七日 水曜日 朝来晴

朝聖書の試験ありしが大きに閉口の至りなりき、然し何うか此うか胡摩かしたり、帰宅後明日の試験の準備をなす、前日に懲

りて、本に「あなりしす」を書ひて置きたり

十二月拾八日 木曜日 朝来晴

此日聖書の試験には書より「解分」を写し取りて胡摩かしたり、数学の試験わ一つも出来ず大きに閉口したり、天文と歴史は何うかこうか切り抜けたり、帰宅後心理学及び論理学を読む、七時過鶴仙に行く、奈良梅の「彦山権現誓助剣六合村六助住家之段」餘り感服も出来ず、次は小竹の「伽羅先代萩、御殿之段」今少し工夫あれ、あんまりひねってこんやくの如き所ありたり、切わ稻舂の「義経腰越状、泉三郎館之段」先づ可成の出来なる可し、姉来れり

十二月拾九日 金曜日 朝来晴 朝氏家と云ふ人の所へ行く

此日朝八時より試験を受け心理、論理、聖書の三の試験を受け大きに弱りたり、それも拾一時迄に胡摩かして比佐氏を訪ひ本の事に付き少々談話し拾二時過帰宅す、野崎の伯母、高屋、弥昇等来れり、午後四時過宮松に行く、最初は越尾の「忠臣蔵、勘平切腹の段」先づ可成、次は村太夫の「鎌倉三代記、三浦別の段」先づ無難、然し今少し調子に変化あらばと存する、次佐野の「八百屋の献立、八百屋之段」相変らず旨し、実に其の熱心わ以て聴衆を動かすに足る——未来多望の士なり、余わ数年の後名人の資格を氏に於て見出すを喜ぶ者なり、次は路太夫の「恋女房染分手綱、重の井子別の段」之れは中々さびあれど餘り感服わせざりし、扱大切わ竹本越路、豊沢広助「撰州合法辻、合法内之段」先づ「深々たる夜の道」より歌ひ出して尾に至る

まで一点のだれ気味なく、或は峯の松風かと疑われ或は潺湲たる小流の岩に激するかと思われれば忽焉千草にすたく虫の音なるかと疑われ、又時として遠雷の稍く近づくが如き思あり、実に聴く者をして思はず涙下らしむ、其技神に入り微に入ると云ふ可し、殊に「聞く子や妻は内と外、顔とくは隔つれど」と云ひ「云ふても親子の道を立て難面返事堅い程猶いやまさる恋の淵、いつそ沈まば何処迄もつ跡を慕ふて歩徒足、あしの浦々難波瀉、身を尽したる心根を不便と思ふて共々に」と云ふに至りては只流麗とや云わん艶富とや云はん猶彼の「南無阿彌陀仏」に至りて此感猶一層深きを加へたり、九時頃帰途に就き鶴仙に行き弥昇に「合法」の本を借る、拾時過姉帰来れり

十二月二十日 土曜日 朝来晴

此日午前野崎氏を訪ひ、「二拾四孝」と「菅原」わ三昧の手へ渡したる由を言われたり、拾二時過氏と共に帰宅す、氏には中村氏来り居られたり、氏わ声曲類纂を借してくれたり 種々談話し晩方二人にて「合法」を読む 弥昇来れり、晩方中村氏去る夜に入り髪をかり鶴仙に行く 最初弥昇の「明烏夢泡雪、山名屋之段」之れは先づ…… 次は奈良梅の「妻重恨鮫鮫、鰻谷之段」之れも感服致さず 次は小竹の「鎌倉三代記、三浦別の段」中々能し 次は稻舂の「八陣守護城、正清本城之段」之れは能く出来たれど時々云ひ間違のありしわ残念なりき 錦の「志渡寺」わ六に聴かず帰宅せり

十二月二十一日 日曜日 朝来晴

庚寅日記

朝豊川を訪ふ、豊川に逢ひ、中村氏の事を話し家父の事に付き少々談話す、早川を訪ひ芋の馴走に相成り、午後二時頃中村氏を訪ふ、種々談話し晩食を饗せられ、七時前相伴ふて若竹に行く 最初小政の「天網島時雨炬燵、紙治内之段」中々旨かりし次は駒之助の「御所桜堀川夜討、弁慶上使之段」之れも可成なり 然し能くも呂華に似たる物かなと思ひぬ、次は小緑音女の「大平記忠臣講釈、重太郎出立之段」之れは中々上品に出来たり、然しあんまり気取るのは止めたら能からん 次は綾之助鶴加津の「絵本大功記、十段目尼ヶ崎之段」先づ例の如く「入りにけり 残る蕾の花一つ」より歌い出し総体艶たつぷりにて語られしかば破るばかりの喝采なりき、殊に「胸は八千代の玉椿」以下「主を殺せし天罰」以下操の口説等は勝れたる出来ならんと存ずる 此れにて中村氏方に一泊す しきりに話しをなして拾二時過就眠

十二月二十二日 月曜日 朝来晴

此日中村氏と共に豊川に行くに同人は留守なりき、それより中村氏と別れ福島を訪ひ昼食及び晩食を饗せられ旭町迄行き、それより立戻りて若竹に行く 前日に劣らぬ入りなりき最初わ子染の「加賀見山田錦絵、鳥居又助内之段」先づ無難？ 次は小政の「同上、尾上部屋之段」此れは中々旨かりし 次は駒之助の「恋娘昔八丈、鈴ヶ森之段」之れは相変らず伶俐に語られたり、稻舂の呂華とを一所にした様な工合なりき 次は小緑の「玉藻前囃袂、道春館之段」中々能く出来たり、就中初花と

庚寅日記

桂姫と互に死を争ふ所は一際目立ちて感服せり。然し「燒野の雉子」云々わ今少しと思ひ侍りし。扱大切わ竹本綾之助の「生写朝顔日記、宿屋之段」之れは中々能くしてのけられたり。旨い所は「露のひぬ間」其少し前及び「元私わ」以下の佐和理の中に「恋しく、目に泣き潰し物の、黑白も水鳥の陸にさまよふ心地して」「領布振山」等なりき。車にて帰宅す。

十二月二十三日 火曜日 朝来晴

此日午前麻布に行きたるに高崎氏わ「りうまちす」で寝て居られたり、本の事を種々談話し原稿紙を受取りて帰宅す、江橋が三時頃来りて同人に「菅原」の騰写を依頼す、夜に入り鶴仙に行く、最初わ弥昇次は奈良梅の「恋女房染分手綱、重の井子別の段」中々感服は出来不申候次に小竹の「金比羅利生記、百度平住家之段」之れは中々能き方とわ言えず。然しちつとは旨し錦の「薰木累物語、土橋之段」之れも感服せず。中村氏わ曰くあれでも浄瑠璃かと、大切稲舩の「彦山権現誓助剱、六助住家之段」中々善く出来たりと存するなり、銀座通を歩きて帰宅す。
* 中にて中村佐伯両氏に会す

十二月二十四日 水曜日 朝来曇午後は雨

此日朝寝過しにけり、午前より「猿丸太夫」及び「千本桜」を讀み終れり。

十二月二十五日 木曜日 朝来晴風あり寒し

此日朝六時半寝起七時過車にて水道端迄来り、それより表町の中村氏を訪ふ。氏と共に豊川を訪ふ、丁度出掛けなりにしに因り

銀行に行く事にし時計を受取り、本郷の家に行き一円貰ひ、それにて時計の直し代をすまず、拾考時過銀行に行き少時待ちて豊川に逢ひ、中村氏に書生に來らぬかと云ふ話あり、氏も承諾の傾なりき、同所を出て外神田にて昼食し、車にて書籍館に行く、休みなり、それより徒歩表町に行く、道にて岡野の菓子を買ふ、本屋にて「文学全書九篇」及び「好色五人女」を取りて表町に着す。中村氏風心地にて大分苦しうなりければ、四時頃同家を辞し車にて帰宅す。

十二月二十六日 金曜日 朝来曇

此日「大内裏大友真鳥」を讀む。弥昇来れり。

十二月二十七日 土曜日 朝来曇

此日都の花五拾二、三両号を讀み夜に入り「軍法富士見西行」を讀み終れり。高屋氏来られたり。弥昇も来れり。但し鶴仙わ当夜を本年の最終興業とす。

十二月二十八日 日曜日 朝来曇

此日午前より「大平記忠臣講釈」を讀む、高屋の子息来れり。三時前家を出て中村氏を訪ふ。同氏わ先日來苦さを加へたる由を言われたり。晩食の御馳走に相成り松永氏をも訪ひ、雨を冒して車にて帰宅す、家には姉来り居りぬ。草郷も追々困難の場合なるに因り余の学資わ豊川にて借用する分にせよとの話あり。直ちに歸去れり。金三円貰い受く。

十二月二十九日 月曜日 朝来晴

此日朝豊川に行き。同人に学資の事を話す。快く承諾してくれ

たり 午前本郷に行き親父に逢ひ鯛を買ひて日吉町に帰り荷物
を纏めて居る中に弥昇来れり、杏円貰いて四時前豊川に来れり
六時過洗濯屋に行き本郷に行くに留守の様子なりしが故に去つ
て真砂町にて下駄を買ひ、福島氏を訪ひ少時談話の末八時頃勸
工場に行き、股引及び状袋を買ひ出来りたるに福島氏は大に嘯
まれしかば医者を呼び来りて治療を加えぬ 拾壹時頃同家を辞
し豊川に来り拾二時頃就眠

十二月三拾日 火曜日 朝来曇時々雨

此日朝お安えの手紙及び学資の予算を書き、それより草郷への
手紙をも認む 垣内氏に逢ふ、拾時過豊川は出行けり、それよ
り余は此の日記の内去月二十三日より書き始め当月二日頃迄書
きそれより外出し、車にて新小川町迄行き小泉氏を訪ひ妻君に
逢ひ珈琲器を遣りたり 去つて中村氏を訪ふ 密柑を贈る 氏
は大きに快き由なり 氏を辞し福島氏を訪ひたるに氏も大きに
快き方なり 本郷に行くに家には葛目の伯母来り居りたり、本
屋にて日本人、新著百種号外及び、衛生療病志の三書を求め四
封紙二百枚を買ひ、横浜に郵便を出す、五時前豊川に帰着す
晩食後此の日記を今日迄書く 随分日柄も立ちたるが故に忘れ
しもあり事実を誤りしもあり、さるからに、事の前後したる等
は間々多からんと信するなり此日拾壹時半就眠

十二月三拾一日 水曜日

此日朝七時過寝起、八時過矢野氏より金を預る、朝食後新著百
種、号外(紅葉著新桃花扇及び巴波川)を読み終る 結構簡單

庚寅日記

にして行文益々流暢になりたり、然し巴波川のお萬の書置中に
「一度男に肌触候得者一時に病発りて」云々とあるわ前に此女
の経験がある様なり、然し著者も其積りにて書かれたるとあら
ば是非なけれど、それにしても猶面白からぬ考ならんと存する
さわ云ふ者の筆力周到、写す所、真に近し 氏は世間平凡の事
を脱化して以て一部をなす、之れ蓋し氏の明治の西鶴たる所以
か、余わ只文章わからず、其着想に至りては氏の西鶴に勝る点
多々なるを認むる者なり 午前より諸所の私をなす、五時過矢
野氏に金を引渡し晩食し六時龍岡町を出で、萬世橋より鉄道馬
車にて京橋迄来る さすが歳尾今日一日と押詰りたる故、諸所
賑ひ甚し日本橋近傍は道傍に露店の小屋掛様の者を多く見受け
たり、銀座通りも相応に賑ひぬ、日吉町に帰着すれば武藤氏及
び弥昇来り居りて浄瑠璃を語り居りたり 同人は「恋娘昔八丈
鈴ヶ森」を語り、「先代萩」「朝顔日記宿屋」の佐和理を語れ
り 姉より四拾銭貰ひ、他に三拾銭中村氏への贈り物代として
受取る 九時過武藤去り次いで姉も帰る、弥昇も九時半過に帰
りぬ、余わ外出し、帽子、手巾、菓子を買ふ、拾壹時過親爺が
酔ふて詰らぬ管をまきて大閉口致せり、嗚呼、月去り月来り、
明治二十三年は今日を以て終れり、今此の年間に余わ如何なる
事を成し遂げしやを思ふに余わ実に我ながら茫然、漠然、一の
捕獲する所なきにぞ驚きぬ、先人「^{こと}」日誌を作りて、
嘆して曰く思ふ事半だに遂げずと、嗚呼余わ、猶一步を進めて
曰はん、思ひし事、一も遂げずと、年の始毎に余わ此年こそは

と所存の贖を堅むれど、さて其年に成ると中々左様には行かず、相変らず空々然と光陰を消費するわ、実に嘆ず可きの至りならずや、然れども余わ言はん、又來年よりわ余は一層奮進すべしと、然し此れも当にわならず、扱此の年の内余の一身上に起りたる所の事件内重なる物次の如し、三月半頃日吉町に居を定めたると博覽会を見物したると、六月競技演説をなし、同二十四日写真を写し同二十五日、二等賞金五円を得たると、九月には弥々四年級になり経済、心理、論理等を学を始めたると、質店の格子戸潜りたると、媚引出の返却の便を頼まれたると、拾二月三十日、豊川より学資を借る事にしたると、中村啓次郎氏を知るを得たると、丸本を少々読みたると、日本文学全書、同歌学全書を求め出したると、弥昇なる人を知りたると、越路の浄瑠璃を聞きたると、拾一月十四日同盟文学会の弁士として英語演説をなしたると、夏腸胃加多兎に罹りたると、義太夫を聞きし事の非常多くなりし事わ次の統計にて知れ、先づ七月迄わ前に出しあれば……八月、鶴仙へ一度、小政一座にて四段、宮松へ八度、稲榊東玉、一座にて四拾一段、小川亭へ三度、稲榊東玉、土佐栄一座、拾一段、計五拾六段、九月、新柳へ二度、稲榊小政一座十四段、鶴仙へ二度、綾之助小住、一座、十段、琴平へ三度、小政一座、拾四段、若竹へ一度、綾之助東玉一座、三段、計四拾四段、拾月、鶴仙へ七度、住之助稲榊一座、三拾七段、万長へ二度、稲榊東玉小住一座、拾二段、若竹へ二度、越路一座、六段、鶴仙へ二度、四段、生駒太夫一座計五拾九段、

拾一月琴平へ七度三拾五段、稲榊東玉一座、玉の井へ二度、越路広助一座にて七段の計四十二 拾二月、鶴仙へ十一度、四拾段、稲榊錦一座、宮松へ一度、越路一座五段、若竹へ二度、綾之助小緑、小政一座、九段計五拾四段、外に本日弥昇に巷段聴く、合計二百五拾六段、之れを巷月分より通算する時は四百五拾四段となるなり……余わ拾巷月頃より院本集を発売せんと非常し居るなり、余わ此の年一友を失ふと共に一友を得たり、即ち、谷内岡山に行き、江橋山形より来れり、

嗚呼此の二拾三年わ実に日本国民として長く記憶すべき大切な年なり、此れに於て我第一期国会開け之れより吾人は立憲政治の旅に上れり、然れども其間此れに伴ふ幾多の□聞なしとせず、只余わ、此年を送り、且、余の此の千載一遇の盛典を拝するを得たるの年を無事に生息せしを喜ぶ者なり、明治二拾四年 巷月朔日午前巷時二拾二分筆を擱す

馬場孤蝶略年譜

明治二(一八六九) 1歳

一月八日(戸籍では、明治三年一月九日)高知市金子橋(現在、高知市升形九番地)に生る。本名は勝弥。父は土佐藩士馬場来八、母は寅子。兄に源八郎氏永(明治六年没)、辰猪(明治二年没)、姉駒子(のち東京の草郷清四郎に嫁す。草郷は慶応義塾で教え、明治生命保険の監査役)。妾腹の兄妹に喜久衛(明治一五年没)、小鶴(のち東京の医師黒岩徳明に嫁す)がある。

明治一(一八七八) 10歳

五月、父母に伴われて長兄源八郎の遺子安子とともに上京、姉駒子の婚家草郷家に落ちつく。身体弱いため就学をおくらす。

明治二(一八七九) 11歳

四月、下谷茅町忍ヶ岡小学校入学。

明治三(一八八〇) 12歳

この年、年上の姪安子、豊川良平(のち、三菱銀行頭取)に嫁す。

明治一七(一八八四) 16歳

馬場孤蝶略年譜

この年、神田の共立学校(のち開成中学)に入学。同級生に平田禿木、桑木巖翼、瀧精一、片山貞次郎らがおる。

明治一八(一八八五) 17歳

一月二日、次兄辰猪、爆発物取締条例違反の嫌疑で、大石正巳とともに投獄さる。

明治二一(一八八八) 20歳

一月一日、辰猪、米国フィラデルフィアにて死去。享年三九。

明治二二(一八八九) 21歳

一月、共立学校を退学し、明治学院普通学部第二学年に編入。同級生に島崎春樹(藤村)、戸川明三(秋骨)らがおる。

明治二三(一八九〇) 22歳

いつ頃より日記をつけ始めたか明らかでないが、明治学院在学中から日々丹念に日記を誌し始めている。

明治二四(一八九一) 23歳

六月二十四日、明治学院普通学部卒業。八月、相州酒匂の松濤園で尾崎紅葉を知る。

二月一四日、高知市、私立共立学校の教師として赴任。

明治二五(一八九二) 24歳

八月一日、暑中休暇で東京に帰る。眼病にかかる。

一〇月、駒子の長子太一を伴い高知に歸る。

明治二六(一八九三) 25歳

二月、藤村、高知に来訪。

春、得月樓にて板垣退助歓迎の辞を述べる。

八月、共立学校を辞任、帰京す。

九月、日本中学の教師となる。ついで、築地の福音教会牧師フィッシャの書記をなす。

十一月、長詩「酒匂川」を「文学界」に発表。

十二月、評論「想海漫歩」を「文学界」に発表。

明治二七(一八九四) 26歳

一月、小説「片羽のをしどり」を「文学界」に発表。

二月二日、樋口一葉を知る。

三月より五月まで、さらに八月、「流水日記」を「文学界」に発表。

九月、詩「破三味線」を「文学界」に発表。

九月より十二月まで小説「みをつくし」を「文学界」に連載。

十一月、詩「孤雁」を「文学界」に発表。

明治二八(一八九五) 27歳

一月、「かれ野」を「文学界」に発表。

三月、詩「すりごろも―別れ路」を「文学界」に発表。

六月、翻訳「かたみの絵姿」を「文学界」に発表。

七月、随筆「我おもしろの記」を「文学界」に発表。

八月、随筆「蝶を葬むるの記」を「文学界」に発表。

八月、杉浦重剛の推薦で、滋賀県彦根中学に赴任。

明治二九(一八九六) 28歳

一月、随筆「柴刈る童」を「文学界」に発表。

八月、翻訳「荒磯」(バルザック原作)を「太陽」に発表、はじめて原稿料をうる。

十一月、樋口一葉の病床を見舞う。

明治三〇(一八九七) 29歳

一月、彦根中学を辞任、帰京す。

二月、浦和中学に赴任。

十一月、日本銀行文書課に勤務。

この年、森川町の藤村の下宿で斎藤緑雨を知る。

明治三一(一八九八) 30歳

一月、小説「雪の朝」、詩「みちしば」、磯尾のけぶり」を「文学界」終刊号に発表。

八月、小説「雪のあした」を「文芸倶楽部」に発表。

この年、森川町の緑雨の下宿で、田岡嶺雲、久津見厥村、幸徳秋水らを知る。

明治三二(一八九九) 31歳

春、高知県人上村氏の長女源子と結婚。

六月、「野路の花」を「読売新聞」に発表。

九月、翻訳「心の限」(バルザック原作)を「文芸倶楽部」

に発表。

明治三三(一九〇〇) 32歳

七月、長女照子生る。

一〇月、小説「絵すがた」を「文芸倶楽部」に発表。

明治三四(一九〇一) 33歳

一〇月、美文「湖畔の秋」を「明星」に発表。

十一月、美文「秋のゆふべ」を「明星」に発表。

十一月、短詩「湖山秋風」を「明星」に発表。

十二月、美文「浦光響影」を「明星」に発表。

明治三五(一九〇二) 34歳

一月から五月まで、紀行文「浦分衣」を「明星」に連載。

五月、翻訳「楽人のねたみ」(ドーデー原作)を「文芸界」

に発表。

六月、翻訳「夏の夜」(ドーデー原作)を「明星」と「白百

合」に発表。

七月、次女晴子生る。

七月、蒲原有明の推薦で文集『野守草』(新声社)刊行。

八月、詩「友を悼むの歌」を「明星」に発表。

九月、翻訳「秋の一夜」(ゴルキイ原作)を「明星」に発表。

九月、「常久のうらみ」(モーパッサン原作)を「新声」に発

表。

十二月、父来八没す。享年八〇。

十二月、美文「寢覚の記」を「明星」に発表。

馬場孤蝶略年譜

この年、与謝野鉄幹・晶子夫妻と親交を深む。

明治三六(一九〇三) 35歳

一月、翻訳「鐘の音」(モーパッサン原作)を「新声」に、

翻訳「苦闘録」(バルザック原作)を「明星」に発表。

二月、美文「浴泉日記」を「明星」に発表。

三月、「書牘一則」を「明星」に発表。

春、森田草平、生田長江、中村古峯、栗原古城、辻村鑑らと

知りあい、草平宅で一葉会を催す。

四月、美文「冬の夜」を「明星」に発表。

六月、翻訳「月の夜」(モーパッサン原作)を「明星」に発

表。

七月、長男昂太郎生る。

十月、緑雨の推薦で、翻訳文集『やどり木』(弘文社)刊行。

明治三七(一九〇四) 36歳

一月、美文「磯の一夜」を「明星」に発表。

四月、斉藤緑雨没す。

五月、談話「故斉藤緑雨君」を「明星」にのす。

七月、与謝野鉄幹・晶子の共同詩歌文集『毒草』に跋文を寄

す。

明治三八(一九〇五) 37歳

一月、翻訳「心の通路」(バルザック原作)を「文芸界」に

発表。

二月、「万朝報」所載、孤蝶選の新体詩集『花がたみ』(佐久

良書房) 刊行。

三月、詩「山火」を「明星」に発表。

五月、長詩「うきくさ」、「夜半の街」を「明星」に発表。

五月、文集「連翹」(佐久良書房) 刊行。

六月、長詩「夏野」を「明星」に発表。

九月、上田敏、与謝野鉄幹らと『春鳥集』合評を「明星」に発表。

十二月、翻訳「負債」(モーパッサン原作)を「明星」に発表。

この頃、安成貞雄、吉井勇、石川啄木、北原白秋らを知る。

明治三九(一九〇六) 38歳

一月、上田敏、森田草平、生田長江らと「芸苑」を発行。

一月、翻訳「金脳の人」(ドーデー原作)を「明星」に発表。

一月より六月まで、翻訳「六号室」(チェホフ原作)を「芸苑」に連載。

三月、「万朝報」所載、孤蝶選の新作詩集『春駒』(佐久良書房) 刊行。

四月、翻訳「外光」(ゾラ原作)を「明星」に発表。続いて五・六・一一月にのる。

八月から十二月まで、翻訳「わが小説」(モーパッサン原作)を「芸苑」に連載。

九月、日本銀行を辞任、慶応義塾大学の教授となり、ヨーロッパ文学を講ず。

明治四〇(一九〇七) 39歳

一月、翻訳「田鼠」(コザック伝説)を「明星」に発表。

一月、平田禿木、上田敏らと芸苑社講演に出席。

一月、「秀才文壇」詩欄の選者を始む。

七月、翻訳「あた枕」(ゴルキー原作)を「太陽」に発表。

七月、訳文集『泰西名著集』(如山堂) 刊行。

七月二六日、茅野蕭々、増田雅子の媒酌をつとめる。

九月、「藤村子の『並木』」を「趣味」に発表。

秋より、文学講話会を開催、また生田長江らと閩秀文学会(成美女学校)を催す。平塚明子(雷鳥)、青山(山川) 菊栄、林千歳ら来会。

明治四一(一九〇八) 40歳

一月より六月まで、翻訳「火と剣」(シエンキイウィッツ梗概)を「明星」に連載。

一月、翻訳「断頭台」(ツルゲネフ原作)を「新声」に発表。

一月、「明治学院及び文学界時代」を「趣味」に発表。

四月、東京日日新聞客員となる。この頃、田中貢太郎、森下岩太郎(雨村)らを知る。

八月、「事実と『春』」を「新潮」に発表。

九月、翻訳「小児の心」(ドストエフスキー)を「明星」に発表。

十二月、翻訳「処女地」(ツルゲネフ、梗概)を「趣味」に発表。

一二月九日〜一〇日、「春」付モデル問題」を「国民新聞」に発表。

明治四二(一九〇九) 41歳

一月、「万朝報」詩壇選者を辭す。

五月、「野人言」を「東京日日新聞」に連載。

六月、「ドストエフスキイの小説(上)」を「新声」に発表。

九月、「共立学校」時代」を「文章世界」に発表。

一〇月、「モーパッサンと紀行」を「読売新聞」に連載。

明治四三(一九一〇) 42歳

一月、「中沢臨川君」を「趣味」に発表。

四月、翻訳「上長官」(ブウルジェ原作)を「太陽」に発表。

五月、「三田文学」創刊、創刊号から八月まで、「ブウル・ド・スイフ」を連載。

六月、翻訳『国事探偵』(ゴルキイ原作)(昭文堂)刊行。

七月、鷗外、孤蝶らの「夏目漱石論」を「新潮」に発表。

八月、泡鳴、孤蝶らの「島崎藤村論」を「新潮」に発表。

九月、翻訳「親殺し」(モーパッサン原作)を「新潮」に発表。

表。

一二月、翻訳「上臈」(アナトール・フランス)を「学生文芸」に発表。

この頃、安成貞雄、阿部幹三とともに荒畑寒村来訪。

明治四四(一九一一) 43歳

一月、小説「こし方」を「三田文学」に発表。

明治四四(一九一一) 43歳

一月、小説「こし方」を「三田文学」に発表。

二月、「一葉女史に就て」を「智仁勇」に発表。
五月より九月まで、「屈辱」を「三田文学」に連載。
一二月、「日記を通して見たる樋口一葉」を「早稻田文学」に発表。

一二月、「二葉の作物と周囲」を「三田文学」に発表。

この年より翌年にかけて、博文館の一葉全集の校訂をする。

明治四五・大正 元(一九一二) 44歳

六月より七月まで、「樋口一葉の手紙」を「女学世界」に発表。

表。

六月、「一葉全集の末」を『一葉全集』後篇に発表。

八月から九月まで、翻訳「闘牛」(シエンキウイッソ原作)を「三田文学」に発表。

一二月、随筆「地下へ」を「三田文学」に発表。

この年、「戦争と平和」(トルストイ原作)の翻訳に着手す。

大正 二(一九一三) 45歳

一月、「夢二つ」を「黒耀」に発表。

一月四日、第一回近代思想社集會に出席。

二月一五日、青鞜社第一回講演會で講演。

三月、青鞜社研究會でヨーロッパ文学につき講演。

七月、近代思想社講演會で講演。

大正 三(一九一四) 46歳

三月、『モーパッサン傑作集』(如山堂)刊行。

五月、「近代思想」の与太の會(堺利彦、土岐哀果、大杉栄、

荒畑寒村ら)に出席。

七月、翻訳『戦争と平和』(トルストイ原作)(国民文庫刊行会)四巻を翌年八月までに刊行。

九月、『近代文芸の解剖』(広文堂)刊行。

十二月、随想『葉巻のけむり』(広文堂)刊行。

十二月、母寅子没す。享年八四。

大正 四(一九一五) 47歳

二月、「現今の裁判制度を難す」を「反響」に発表。

三月、翻訳『戦塵』(モーパッサン原作)(如山堂)刊行。

三月、衆議院議員選挙に立候補し落選。

十二月、『社会的近代文芸』(東雲堂)刊行。

十二月、翻訳『イリアード』(ホーマー原作)(国民文庫刊行会)刊行。

大正 五(一九一六) 48歳

一月、日本著作家協会幹事に選ばれる。

五月、『ポーの小品』(千波万波―松本商会出版部)刊行。

七月、「上田敏君」を「読売新聞」に発表。

七月、「文芸と民主主義」を「第三帝国」に発表。

九月、「弟の見たる馬場辰猪」を「新小説」に発表。

十一月三日、山川均、青山菊栄の結婚の媒酌をなす。

この頃から、書画に興味をもちはじめ。

大正 六(一九一七) 49歳

一月、「シエリコフ夫人の計画を許し作家の反省を促す」を

「時事新報」に発表。

四月、「近代文学の一傾向」を「第三帝国」に発表。

七月、「文壇二十五年」を「中央文学」に発表。

七月、『名人長次』になる迄」を「東京日日新聞」に発表。

十一月から十二月、「アナトオル・フランスの自伝体小説」を「文明」に発表。

十二月、「一葉と緑雨」を「中央文学」に発表。

大正 七(一九一八) 50歳

二月、「悪筆雜観」を「大阪毎日新聞」に発表。

三月、「春宵漫言」を「三田文学」に発表。

六月、「露文学に関する英書」を「英語文学」に発表。

六月、「一葉女史作『濁り江』上演の由来」を「時事新報」に発表。

六月、『「ごり江」になる迄』を「東京日日新聞」に連載。

十一月、「跋として、樋口一葉君略伝、一葉著作年表」を樋口邦子編『たけくらべ』(博文館)にのせる。

大正 八(一九一九) 51歳

五月、「オデッセエ物語」(ゼームス・セクストン原作)を「婦人公論」に発表。

六月、「騷擾条件」を「新社会」に発表。

八月、「二、三十年前の寄席」を「我等」に発表。

九月、「社会改造と文芸」を「文章世界」に発表。

九月、『闘牛』(天祐社)刊行。

一二月、詳註『橄欖の森』（モーパッサン原作）（アルス英文学叢書第一編）刊行。

大正 九（一九二〇） 52歳

一月、「将棋の話」を（読売新聞）に連載。

二月二三日、京橋遊楽亭の「石路会」に出席。

五月二九日、堺利彦宅で有島武郎に会う。

六月、森下岩太郎、佐藤緑葉との共訳『クロボトキン露西亜文学講和』（アルス）刊行。

八月、「午睡に入る前」を「三田文学」に発表。

一二月、「文芸の社会化か、社会の文芸化か？」を「読売新聞」に連載。

大正一〇（一九二一） 53歳

一月から二月、「探偵小説の研究」を「読売新聞」に連載。

四月、「文壇三十年」を「中央文学」に発表。

四月、「文化の変遷と寄席の今昔」を「新文学」に発表。

四月から七月、「島崎藤村君の踏み入りし路」を「蜘蛛」に連載。

六月、「演劇門外観」を「劇文学」に発表。

七月、「豊田貢」を「改造」に発表。

一〇月、「明治小説界概観」を「解放」に発表。

大正一一（一九二二） 54歳

二月、「英米の通俗小説」を「三田新聞」に発表。

六月、「一葉全集の末」を『縮刷一葉全集』（博文館）にの

せる。

八月、「更に衰へざりし鷗外大人」を「三田文学」に発表。

九月、甲府の一葉碑建立にたちあう。

九月から一〇月、「探偵小説の興味の核心」を「サンデー毎日」に連載。

一二月、「人間を透視せる一葉女史」を「心の花」に発表。

大正一二（一九二三） 55歳

一月、「探偵小説の新傾向」を「新青年」に発表。

四月、「若き巨男」を「金の星」に発表。

六月、『鸚鵡威』（表現叢書）（二松堂）刊行。

一〇月、「震後雑感」を「報知新聞」に発表。

十一月、「善き人なりし大杉君」を「改造」に発表。

大正一三（一九二四） 56歳

一月から二月、「回顧四十年」を「改造」に発表。

二月、「翻訳権を自由に」を「東京朝日新聞」に発表。

三月、「翻訳の秘諦は―何処に有りや」を「読売新聞」に発表。

五月から七月、「福沢先生と馬場辰猪」を「三田評論」に連載。

六月、「事実と創作」を「万朝報」に発表。

七月から一二月、「馬場辰猪自伝」を「改造」に連載。

一〇月、『孤蝶隨筆』（新作社）刊行。

大正一四（一九二五） 57歳

一月から五月、「探偵小説 悪の華」を「婦人倶楽部」に連載。

二月、「たばこ(上)」「(下)」を「読売新聞」に発表。

五月から十二月、翻訳『戦争と平和 上中下』(トルストイ原作)(国民文庫刊行会)刊行。

六月、「紫煙裡雜記」を「読売新聞」に連載。

六月、『紫煙』(大阪屋号書店)刊行。

九月、「小説モデル物語」を「婦人倶楽部」に発表。

一〇月、「両都放送所感」を「中央公論」に発表。

十一月、「煙草の趣味」を「週刊朝日」に発表。

大正一五・昭和 一(一九二六) 58歳

一月から四月、「荆棘の路」を「婦人倶楽部」に連載。

三月二日、高知へ行く。

三月二七日、高知講演(県公会堂)

四月、「高知の一夜」を「文章往来」に発表。

四月から五月にかけ高知県下を巡遊す。

四月、「眉山 緑雨 透谷」を「早稲田文学」に発表。

九月、「故郷の二た月」を「桂月」に発表。

九月、『春』の中の事実と藤村君の人物」を『明治大正文学の輪郭』(新潮社)に発表。

十二月、『芸苑』の「出た前後」を「改造」に発表。

昭和 二(一九二七) 59歳

一月、「対局観戦記」を「読売新聞」に連載。

三月、「二葉のことも」を「文芸公論」に発表。

五月、翻訳『緋の文字』(ホーンン原作)(国民文庫刊行会)刊行。

八月、北海道旭川に遊ぶ。

八月、『世界名著解題』(誠文堂)刊行。

十一月、J O A Kで「明治文学に於ける俳句の影響」を放送。

昭和 三(一九二八) 60歳

一月、「余技の俳画」を「俳諧雜誌」に発表。

二月、「古き東京を思ひ出て」を「週刊朝日」に発表。

三月、翻訳『サイラス・マアナア』(エリオット原作)(国民文庫刊行会)刊行。

五月、「共存同衆の功績」を「明治文化研究」に発表。

六月、「パイプの話」を「雄弁」に発表。

七月、「層雲峽まで」を「時事新報」に連載。

八月、「日記をつける心得」を「三田文学」に発表。

昭和 四(一九二九) 61歳

一月、「賀筵と追憶」を「三田文学」に発表。

四月、「臨終の斉藤緑雨」を「現代」に発表。

四月、『現代日本文学全集37』(孤蝶篇を収録)(改造社)刊行。

六月九日、藤村らが孤蝶還暦祝賀会を開く。

八月、『現代日本文学全集36』(孤蝶篇を収録)(改造社)刊行。

一〇月二七日、評論隨筆家協会主催の孤蝶還曆祝賀会を開く。
十一月二四日、泊鷗会、三田文学系の孤蝶還曆祝賀会を開く。

昭和五(一九三〇) 62歳

一月、翻訳『オリヴァー・ツイスト』(デッケンズ原作)
『世界大衆文学全集第九卷』(改造社) 刊行。
三月、慶応義塾大学教授を辞任。

九月から一〇月、「刺戟を逃れて」を「東京朝日新聞」に連載。
一二月、翻訳『オリバー・ツイスト』(デッケンズ原作)(国民文庫刊行会) 刊行。

昭和六(一九三一) 63歳

七月、「たばこのひま」を「雑味」に発表。

八月から九月、「アパートの老人」を「週刊朝日」に発表。

九月、「談話」を「東京朝日新聞」に連載。

一二月、「最も優れた物語作家」を「読売新聞」に発表。

昭和七(一九三二) 64歳

二月、「変わりゆく言葉」を「古東多万」に発表。

三月、「手紙の話」を「都新聞」に連載。

七月、「木堂翁を憶ふ」を「文芸春秋」に発表。

九月、名古屋松坂屋の煙草講演会に講師として出席。

一月、「一葉女史原稿の所在」を「書物展望」に発表。

一二月、「政治文学」『岩波講座世界文学4』(岩波書店) 刊行。

一二月、中島久萬吉商工大臣宅の談話会に出席。
昭和八(一九三三) 65歳

一月、「露国恐るべきか」を「文芸春秋」に発表。

三月、「亡兄の片影」を「報知新聞」に連載。

八月、「著作権差押を何う見るか」を「東京帝国大学新聞」に発表。

九月、隨筆集『野客漫言』(書物展望社) 刊行。

昭和九(一九三四) 66歳

一月、「ルソー『懺悔録』」を「婦人公論」に発表。

二月、佐々木三津三全集刊行発起人の会に出席。

三月、「好漢味津三君」を「衆文」に発表。

一二月、「面白かった本、珍蔵書」を「文芸春秋」に発表。

昭和一〇(一九三五) 67歳

一月、「春らしい座談会」は「文芸春秋」にのる。

一月一四日より、村松梢風らと台湾へ講演旅行。

二月、「『名人長次』になる迄」を「有馬幸子家集」に発表。

六月、「時代に残された乗物」を「旅」に発表。

一二月、「蟹の舎左文の事ども」を「三田評論」に発表。

昭和一一(一九三六) 68歳

三月、「長江君の若かりし頃」を「書物展望」に発表。

五月、「仮名垣魯文」を「隨筆読本」に発表。

七月、「明治文壇回顧」(協和書院) 刊行。

一〇月、「秋夜漫筆」を「サンデー毎日」に発表。

昭和二(一九三七) 69歳

- 二月、「噺みタバコ」を「読売新聞」に発表。
- 八月、「講演の巧拙」を「東京朝日新聞」に発表。
- 九月、「偶感」を「キング」に発表。
- 十一月、「教科書に転載される吾々の文章の事など」を「日本読書新聞」に発表。
- 十二月、「苜蓿雜記」を「東京朝日新聞」に連載。
- 十二月、大津留聡、次女晴子夫妻、満鉄勤務のため渡満せるにより、その留守をかねて渋谷区松濤の家に移り住む。

昭和三(一九三八) 70歳

- 七月、「江戸名物の川柳」を「文芸春秋」に発表。
- 七月、「樋口一葉の恋人は誰であったか」を「月刊文章」に発表。
- 十一月、「閑時漫録」を「書物展望」に発表。
- 十二月、「煙草」を「読売新聞」に発表。

昭和四(一九三九) 71歳

- 一月、「言語の虐待」を「月刊文章」に発表。
- 一月、「揮毫の話」を「博浪沙」に発表。
- 五月、東宝映画「樋口一葉」(並木鏡太郎監督、山田五十鈴主演)の試写会に出席。
- 七月、「雅号の由来」を「東京朝日新聞」に発表。
- 八月、「東京人戸川秋骨君」を「三田評論」に発表。
- 八月、「戸川秋骨君と鳥崎藤村と私」を「三田新聞」に発表。

- 九月、「戸川秋骨君の本郷時代」を「書物展望」に発表。
- 九月、「戸川君の明治学院時代」を「英語青年」に発表。

昭和五(一九四〇) 72歳

- 一月、「昔の万世橋」を「博浪沙」に発表。
- 一月、「野老偶語」を「学鑑」に発表。
- 二月、「筆戯雜談」を「書齋」に発表。
- 三月、日本橋矢尾板病院に入院。
- 六月二〇日、松濤の大津留家で死去。享年七二。

昭和七(一九四二)

- 五月、『明治の東京』(中央公論社) 刊行。
- 十一月、『明治文壇の人々』(三田文学出版部) 刊行。

秋山繁雄編集

参考文献

- 『馬場孤蝶』木戸昭平著、高知市民図書館 昭和六十年三月
- 『馬場孤蝶年譜』紅野敏郎作製『日本現代文学全集』北村透谷集附文学界派』講談社 昭和四十年
- 『馬場孤蝶』『近代文学研究叢書 第四十六巻』昭和女子大学近代文化研究所 昭和五十二年
- 『現代日本文学大年表 明治篇』明治書院 昭和四十三年
- 『現代日本文学大年表 大正篇』明治書院 昭和四十五年
- 『現代日本文学大年表 昭和篇Ⅰ』明治書院 昭和四十六年

【資料1】

記念館肖像画の人びと

——初代宣教師と歴代総理・院長——

工藤 英一

はじめに

明治学院記念館2階の大会議室に、10枚の油絵の肖像画が掲げられている。その経緯について、武藤富男第7代院長は、次のように述べている。

“学院には歴代学院長の肖像画がどこにもかかっていなかった。ヘボン博士の胸像はあるが、井深学院長以来、都留学院長に至るまでの面影は展示されていない。

昭和42年の11月に迎える創立90周年を記念して、大会議室の壁面に油彩の肖像画を掲げようと提案し、理事会の賛成を得て、長尾己画伯に頼み、ヘボン、ブラウン、フルベッキ、井深、田川、矢野、村田、都留と6代の学院長、2名の先達の肖像画を描いてもらい、壁面を飾った。”（「明治学院の12年」、『クリスチャン・グラフ』1983年5月号所収）

歴代院長のほか、先達としてブラウンとフルベッキが選ばれたのは、このふたりが、ヘボンとならんで、明治学院と密接な関係が続けているアメリカの教会から派遣された、最初の来日宣教師であったからにはかならない。幕末におけるこれらの宣教師の来日がなかったならば、明治学院の創設もなかったのである。

これらの肖像画のために彩管をふるった長尾己画伯は、東京白馬会洋画研究所で黒田清輝に師事した洋画家である。岸田劉生・中川一政は同門の先輩であった。長尾はここで、写実主義の画風を身につけた。かれは文展や院展に入選した後、専ら人物画にとりくむに至った。かれは、アチソン駐日米国大使やマッカーサー司会官の肖像画、ならびに数名の衆議院議長・副議長の肖像画を描いて、肖像画家としての地歩を築いた。

武藤院長が長尾画伯に依頼したのは、ただ単に肖像画家としての名声に惹かれたからではなく、長尾がクリスチャン画家であったからである。かれは1893年8月26日、牧師の三男として金沢で生れた。祖父の長尾八之門は、北陸における最初のプロテスタント信徒であり、両親の巻と松えは、賀川豊彦が最大の感化を受けたと深く感謝している牧師夫妻であった。己という名が示すように、かれは10人の兄弟姉

妹の6番目であったが、その10人によって“姉弟伝道会社”と称する伝道団を組織し、それぞれのタレントを活かして福音宣教に努めた。長尾一族とは、日本のキリスト教界におけるユニークなファミリーであり、長尾画伯はその一員であった。

肖像画家としての長尾については、モデルの人物によく似た画を描き、しかもきわめて筆が早いという評判であった。しかしかれは、画家として追求する美について、次のようにその宗教的意義を強調している。

“人間には、無から有を生ぜしめる能力はありません。無から有を生ぜしめる能力あるものは神だけです。わたしには、美を創造する能力はありません。ただ神の創造したもうた美に同調してゆくだけのことです。”(長尾己「出会の人々(7)」、『愛と希望』1980年2月号所収)

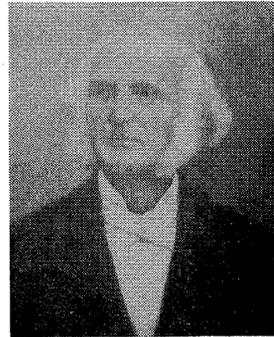
記念館の壁画に10枚の肖像画を残したこの画家は、1985年5月28日、91年9カ月の地上の生涯を終えて天に召された。

(注) 長尾画伯については、安孫子治夫妻から資料ならびに写真の提供を受けた。記して感謝の意を表したい。安孫子氏は本学院東村山高校教諭、友子夫人は己画伯の長女である。

I. S. R. ブラウン

Samuel Robbins Brown
(1810. 6. 16~1880. 6. 19)

アメリカ・コネティカット州イースト・ウインザーに生まれた。母フィーベは、讃美歌“わずらわしき世を しばしのがれ”(現行教団讃美歌319番)の作詩者として知られている。ブラウンは、母の祈りに支えられて外国伝道者をめざし、苦学しつつ1832年エール大学、38年10月ユニオン神学校を卒業した。その後すぐに、エリザベス・バートレットと結婚、長老教会牧師としての准允を受け、同月17日、アメリカ伝道協会派遣宣教師として中国へ出発した。39年2月マカオに到着、モリソン記念学校の校長として中国人学生の教育に当たった。47年夫人の病気のため帰米、ニューヨーク州に新設されたローマ・アカデミーの校長となった。51年同州オワスコ・アウトレットにあるオランダ改革派のサンド・ビーチ教会の牧師に招かれた。在任約8年、再び外国伝道に赴く決心をし、オランダ改革派教会が初めて日本に派遣する宣教師の



ひとりとなった。59年5月7日、夫人と共にサープライズ号でニューヨークを出帆したが、同行の宣教師フルベッキはブラウンの推薦によるものであった。

途中上海に寄港した後、11月1日、宣教医シモンズ夫妻と共に神奈川に到着、先着のヘボン夫妻の住む成仏寺に住み、矢野元隆を教師として日本語の学習を始めた。62年幕府が開設した横浜英学所の英語教師となり、63年『日英会話篇』を刊行するとともに、四福音書と創世記の日本語訳をほぼ完了した。

67年5月、横浜居留地内の住宅を火災で失い、一時帰米したが、その間ニューヨーク市立大学から神学博士の学位を授与された。69年新潟英学校の教師に招かれ、ミス・キダーを伴って赴任した。翌年同校を辞して横浜に移り、横浜修文館で教鞭をとった。

72年3月の日本基督公会の創立に際して、ジェームズ・バラと共にその指導に当り、奥野昌綱・井深棍之助等に洗礼を授けた。同年9月、宣教師会議において新約聖書翻訳委員会の委員長に選ばれた。73年8月、修文館の教師を辞し、横浜山手211番にブラウン塾を開設、日本人青年の教育をおこなったが、その中心は漸次神学教育になり、同塾の出身者から多くの日本人伝道者を輩出した。77年他の宣教師の私塾と合併して、同塾は東京一致神学校へと発展的に解消した。

79年、ブラウンは、病気のため帰米、みずから委員長であった新約聖書の翻訳は、ヨハネ黙示録の最後の2章を残すのみであった。その仕事は、後任のヘボン委員長のもとで、翌80年に完成された。その知らせに接して約1カ月の後、両親の墳墓の地であるマサチューセッツ州モンソンで、ブラウンは天に召された。

II. G. H. F. フルベッキ

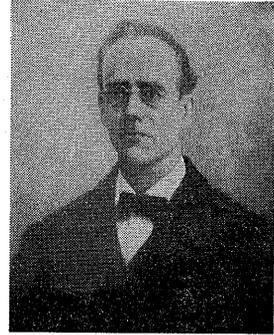
Guido Herman Fridolin Verbeck
(1830. 1. 23~1898. 3. 10)

オランダ・ゼーストに、町長を父として生まれた。モラヴィア派の小学校を経て、ユトレヒト工芸学校を卒業、蘭・英・仏・独の4カ国語を修得した。1852年、義兄のG・ヴァン・デュースの招きと導きを受けてアメリカに渡った。技師として働いたが、54年夏コレラに罹り、病床で、健康を取り戻したならば外国伝道に献身することを決意した。少年時代から、モラヴィア派の教会で培われた外国伝道への強い関心、特にK・ギュツラフによって鼓吹されたものが、ここで実を結んだ。

56年ニューヨーク州の長老派のオーバン神学校に入学、59年3月同校を卒業した。当時アメリカのオランダ改革派教会では、総会の決議により三名の宣教師を日本に派遣することとし、その募集をしていた。特にそのうちの一名は、オランダ語

のできる者とする事となっていた。フルベッキは、S・R・ブラウンの推薦に基づき、その一名に選ばれた。

59年5月7日に日本に向けニューヨークを出発するまでの間に、フルベッキは長老教会牧師としての准允を受け、さらに改革派教会に転籍し、マリア・マニオンと結婚した。その頃すでにオランダ国籍を失っていたが、アメリカの市民権獲得の手續を済ます間もなく、無国籍のまま日本へ出発した。10月21日上海到着後、同行のブラウンとシモンズは神奈川



に赴いたが、フルベッキは長崎に向い、11月7日同地に着き、アメリカ監督教会宣教師ウィリアムズのもとに同居した。最初中国で印刷された伝道用文書の頒布の責任者となったが、みずから日本語の修得に努めるとともに、日本人への英語教授に従事、幕府の長崎外語学校・済美館（のち広運館）および佐賀藩立の長崎致遠館の教師を務めた。これらの機会をつうじて、大隈重信・副島種臣をはじめ後年明治政府の重要ポストに就いた多くの武士との接触をもった。その間佐賀藩の家老・村田若狭兄弟に洗礼を授けた。

69年4月から政府の招きを受けて上京、開成学校教師となり、現在の東京大学の創設に尽くした。同時に政府顧問として公議所に勤務、77年まで“お備い外国人”として、明治政府の相談役の任務を国政の各分野に果たした。特に、71年の岩倉外交使節団の派遣は、フルベッキの建策に基づいた。

77年、東京一致神学校の講師として弁証論と説教を講じたが、流暢な日本語の講義であった。同時に華族学校にも出講、78年家族と共にアメリカに帰ったが、翌年再来日して宣教師に戻った。

82年、旧約聖書の翻訳委員に選ばれ、植村正久と詩篇を訳した。日本語を駆使して、多くの講演・説教をおこない、伝道旅行は全国各地に及んだ。87年以降明治学院教授となり、理事をも務めた。91年、日本政府は、フルベッキの功績にむくいるため、かれと家族に自由な国内旅行を許可する特別許可証を与えた。赤坂葵町の自宅で、心臓麻痺のため永眠、ついに無国籍のままであった。青山墓地に各界の名士の贖金により記念碑が建てられた。

III. J. C. ヘボン

James Curtis Hepburn
(1818. 3. 13~1911. 9. 21)

記念館肖像画の人びと

アメリカ・ペンシルヴェイニャ州ミルトンに生まれ、1832年プリンストン大学を卒業した。36年、ペンシルヴェイニャ大学医科を卒業し、医学博士を得た。

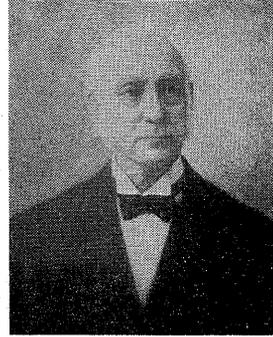
41年、アメリカ長老教会宣教医として東洋に派遣された。シンガポール、マカオ、アモイで医療に従事し、45年夫人の病気のためアメリカに帰った。

ニューヨークで病院を開業し成功したが、59年10月伝道のため来日、神奈川成仏寺に住み、宗興寺に施療所を開設。62年横浜居留地39番館に施療所を新築して施療をおこなった。79年健康上の理由で医療事業をやめるまで、多くの患者に接し、近代西洋医術の紹介・普及に貢献した。

41年シンガポールでギュッラフの日本語訳『約翰福音之伝』を発見して以来、日本語の修得に関心を寄せ、67年『和英語林集成』を刊行、新旧約聖書・キリスト教書の日本語訳に貢献した。

63年、夫人を助けて前記居留地の施療所にヘボン塾を開いた。同塾は一時中断することもあったが、長老派ミッションの教育機関となった。同塾は、80年東京へ移って築地大学校となり、83年東京一致英和学校となったが、その教育は主としてジョン・バラに委ねられた。なお同校は、87年発足の明治学院の母体のひとつとなった。

ヘボン博士は、明治学院の生理学・衛生学の教授となったが、89年10月、明治学院理事会から総理に推戴された。当時、指路教会建築資金募集のため夫人と共にアメリカ旅行中であった博士は、すでに74歳の老令であったことを理由に、一度は辞退したが、理事会の強い要望によって、井深棍之助を副総理とすることを条件に、横浜在任のまま総理に就任することを承諾した。東京一致神学校時代はもちろん、明治学院となってからも、校長をおかず、教会政治における長老主義に基づいて、理事会を最高決議機関として学校の運営をおこなっていた。従って、ヘボン博士が初代総理にはかならなかった。博士はアメリカのユニオン神学校に留学した井深の帰国を待って、91年10月13日総理の職を辞した。



博士夫妻は、かねて念願していた指路教会の会堂の落成を見とどけ、92年10月22日横浜を出帆、帰米した。その後は、ニュージャージー州イースト・オレンジに引退、同地のブリック教会の長老をつとめた。1905年6月プリンストン大学から法学博士の学位を授与された。翌06年3月4日夫人が永眠、博士も5年後に96歳で天に召された。永眠の日の早朝（日本時間）明治学院ヘボン館が全焼した。夫妻の遺骸は、ローズ・デール墓地に埋葬されている。

IV. 井深梶之助

(1854. 7. 4~1940. 6. 24)

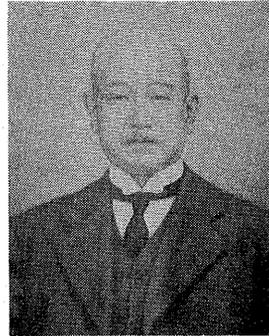
会津藩士の長男に生まれ、戊辰戦争における鶴ヶ城籠城に参加、その後も深刻な敗戦体験をした。薩長への怨念に燃え、学問をつうじての報復を期して上京したが、S・R・ブラウンの支授のもとで苦学して横浜修文館で学び、さらにブラウン塾に転じた。

漢訳聖書によって、山上の垂訓のなかの愛敵の精神を知り、1873年1月第1日曜日にブラウンから洗礼を受けた。伝道者を志して、東京一致神学校に学び、78年同校を修了して牧師の准允を受け、翌年10月正牧師、80年1月東京麴町教会の牧師となった。同年水上せきと結婚、81年一致神学校助教授となった。

明治学院設立に際しては、日本人理事として尽力し、87年教授となった。89年ヘボン博士の総理就任にあたり、副総理となった。90年8月、ユニオン神学校留学のため、副総理の事務代行を杉森此馬幹事に委ねて渡米、教会史を専攻して91年9月23日帰国した。

井深の帰国を待って、ヘボン総理はその職を辞し、第2代総理に井深が選ばれた。91年11月6日、サンダム館礼拝堂で総理就任式がおこなわれた。その時、井深は37歳であった。

就任当初から、井深は反動期におけるミツシヨーン・スクールの苦難を体験し、特に文部省訓令12号発布によるキリスト教主義学校への弾圧に対しては、全国の同種の学校を結集して、反対運動を指導した。98年3月妻を失い、翌年4月大島はなと再婚した。



日本基督教会内の自給独立主義と外国ミッションとの関係をいかに調和させるかは、井深総理にとってのひとつの課題であった。それは、1903年の植村正久の明治学院辞任事件をめぐる井深の行動によって理解される。他方井深は、日本基督教会のナショナルリスティックな立場を代表する牧師のひとりでもあった。いわゆる『日本の花嫁』事件における態度や日露戦争における日本の立場を弁明するため欧米諸国を巡回したことから以上の点が知られる。

井深はまた、日本のキリスト教界における最高の国際人でもあった。万国キリスト教学生同盟の大会や世界宣教会などの国際的舞台上での日本代表として、井深は貴重な存在であり、そのような場での活躍をつうじて、かれ自身エキユメニカルな信仰を身につけていった。07年の頃から、日本における超教派的キリスト教主義大学創設のために働いたが、その努力は実を結ぶに至らなかった。

一方、学院総理としての井深に課せられた課題は、学院拡張案の具体化であった。J・L・セベレンスの寄付によって、神学部寄宿舎（セベレンス館）の建設は順調にいったが、拡張資金の募金は必ずしも容易ではなかった。そのため、拡張は専ら普通学部（中学部）の急激な規模拡大に集中しがちであった。20年、井深が総理辞任の決意をしたのは、同年3月9日に勃発した中学部同盟休校事件を契機としてであった。その背後には、中学部膨脹による校紀の弛緩や教員間の不一致があった。21年3月末日をもって総理を辞任した井深は名誉総理であると同時に、24年まで神学部教授・同部長であった。

39年3月以降高血圧で白金三光町の自邸で静養中であった井深は、翌年脳膜下出血ため危篤におちいり、86歳の生涯を終えた。葬儀は、6月26日礼拝堂において学院葬としておこなわれた。

V. 田川大吉郎

(1869. 10. 26～1947. 10. 9)

井深総理の退職後約4年間、総理不在が続いた。その間、1921年4月から11月まで、オルトマンズ理事長が総理事務取扱となり、25年2月田川大吉郎が総理に就任するまでは、田川理事長が総理事務取扱をつとめた。

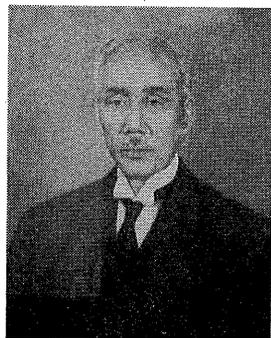
井深の後任として最有力視された田川の総理就任が、以上のように遅れた最大の理由は、田川がある筆禍事件のために「禁錮五箇月罰金百円」の実刑に服した経歴があったからである。

田川は、大村藩士の長男として生まれ、東京専門学校政治科を卒業し、その後、

報知新聞・都新聞などでジャーナリストとして活躍した。1890年番町教会で小崎弘道から洗礼を受け、1904年植村正久の一番町教会に移り、さらに信濃町教会に転じた、

日清・日露の両戦争には、田川は中国語通訳として従軍している。03年東京市水道部長となり、一旦辞職の後、08年尾崎行雄市長の助役となって、14年まで東京の市政に携わった。

1908年、長崎県から衆議院議員に立候補、当選8回に及んだ。無所属の時代もあったが、中正会、同志会、憲政会に所属し、キリスト教の立場を堅持しつつ、自由主義・民主主義を貫いた。



16年10月の大隈内閣総辞職に際しての後継首班推薦問題に関し、田川は元老政治を批判する論文を発表したが、そのなかに天皇への不敬の文章があった。先にあげた筆禍事件がそれである。そのため、18年4月16日、富士見町教会における入獄祈禱会の後、実刑に服した。

中学の拡張から起こる校紀弛緩をめぐって第2回同盟休校事件が発生し(24年11月)、田川は総理事務取扱として、生徒との話しあいによってこれを収拾した。正式に総理に就任した後(就任式は1925年4月)、田川は高等学部の充実をめざした。26年、高等学部英文科を4年制とし、28年同部商業科を高等商業部として独立させ、高等学部に社会科を新設した。しかし一方では、すでに角管に移転していた神学部は、30年明治学院から分離し、日本神学校として独立するに至った。

ロシア革命、米騒動、戦後恐慌と慢性的不況等の影響を受け、学院内特に高等学部・高等商業部の生徒の間には、社会問題・社会主義への関心が高まった。従って、学内には軍事教練反対運動をはじめ左翼的学生運動が渦巻いた。田川は、学生の自治を重んじ、かれ自身の社会改良主義の立場から、運動に理解を示し、学内における消費組合を支持・奨励したが、学内の紛糾はさげがたかった。

1935年7月、総理の名称が院長と改められた。それ以前から、田川は辞任の意志を理事会に表明していた。衆議院議員としての活動と院長職との両立が困難となったこともその一因であった。しかし、経済不況の影響から経営難に陥った学院財政の窮状を救うために立てた白金校地売却案が、理事会の支持を得られなかったのが、院長辞任を早めた原因であった。

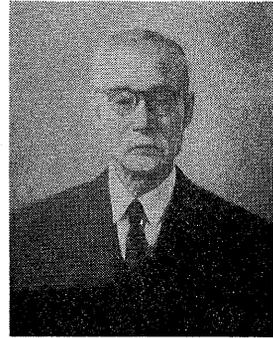
35年11月6日付をもって、田川院長の辞職が認められ、W・G・ホキエ博士が院長事務取扱に就任した。

院長辞任後の田川は、衆議院議員としての働きをつづけ、国際主義的平和論者として時局を批判し、そのため軍部からのきびしい圧迫を受けた。しかし、第二次世界大戦末期まで、日中和平工作を継続し、重慶に蒋介石を訪ねる途中、南京で日本の無条件降伏を知った。戦後、東京都長官の社会党候補者として立ったが、不幸落選に終わった。

VI. 矢野貫城^{つらき}

(1886. 7. 4～1975. 11. 4)

ホキエ院長事務取扱の時代は、1939年9月の矢野院長正式就任の時まで続いた。すでに国家主義・軍国主義の風潮が支配的な時期にあって、ミッション・スクールへの風当りはきわめて強かった。しかも、事務取扱とはいえ、学校長に相当する院長のポストに、外国人が就いていることは、いっそう学院への偏見を大きなものにした。文部省は再三にわたって、学院に督学官を派遣して巡視をおこない、学院の教育に対して批判の眼をむけ、さまざまな要求をつきつけた。その一例として、天皇・皇后の“御親影”が学院にないことを非難して、ついに1918年10月にこれを“奉戴”させた。



このようにミッション・スクールへの偏見や迫害のきびしい時代に、院長としてその苦難を切り抜けていくことのできる人物を迎えるのは、決して容易ではなかった。理事会が設けた詮衡委員会が、矢野院長の招請を決定するのに1年以上の歳月を要した。その後、矢野自身との交渉をかさねて、正式の就任をみるまでに、さらに3年近くがかかった。

矢野は高知県の出身であり、高知第一中学を経て、1908年山口高等商業学校を卒業、同校の助教授となった。13年同校教授となり、15年アメリカに留学して、コロンビア大学において商業学・商業地理を専攻、MAの学位を取得して帰国した。19年文部省事務官兼同省督学官となり、21年同省実業学務局第三課長、24年同局商業教育課長となり、27年彦根高等商業学校長に就任した。

信仰的には、1907年2月24日、日本基督山口教会の和知牧太牧師から洗礼を受け、東京移転により富士見町教会に転籍、同教会の長老をつとめた。

官立の高商の校長をつとめ、文部官僚としての経歴をもつ矢野院長からみれば、学院の学制や職制には不完全な部分が少なくなかった。それゆえ、着任早々、矢野院長は新しい学制・職制を制定した。また、各種の学校行事を、教育勅語の奉読を中心とするものに改め、明治神宮や靖国神社への参拝をも、学校行事としておこなった。これらのことは、すでに全国の学校では一般的となっていたが、学院やキリスト教系の学校としては、きわめて画期的なことであった。また、従来学院の創立記念日は11月3日であったが、その日が明治節にあたるため、院長の宮中参賀記帳の都合で、11月1日に変更された。

1940年4月、高等学部を東亜科を新設、11月にはミッション援助辞退を理事会で決議した。すでに創立当初のような意味でのミッション・スクールではなかったとはいえ、学院の外国ミッションとの経済的関係は、ここで完全になくなったわけである。

以上の他、矢野院長のもとでは、急迫した戦時体制に適應するさまざまな改革が進められた。アメリカ人宣教師も漸次帰国した。そのような状況のもとで、国策に即応した教育路線の枠内で、建学の精神を守ることが、矢野院長の使命であった。戦時下といえども、可能な限りにおいて礼拝は守られた。

1944年4月、戦時学校統合によって、青山学院・関東学院の文科系生徒を吸収して、明治学院専門学校が開校し、矢野院長が校長となった。

敗戦後の矢野院長は、新教育制度に基づく学院教育の改革を推進すると同時に、悪性インフレ下における困難な経営問題に取り組まねばならなかった。教育民主化の名のもとに戦時中の校長や指導者への追及が多く为学校において激化したが、矢野院長の時代は1947年まで続いた。しかし、戦時中における院長の施策についての不満は皆無ではなかった。このような情勢を察知して、矢野院長は辞表を提出、理事会は47年8月31日付でこれを受理し、名誉院長に推薦した。

院長辞任後、矢野は基督教教育同盟総主事に就任した。在職8年余に及び、その後四国学院長に就任、東京女子大など数校の理事長や国際基督教大学監事をつとめた。

VII. 村田四郎

(1887. 9. 2~1971. 2. 7)

矢野院長辞任のあと、8カ月の空白期間を置いて、1948年4月、村田四郎牧師が第5代院長に就任した。空白期間の院長事務は、富田満理事長が担当した。

村田院長は山口の出身、1904年7月7日、山口日本基督教会で山本秀煌牧師から受洗した。11年6月、明治学院神学部を卒業、直ちに桐生教会牧師に就任した。12年9月渡米してオーバン神学校に学び、キリスト教史・新約聖書学を専攻した。16年9月帰国して大阪神学院教授となった。18年4月、明治学院中学部聖書科教員として招かれ、明治学院教会を設立し、その牧師を兼ねた。翌19年9月中学部長に就任したが、20年3月に中学部生徒による同盟休校事件が起こった。同年7月中学部長を辞任して、朝鮮の大邱教会牧師として赴任した。



1922年、熊本日本基督教会に招かれて牧師に就任するとともに、九州学院神学部講師を兼任した。26年、明治学院神学部教授として母校に戻り、新栄教会・本郷日本基督教会を応援した。30年日本神学校の設立とともに、同校教授となり、新約学と教会史を講じた。33年高倉徳太郎の死後、日本神学校々長となり、その傍ら青山日本基督教会を牧した。その間、東京帝国大学文学部哲学科講師として“パウロ神学”を講じた。

1935年、日本基督教団の成立とともに、東部神学校の校長となったが、教団教学局長に任じられたため、校長を辞した。

敗戦後、国立教会を設立してその牧師となり、1947年から東京商科大学兼任講師としてキリスト教学を講じていた。

戦後の新教育制度による中学・高校・大学の設立準備は、すでに矢野院長のもとで始められ、1947年には新制中学が発足していた。村田院長就任と同時に新制高校も設立した。残る新制大学の設立は、専門学校の昇格という形で準備され、49年4月に発足した。学長は村田院長が兼任した。村田学長は、コリント人への第一の手紙13章6節の“真理の喜ぶところを喜び”という聖句を明治学院大学のめざす理想とすると入学式で語った。

1945年5月、大学の入学式を終えた直後、村田院長は世界聖書協会会議出席のために渡米した。その際、アメリカの長老・改革両派の教会幹部と会談し、両教会と明治学院の協力関係を確認して帰国した。それ以後、特に改革派教会からは、院長顧問としてシェーファー博士が、また宣教師の資格で松本亨が来日し、村田院長を補佐した。

村田院長が、明治学院独特の教育プランとして、外国ミッションとの協力のもとに実施をめざしたものに、中学校における少数教育プランがあった。この理想教育

案の実行に、村田院長はきわめて意欲的であった。しかし学院全般の財政状況から、この理想案は漸次修正のやむなきに至った。

文経学部という変則的な複合単一学部として発足した大学が、文、経二学部の独立したものとなるためには、既存の土地・建物だけでは不十分であった。そのため隣接地の海軍基地の買収が進められ、そこに図書館と大学本館を建設することが予定された。図書館は1954年11月ようやく完成したが、本館の完成は、57年1月まで待たねばならなかった。

1953年5月、村田院長は、現職の院長・学長のまま、日本基督教団指路教会の専任牧師に就任した。伝道者たることをみずからの使命と強く信じていた村田院長としては、牧師職を引き受けることに、それ程の躊躇を感じなかった。学院においても、中学・高校・大学の礼拝時間には、村田院長は必ず出席していた。このことは、学院生への大きな宗教的奨励になった。また、チャペルにおける村田院長の説教は、聴く者の心を強くひきつけた。

1955年9月、突然狭心症で倒れて以後、院長・学長・専任牧師を兼ねることは健康が許さなくなった。それゆえ、56年3月学長を辞任し、57年3月には院長をも辞任した。このようにして、指路教会牧師に専念することになったが、67年4月、同教会牧師を辞任、名誉牧師となった。その間、関東学院大学神学部の設立に際して教授に就任した。

1971年2月14日指路教会でおこなわれた葬儀は、同教会・明治学院・日本聖書協会の合同葬であった。

VIII. 都留仙次

(1884. 1. 20～1964. 1. 21)

都留仙次第6代院長の就任は1957年4月、“もはや戦後ではない”といわれはじめた年のことであった。村田院長のもとに開設された大学を、いかに充実させていくか、膨脹していく学院の教育のなかでいかにキリスト教教育を堅持していくか、これが都留院長に課せられた課題にほかならなかった。

都留院長は大分県宇佐の出身、長崎を拠点とする米国改革派ミッションの昔からの伝道地のクリスチャン・ホームの四男であった。1902年長崎の東山学院中学部を卒業したが、同校在学中長崎教会において瀬川浅牧師から受洗した。

その後、明治学院高等学部を経て、1907年6月同神学部を卒業した。同年9月米国オーバン神学校に入学、10年5月同校を卒業した。同年6月からスコットランド

のエディンバラ大学神学部において、旧約聖書および旧約歴史を専攻し、翌年日本に帰った。

1911年9月明治学院神学部助教授となり、12年4月教授に昇進、21年高等学部長に就任した。本郷教会・麴町教会の牧師として、牧会にも従事した。

関東大震災に際して、中山昌樹教授と協力して、朝鮮人学生を匿い、不法な暴力からかれらを守った。

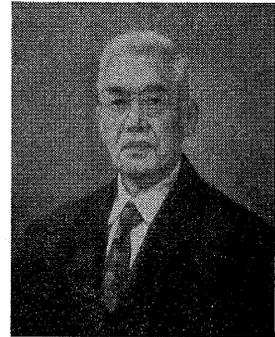
1924年、神学部角管移転の年に同部長に就任、29年3月までその職にあったが、30年4月の神学部と神学社との合同に強く反対し、神学生の懇望にもかかわらず、新設の日本神学校教授には就任せず、明治学院にとどまった。

1932年4月、中学部長となり、長崎東山学院中学部の廃止と同部の明治学院への合併に関する問題の処理にあたった。

矢野院長の就任に際して、中学部長を解任され、1940年10月学院を辞任、51年までフェリス女学院長をつとめた。戦時下抑留された外国人宣教師を、特に深い友情と好意をもつて遇した。51年から55年まで、聖書協会口語訳聖書改訳委員長として、戦後の聖書改訳に貢献した。

都留院長は、学院教育の根本としての礼拝を重んじ、中学・高校・大学の礼拝を率先して守った。第2代学長に高橋源次教授が就任したこともあって、都留院長は院長職に専念した。組織が拡大した学院内部には、さまざまな摩擦や軋轢が生じたが、そのため院長独自の解決策を講じねばならぬこともあった。学院内における一貫教育をめぐる問題の処理も、院長に負わされた重い課題であった。

中学から始められた少数理想教育も、開始当初から波瀾含みであったが、1958年度から大幅な修正をよぎなくされ、募集定員を増加することとなった。大学においても定員増がおこなわれた。このようにして、学院の教育は、拡大・膨脹の道をたどりはじめた。このことは、都留院長の本意とするところではなかったが、学院教育における大きな曲角に、都留院長は立たされざるをえなかった。すでに70歳台の半ばを過ぎていた都留院長は、対処しなければならぬ多くの問題を残して、健康上の理由で院長職を辞した。1962年3月のことである。



IX. 武藤富男

(1904. 2. 20～)

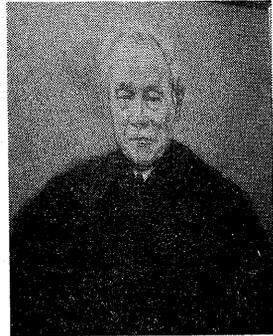
第7代武藤富男院長の就任式は、1962年6月16日礼拝堂においておこなわれた。高橋源次学長の先導のもと、北村理事長・武藤新院長・都留前院長とつづいて入場するプロセッションの写真が、『明治学院百年史』(472ページ)に掲載されている。拡大・膨脹にむかう武藤院長時代の開幕にふさわしい院長就任式の光景であった。

武藤院長の施策の根幹をなすものは、就任の年の9月、理事会に提示された“明治学院発展方策素案”であった。学院の経営規模の問題と少数教育ないし人格教育の問題とは別箇のものであるという前提に立って、積極的な発展策が進められた。大学における学部を増設・東村山高校の開設・中学の移転ならびに学生・生徒数の増大等が実行に移され、それと平行して校舎・施設の増新築や土地購入がつぎつぎになされていった。

このような発展策の展開が、軋轢や歪みを伴ったことは否定できない。その最たるものは、学園紛争であった。特に大学における紛争の激化は著しいものがあり、若林龍夫学長・和田昌衛学長とともに、武藤院長は文字どおり身を挺して紛争対策に忙殺した。

1974年3月11日、学院におけるみずからの使命は終わったとして、武藤院長は辞表を提出し、3月末をもって院長職を辞した。11年10カ月間の院長在任であった。その略歴については、『キリスト教人名辞典』に次のように記述されている。

“教育家、牧師、キリスト教事業家、社会事業家。静岡県富士岡村(現・御殿場市)に生まれる。東京帝国大学法学部法律学科卒業(1927)後、司法官試補に任官、横浜地方裁判所に勤務(27)、その後東京地方裁判所判事となる(29)。満州国國務院司法部刑事科長(34)、日本政府内閣情報局第一部長(43)などを経て退官(45)、日米会話学院を創立し院長に就任(45)。1946年『キリスト新聞』創刊に携わり主筆として活躍。48年日本基督教団補教師試験に合格。教文館社長(59)、キリスト新聞社社長(60)、明治学院長(62)をつとめる。64年よりキリスト新聞社会長、74年に明治学院長を退任、名誉学院長となる。日本基督教



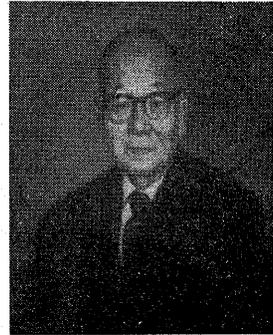
団向河原教会名誉牧師。著作に『再軍備を憤る』(1951),『口語訳 新約聖書』(1952),『甘粕正彦の生涯』(1956),『キリスト教入門』(1974),『社説三十年』I (1975), II (1976),『評伝 賀川豊彦』など多数がある。”

X. 島村亀鶴

(1900.12.25～)

武藤院長の辞任と同時に、鈴木春理事長も94歳の高令のため辞任した。理事長の後任には、島村亀鶴理事が選任されたが、後任院長の人選は容易に決まらなかった。そのため、1974年4月新任の金井信一郎学長が、院長職を代行することとなった。

この体制は、専任院長の人選が困難なままに約3年間続いた。折しも、1977年11月には明治学院は創立100年を迎えることになり、すでにそのための各種記念事業の準備は着々と進んでいた。院長空席のまま、意義ある創立100年を迎えることを憂慮した理事会は、島村理事長の院長兼務を強く要望し、1977年8月兼務の形ではあるが、ここによりやく第8代院長が決定し、同年9月16日礼拝堂において院長就任式がおこなわれた。同年11月1日、日比谷公会堂において挙行された創立100周年記念式典での式辞は、島村院長が述べた。



島村理事長の院長兼務は、翌78年3月まで続いたが、同月30日金井学長は院長代行となった。その後、第9代平出宣道院長が決定するまでの経過は、以下のとおりであった。

1978年4月就任の平出宣道学長は、翌79年4月から院長事務取扱を兼ねた。81年10月1日、平出学長は院長を兼務することとなり、院長就任式をおこなった。ただし、82年3月末をもって、学長の任期が終了したので、それ以後専任の院長となった。

なお、島村理事長の後任としては、1978年7月郷司浩平が就任、84年1月以降阿部志郎が理事長を代行したが、同年6月理事長となり現在に至っている。

第8代島村亀鶴院長の略歴は、『キリスト教人名辞典』によれば、次のとおりである。

“牧師。俳号は哉哉(さいさい)。高知県室戸市室津に生まれる。1930年明治

学院神学部卒業後、直ちに前橋市に赴き開拓伝道に従事。10年間、日本基督群馬教会牧師として在任。39年3月、東京の富士見町教会牧師に就任。50年10月以降、富士見町教会主任牧師として在職、79年4月引退し、名誉牧師。その間1963年創立の日本基督伝道会の会長。69年以来、俳誌《九十九里》の選者として活躍。著書に『講話イエス・キリスト』（1958）、『信仰歳時記』（1971）などがある。”

おわりに

記念館の壁面に飾られた10枚の肖像画について、それぞれの人物の伝記的素描を、以上記述してきた。初めて明治学院を訪れ、これらの肖像画に初めて接する人を想定し、できるだけ公平な立場から各人物を紹介したつもりである。しかし、筆者の個人的評価や好み、知らず知らずのうちに含まれているのではないかという不安がないわけではない。各人物によって、記述に長短のあるのは、筆者としてのその人物に関する研究・調査の程度の差によるものと理解されたい。特に現存の人物については、たまたま最近刊行された、『キリスト教人名辞典』（日本基督教団出版局、1986年2月）の記事をそのまま引用させて貰った。

現院長を除いた8名の歴代院長のほかに、二名の宣教師が加えられたことについては、“はじめに”の部分で触れた。いわばこれらの宣教師は、明治学院前史の舞台に登場する重要人物である。しかし、1877年の東京一致神学校の開校をもって学院史の出発点とするという見解に立つならば、同校開設の中心的役割をはたした3名の宣教師のことが忘れられない。その3名とは、米国改革派教会のアメルマン（James Lansing Amerman, 1843～1928）、米国長老教会のインブリー（William Imbrie, 1845～1928）、スコットランド一致長老会のマクラレン（Samuel Gilfilan McLaren, ?～1914）のことである。この3名の宣教師こそ、各教派のミッションの委託を受けて、一致神学校の開設に尽くした功労者であった。そのことは、明治学院の創立にとっても大切な功労者であることを示している。できればこの3名の宣教師の肖像画も欲しいように思うのだが、スコットランド一致長老教会と学院との協力関係はその後とだえている。

いま改めて、10枚の肖像画をひとつひとつながめ、ひとりひとりの人物の事績を思う時、学院教育の最高責任を担った人びとの労苦がしのばれる。各時代の総理・院長は、それぞれのおかれた時代的環境のもとで、学院の伝統の継承につとめ、しかも常に時代にふさわしい教育の在り方を求めてやまなかった。そのような創造的努力を支えたものは、キリストへの信仰であり、学院教育をキリストの依託への応答として捉える姿勢にほかならなかった。いずれの肖像についても、その眼ざしに

は、キリストを信ずる者の輝きが感じられる。歴代の総理・院長には、経営的行政的手腕等において、それぞれ長短のあったことは否定できない。しかし、すべての人物について例外なく指摘できることは、かれらが“良きキリストの僕”であった点である。



衆議院副議長室で肖像画を描く長尾己画伯

【資料2】

マリア・T・ツルー夫人の 人物史のための基礎的研究

津田 一路

米国長老教会婦人宣教師として活躍し、日本女性のため一生をさげ異国の地に死んだM. T. True (以下ツルー夫人と記す)について知られているところは少い。その活動の大きさから考えて、その人物を知ることの大切さを思い、人物史を明確にするため現在知られる事をまとめ今後の研究のために供したい。



I 資料

ツルー夫人の生涯の概略は「Japan Evangelist」1896年8月号にA.K. Davis が書いている。伝記として唯一だと思われるものは1899年に発行された田村直臣著「ツルー夫人之伝」である。来日後、初期の横浜時代については「横浜共立学園六十年史」に記載されている。東京に移ってのちについては「女子学院五十年史及学窓回想録」に記載されている。とくに1985年に刊行された「女子学院の歴史」において多くの資料と、すぐれた史観によって詳しく記述されていて、これらをあわせると人間像がかなり明確になる。その他「金沢教会百年史」にも記されている。矢嶋揖子との関係は久布白落実著の「矢嶋揖子伝」にくわしく、その他当時の「基督教新聞」、女学雑誌等にも記載されている記事が多くある。また最近では看護教育の日本における先駆者として注目され、高橋政子「日本近代看護の夜明け」(1977年医学書院)「写真でみる日本近代看護の歴史」(1980年医学書院)高田みつ子「桜井女学校の誕生とマリア・T・ツルーと矢嶋揖子」(1986年看護教育6月～9月医学書院)などがある。

外国資料としては米国フィラデルフィアにある米国長老教会の史料館たツルー夫人が日本から出した手紙のマイクロフィルムが30通以上残されていて、そのコピー

が横浜開港資料館に保存されている。しかしこれは写真が悪く、全部解読することが不可能であるため人物史解明の壁になっている。

筆者は1982年「白金通信」161～162号に紹介したことがある。

Ⅱ 一枚のカード

米国ニューヨークの Inter-Church Center とよばれている建物にアメリカ長老教会の事務所がある。そこにアメリカ長老教会の宣教師の名を記したカード・ボックスがあり、その中に次にあげるカードが一枚あった。

〈表〉

True, Mrs. Maria T.
Birth 1840
Birth Place *New York State*
Marriage *May 16, 1865*
to Rev. Albert True died 1876
Education *Educated in New York State*

〈裏〉

Business or Professional Experience
Teacher, In city Mission work in New York, N. Y. 1871~73. Missionary under Woman's Union Missionary Society in China and Japan. 1873~1876
Appointment *Oct. 30, 1876.*
Mission *Japan*
Form of Work on Field *Teaching in Tokyo and Kanazawa. Largely instrumental in organizing the Jo-shigakuin, as now conducted. Established a Convalescent's House and Training School for Nurses in Tokyo.*
Retired *July 30, 1892. Engaged in other work in Japan.*
Death *April 18, 1896 at Tokyo.*
Biography *Japan Evangelist Aug. 1896 pp. 317~330.*

以上の記載事項を基本にして人物史を解明するために重要な年代・日時を検討してみたい。

(1) 生年月日

カードには1840年に生れたとだけ書いている。A. K. Davis も1840年とだけ記している。おそらく Davis の文からカードにとったと思われる。田村直臣の「ツルー夫人之伝」では1840年12月17日とあり、1985年刊行された「女子学院の歴史」でも12月17日となっている。これはおそらく「ツルー夫人之伝」から採用したものであろう。田村直臣はその緒言で「予は先年米国に赴き夫人の故郷に到りて夫人の姉妹に面会して略夫人の幼少時代を聞き、夫人が我国に来らるる迄の働きを知る事を得て帰朝し、以て其の（筆者一伝記記述の）宿望を果さんとしぬ」といっている点を考慮し12月17日を誕生日と認めていきたい。

(2) 出生地

カードと A. K. Davis はニューヨーク州とだけ書いているが、田村直臣は「ニューヨーク州ビニシー郡ボルシンで生まれた」と書いている。以上からニューヨーク州の出身であると認めてよい。

(3) 結婚

カードでは1865年5月16日アルバート・ツルー牧師と結婚したと書いている。A. K. Davis は「1865年5月16日にアルバート・ツルーと結婚して二人の共同生活をアイオワ州のセダー・フォールズで続けていった」と書いている。田村直臣は「ウィリアム大学に於ける有為の一青年ツルー氏こそマリエタ嬢が未来の夫なりけれ。彼は此校に螢雪の功を積むこと四年間、業を卒えて後オーボルン神学校に転じぬ。……中略……1865年5月ツルー氏はオーボルン神学校を卒業しぬ。同じ月彼は按手礼を施されて長老教会の一教師になりぬ。一小女なりけるマリエタ嬢も既に二十五回の春秋を重ねたるなり。而してツルー氏が按手礼を施されたる同じ週に於て楽のしき結婚の日は来りぬ。美はしき五月の天、美はしき五月の地、美はしき五月十六日に於て会堂の鐘は楽のしき音を響かせたりき」と記しているので結婚の年月日は三者が一致している。

この Rev. Albert True は1871年病を得て天に召されたたと記しているが田村直臣の伝記によれば1871年10月18日となっている。

(4) 1871年から1876年まで

カードによると Rev. A. True の死後、ツルー夫人は1873年までニューヨークの都市伝道の仕事をしてのち1873年から1876年まで Woman's Union Missionary Society のもとで中国・日本での仕事にあたったことになっている。これについて

A. K. Davis の文章によると1873年に中国に渡り、1874年11月に日本に来たといっているのは「横浜共立学園六十年史」と一致して居り、田村直臣も1874年来日したといっている。来日して横浜・山手 212 番地の「ミッション・ホーム」といっていた学校に着任した。

カードによると1876年10月30日にアメリカ長老教会の宣教師に任命されたことになっている。こうしてツルー夫人は東京の原女学校の教師に就任して、東京に転じ、新栄女学校、桜井女学校、独立女学校、北陸女学校での働きがはじまる。

Ⅲ 角筈教会の礎石

東京府南豊島郡角筈村（現在の新宿区西新宿 1 丁目）で1902（明35）年 6 月 6 日午後 2 時から日本基督教会角筈講義所会堂の捧堂式が行われた。その時の角筈講義所の記録は次の通りである。



「讚美歌大能聖父を歌ひて式を初む。次に博士タムソン氏祈禱あり次に和田秀豊氏の聖書朗読あり。次に讚美歌神の教会歌ひ奥野昌綱氏捧堂式

M・T・TRUE 記念会堂として建てられたレバノン教会会堂

祈禱終て女子学院生徒英語唱歌あり。次に井深梶之助氏の説教捧堂式の讚美歌あり田村直臣服部綾雄氏の演説岡見千吉郎氏の会計報告祝禱を以て終る。出席者百有余名」

これに関連する新聞記事は福音新報362号、363号にのっている。この会堂は1945（昭20）年 5 月 25 日の空襲によって被災し焼失したが、その礎石が現在日本キリスト教団高井戸教会に保存されている。その表面と側面に次の文字が刻まれている。

IN MEMORY
OF
MARIA・T・TRUE

〈表〉

ツルー夫人
記念ノ
為
建設ス
明治卅四年

〈側〉

ここで何故角管講義所会堂が「ツルー夫人記念ノ為」なのかを解明したい。

ツルー夫人は東京に移ってからのち、原女学校、新栄女学校から桜井女学校の経営をまかされアメリカ長老教会の援助で学校規模を拡大し、教育内容を充実した。学校のことは矢嶋揖子校長代理にまかせ、ツルー夫人の活躍は1886（明19）年頃から看護婦養成と1889（明22）年独立女学校設立に対する努力が中心になってくる。この独立女学校を東京府南豊島郡角管村に土地を求めて建設したのであった。そしてすでに開校していた看護婦養成学校を桜井女学校から角管に移し、角管にその校舎と看護婦養成の実習の場としても利用でき、日本女性の健康のために貢献できる衛生園（サナトリウム）を建設した。筆者の推測では看護学校に必要な実習の場としての病院をキリスト教主義によって建設することが願望であったが、それができなかったので、衛生園（サナトリウム）というような半端なものになったと考える。その過程を資料でおさえることは、まだ十分できていない。

さて角管教会の資料によると角管に土地を取得した頃にミス・バラが新宿駅周辺で伝道の成果をあげていたとなっていて基督教講義所がたてられ、1891（明24）年以後、貴山幸次郎、岡本敏行、多田素、服部綾雄、朝倉岩造、長谷川裕らが伝道にあたって1896（明39）年頃にいたっている。かれらの顔ぶれは明治学院神学部に関係するものであって、米国長老教会につながるものであった。

以上のことを考慮にいれて、この小論の資料として採用してきた田村直臣の「ツルー夫人之伝」の緒言を再度引用してみたい。

「予は夫人の永眠後直ちに、夫人の一生を書き綴り是れを世に公にせんとの希望を懐きぬ。一中略一然るに予は先年米国に赴き夫人の故郷に到りて一中略一以て其宿望を果さんとしぬ。恰かも宜し角管教会（註・当時正しくは角管講義所）の主任教師福田錠二氏岡見千吉郎氏と共に予を来訪し同教会の信徒相議し、夫人の為に一記念館を建設せんとの計画ある旨をつげ、其の趣旨書を予に示された。予は其の計画が夫人を記念するに最も適当なる計画なるを賛し、予も亦た夫人の伝記を物せんとする意あるを語りぬ。而して予は同時に夫人の伝記の編輯に従事し、漸くにして其の書を成するを得たりき。予は角管教会信徒諸君の計画を賛成し謹しんで此の冊子を献ぐ」

と書いている。しかし、この本は1899（明32）年に発行されたのであったが、1900（明33）年2月に講義所の建物が焼失してしまったので、できた建物が記念館でなく記念会堂となった。

田村直臣が言うツルー夫人の記念のために角管の地が何故最も適当かということにふれておきたい。ツルー夫人は日本の女性のために一生を捧げたといって過言でない。その方法は第一に教育であり、第二に健康であり、第三に職業（社会的役

割)を確保することであった。第一は横浜共立学園にはじまり、原女学校、桜井女学校から女子学院へとつながる一連の活動がそれである。第二は衛生園であり、第三は独立女学校と看護学校であった。このうち角管で第三の部分をもっと重視して、自分の最後の最大の仕事として、自分の生命をかけて努力したからであった。そして田村直臣はツルー夫人が自分の死期がせまっているのを予期するかのように必死の思いで自分の仕事の完成をめざして努力しているのをみていた思いを、伝記に残そうとしたのだらうと思う。

(註) 角管教会は1960年頃からはじめられた東京副都心計画によって移転をヨギなくされ1961(昭36)年杉並区高井戸に移転し高井戸教会になった。

Ⅳ 一通の手紙

前述のカードによると1892(明25)年 July 30 に宣教師を退職している。そして Engaged in other work in Japan. となっている。この退職を示す記録はこの一枚のカード以外にない。そして次に示す手紙がそのことを裏づけている。そして田村直臣が感激して伝記を書かずに居れなかった秘密をそこに発見できる思いがする。まず、その手紙の全文を紹介する。

<p>Received Aug. 22, 1892 DR. Gillespie</p>

512 2nd st. Towanda. Pa.

Aug. 20th 1892.

Dear Dr. Gillespie ;

Your very kind letter of the 16th inst ; together with the Board's acceptance of my resignation, came to hand in due time.

Thank you for the expression of confidence, and sympathy with my purpose to do what seems to me right.

I trust that no mistake has been made, and believe that even our mistakes will be overruled for good and so come under the head of "all things."

These changes which come to us, even though in the path of duty. Are very trying ; but it does not become us to make much of them.

Thanks for the kind thoughtfulness in the grant of \$100. as "a retiring

allowance.”

It is my purpose to set out on my return journey about the middle of Sept. leaving time for some stops by the way, and sailing from Vancouver early in Oct. My interest in the work of the Board will certainly not be less because of my call to another Service.

Trust Sincere thanks for all kindnesses, and best wishes for all at the Mission House.

I am yours very sincerely

Maria T. True

ツルー夫人が米国長老教会の宣教師を辞任する経過を知ることは在日の宣教師団又は個々の宣教師や学校・教会とミッション理事会との連絡のすべて、即ち往復書簡や会議の議事録を検討する必要があるが、現在ではそれがほとんど不可能になっている状況で、唯一の手がかりとして、部分的にしか判読できない手紙のコピーにたよる以外方法がない。

1883 (明16) 年 J・バラ夫人が病気をした経験から「キリスト教精神」による看護婦養成の必要を感じ、「看護婦養成所」建設募金のため帰米して活動中に斃れたためツルー夫人が遺志をついで桜井女学校の中に看護婦養成所を設立した。「女子学院の歴史」(p 250～)では明治19年に第1回生が入学している。卒業生の文章からしても明治19年12月に入学し20年11月から1年帝国大学附属第一病院で実習して明治21年11月に卒業したといっている。書簡集の中に発見できないが、リストにだけあるツルー夫人の書簡の末尾に次の記載がある。

NO. 161 NOV. 28 1887 (註・明20年)

……前略……Addition of Dr. Light (M. D) to our circle.

高橋政子の「写真でみる日本近代看護の歴史」(p. 27)によると教育年限は2年で、第1年は教室での学習、第2年が病院実習でこれを Miss. Agnes Vetch に依頼した。このヴェッチの看護学の学力と業績から帝国大学附属第一病院では月給80円で教師として採用したということは第1回生の病院実習は帝国大学の病院でできたが、このとき着任した Dr. Light のもとで、実習が継続できるかどうかという不安か、もしかすると不可能が決定していたのではないだろうか。しかし筆者はライト医師が来日した事情やミッションとの関係を前述の1887 (明20) 年11月以前にみる資料を全く持っていない。

次に1888 (明21) 年10月にミッションの Gillespie から Dr. Light にあてた手紙をみる事ができる。これは10月1日の理事会決定を10月2日に発信している重要

な指令である。よみとれるかぎりの要点は、①看護婦養成所を宣教師団の事業の一部から外す。②Dr. Light は宣教師団の同意と本人の意志で他の宣教事業に移ってもよいこと、しかし個人的好みにならないようにしてほしい。そしてこの手紙の後半で看護学校を開設し、Dr. Light を任命する前に実習の病院が必要であることが予見できなかったことは大きなミスだが、看護婦養成学校のために病院を建てることは宣教活動の目的からはずれるので理事会はこの事業に否定的結論をだすにいたったことを説明し、Dr. Light を医療宣教師として全面的に支援すると書いている。

11月16日付ツルー夫人から Dr. Gillespie にだした手紙をみるとこの間の大きな動揺がわかるがツルー夫人の強さもよくわかる。

The day on which your letters arrived was a "red-letter" day in the history of that work.

この日は10月2日で6名の第1回生が2年の課程を終了してスコットランドから来られた先生 (Miss. Agnes Vetch) から立派な証明書が与えられたこと、そしてツルー夫人の部屋に集って将来の計画を語り合ったといっている。又6名の卒業生のうち1名は Agnes Vetch の代役として病院に残り、他は病院や個人病院の看護のため求人が多いといっている。(ただし実際は病院に残ったのは3名だったという) こういうときに廃止の手紙をうけた。そのときの失望を顔にあらわさず、神様は私どもの信仰にさらに大きい試練を必要としているのだと感じたと書いている。そして第2回生として在籍している6名の生徒をどんなことがあっても卒業まで引張って行くと言っている。理事会の決定ではあるが、資金はあるから続けるといっている。

Dr. Light は11月6日 Dr. Gillespie に理事会決定に満足しているという返事を出した。一方ツルー夫人は1889 (明22) 年1月9日付の手紙を受けている。それには

On ascertaining that you had engaged another class, before the section of the Board reached you. I felt at once that you must be protected in what you had entered into in good faith.

と書いている。即ち理事会の決定にもかかわらず、次のクラスととりくんでいるということはツルー夫人が信じてすゝんでいったところにおいて護られねばならないといっている。Dr. Light に対しては医療宣教師として支えるし、できるかぎりの援助をするといっているのにたいし、ツルー夫人には、これからやろうとしている事業が宣教活動として最善でないという理事会の決定にしたがえないのだとしたら、あなたの計画を支持する方に移っても仕方ないだろうという意味に読みとれ

る。その後1890年は手紙の交渉で、A. K. Davis の文によると1891年はツルー夫人がアメリカに一時帰国している。そして宣教師団が関係していない日本人のキリスト教団体の仕事に関係していく決心をする。その一つを Industrial School for young women. といっている。これは日本の婦人のキリスト教信者によって建てられ、日本の牧師たちが援助を依頼してきていたが、従来は多忙のためできなかったのをこれを援助するにしたいという。そして第二には、さきに廃止した看護婦養成学校を実現したいという。この実現は神様のみこころであって、彼女はその実現に責任を感じている。そしてこの看護婦養成学校のために購入しておいた土地に校舎を建てたい。その費用を得たいというのが悲願であった。しかしその仕事はすでにミッションの管轄外のことなのでどうすゝめたらよいか心配であることが1892年1月30日の手紙によくでている。

私はこの Industrial School for Young Women を独立女学校とし、これを支える日本のキリスト者婦人の団体を加藤俊子を中心とするグループと考えたい。その婦人たちの団体を支援している牧師が数名存在するようだがその名も不明である。しかしあとで掲げる人物が入っていると予想してもよいだろう。そしてフィラデルフィアの長老教会の資料館で見た Woman's Union Missionary Society の年報に1頁にわたる加藤俊子の和服で立った写真でこの学校の紹介があったことを記憶の中に思いおこす。即ちこの婦人の伝道団体（この団体は世界中の伝道活動に援助金と人材をおくり、日本では横浜にミッションホーム（横浜共立学園）を建設したので、大いにアピールしたものと思われる。

この手紙の中でツルー夫人に賛成し、応援する Mrs. Twistar Morris という人物名をみるができる。それによると、ツルー夫人を中心とする活動計画は日本の女性に必要な事業であるから、もし専念するならば数年にわたり給料を払い、ツルー夫人をおくりだしているシラキュースの2つの教会が従来通りの給料を払ってくれるのならば Mrs. T. Morris の援助を校舎建築にまわすことができる。どうすることが最良であるか指示してほしいと書き送っている。

この1月30日の手紙は1891年からひきつづいて米国滞在中でニューヨークかペンシルバニアから出している。それに対して返信をうけているらしいが、それは不明で、2月26日再び手紙を出して失望したと書き送っている。しかし4～5月までに資金を集めすべてが整ったら秋の終りには日本に帰り仕事にとりかゝりたいといっている。かなりのあせりが感じられ、5月9日の手紙から辞職のことが言われはじめ、8月10日の手紙で辞職が申し出られ、8月10日のさきに掲げた手紙になる。これで見ると辞職は8月になるが、先のカードによると7月30日である。

こゝにでてくる Mrs. T. Morris は米国フィラデルフィアのウイスター・モリス

の夫人である。1890（明23）4月18日付基督教新聞によると「ウィスター、モリス氏は米国フィラデルフィア府の人にして有名なる富豪家慈善家なるが、熱心なるクエーカー派の基督教徒にして氏の世話に預りたる者少からず。氏は又日本人と見れば親切に至らざるなし。頃日社員は夫婦を旅館に訪ひ種々の談話を為せしが、氏は主に伝道上の視察を為さん為に来遊せられたるにて、殊に夫人には滞在中、種々伝道に尽力すべしとのことにて近々府下の貴婦人を鹿鳴館に会し、教に関する談話を為さるる由」という記事がある、福音新報の1896年10月16日号の加藤俊子による「妾の信仰歴」によると（本井康博編「回想の加藤勝彌」の中に再録あり）

「妾は其の時、桜井女学校の故ツルー女史と相謀り、独立女学校創立の経営を致し候。是れは、精神ありて資金乏しき女子を教えて独立自修の途を立つさするものに有之、一も二もなく、薄資の女子をバイブルウーマン（婦人伝道師）に養成することの弊害多きを見て、思い立ちたるものに御座候。

斯くに、不取敢、十三名の生徒を得て、上二番町に仮校舎をしつらえ、越えて1889年の春、更に其の規模を拡張致し度候て、資金募集のため、鍋島侯、樺山伯、井上男等の令夫人の助力を得、鹿鳴館に第一回の音楽会を催し、四千円足らずの金額を得候て、地所を新宿郊外、角管村に買い、且つ校舎を建築して、之に移転仕候—後略—」

といっている。ツルー夫人の手紙にある Industrial School for Young Women が日本の婦人キリスト信者と日本の牧師たちによって建てられ援助を求められているということが、ある程度具体的にこゝで語られていると考えてよくはないだろうか。

1892年9月23日付基督教新聞において次の記事をみることができる。

「先年其良人と俱に我国に来遊せられし事ある米国費府モウリス夫人は良人の死去せられし後も相変らず日本の遊学生を愛して深切（ママ）に之を世話し居られしが、今度我国に來りて日本婦女の爲めに働き其余年を送らんとの覚悟にて多分来月来着せらるべしと聞く」

ツルー夫人のこれまでの経過をまとめると看護婦養成学校の問題を中心に独立女学校の援助を新しいテーマとして宣教師団と米国にある長老派ミッションの理事会との手紙による交渉が1888年頃から開始され、1891年に帰米した。1892年1月には資金集めの見通しがついて独自で計画をすすめる決意がかためられ、この年の秋に再来日して実行にうつすことであった。この9月23日の基督教新聞によるモリス夫人来日予告の記事は、ツルー夫人の計画実行の予告でもあったのであろう。

こうして1892年8月20日の手紙を出しアメリカをはなれ再び日本にもどってきた。

さらに11月18日の記事に次の記事がある。

「先年我国に來遊せし費府の慈善家故モリス氏の夫人は数日前再び來遊、現今帝國ホテルに滞在在中なるが、曾て米國に於て同家の親切を受けし人々及び知友諸氏は來廿三日、品川御殿山なる原六郎氏宅に於て歓迎會を催さるる由」とあり、その出席者は次の通りであった。

会主 三島彌太郎・原田助・津田元親・原富子・津田梅子
 來賓 大山伯夫人・津田仙・中島力造・柳谷謙太郎・中村栄助・矢嶋侘子
 (ママ)・加藤錦子(?)

こうして加藤俊子を校長とする独立女学校が上二番町から角管に移り校舎を建築し教育をはじめたところであり、さらにツルー夫人は看護学校を再建し、そのための施設を建設する準備ができた。

V ツルー夫人の死とその後の事業

角管における新しい事業は多くの人々の協力とモリス夫人の寄附によってすゝめられた、建築が完成したとき1895年10月からツルー夫人は病床につき、1896年4月18日天に召された。これらの年月日については問題ない。

葬儀についての記録は現在のところ発見できていない。田村直臣は「数百の知友の哀悼を以て青山の墓地に葬られたりき、予は夫人の一生に於て、生ける基督教を讀む心地す」と言っている。

(註) 墓地……青山墓地・西四通北一種角

本稿においてはツルー夫人の人物を考える上で必要な基礎的な事柄を資料に基づいて明確にする作業をしてきた。おのずから人物像もでてきているが、詳細な伝記にはほど遠いものであるので、それは後日を期したい。

とくに角管における事業のその後については頌栄女子学院百年史の171頁以下、女子学院の歴史340頁以下で書かれている。

「角管衛生園」という名称で赤坂病院の分院として婦人のためのサナトリウムとして開業したのは1897年11月27日だった。園長にはツルー夫人の横浜時代の教え子で米國で医学を修めてきた岡見京が就任した。しかし経済的行きづまりから1906年に閉園、建物は女子学院の分教場となり、のち1918年には東京女子大学の開校の地となり(東京女子大学五十年史37頁)1924年には明治学院神学部が移転した。

(明治学院百年史305頁)。

国立横須賀看護学校の井上義衛先生が解説して下さった英文手紙解説の原稿を参考にさせていただきましたことを感謝致します。

執筆者紹介(掲載順)

大津留暗子 (馬場孤蝶・次女)

伊東一夫 (東洋大学名誉教授)

秋山繁雄 (元明治学院大学図書館史料室)

津田一路 (明治学院白金高校教諭)

工藤英一 (明治学院大学経済学部教授)

昭和六十一年十月三十一日印刷
昭和六十一年十一月一日発行

明治学院史資料集【第十三集】

東京都港区白金台一ノ二ノ三七
編集代表 清 水 徹

東京都港区白金台一ノ二ノ三七
発行者 森 井 眞

東京都港区白金台一ノ二ノ三七
発行所 明治学院大学図書館
電話(〇三) 四四八―五一八八

東京都港区南青山二ノ一ノ一七
印刷所 第一法規出版株式会社
電話(〇三) 四〇四―二三五一

『明治学院史資料集』第13集 訂正表

		誤	正
扉写真		和卦紙	和野紙
p 6	6行目	Arfred	Alfred
p 11	9行目	赤田ノ二氏	赤田ノ二氏
p 27	4行目	普通学部二年	普通学部三年
p 27	5行目	普通学部三年	普通学部四年
p 37	13行目	「西みんすと5あべい」	「西みんすとるあべい」
p 127	下段2行目	桑木巖翼	桑木巖翼
p 133	上段8行目	文学講和	文学講話
p 135	下段10行目	佐々木三津三	佐々木味津三
p 136	下段8行目	六月二〇日	六月二十二日
横組		御親影	御真影
p 9	下から14行目	御親影	御真影
p 18	下から2行目	史料館た	史料館に
p 23	下から9行目	carne	came
p 23	下から2行目	Are	are
p 24	上から4行目	thr	the